誰ガ為二、華ハ薫ル★

椿屋カヲル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
誰ガ為二、華ハ薫ル★

【Ｎコード】
Ｎ７２６２Ｙ

【作者名】
椿屋カヲル

【あらすじ】
――大正９年　帝都
財閥令嬢、二階堂櫻子の住む自宅の屋敷では、華やかな夜会が開かれた。
あなたのチョイスで主人公の運命が変わります。序章の後は、お好みの選択肢（男性キャラ）に進んでください。他サイトで投稿中の同名小説のＲ１５版です。１１／２１【楡崎蓮一】編ＵＰ！！俺様成金男の求婚理由とは？１１／２１【斎木萩人】編ＵＰ！実直な執事の哀しい過去とは？１１／２１【京極菊弥】編ＵＰ背徳軍医の願

いとは？１１／２１【二階堂桃真】編ｕｐ始めました。前途洋洋な帝国陸軍少佐、その唯一の憂いとは。

開幕　夜櫻

――大正9年（1920年）　春

雲の無い天には、星も無く、細くて明るい月が浮かんでいる。

下界のとある場所で、真っ盛りという状態の櫻の木があった。

それは、月光を吸う度に、神秘的な雰囲気を撒き散らすがごとく、花びらをさらさらと舞わせていた。

その美しいような、妖しいような櫻の下で、一人の男が寝転んでいる。

手を胸のあたりで組んで、まるで瞑想でもしているかのように、瞼を閉じたままだった。

辺りは音もない風が吹く闇夜で、あるのはほんのりとした櫻と土のにおいだけ。

残りは、その額や、頬に、花びらが積もっていく感触だけが、男の世界の全てである。

「これが、おまえなんだね。」

男は、自分の手のひらに積もった花びらを握り締めて、顔に近づけてその匂いを吸った。

どこか懐かしいような、清廉な香気に陶酔する。

「この大木の中の筋を通って、綺麗な桜の花となって、こうして俺の元に降り注いでくれているんだね。」

夢見るように、つぶやいている。
しかし、櫻は何も語りかけることもなく、ただただ、見事な花弁を散らしていた。

――夜明けには、男の姿は何処にも無かった。

その数日後、この櫻の木の根元で、死体が埋められているのを、近所の住民が発見した。
随分昔から土の中にあったらしいそれは、すっかり白骨化していた。しかし、警察が、掘り起こして確認すると、その骸骨には頭の部分がなかった。

辺りを掘り起こして捜索しても、髑髏は、終に発見されなかった。

登場人物ノ紹介

二階堂櫻子（にかいどう さくらこ）
財閥の娘。仏蘭西の血が混じっている
女学校の国語教師

二階堂桃真（にかいどう とうま）
母方のいとこ。養子となり、櫻子の兄。
帝国陸軍少佐。

楡崎蓮一（にれざき れんいち）
海外に人脈を持つ楡崎商会の社長。
一代で身を起こした成金で外国語に堪能。
関東出身だが、神戸で会社を興し帝都に本社を移した。
関西の商人の話し方の影響を受けている為、独特の話し方をする。

京極菊弥（きょうごく きくや）
御典医の家柄で関西出身。現在は、陸軍医。
二階堂家とは懇意であり、櫻子とは幼馴染。
二階堂家から帝都の大学に通い、卒業。

斎木萩人（さいき はぎと）
二階堂家の家令。
壊太利の血を半分受け継いでいる。灰色の瞳を持つ。
二階堂家の書生として、音楽大学の学生となる。
留学先の独逸で海難事故により、指を痛めて帰国。

神谷藤隆（かみやふじたか）
若いが優秀な梅造の秘書の一人。
破産した神谷洋装店の御曹司だった。

春日玲子（かすがれいこ）
春日財閥の長女。櫻子の親友。
日本人形のような容姿で、穏やかな性格だが、かなり天然。

春日葵（かすがあおい）
玲子の弟
頭脳明晰で容姿端麗。
時々、女性に間違われる。

二階堂梅造（にかいどううめぞう）
二階堂財閥の総理事長、二階堂家の当主。

二階堂園子（にかいどうそのこ）（故人）
華族出身。櫻子の母で、英國の血を半分受け継いでいる。

冬馬撫子（とうまなでしこ）
二階堂家の長女で、櫻子の姉。
若手官僚に嫁ぎ、現在は夫の洋行に一緒について英國にいる。

序章（1）　夜会

――大正9年　帝都

この時代、明治初期にかけて花開き始めた西洋を取り入れた文化が、大正デモクラシーと呼ばれる民主主義的な風潮の後押しを受けて、享楽的な文化を新しく生み出していった。

その反面、スラムの形成、民衆騒擾の発生、労働争議の激化など社会的な矛盾が深まっていったのもこの時期である。

日本史上、一番短いとされるこの時代は、大日本帝国の最盛、安定期であったと後世は語り、経済界で名を馳せた富豪達は「財閥」と呼ばれるようになった。

その時代に、財閥令嬢に生まれた二階堂櫻子という女性は、自室の窓から、満月を見上げてため息をついていた。

「はあ…」

秋の夜会と称して、この屋敷では今夜、盛大な宴が催される事になっていた。

階下の大広間には、既に招待客が集まりかけていて、この日のために呼び寄せた楽団が、優雅な音楽を演奏している。

最近、いつにもまして自宅で夜会開かれる機会が、増えたようだ。

主催者の一族として、来てくださったお客様にもてなしをするのが嫌なわけではないが、こうも頻繁だと、さすがに気疲れする。

その時、部屋を扉を軽く叩く音がした。

「櫻子、もう客人がお見えになっているぞ。いつまで部屋にこもっているつもりなんだ。」

兄の桃真の声だった。

扉を開けると、洋装に身を固めた桃真が腕を組んで立っていた。

「あら、兄様（にいさま）の洋装姿なんて久しぶりに見たわ。」

三十歳にして、帝国陸軍少佐である兄は、いつも軍服か和装しか見たことがなかった。そういえば、そんなに「流行っているから」と、紅茶で有名なカフェに一緒に行って欲しいと懇願しても、渋った過去がある。

最後には、櫻子におれて、不機嫌そうな顔をして、後ろをついて行ってくれはしたが。

「あら、兄様、じゃない。父様から、櫻子はどうしたのか、と言われたのだ。もしや、体調でも悪いのかと思ったが…さぼりか、その顔は。」

「ちがうわ、ちょっと髪のほつれを、直していたのよ。」

後ろ髪の束をねじりあげて髷にしたこの髪型は、花月巻きと呼ばれるものだ。それに、白金製のあまり派手ではない簪を挿した。

「ほう…、夜会服を新調したのか。それが父様が、神谷さんに頼んだ、と言っていたものか?」

神谷さんとは、数年前から父の秘書として働いている青年の名前だ。実家が、有名な洋装店で、彼自身も仕立てに関しては、素晴らしい技術を持っているそうだ。

しかし、寸法を測ったのは屋敷の女中で、どんな服が着たいかをスケッチに描いて、要望を沿えて送っただけにも関わらず、立派な服を仕立てて送ってくれた。

「少し、地味すぎないか?」

姿見に映った自分は、新調された紺色の夜会服で飾っている。なるべく地味にしてくれ、と懇願したおかげで、襟も首周りを覆っているし、袖も、肘まで伸びている。

しかし、仕立てのおかげで、お堅い女姓というよりは、控えめな印象を与える服に仕上がっていた。

腰周りの位置が高い場所に置かれてあり、柔らかで直線的なドレスだった。何よりも、コルセットを使わないで済むのがいい。

神谷が言うには、仏蘭西の流行を取り入れてみたのだそうだ。

櫻子の母は、華族の出身であったが、仏蘭西人の血を半分受け継

いでいた。
その為、櫻子は、目や肌、髪の色は、日本人の特徴をそっくり受け継いでいたが、顔の彫が深くて、他人からは艶やかに映った。
ゆえに、周囲からは、派手好みと勝手に勘違いされてしまうことも、櫻子が地味な装いを好む理由の一つだったのだ。
「少なくとも、俺の好みではない。」
「兄様の好みにしてどうするのよ。私は今までで、一番気に入っているわ。」
「殿方の視線を少しは考慮せよ、ということだ。夜会とはな、麗しい淑女が、紳士と出会う為の場所でもあるのだぞ。世の女性達に比べて、令嬢であるおまえはその機会には恵まれているはずなのだからな。にもかかわらずだ。」
桃真の脳裏にはある出来事が浮かんだ。
「この間も、玲子嬢と浅草に行った時に、絡んできたならず者たちを蹴散らしたというではないか。全くあきれた事だ。」
玲子嬢というのは、春日財閥の娘で、私の一番の友人で、よく、一緒に出かけている。きっと、今日の夜会でも会えるはずだ。
「あら?どうしてあきられなくちゃいけないのよ。玲子も一緒に居たのよ?撃退しなければ危害を加えられていたかもしれないじゃないの。」
「おまえはそれでも、女学校の教師か?」
櫻子は、国語の教師として、教壇で教えるのが職業だった。
「そういう時はだな、まず周囲の人に助けを求めるのだ、普通は!」
浅草にはいつも人が居るが、とっさの事だったので、誰もが様子を伺っているだけであったから、こういうことになったのだ。
「いくら、剣道で三段を持っているといってもだな…。」
「四段よ、兄様。」
「……おかげで、二階堂家の娘は、はねっかえりで娘らしかぬ、という噂だ。このまま、だらだらと年を重ねたら、嫁にもらってく

だされる方もなくなるぞ。」

桃真は、櫻子の手を取り、がっくりと俯いて落胆した。

近づいた兄からは、甘みの強い白檀の香りがした。

彼の自室は、櫻子の洋風の部屋とは違い、畳の敷かれた日本様式の部屋で、時々部屋で炊いている香の匂いが、いつの間にか服や体に移ったのだろう。

「いいわよ別に…。兄様が家を継いで下さるのでしょう?」

「あのなぁ…、俺は父様とは血は繋がっていないのだぞ。」

実は、桃真は、実の兄ではなく、母方の従兄弟だった。母が、なかなか子供ができない体質とわかり、母の姉の家から養子として引き取ったのである。

その家は由緒正しい華族の家柄であったが、多額の借財を抱えており、何人も子供を抱えいた事に加えて、当主が病気がちであった。

よって、数多くの候補者の中から、桃真を養子として向かえた方が、相手の家の助けにもなると梅造は判断し、向こうもそれを望んだのだった。

その後に、姉の撫子、次いで櫻子が生まれたのだった。

「あら、まだそんな事を言ってるの?父も、亡くなった母も、兄様とそのお嫁様に家を継がせる気持ちでいるわよ。もし、入り婿を取るつもりなら、撫子姉様の時に、そうしてたわよ。」

父は、婿を取らず、撫子を嫁に出してしまった。ちなみに、政府の若い官僚に嫁いだ姉は、現在は、旦那の英國への洋行に一緒について行っているので、日本にはいない。

その時、足音がして、新たな人物が私の部屋の前に現れた。

「失礼します、お嬢様。」

白い手袋をはめた、家令の斎木萩人が立っていた。

いつもは、グレーや茶色の背広を着ていることもあるが、今日は黒い背広をきっちりと着込んでいる。太くて艶やかな黒髪は、香油で整えられていた。

ほのかなオード・トワレの香りがした。

男性的な渋みと爽やかさを併せ持つ香りだったが、それがなんの成分で出来ているかはわからないことから、神秘的で謎めいた香りでもあった。

強く主張しすぎないその香りは、斎木によく合っていた。

兄も百八十もあろうかという高身長だが、斎木の方が少し高かった。

それは、灰色の瞳と彫の深い顔立ちから推測できるように、彼は混血児だった。母親が、墺太利（オーストリア）人である為、櫻子よりも異国の血をより濃く受け継いでいる。

元は、類稀な音楽の才能を持ち、東京音楽学校を首席で卒業した、二階堂家の書生だった。しかし、独逸留学中に、運悪く海難事故に巻き込まれ、指を痛めてしまったことから、演奏者としての道を閉ざされてしまったのだ。

そして、今は、二階堂家で執事をしながら、時々、富裕層の子女に音楽を教えている。

屋敷には女当主、つまり櫻子の母親は、すでに他界してしまっていることから、屋敷の筆頭使用人として、采配を振るっているのが、彼であった。

財閥といえども、二階堂家はそれほど派手好みではないので、通いの料理人と女中が数人、自慢の日本庭園を管理する園丁、そして住み込みの使用人としては、斎木しか使用人は雇っていない。しかし、夜会の時だけ、特別に使用人を増やしていたので、大変そうだった。

「旦那様が、お嬢様の姿がお見えにならない事を心配していらっしゃいます。」

「斎木まで呼びに来てくれたのね。」

「ご気分でも優れないのでしょうか?でしたら、旦那様には、私から上手くお伝えしておきましょうか?」

感情を表に出さない人なので、いつも無表情だが、良く気がついて気配りが出来る人だという事を、櫻子は知っている。

「大丈夫よ。体調が良い事は、兄様にはばれてしまったし。ありがとう、すぐに広間に行くわ。」

「そうですか…。無理はなさらないで下さいね。何かあれば、さりげなく私や他の使用人を呼んでくだされば、それなりに対処はいたしますから。」

響きのある低音。斎木は、ヴァイオリンの演奏者を目指していたが、音楽学校では声楽も習うのだろうか、と櫻子は思った。

「では、私は、まだいろいろございますので、御前を失礼いたします。」

一礼した斎木が、階段を下りていく音が聞こえた。

「…斎木に対しては、俺より優しくないか？」

「主が使用人に対して優しくするのは当然でしょう？」

西洋嫌いの桃真であるが、斎木の事は嫌いではなかった。

それは、彼がそれほど裕福な家の出身でないのに加えて、混血児である事から、音楽学校時代に苦労をしていた事を知っていたからだ。

今、思えば、斎木が首席で卒業した事、独逸への留学が決まった事に一番喜び、そして、怪我をして夢半ばに帰国した事を一番悔しがっていたのも、桃真だったように思う。

「それに今日の斎木は、眼が回るくらい忙しいはずだわ。お母様がまだ生きてらっしゃた頃は、二人で仕切れたけど…。年配の執事は、高齢だったから、亡くなってしまわれたし。斎木を助けられる熟練の使用人が必要よねぇ。」

あと、一人くらいは、執事を雇った方が良いのかもしれない。

「戻らないと、俺も怒られそうだ。先に戻るぞ。」

桃真が去ってから、櫻子も、階下へ降りる為に部屋を出た。

序章（2）　夜会

広間には、豪奢な夜会服に身を包んだ貴婦人や紳士が、談笑していた。
その輪の一つに、父である梅造の姿を見つけた。
彼も、娘の姿を見つけると、声をかけた。
「櫻子、ようやく来たな。今、おまえの事が話題にでていた所だよ。」
６５歳という年ながら、眼光の鋭さの衰えない様は、さすがは、経済界に君臨してきた二階堂家の当主、そして、財閥の総理事長である。
「まあ、この方が、二階堂様のお嬢様！」
「なんてきれいな顔だちをしてなさるのでしょう。」
「仏蘭西のお血をひいていらっしゃるのだとか。」
父と談笑していた貴婦人達の関心が、自分に向けられた。
「今晩は、来て下さってどうもありがとうございます。亡くなった母も、屋敷の中が皆様のおかげで華やかになって、きっと喜んでいますわ。どうぞ、ごゆっくりしていってくださいませね。」
世辞を受け止めながら、一人ひとりに、あいさつをする。
「櫻子、この新しい洋装が、神谷くんが仕立ててくれた物だな。」
梅造は、櫻子の夜会服に視線を移した。
「彼の技術は素晴らしいな。お礼を言いなさい。」
梅造が、後ろに控えていた青年を、前に押しやった。
「そんな…理事長…。」
神谷藤隆は、謙遜から手を顔の前で振った。
櫻子は、父の秘書の一人である彼を、気に入っていた。
いつも柔和な笑みを浮かべていて、精錬で優しい性格をしていた。
例えるなら、陽だまりの中の蒲公英（たんぽぽ）。
「神谷さん、お久しぶりですね。櫻子です。品の良い服を仕立て

てくれてありがとう。」
「いえ、喜んでくださったのならば、造り手として光栄ですよ。」
神谷は、少しはにかんで笑った。
ふむ、と梅造が、あごの辺りを手でかいた。
「どうしたの、父様？」
「そんなに若かったのか、と思ってね。仕立て職人から私の秘書なぞをする事になって、大変だと思うが、叱りつけた記憶がないのだよ。」
梅造は、神谷と自分の娘を見比べて、娘の方を見て、息を吐いた。
「ちょっと、今のため息は、どう意味なの、父様？」
「私が頭があがらない程、神谷くんは優秀なのに、おまえと来たら…。」
「父様！」
神谷は、罰が悪い気分になった。彼のせいではないのだが。
「いずれ、神谷くんには、服の知識を生かして、うちの紡績事業か、百貨店を任せるつもりでいるのさ。神谷くんには、お前も失礼の無いようにしなさいよ。」
「そんな、理事長、僕は、お嬢様に気兼ねしていただくような者ではありませんよ。」
梅造は、さらに赤くなった神谷を見て笑った。
「きみはいつでも謙虚だね。仕事をしていく上では、少し傲慢になった方が上手くいくときもあるのだよ。……そうだ、櫻子、神谷君を、庭の池に案内してあげなさい。」
「ええ、喜んで。」
「庭の池に案内してあげなさい」というのは、「少し、休憩できる場所に人を案内してあげなさい」という意味だと、父から言いつけられていた。
おそらく、神谷は、その優しそうな容貌と、品のある様子から、貴婦人達の注目の的である事は間違いなかった。おそらく、ずっと話し続けて気疲れしているに違いない。

灯りのともった庭先には、飲み物が置かれた台もあり、数人の客も広間から一息つくために出てきたようだった。

日本庭園の大きな池には、橋がかかっており、神谷と櫻子は、その上で、水面に映った月を眺めながら、ぼんやりする事にした。

「理事長は、どうやら私に気を使って下さったようですね。」

「だって、ずっと父について下さってお客様とお話して下さっていたのでしょう?少し、休憩されないと明日は声が枯れてしまうわ。」

「でも、それは理事長も同じですよ。ご高齢の分、私より体の負担は大きいはずです。そろそろ、休憩して頂かないと。」

「父の体調まで気を使ってくださって、感謝しますわ。」

「秘書として当然ですよ。僕なんかを拾ってくださった事でも、感謝しているのに、秘書の一人にまでして下さった。」

僕は、神谷洋装店という所の跡取り息子だったんです、と橋の下に映る月を眺めながら、神谷が語り出した。

「まあ、神谷洋装店の?」

初耳だった。

銀座に本店があって、他にもいくつかの支店を持っていた指折りの大店、だった。

「明治の文明開化の頃に、いち早く洋装に目をつけて、その専門店になる事が出来たのですが、先代の跡を継いだ僕の両親は、経営の才能がなくてね。投資に失敗して、その心労から二人とも、急になくなった。借財をきれいにする為に、店は他の洋装店に売りました。」

まだ、若いのに、そんな苦労をしていたなんて、櫻子は知らなかった。

いつも、父の隣で、柔らかに微笑んでいた青年だったから、そういったドロドロした運命とは離れた世界の人間に見えていた。

「その時にお世話になったのが、二階堂銀行だったのですが、どういうわけか、理事長の元に僕の噂が届いていて、そして、何もか

も失った僕を雇ってくださったのですよ。」

実は、残された神谷は、洋装店の跡継ぎとして素晴らしい技術と感性を持っていた。鬼才、とも表現できる程だった。

あまりに抜きん出た才能だったが為に、神谷洋装店と親しかった同業者は、どこも彼を雇うことを恐れ多いと感じた。

そして、彼らの多くは、同時に債権者でもあったため、訪れた銀行担当者に、その事を話していたのだった。

神谷の才能の噂は、そうして二階堂財閥の理事長の耳元まで届いたのであった。

梅造も、どこかのお抱え職人になるよりは、経営を学ばせた方が彼の役に立つと感じて、彼を引き取る事に決めたのである。

「まあ、そうだったの。」

「はい、ですから私は理事長には、大変感謝しているのです。」

櫻子の方を向いて、微笑んだ。

「私も、神谷さんは感謝しているわ。」

微笑む櫻子に、神谷は首を傾げた。

「僕は、お嬢様に何か感謝していただくような事をした覚えがないのですが…？」

「何を言ってるのよ、この服！仕立ててくれたじゃないの。私、なるべく質素な服を着たかったから、夜会服としては少し無茶な注文をしてしまったのだけれど、こんなに品良く仕上げて下さったわ。兄は、地味って言ったけど、私はそうは思っていないの。」

「本当に喜んでくださっていたのですね！ありがとうございます。」

「お世辞だとでも思っていたの？」

「いえ…そんな事は…ありがとうございます。」

神谷は、どうやら自分の才能を謙遜しすぎる傾向があるようだ。

「…でも、お仕事って、頭だけじゃなくて、体力も優れていないと大変なのね。神谷さんも、きっと父の後ろでいろいろ気を配っていたでしょうし。」

「そうですね。僕は運動の方はからっきしですけど、体力の維持はこれでも若いときから心がけるようにしているんですよ。ですから、桃真さまがすぐに経済界に入らずに、士官学校に進まれたのは、賢明だと思います。体力も、身体能力もつくし、軍の内情に詳しければ、時勢にも敏感になれます。帝国陸軍での人脈も、将来役に立つかもしれませんし。」

「あら?でも、父様は、兄様に士官学校に行くように言った事は一度もなかったわ。」

「でも、ご自分の会社で働け、とも、大学に進学せよ、とも仰られなかったでしょう?」

…確かにそうだ。

梅造は桃真の進路に口を出した事はなかったが、彼が決めた進路をいつも応援していた。

特に、少佐に昇進したときには、狂喜乱舞して、いつにもまして豪奢な宴を催した事から、無関心でもなかった事も証明できる。

「ああ、少しお喋りし過ぎました。僕としたことが。今日の主役を引き止めてしまって申し訳ありません。僕にかまわず、広間にお戻りになってください。皆さん、あなたの姿を見たくていらっしゃった方ばかりなのだから。」

皆が、私の姿を見に?

「……どういう事かしら?」

櫻子が眉をひそめると、神谷は明らかにしまった、という顔をして、目を泳がせた。

「説明していただけるかしら、神谷さん。」

「いえ、お聞きになっていないなら、僕の口からは…。」

「あなたから聞いたとは、決して言わないわ。言って頂戴。」

櫻子に腕をつかまれて、観念したように神谷が口を開いた。

「今晩は、あなたと桃真さんの為の宴だったのですよ、櫻子さん。あなたと兄様の婚約者を決める為のね。」

「なんですって?」

「今晩だけじゃない。少し前の宴から、豪商、医者、帝国軍、官僚などの御曹司、良家の令嬢が、客人として招かれる事が増えたでしょう?僕は、あなたや桃真君がお気に召す方が、なかなか現れないのだと思っていたのですが。」

「わたくしは、知らなくってよ。」

「……そのようですね。」

「きっと兄も知らなかったに違いないわ。使用人もね。斎木は知っていたでしょうけど。」

「ちなみに、白状してしまうと、私もその候補者の一人なんですが…。」

「はい?どうして、神谷さんが?」

言ってしまってから、はっと、気がついた。

先ほど父が、彼に自分の持つ企業のどれかを任せたい、と言っていたではないか。

梅造は、相当、彼を高評価しているようだ。

「決めきれないなら、僕はどうでしょうか?」

神谷が、櫻子に笑いかけた。

しかし、それには、いつもの柔和な笑みに加えて、とても妖艶な色気を含んでいた。

どきりと心臓が高鳴った。

彼は、時々、こういう表情をする事がある。本当に、一瞬だけ。

櫻子は、その度に、「色あひふかく、花房長く咲きたる藤の花松にかかりたる・・・」と、いう一節を思い出す。

しなだれた藤の花房が長く色濃く咲いていると、とても素晴らしいと清少納言も述べた視覚的な美しさに加えて、夜風に誘われて、揺れる花房から立ち込める、藤の香気の記憶さえも、呼び覚ましてしまう。

――藤の花言葉は、「陶酔」。

「冗談ですよ。」

神谷は、またいつものような、顔に戻った。

「僕は、その候補者だとは、理事長からは聞かされておりません。今晩も、単に秘書として、ついて来ただけですよ。日ごろ交流されている方々にお会いできる良い機会ですからね。」

からかわれているだけだと知って、櫻子は安心した。

「ああ、あそこに見えるのは、京極様じゃありませんか？」

神谷は庭の隅で、何かを飲みながら、ぽつんと立ってる客人の一人に話題を移した。

「あら、ほんとだわ、菊弥さんだわ。」

「京極様は、大学の医学部を首席で卒業されて、今は陸軍医でしょう？素晴らしいですね。」

「あんな所で何をしていらっしゃるのかしら？」

「お声をかけてあげなさった方がよろしいのでは。あなたの幼馴染でしょう？僕はそろそろ、広間に戻ります。理事長様が心配ですし。それでは、櫻子さん、また後で。」

神谷が去った後で、櫻子は、菊弥にそっと近づいて、声をかけた。

序章（3）　夜会

◆◇◆◇

「今晩は、菊弥さん。」

「櫻子か…？」

櫻子に気がついて、驚いたように、やや切れ長の目を開く。

褐色の肌は、帝国陸軍での訓練による日焼けではなく、生まれつきだった。

口をつけていたのは葡萄酒だったようだ。

近づくと、独特の甘い香りがした。

「どうしてこんな所にいるの？中に入ればいいのに。」

今年で二十六になる京極菊弥の実家は、御家人に仕えていた御典医の家系であり、当主は梅彦と親友だった．．

両家は仲が良く、櫻子と菊弥も幼少の頃から仲が良かった。

そして、京極家の実家は京都にあった事から、ゆくゆくは帝都の第一大学区医学校（現在の東大医学部）に行きたい、と思っていた菊弥は、上京し、二階堂家から大学に通っていたのだった。

もちろん、扱いは書生ではなく、親友の子息を預かるという関係だったのだが、他に居候していた書生に配慮してか、はたまた、その生真面目な性分からか、屋敷の中で一番熱心に雑用をしていてくれていた記憶がある。

そして、櫻子が、女学校の教科を一つも落とさずに卒業できたのも、彼の家庭教師のおかげであったのは、余談だ。

「大佐殿を通じて、招待して頂いたんやけど、何分、こういった華美な場所は、俺には合わんらしいてな。しかし、せっかく誘って頂いたのに、さっさと帰っては失礼というものやろう。だから、理事長が、一通り客人への挨拶がお済になったら、ご挨拶をして帰ろうとここで時間を潰してたんや。」

優雅な京都弁で話す。

「相変わらず、真面目なのね。」
帰らずに、肌寒い秋の夜長に一人で立ち続けている所が。
櫻子は、こらえきれずに、少し苦笑した。
「私が付き添うわ。黙って私の隣に居れば、余計なお喋りをせずに済むでしょう?」
櫻子は、葡萄酒を持っていないほうの、菊弥の手を取った。
近づくと、彼からは、消毒液の匂いに混じって、腕からは、菊の匂いがした。
二階堂家に居たときも、ほとんど毎日花を生けていた。特に春は、菖蒲、秋は菊の花がお気に入りのようで、今日もきっと、花を生けてからやって来たに違いなかった。
花の匂いで患者に迷惑をかけてはいけないから、といつも勤務が終わってから活けていると聞いた事がある。
「それに、宴が中盤になれば、舞踏が始まってしまうわ。菊弥さん、舞踏は得意だから、一緒に　踊ってくださると助かるわ。私は、ワルツなら大丈夫なんだけど、それ以上に早い音楽にはついていけないの。」
「そんなん、俺も得意やないわ。」
櫻子は、あまり得意ではなかったが、菊弥の母親が、日本舞踊の師範である血筋からか、それなりに上手であった。
明治の鹿鳴館時代から、諸外国との外交政策上の必要性から導入され始めていた社交ダンスは、大正には、富裕層にまで浸透し始めていた。
「なんで、斎木さんに教えてもらわへんのや?」
「斎木…?どうして?」
「欧羅巴(ヨーロッパ)留学してはったんなら、必然的に踊る機会があるやんか。それに、彼は、音大出身やろう。」
執事の斎木は使用人なので、夜会で踊る姿などは、見たことがない。
しかし、考えてみれば、彼は踊るのが上手いかもしれなかった。

「なんや、気がつかんかったんか？」
図星だった。
盲点だった。
「と、とにかく、広間に行きましょうよ。」
「でもやなぁ…。」
「その様子だと、何も召し上がっていないでしょう？せっかく来て下さったんだから、まずは何か　一緒に食べましょうよ。」
「ああ、そうやな。ほな、入らしてもらうわ。」
口の端をゆがませて、笑みを浮かべている。
櫻子に促されて、広間の方に行くことに決めたようだ。
父親から受け継いだ褐色の肌を覗いては、菊弥の顔の造りは、典型的な京美人である母親の面影を受け継いでいた。
その切れ長の瞳と、優美でで端正な顔立ち、そして、菊弥の真面目で固い性格から醸し出される雰囲気は、そのままでいると、近寄りがたい印象を与えている。
しかし、彼自身は、特に愛想に欠けているわけではなく、人の前に出て他人と関わるのが、すこし下手なだけだった。
社交が苦手ではなく、単に下手であることを、付き合いの長さから、櫻子は見抜いている。
こうして、広間に引っ張り出して、今晩の宴に馴染ませれば、すぐに若い令嬢達に囲まれてもてはやされるに違いない。音楽が流れ始めれば、誰もが彼と踊りたがるだろう。
彼は、自身の技量もさる事ながら、女性にとって踊りやすいように誘導して踊るのが、上手かった。

◆◇◆◇

広間に戻ると、父の姿はなかった。その代わりに、神谷が、客の間を縫うようにして、客人に声をかけ続けていた。
「神谷さん、父は？」

「今、少し別室で休憩されています。」
神谷は、斎木と一緒に、広間の采配に勤しんでいる最中だったようだ。
飲み物のグラスがたくさん入った銀の盆を手にしている。
「今晩は、京極様。私は理事長の秘書をさせて頂いている、神谷藤隆です。起こしくださってありがとうございます。」
「京極菊弥です…どうして私の名前を?」
「客人のお名前とお顔は、記憶させて頂いております。飲み物は何かいかがですか?」
菊弥が、何かの洋酒の入ったグラスを取ると、「ごゆっくり」という言葉とともに、一礼する。
「それでは、櫻子様、失礼いたします。」
「ありがとう、神谷さんも、時々は休憩をしてくださいね。また後でお会いしましょうね。」
神谷は、二人にもう一度一礼すると、、広間の中央のほうへ進んで行こうとしたが、何かを思い出しで、きびすを返した。
「そういえば、春日玲子様が、お嬢様をお探しになっていましたよ。」
「まあ、玲子も既に来てくれているのね。ありがとう、探してみるわ。」
神谷は、微笑むと、また歩き出した。
「俺は大丈夫や、おおきに。玲子嬢をお探ししてあげたらどうや?きっと、櫻子に会いたがっておられるやろう。」
「本当に…大丈夫?」
「首を傾げるな、大丈夫や。どうやら、俺の顔見知りも、たくさん招待されているようやしなぁ。」
菊弥が広間を見渡すと、陸軍で見慣れた顔がいくつかあった。
「わかったわ、また後で会いましょうね。玲子を見つけたら戻って来るわ。」
「おう。」

菊弥は、片手を挙げて、また口の端をゆがめて笑った。爽やか、というよりは、妖艶だったが、きっと、彼に自覚はない。

広間を半周ほどすると、他の貴婦人達と輪になって、談笑している玲子の姿があった。

「あ、櫻子！」

彼女が、櫻子の姿に気がついて、他の子女に断ってから、輪から抜け出てくる。

「玲子、来てくれてありがとう。数日前に会ったばかりだけど、私は毎日でも嬉しいわ。」

「私もよ。でも、来たときは、姿が見えなくて、気分がすぐれないのかと思っちゃったわ。元気そうで良かった。」

「ちょっと庭にいたのよ。ごめんなさいね。」

櫻子をようやく見つけた玲子は、少し興奮しているのか、顔がすこし火照っていた。

まるで、日本人形のように、華奢な顔立ちに、白い肌は、どこから見ても春日財閥の、深窓の令嬢であったが、櫻子の無二の親友である彼女も、かなり活発な性格をしていた。

「この間の浅草の一件の後、手首や足が後から痛んだりしなかった？」

「この通り、よ。」

「良かったわ！あ、そうだわ、今日は両親と一緒に葵もついてきたのよ。珍しいでしょう？」

すると、自分達から遠くのほうの人の輪にいた人物が、自分の名が呼ばれたことに気がついて、こちらを見た。

背は百六十半ばある櫻子とほぼ同じだが、細身な体形のせいか、少年と呼んでも良さそうな、美青年がいた。

そして、こちらに近づいてくる。

艶のある黒髪に、白い肌をしている。あごも女性のように細くて、長いまつげが目のふちに隙間なく生えている。

もし、女物の服を着ていたら、女性と見間違えてしまいそうだ。

葵、というのは、玲子の二つ違いの弟だった。
玲子が、日本人形のようなら、彼はまるで西洋人形のような端整な顔立ちに、知性を宿した瞳をしていた。
事実、彼は、東京帝国大学の法学部に所属していた。
しかし、櫻子は、この親友の弟が若干苦手だった。
「今晩は、櫻子さん。ご招待頂いてありがとうございました。」
「今晩は、葵君。」
爽やかな葵の笑顔に、櫻子も微笑み返す。
顔の筋肉の緊張を、彼に悟られていないか心配であったが。
「じゃあ、僕は、失礼しますね。どうぞ、姉をよろしくお願いします。」
「ありがとう、また後でお会いしましょうね。」
そして、先ほどまで談笑していた人の輪に戻っていった。
「あの子、夜会があんまり好きじゃないのに、今日は久しぶりに出席したもんだから、両親もびっくりしてるのよ。うふふ。」
「そ、そう…。」
「ねえ、櫻子、お願いがあるの。」
玲子が指を組んで、櫻子に懇願した。
「もうすぐ舞踏の時間になるでしょう?その間に、桃真様に、私のお相手をしてくださらないか、お願いしてもらえる?」
瞳を潤ませている。
「兄様に?玲子、あなたもしかして…」
「ええ、私が、櫻子よりもずっと、ずっと、ずっと舞踏が下手なのは知っているでしょう?実の弟と踊るのも変だし、桃真様にお願いできないかしら?」
櫻子は、心の中でがくりとうなだれた。
まあ、知らない人と踊って恥をかくよりは、賢明な判断ではある。
「それとも、桃真さまは、今晩はいろいろ方と踊らないといけないのかしら?自分のお屋敷の夜会ですものね。」
(そういえば、兄様って、踊れるのかしら?踊ってらっしゃるの

を見たことがないわ。）

兄は、茶道と、武芸に関しては頼りにしていい。

他の分野は、わからない。

「大丈夫よ、今日は、菊弥さんが来てらっしゃるから！。」

「本当？ああ、嬉しいわ。」

玲子は、ほっと息をついた。安心したようだ。

菊弥は、櫻子のついでに、屋敷にしょっちゅう顔を出していた玲子の勉強もまとめて見ていたので、二人は顔見知りというか、玲子は、菊弥の少ない女性の知り合いの一人だった。

（でも、玲子が菊弥さんと踊っている間、私はどうすればいいかしら？）

菊弥と会った事で、すっかり安堵していたが、急に不安が襲ってくる。

異国の血を引く櫻子と、典型的な日本美人の玲子とでは見た目は全く正反対、と言っても良い程だが、性格や好み、行動様式はかなりの似たもの同士だった。

唯一の違い、といえば、櫻子が料理はできるが裁縫は壊滅的であり、玲子はその反対に、刺繍や編み物など、裁縫全般の才能はあるくせに、料理の味付けをすると、いつも恐ろしい結果となる事くらいだった。

（あ、兄様は、長男だから、きっとお客様のお相手をしないといけないから、無理ね。）

櫻子は、今晩あった全ての男性の顔を順番に、思い浮かべた。

「父様と私…絵的に悪くないけれど、父様も客人と踊りなさるだろうし。斎木は使用人だし。神谷さんも秘書だから、客人に頼まれたら踊るでしょうけど。となると…。」

私は、誰と踊れば良いの？

「玲子、ごめんだけど、私も舞踏が心配になってきたから、始める前に、知り合いにお願いしようと思うの。ちょっと離れていいかしら？」

「ええ、もちろんよ。また後でお会いしましょうね。」
櫻子は、玲子としばし別れると、早速、候補者を探し始めた。

序章（4）　夜会

広間をうろうろしながら、見知った顔が居ないか探していると、神谷と同じように、客の間を行ったり来たりしている斎木に声をかけられた。

ほかの使用人も、空になった料理の大皿を片付けて、食後の紅茶や、珈琲の準備と取替え始めている。

「どうかなさいましたか、お嬢様？」

「ありがとう。たいした事じゃないのよ。」

「冷や汗をかかれているようですが、ご気分でも悪いのですか？」

目ざとい。本当に斎木は優秀すぎる。

「えっと、斎木も、私が踊るのが下手なことを知っているでしょう？だから、音楽が流れている間だけ、一緒に踊ってくださる方を最初に探しておこうと思って。」

「しかし、それでは社交の意味が無いのでは？」

見も蓋もない。

「でも心配なの！」

「心配要りませんよ。女性は、無理に踊ろうとするのではなくて、力を抜いて、殿方の動きに合わせるだけで良いのです。何もしようとしなくて良いのです。」

むしろ、女性側が踊ろうとする気持ちを持つと、男性が上手く女性を誘導できなくなる。

「ダンスが上手く踊れないのは、相手のせい、だと思うくらいの気持ちでいらっしゃればよろしいのですよ。踊りが上手い男性なら、相手が初心者かどうかすぐに見抜いて、お嬢様の踊りやすいようにしてくださるはずです。」

「本当？」

「それが社交ダンスというものですよ、心配要りません。」

しかし、踊ろうとすると、失敗するから、力を抜けというのはど

ういう事なのか、意味がわからない。
「菊弥さんが言っていたけど、斎木は踊りが上手なの？」
「私ですか？」
「そうよ、踊っている姿を見たこと無いもの。」
「上手が下手かはわかりませんが、好きですよ。」
「そうだったの。」
「踊りは元々、欧羅巴の文化ですから、学生でも踊る機会があるのです。特に、私は音大生だったので、向こうに住んでいた頃は、頻繁に踊っていました。」
菊弥の話は、本当らしい。
「じゃあ、音楽が始まるまで、ちょっとだけ、教えて頂戴。もう、お料理も少なくなったし、それ程忙しくはないから大丈夫でしょう？」
「私がですか？私は使用人ですよ。」
斎木は少し眉を顰めた。
「主様（あるじさま）とは踊れません。踊りならば、桃真様に教えていただいた方がよろしいですよ。」
「兄様が踊りが上手だなんて聞いた事がないもの。」
「軍人様は、こういった社交の場も多いですから、きっと上手に教えてくださいますよ。」
「じゃあ、今から踊りの教師として雇うことにするわ。」
斎木は、鉄面皮を若干崩して、複雑そうな顔をした。
「……。」
「あなたは、お嬢様に客人の前で恥をかけというの？」
「……。」
誰も、そこまでは言っていない。
「だから、少しだけ教えて頂戴。私を助けると思って、ね？」
「……。」
沈黙の末、斎木は、陥落した。
「……わかりました。では、少し、場所を変えましょう。」

「まあ、ありがとう！」
広間を出て、客も使用人も、今は通過しないであろう廊下に移動した。

◆◇◆◇

「まずは、まっすぐに立つ事から。頭の上から紐が伸びていて、天井からつるされているようなイメージです。」
「まるで、操り人形みたいね。」
「そう、そのイメージです。首も伸ばして……そうです。踊っている時も、常にこの姿勢を心がけてください。この姿勢を保つだけで、男性は誘導しやすくなります。」
斎木は、そこから櫻子の頭をやや後ろと、左側にそらした。
そして、櫻子の前に立ち、左手を持って、自分の右手は、彼女の肩甲骨の辺りに添えた。
「これが、ワルツの基本的な構えです。女性は、男性の右側に常にいるようにします。お嬢様から見て、左ですね。左手は、ふわりと私の右腕においてください。決して、掴んではいけませんよ。」
「わかったわ。」
斎木は、櫻子が緊張しているのが伝わってきた。
「固くなりすぎないで下さい。風に舞い上がる綿帽子にもなった気分でいてくださいね。」
そういわれて、なるべく体の力を抜くように心がける。
「後は、繰り返される三拍子のリズムに合わせて、男性が右足を進めたら、あなたは左足を下げる。右足を下げたら、左足を進めたらよいだけですよ。」
やってみましょう、と斎木がいい、一、二、三と口で拍子をとり始めた。
動き始めると、確かに、斎木の言った意味がわかった。
男性の動きに合わせて、足を合わせていけばいいのだ。

「そうです、お嬢様。心配されていた割には、お上手ではありませんか。」

斎木が、単調な円運動から、向きを変える動きをした事がわかった。

それに気がつくのが遅れて、櫻子は、足の動きを間違えてしまった。

「ご、ごめんなさい。」

「練習ですから、謝る必要はありません。足の踏み出し方を覚えれば、より上手に踊れるようになりますが、わからなくても、ワルツの場合は、基本的に男性に合わせていれば、相手の方が勝手に連れていってくださいます。でも、いくつか簡単な踏み出し方は覚えていらった方がよろしいので、いくつかお教えしましょう。」

斎木は、簡単な動きをいくつか教えてくれた。

その動きを覚えてから、また練習をすると、まだ十五分も経過していないのに、格段に櫻子の動きは良くなった。

そうこうしているうちに、広間の演奏が、聞く為の穏やかな曲調から、踊る為の優雅な曲調に変わっていた。

「そろそろ始まったようですね。練習は終いにしましょう。」

「そうね、どうもありがとう。」

斎木は、踊りをやめて、櫻子の体を離した。

「また、教えてくれる?」

「……。」

斎木は、しばらく考え込んだ。

「旦那様が、そうしろと仰るなら。」

梅造が認めれば良いというわけだ。

「あら、私が夜会で上手く踊れるようになれば、父様は嫌な顔はなさらないわよ?」

「とりあえず、お嬢様、時間がもったいないですから、広間にお行きください。」

斎木に、促されて、櫻子は戻ろうとした。

◆◇◆◇

広間の前に、春日葵の姿があった。
「また会ったね、二階堂さん。」
「今晩は、葵君。」
葵は、玲子が居ない場所では、櫻子の事を「二階堂さん」と呼んでいる。
「あなたは、踊りはお好きなの？」
「嫌いだね。どうして、良くも知らない人と手を取り合って踊れるよね。西洋の考えは、時々僕には理解できない。」
「でも、その洋装姿は、とってもお似合いよ。」
「無理やり両親に着せられたんだ。この意味わかるよね？」
櫻子は、やや首を傾げた。
全くわからない。
「今晩の宴で、いろんな人と話したけど、皆、誰が二階堂家と血縁関係におなりになられるだろうか…って話ばかりだったさ。姉さんは僕が自主的に夜会に参加したと思っているけど、本当は、両親に無理やり引っ張り出されたんだよ。」
「……。」
「あなた、馬鹿？僕も、あなたの婚約者候補らしいよ。姉もね。」
玲子が、兄の婚約者候補として？
「姉さんは、そのことについては知らないけどね。知ってたら、桃真さんを自分の舞踏が下手なことを隠す為の相手として、あなたにお願いするはずないからね。ばかばかしい。」
確かに、今晩、踊りの相手として、桃真を独占する事は、もしかしたら、令嬢達の反感を買うに違いなかった。
「僕も、自分の名前に花の名前があるだけで、ここに呼ばれるなんて、災難だったよ。」
「花の名前って？何か関係あるのかしら？」

「何で、あなたが知らないのさ……？」
今度は、葵は明らかに見下した視線を送った。
「二階堂家の当主には、花の名前が含まれている。そして、二階堂家の娘が嫁に嫁ぐ時は、相手にも花の名前が含まれていなくちゃならない。そうでなければ、不幸が訪れるとか、血は絶えてしまうとか、言い伝えがあるんだってさ。なんで、自分の家の事なのに知らないのさ。」
「確かに、撫子姉様の旦那様の名前も、菖仁（あやひと）だったわ……。」
菖蒲の「菖」だ。珍しい名前だと思って、記憶に残っていた。
「嘘だと思うんなら、今日の若い男性客の名簿を見てみる事だね。」
「いえ、いいわ。貴方のお話、嘘だと思っていないもの。」
「そう。じゃあ僕は失礼するよ。」
葵は、冷たく笑うと、広間に戻ろうとした。
その時、唐突に、ただ事ではない物騒な物音がした。
優雅な演奏も止み、貴婦人の甲高い悲鳴が起こっている。その声音からは、恐怖が読み取れた。
「な、何があったのかしら…？」
「わからない、様子を見てみよう。」
二人は、すぐに広間に向かった。

序章（5）　夜会

広間に戻ると、そこは思いもしなかった光景だった。
阿鼻叫喚の修羅場、といった表現では表現しきれないほどの惨劇。
中央では、華やかな宴には似合わない野蛮人が、三人、白刃を振り回して暴れている。
その者達がそれ以上奥へは進まないように、日本刀を握り締めて、食い止めているのは、菊弥と、兄の友人である軍人の招待客の二人だった。
櫻子は、絶句した。
「あの暴漢は…？」
男達は「天誅！」と奇声を上げながら、食事が乗った卓子を切り付けている。、派手な音を立てて食器や花瓶が割れるたびに、貴婦人の悲鳴が上がった。
「櫻子さん、春日様、早く奥へ逃げて下さい。」
肩を捕まれて振り返ると、神谷がいた。今まで見たこともないような険しい表情をしている。
「おそらく、無政府主義者（アナキスト）です。数年前から、陰を潜めたと思っていましたが、最近は、こうして下っ端どもが夜会を襲撃していると聞いた事があります。」
社会主義者にとって、富裕層は社会を蝕む害虫、としか映らないんだろう。
外からも、奇声と気合が入り混じった音が聞こえる。
兄の声も混じっているようだった。
「門まで来たところで、警備人が気づいて知らせてくれたから、桃真様達が飛んでいってくれたんですけど、三人は、すり抜けて広間に入ってきたようです。」
斎木は、他の使用人と一緒に、客人を出来るだけ広間から逃がさせようと、賢明に誘導している。

その時、一度に二人を相手にしていた、菊弥ではないもう一人の軍人が、ならず者に追い詰められて、重心を崩しかけた。

「櫻子さん、ど、何処へ行く！！」

櫻子は、考えるというよりも、先に体が動いてしまっていた。

逃げる客人とは反対方向へ。

「すぐにお帰りなさい、無礼者！！」

後日、この場にいた客全員が、深窓の令嬢が青筋を浮かべて、鋭い眼光で無頼漢を叱りつけたのを見た経験は、後にも先にもこれっきりだったと、語る。

しかし、当の本人は必死である。

この広間の誰よりも。

「あなた達をお呼びした覚えはなくってよ！！！」

絶叫ではなく、気迫のこもった怒号を貴婦人から飛ばされて、さすがの無頼漢もすこし驚いたようだった。

「邪魔するな…、女！！」

一人が、櫻子に向かって、白刃を振りかぶる。

その瞬間に、櫻子は、卓子に飾られていた、細長い焼き物の花瓶のふちを掴んだ。

振り下ろされた白刃を、超絶的な反射神経で避ける。

そして、掴んだ花瓶で、無頼漢の額の、やや上をめがけて殴りつけた。

「ぐあっ……！」

あまりの痛みで、日本刀を手放して必死に額を押さえる。

きっと、脳震盪を起こしかけているに違いない。

「この女…！」

しかし、もう一人の男が、仲間をやられた怒りで、向き合っていた軍人から、櫻子へと標的を変える。

「危ない、櫻子！！」

菊弥か、誰かが、叫んだ。

男の予想もしなかった動きに、反応が遅れた。

とっさに目を瞑る。
死を覚悟する間もなかった。
「ぐげげえええ…顔が！！」
その時、櫻子の頭上で、釜蛙が苦痛で身をよじったような、醜い声が絞り出された。
体に痛みはない。
おそるおそる目を開くと、無頼漢は、小さめの椅子の下敷きになっていた。
すると、背後から、少し変わった薔薇のような深い匂いがした。
それは、オード・トワレによるものだと気がついた時には、誰かの腕に体を抱きとめられていた。
「怪我はないか、お嬢さん？」
「え…？」
櫻子は、おそらく椅子を無頼漢に命中させたであろう男を見た。
――正確には、見上げた。
背丈が高くて、がっちりとした逞しい体をしている。
そして、洒落た黒の背広に、アスコット・タイをしめた洗練された服装からは、男の色気のようなものすら感じた。
櫻子も、この非常事態において肝が据わっていた方だったが、男の方も、全く揺るがず、落ち着いている。
その自信に満ち溢れた雰囲気から、実際より、もっと背が高くて大きな人物ではないかと錯覚してしまう。
「おい、そこのあと一人、もう止めにしないか？直に警察もやって来る。それとも、今度は、本当に顔を潰されたいのか？？…って、もう遅かったか。」
残りの一人は、既に菊弥にのされて、気絶していた。
他の二人も、起き上がる気配はない。
その時に、警官が広間に押し寄せて来て、気絶したままの犯人を捕縛して、連れ去っていった。
おそらく、門でも同じような事が起こったのだろう。

血相を変えた桃真が、外から飛び込んできた。
「おい、大丈夫だったか、櫻子？」
「兄様！」
櫻子は、偉丈夫の腕をすり抜けて、桃真に駆け寄った。
桃真は、櫻子をしっかりと、抱きしめた。
突然、力強く抱きしめられて驚いたが、兄からは、血なまぐさい臭いがしない事に安心した。切り合ったわけではなさそうだった。きっと、得意の柔術でしとめていたんだろう。
「良かった…。」
「ちょっと、兄様？？」
桃真は、はっ、と気がついて、櫻子を離した。
「あの方が助けてくださったのよ。」
「そうか、すまない。妹を助けて下さって、感謝いたします。」
桃真が、男性に向かって、一礼する。
「いや、なに、礼を言われることの程でもありません。」
なんでもないことをしたかのように、答えた。
「そうだ、菊弥！」
「なんですか？」
「頼む、ちょっと軽傷を負わされた者がいるのだ。手当てをしてやってはくれまいか？」
「もちろんです。」
そうして、菊弥と、桃真は再び屋敷の外へと出て行った。
「さて、もう夜会どころではなさそうだ。遅れて到着してしまったが、帰る事にしますかな。」
男性は、先程のはずみで足元に落ちてしまった、自分の黒い山高帽を拾って、深くかぶりなおした。
「あ、あの…ありがとう…ございます。助けていただいて…。」
「いや、当然だろう。あの状況で、誰も何もしなかったならば、お嬢さんは、今頃あの世行きさ。いや、しかし、そのおかげで俺は…。不幸中の幸いというか、なんと言うか…。」

「何か、仰った？」
「いやなに、こっちの話さ。それより、手首をひねったりはしなかったかい？」
「心配してくださってありがとう。全く問題ないわ。」
「そうか。」
男も、櫻子がなんともないとわかり、安堵したようだった。
飄々とした面持ちで、櫻子を見ている。
ふいに、櫻子は、この人は何かに似ている、と感じた。
「…あっ！」
「どうしましたかな、お嬢さん？」
「あなたを見て、何かに似ているな、と思ったのよ。思い出したわ。」
「ほう…、何に似ていましたかな？」
「音楽よ。この間、横浜港に行った時に、米國から来た船員達が演奏をしていたのを聞いたの。
その音楽の雰囲気が、なんとなくあなたと合ってるわ、と思って。」
無邪気に笑いかけた後で、
「あ、でも、私、その音楽をその時に初めて聞いたから、実は良く知らないのよ。気を悪くされたらごめんなさいね。」
と、謝った。
男は、こらえきれずに吹き出して、ははは、と笑った。さも、愉快そうに。
「堪らないな、お嬢さんは。実に面白い。」
「ご、ごめんなさい！失礼だったかしら？」
「いや、俺の方こそ、笑ってしまってすまないね。」
初対面の雰囲気から、傲慢そうな男だと思ったが、結構、快活な男でもあるらしい。
「お嬢さんが初めて聞いたのも無理はない。それは最近、日本に渡ってきたジャズという音楽さ。

アメリカのとある場所で生まれた音楽だ。」
櫻子は、記憶の中の音楽が、そのような名前である事すら知らなかった。
「俺の商売は、貿易商でね、外国の客人を相手に商売をしているものだから、自然と西洋の文化の影響を受けてしまっている。それをぴたりと言い当てられたものだから、笑ってしまった、というわけさ。」
「あら、そうなの。変なことを言ってしまって気分を害されたのかしら、と心配したわ。」
ははは、と男は再び笑った。
「お嬢さんとは、またいずれお会いしたいものだ…。」
「ええ、お名前をお聞きしてもよろしいかしら?私は、二階堂櫻子よ。」
「いやいや、名乗るほどの者でもないのでね、それでは、またいずれ。」
そして、男は、去っていってしまった。
「あ、君…?」
ぴたり、と足を止め、乱闘の一部始終を見ていた、葵に声をかけた。
「出しゃばってしまって、申し訳なかったね、お坊ちゃん。」
「は?アンタ、何言ってるわけ?」
葵に睨み付けられても、どこ吹く風、といった様子で、そのまま行ってしまった。
「二階堂さん、あの人と知り合い?」
葵が、不機嫌そうに尋ねた。
「いいえ、初めてお会いしたわ。葵君がご存知の方?」
「ちょっとね。うちの会社と取引をしていたのを見た事がある。一代で身を起こして、今は、海外に広い人脈を持つ貿易会社の若社長だよ。あちこちの夜会に時々顔を出している、有名な成金の一人だよ。」

「へえ、あの方が…。」
納得がいった。
あの、洒落た服装に負けない、自信に満ちた雰囲気は、事業に成功した証だったのだ。
「あの人も招待されたのか。素性のはっきりしない方だけど、ずいぶんなやり手らしいよ。女性に人気もあるから、良い所のお嬢さんを全部骨抜きにしているそうだ。そっか、財閥令嬢を娶れば、自分の事業をさらに拡大できるものね。」
納得したように、葵が言った。
「に、しても、あなたがそこまでお馬鹿さんだとは思わなかったよ。日本刀を振り回す輩に、突っ込んでいくなんてどうかしてる。」
葵は、あきれた声を出した。
「せっかく、花婿探しの宴だったのに、なにやってるのさ。もう、これで、嫁の貰い手はないかもしれないよ。あなたみたいな人が義理の妹になるなんて、耐えられないと考える女性がいるなら、大佐殿の婚期も遠のくよね？」
親友の弟だが、やっぱり、この意地悪な性格を好きになれそうにない、と感じた。
騒ぎが収束に向かう中、確かに、少し、考えに思慮深さが足りない、と反省したのも事実ではあったが…。
その時、耳を劈かんばかりの悲鳴が庭から聞こえた。
桃真や菊弥が慌てて駆け寄る。その後に、警官も続く。
櫻子も、じっとしていられず、後を追った。
草陰には、白目をむいて、人が横たわっていた。
月明かりが照らすのは、バツの字に無残に切られた背中。
男性は、すでに、事切れていた。
生前の恐怖を、その顔に刻むように、口を大きく開いたまま。
「櫻子！」
遅れてたどり着いた櫻子に気がついた桃真は、彼女の視界を遮る為に、抱きしめ、そのまま現場から遠ざかった。

「ちょっと、兄様、押さないでよ。後ろから倒れてしまいそう。」
「見るもんじゃない、なんでついて来るのだ、おまえは。」
十分に、見えない所まで移動し、櫻子を解放した。
「うちのお客さまが亡くなられたの？」
自分で口にしたくせに、恐怖で悪寒が走った。
「……ああ、あの方は、堂島社長だ。堂島金属会社のな。」
「そんな…。」
泣きそうになった。
人が一人死んだのだ。
何かが違っていれば、死んでいたのは自分だったのかもしれないのに。
「現場は警察にまかせよう。今晩は、念のために、おまえの部屋ではなくて、俺の部屋の隣を使え。いいな？」
騒ぎを確かめるべくやって来た斎木に、「女中に言って、あの部屋に寝具を準備してやってくれ」と言って、櫻子を引き渡す。
恐怖に震える櫻子は、そっと斎木に背中を支えられながら、屋敷に戻った。

序章（6）　日曜日ノ訪問者

あの事件の日から、一週間がたった。
今日は、日曜であり、学校で国語の教師をしている櫻子の仕事は休みだった。
あの時、父の梅造は、夜会の途中で休憩する為に別室に居たところ、日ごろの疲れが蓄積していたのか、そのまま寝入ってしまって、結局おきたのは、次の朝だった。
あのような騒ぎがあったにも関わらず、目を覚ましもしなかった豪胆さに、斎木は、「この娘にして、この父あり」と思ったが、その鉄面皮の下に隠した。
そして、朝一番に、神谷から昨晩の襲撃事件と、広間の被害の見積額を聞いたが、聞き終えた後は、しばらく笑い転げて、薫をも唖然、とさせた。
「櫻子が、日本刀を振り回す輩に突っ込んでいって、啖呵を切って、振りかかった白刃を避けて、相手を花瓶で気絶させた…？はっはっはっ！！！」
一言一句、全て紛れもない事実だが、総理事長の一番の関心事がそこか、と思うと、周囲は脱力した。
人が、屋敷内で死んだのだというのに。
しかし、今日も、その梅造は、朝食の席でなにやらご機嫌だった。
「どうしたんですか、理事長？」
と、神谷は恐々尋ねた。
うきうきというよりは、にやにやとした笑いを浮かべているので、はたからみると、何かあったのか、と思ってしまう。
日曜日の朝は、桃真、櫻子、そして梅造の三人で朝食をとるのが、二階堂家の習慣になっている。
今日は、それに加えて神谷も同席だ。
彼は、昨晩は二階堂家に泊まっていたので、今朝は二階堂家の

者と朝食を取る予定である。
ちなみに、今日は、和食だった。
「いや、櫻子の面白い様子が見れなかったのは、残念だったな、と思ってな。」
なんだ、思い出し笑いだったのか。
「面白い、って何よ、父様？私も必死だったのよ？」
怒っているようだ。額に皺がよっている。
「なのに、その跡、嫌味を言われたのよ。嫁の貰い手がなくなるって。」
「違いないな！」
面白かったのか、梅造は、またカラカラと笑い出した。
「確かに、今後は、お前に恐れをなして、並みの肝をもった男ならば、もう、求婚の手紙を届けてくることもなかろうよ。」
そういって、味噌汁をすすった。
「だが、そんなことで、恐れをなすような小物は、義息子にはいらんから、丁度良い。私は、面白い男と酒が飲みたい。」
「父様の酒飲み相手を探しているわけじゃあなくってよ。」
櫻子は、梅造を睨みつけながら、焼き鮭に箸を伸ばした。
「だが、しかし、篩いにかけられて残った男は、より熱心に、お前に近づいてくるだろうよ。」
そして、にやり、と笑った。
「え、父様？そんな手紙が届いているの？」
「ああ、お前に言わなかったが、届いてるよ。」
寝耳に水だ。
「桃真にもな。」
「え、俺にもですか？」
「当然だ。わしからは、そろそろ身を固めよ、とは決していわんが、二人とも、今の世にどんな貴婦人や紳士がいらっしゃるか、だいたいわかっただろう？その機会を与えたに過ぎんよ。」
「でも、名前の件は？花の名前がないといけないんでしょう？」

「まあな。花の名前ではない男の元に嫁げば、短命になる、と先祖から伝えられている。実際、過去を見ると、そういえなくもない。長生きしたければ、そういう男を伴侶に選ぶ事だな。」
ちょっと、適当で、いい加減な言い方にも聞こえた。
「また近いうちに、夜会を開くからな。まあ、ゆっくり考えるといい。」
「ええ、また夜会を？」
「気に入らないのか？」
「だって、ダンスが苦手なんですもの…。」
「おまえなぁ……。」
梅造はあきれた声を出して、我が娘を見た。
「どうして、子女が剣道ができて、ワルツが踊れんのだ。普通、逆だぞ。」
桃真も、父に賛同した。
「お前な、日本の外はシベリア出兵だのといろいろ、物騒なのだ。その中で、夜会を開けることに感謝しろ。」
「恥をかくのは嫌なの。じゃあ、兄様が教えてくれたらいいじゃないの？」
櫻子は、軽く兄を睨んだ。
「少佐殿が、踊れないわけはないわよね？」
「踊れぬわけではないが、女側の足順がわからん。」
櫻子の挑戦的な視線を受け流して、白米を頬張る。
「なら、櫻子、しばらくは斎木くんにでも教えてもらえ。」
梅造が、女中に茶碗を差し出して、お代わりを持ってくるように言った。
「それは、いい考えですね。」
今まで、静かにしていた神谷も顔を上げた。
斎木は、一同が食卓を囲むこの部屋の、扉の横で立っていたが、突然、話題に自分が持ち上がったので、驚いた。
「音楽に関することは、きみに任せておけばよい。のう、斎木く

ん。」
「私（わたくし）ですか…？」
「ああ、しばらく、櫻子が夜会を嫌がらんですすむように、踊りを見てやってくれ。」
斎木は、梅造と櫻子を交互に見比べていたが、最後に、わかりました、と返答した。
「あら、父様の許可がでたわね、斎木！」
どうやら、自分は、墓穴を掘ってしまったらしい事に、斎木は気がついた。
「じゃあ、今週中に上達しとかないと、次の夜会に間に合わないわね。」
「せいぜい頑張れ、櫻子。」
他人事のように、桃真が言った。
「そうだ、忘れておった。」
唐突に、梅造が言った。
「櫻子、午前中に、客人が来るぞ。」
この人の思考は、時々唐突に何かが飛び出す時がある。
いつも、様々な事に思考をめぐらせているせいだろうか。
「お前に御用だそうだ。わしと、桃真は出かける用があるから、斎木にはよろしく伝えておいたぞ。」
「客人…？私に？」
「ああ、ま、会えばわかる。」
そうして、梅造は、最後に卵焼きを食すと、それで朝食を終いにした。

序章（7）　日曜日ノ訪問者

その客人とやらは、十時頃に訪ねて来た。
自室で読書をしていたところを、斎木に呼ばれて、応接室までやってきた。
「失礼します。」
部屋の扉を軽く叩くと、「どうぞ」という斎木の声が聞こえた。
長椅子にゆったりと腰掛けて、用意された紅茶に口をつけていた男が、カップを皿に戻して、　ゆっくりと立ち上がった。
「あらあなたは…。」
見慣れた顔があった。
「やあ、お嬢さん。またお会いできましたな。」
昨晩、櫻子を救ってくれた男。
「まあ、名無しさん！お会いできてうれしいわ！」
男は、少し、よろめいた。
「お嬢さん、名無しはあんまりじゃあないですか？」
「お名前を教えてくださらなかったじゃないの。」
「……そうですね。俺が悪かった。」
男は、気を取り直した。
「楡崎蓮一、歳は二十八です。漢字は、睡蓮の蓮に、数字の一で、蓮一です。ちょっと変わった名前で覚えやすいでしょう？楡崎商会という貿易業をしております。」
そして、貫禄のある笑みを見せた。
「昨日は、とんだ災難でしたな、櫻子さん。しかし、お怪我が無いようで安心しましたよ。これが、お見舞いではなく、ちょっとした贈り物の花になって、良かったです。」
そうして、今まで見たことが無いような、大きな真紅の薔薇の花束を、櫻子に渡した。
「まあ、ありがとう。」

櫻子の顔が、ぱっ、と明るくなった。
「欧羅巴のものを真似た香水も、商品として取り扱っていましてね。国内外に原料となる花園をいくつか持っておるのですよ。」
「それで、貴方からは、薔薇の香りがするのね？…どうそお座りになって。」
「おや、昨晩の騒ぎの間に、そんな事まで見抜かれていたとは恐れ入った。やはり、あなたはただの令嬢ではなさそうだ。」
楡崎は、もう一度長いすに腰をかけた。
「昨晩も、無頼漢共に啖呵を切って乗り込んでいく様は、さすがの私も少々びっくりいたしましたがね。さすがは大佐殿の妹さんだ。」
ほとんど初対面の男性に、面を向かって言われると、今更ながら恥ずかしくて、櫻子は、耳のあたりを紅く染めた。
「知り合いを通じて、浅草で絡んできたならず者を蹴散らしたお嬢さんが居なさる、というのを聞いて、興味を持ちましてね。一度、会った見たいと申し上げておいたら、その方が、昨晩の夜会を紹介して下さった事で、こうしてご縁を頂く事ができたのですよ。若い男性は、花の名前が自分の名前に含まれている事が、条件だとお聞きしましたときには、奇妙な規定だと思いましたが、生まれて初めて、自分の名前に感謝しましたね。幸運でした。」
（どうして、浅草の一件が、噂になっているのかしら？？）
世間は、狭い、と櫻子は思った。
「ええ、今朝も、父から全くはしたない娘だ、と怒られていましたのよ。どうか、恥ずかしいですから、それ以上は仰らないでください。」
実際の梅造は、かなり面白がっていたが。
嘘も方便、という諺もある。
「褒めているのですよ、俺はね。だから、こうして、先手必勝とばかりに、お宅に伺ったというわけだ。」
「はあ…。」

話が読めない。
そういえば、彼は何の要件で、この屋敷に来たのだろう。まさか、忘れ物を取りに来たわけでも、あるまいし。
「ですからね、私は、貴方にこうして結婚を申し込みに来たのですよ。」
「は…？」
（はい……？）
櫻子は、ぽかんと口を半開きにして固まった。その様子は、あまり、令嬢には似つかわしくない。
「どなたの…？」
「ですから、俺と、貴方の、です。」
「……。」
「気の強い女は世間にはごまんといるが、実際に白刃が光るのを前にして、啖呵を切って乗り込めるような気の座った女性は、初めて見ましたよ。ますます、貴方が欲しくなりました。」
「……。」
「しかも、まだ日本人には馴染みのないジャズを、一度聴いただけで覚えておられて、おまけに、　それは俺のようだ、と仰った時には、もう、その帰り道には、貴方以外の女性は、俺には霞んで見えてしまってね。たまらず、こうして足を運んでしまった、というわけですよ。」
「……。」
「おっと、自分ばかり少し喋りすぎたようだ。櫻子さんは、どう思うかね？」
尋ねられてわれに返った。
「櫻子さん？」
「ごめんなさい。ちょっとびっくりしてしまったわ。だって、楡崎さんとは、昨日、お会いしたばかりだもの。」
「ははは、それもそうですな。しかし、どうやら、俺が一番乗りだったようで、安心しましたよ。」

「ええ…、昨晩も、あの後で、知り合いから、このようなはしたない娘に求婚してくださる方なんて、現れない、と嫌味を飛ばされたばかりでしたもの。」

「そんな事、言わせておけばいいことですよ。むしろ、俺は、こうして花束を抱えて、屋敷の門に並ぶ熱心な殿方が増える事を、心配しましたからね。」

そういえば、父も篩(ふるい)がどうの、と、似たような事を言っていたような。

櫻子は、頬に、指をすこし当てて、ちょっと首を傾げた。

さて、これからどうしたものか、という風に。

「どうしましょう?」

昨晩、そろそろ婚約者を…という話を耳に挟んだと思ったら、今日、既に一名、現れてしまった。

心づもりもなかったことなので、承諾する気はさらさらないが、お断りしたところで、また新たな男性が屋敷にやってくるような気がした。

それに、このような自分を、「気に入った」といってやってくるような風変わりな若者なのだ。それに、朝一番に駆けつけてくる、行動力もある。

「貴方の気持ちを代弁いたしますと、今は承諾するつもりはないが、すっぱりここで断るほど、まんざら嫌でもない、と言った感じですな。」

ずばり、心の中を言い当てられてしまった。

「私は、先手必勝が信条だが、せっかちではないのでね。どうですかな?これからお忙しくなければ、ご一緒にどこかへ出かけませんか?」

思っても見なかった申し出に、櫻子は驚いた。

慌てて、斎木の方を見る。

「旦那様からは、お嬢様に任せる、と仰っておりました。」

父様は、本当に自由主義者だわ、と思った。

「私は、今日は午後からは特に何もする事が無いのよ。お断りする理由が思い当たらないわ。そうおっしゃるなら、どこか一緒に行ってくださる？」

「ははは、貴方は正直な方だ。もちろんですよ。俺がお誘いしたのだからね。」

もう、車は、用意してあるのだよ、と、楡崎は笑った。

「ご婦人は、支度に少々、お時間が必要だろう？俺は、ここで紅茶を頂きながら、いくらでもお待ちしているから、準備ができたらまた戻ってきてくれないか？」

ええ、わかったわ、と櫻子は、応接室を出て、自室に戻った。

◆◇◆◇

部屋から出ると、廊下には、しかめ面の桃真がいた。

「あら、兄様、まだ家に居たの？」

「……斎木から、話は聞いた。」

「ちょっと、お出かけしてくるわ。」

「子女が、よく知らぬ男と一緒にいくのは好ましくないが、父様が了承した、という事は身元もしっかりした相手なのだろう。俺は心配はせぬが、気をつけて行ってこいよ。」

「ええ、車を出してくださるから交通はお任せするつもりだけど、そうするわ。」

気をつけて、の意味が違う、と思ったが、言わなかった。

「そういえば、兄様も、昨日の一件で、どこもお怪我はなかったの？」

「あのような斬り合いで負傷しておれば、軍人なぞ務まらん。それより、菊弥には、今度会ったら、お前からも礼を述べておけよ。負傷したものはいずれも軽傷だったが、全員彼が見てくれたんだからな。」

「わかったわ。せっかく来ていただいたのに、彼にも申し訳なかったわね。」

「全くだ。来週、彼の両親が帝都を尋ねてくるそうだ。お前も、日ごろお世話になったのだから、一度は顔を出しておくのだぞ。」

そうだ、と桃真は思い出したように、声をあげた。

「お前に返事をするのを忘れていた。来週の終末に浅草に行きたいといっていたな。俺の予定は大丈夫だ。」

十一月は、浅草では酉の市と呼ばれる年中行事があった。

開運招福と、商売繁盛を願う祭りで、江戸時代から続いている。

お祭り好きの櫻子は、毎年、この行事を楽しみにしているが、人が多すぎて、一人で行くのはいささか危険なので、毎年、兄についてきてもらっている。

「よかったわ、ありがとう。」

「ああ、じゃあ、気をつけてな。」

夕方には返って来いよ、と言われて、部屋を後にした。

序章（8）　日曜日ノ訪問者（選択肢有り）

「おや、櫻子さん…。」
楡崎は、櫻子の洋装を見て驚いた。
黒を基調としたテーラード・スーツは、襟や、スカートのなど、部分的に、白くなっている。
全体的に直線的なシルエットは、巴里あたりから巻き起こった、最近の流行だという。
「…変かしら？」
「いや、よくお似合いだ。」
「髪は、短い髪のほうが、この服にはよく似合ったかもしれないわね。今日も、あなたは洋装で着てくださったから、真似てみたのだけれど。」
「あなたは、流行には敏感な性質なんだね。」
この時代、男性は三割程度は洋装をたしなんではいたが、女性はまだまだ百人いて一人くらいの割合しか親しまれていなかった。
「でも、この格好は、もう少し痩せた女の子が着た方が似合うわね。」
「そんな事ないさ、さあ、もう昼ですから、何処に行くか決める前に、昼飯にでも行きましょうか。」
楡崎の車で、仏蘭西料理を食べに行き、それから帝劇へ行く前に、銀座の喫茶店で時間を潰した。
「この間の夜会といい、あなたは地味好みなんですな。」
紅茶のカップを傾けながら、意外そうに、楡崎が言った。
「私、実は、あまり服は持っていませんから、新しく仕立てていただく時は、なるべく質素な服にするようにしてるのよ。他の人の印象に残ってしまう服なら、そう何度も着れないでしょう？特に、夜会ではね。」
櫻子は、いたずらっぽく微笑んだ。

「あなただったら、服どころか、銀座の呉服屋をまるごと買えるでしょうに。」

「私が、稼いだお金ではないもの。」

楡崎は、ほう、と、眉を上げた。

どこの夜会に顔をだしても、家が金持ちな所の娘は、今の流行は何だの、この間新調した着物はどうだのと、楡崎には消費する事ばかりしか考えていないように聞こえたので、櫻子の考え方に、少し驚かされた。

「それでお嬢さんは、国語の教師もされていらっしゃるのですな。」

「ええ、なるべく身の回りのものは自分で買うようにしたいし、それに、私は、生徒に国語を教えるのが好きなのよ。」

「俺は貧乏でしたから、尋常小学校しか卒業していませんからな。勉強というものも、あまり好きではありませんでした。」

「私は、実を言うと、国語以外はあまり出来なかったのよ。」

櫻子が、照れ笑いをした。

「家同士の付き合いの長いお家に、大変頭の良い息子さんがいらっしゃってね。京都から上京されて、私の家から大学に通いなさったの。その方に、私は勉強を見てもらえたから、女学校を卒業できたようなものなのよ。」

「もしや、昨晩の軍医殿ですかな?」

「あら、ご存知?」

「直接の知り合いではありません。が、しかし、こういった商売をしていますと、自然とあちこちの夜会に顔を出させていただく機会が増えるので、情報が入ってくるのですよ。」

「私のお話も、一体どこから入ってきてしまったのかしらね…。」

櫻子は、浅草の一件が楡崎の耳に入っていた事を思い出し、右手で頬を押さえた。

「いいや、元を辿れば、俺はそのおかげであなたに会うことが出来たんだ。もし、俺が他の夜会に出席していた時に、あなたも出席

していたとしても、俺はあなたが、あなただと、わからなかったかもしれない。」

――あなたが、あなただとわからなかった。

国語の教師としては、なにやら心につっかえる表現だ。

「あら、昔にあなたとお会いした事があるという事かしら?」

ふふふ、と楡崎は不敵な笑みを浮かべるだけだった。

「私は、あなたをお探ししていたのですよ。」

その笑みが消え、真剣な目つきになって、櫻子をまっすぐに捉えた。

さすがの櫻子も、ぎくり、とした。

剣道の試合ならまだしも、男性から、強くぎらりと光るような視線を送られるのは、父や兄から叱られた時だけだ。

しかも、このような喫茶店でそうされた経験などない。

怖い、と櫻子は思った。

「この人だ、と思った。俺は本気ですよ、櫻子さん。本気であなたを欲しいと思っているのです。」

心に突き刺すような、真摯な口調だった。

このような直接的な口説き文句を聞かされたのは、初めての経験だった。

不覚にも、赤面してしまった。

「女性をときめかせるのがお得意なようね?その手練手管で、一体、何人の女性を今まで虜になさったのかしら?」

「そんなことはない、私がこんなに情熱的な言葉を伝えたのは、あなただけだ。自分でも、びっくりしてしまった。」

それすらも、演技なのか、あるいは、本気なのか。

「でも、楡崎さんなら、私よりも、もっと美しくてお金持ちのお嬢さんとでも婚約できそうよ。」

「ふう……、さすがは教職に就かれているだけあって、真面目ですな。」

「それに、ご存知の通り、私は教師で、財閥とはあまりかかわり

が無いのよ。もし、ご商売の為に、私を利用となさるなら……。」
「あなたは、俺が金や人脈目当てで近づいたとでも思っていらっしゃるのか？」
楡崎は、己の自尊心を傷つけられたようだった。
その瞳が、凍るように冷たくなった。
「失礼な事を言ってしまったわ。」
「いや、俺の立場なら、似たような事を考えたかもしれない。しかし、俺は、ゆっくりと事を進めるのは嫌いな性分でね。」
「正直に言うとね、自分が結婚するだなんて考えてもいなかったもの。」
櫻子が、紅茶のカップを持ち上げて、口に含んだ。
生ぬるいというか、すでに冷たくなったそれが、この男と一緒に居る時間が長いものになった事を表していた。
「……それ以前に、まだ、人を好きになった事がないんですもの。」
この時、櫻子の脳裏には、何故だか神谷の顔が浮かんだ。
そんな、自分に、少し動揺した。
しかし、その事に気がつかなかったことにして、胸の奥にしまいこんだ。
「……。」
少し、驚いたように、楡崎の瞳が丸くなった事に、櫻子が気がついた。
楡崎は、この前のようなきらびやかな夜会を、当たり前のように開き、華やかな御曹司達に囲まれて育っている女性から、このような台詞を聞くことになるとは思わなかった。
「だから、恥ずかしい話ですけど、私、こんな歳になっても、恋というものがどんなものなのか、よくわかっていないの。」
楡崎は、笑わない。
しかし、妙に納得した。
普通ならば、年頃の男女が二人で何処かへ出かけた時、どちらか

が、艶っぽい視線を飛ばしたら、用意、ドン、だ。
自分が今まで相手にしてきた女性達は、そこから駆け引きが始まった。
すると、女性というものは、突然、なんともいえない雰囲気を醸し出し始めるのだ。まるで、花が綻んで、中に閉じ込められていた香りが、外へこぼれ出すように。
しかし、彼女は、まるで、まだ固くて青い蕾のままだった。
自分は、ここまで感情をむき出しにして、彼女を欲しているのに、返ってくるものは、こんなにも味気ない。
わざとはぐらかされているのか、と思っていた。
しかし、そうではないらしい事には、ずいぶん早くから気がついてしまった自分が、悲しい。
もしかすると、彼女は、自分がそれなりの歳の男であることすら、時々忘れているのかもしれない。
その無邪気な笑顔を見るたびに、愛おしく思ったが、同時に憎らしい、とも思った。
心の芯から、嫉妬にも似た、なんとも例えようのない黒い感情が、渦を巻いているようだった。
「急にぼんやりされて、どうしたの？」
「ああ、いや…なんでもないさ。」
きっと、まだ彼女は気がつかないだろう。
恋の味を知らないあなたに、これからどんな策を講じようか、と考えている事を。
「本当に、今日は良い天気ね…。」
櫻子は、話題をそらせようと、窓の外を見た。
秋の日差しは柔らかい。
「そうだ、散歩でもしましょうか。まだ、紅葉にはちと早いが。」
「まあ、いい提案ね。…でも、劇場の準備をしてくださったのではないのかしら？」
「他に行くところが無ければそうするつもりでしたがね。なにぶ

ん、仕事が忙しくて、何処か自然の多い場所で安らぎたかったので、丁度よかった。」

どうやら、忙しい間を縫って、自分を訪れてくれていたらしかった。

「お忙しいのに、来て下さったの？」

「この時勢に仕事が多いのは、良い事ですよ。では、外へ出ましょうか。俺も、室内より外をぶらぶらしたい気持ちになっていたのでね。丁度よかった。」

「じゃあ、行きましょう。」

「ああ、ゆこう。」

そうして、二人はそういうことになった。

◆◇◆◇

もみじは、まだ朱色のものが多くて、真紅ではない。

もう少し、寒くなれば、深く色づくだろう。

それでも、櫻子を感激させるには、十分だった。

「あと二週間後くらいに、京に行けば、きっと最高でしょうね。」

「京都がお好きなのですか？」

「父の祖父の実家は、もともとは京都だったのよ。だから、本当に古いお付き合いをさせて頂いているお家は、京に多いから、今でも父に連れられて、よくうちの別荘に行くのよ。特に春は必ず。」

「櫻ですかな？」

「そうよ。京の櫻でなければ、観た気がしない、といって、父が言うの。生まれた時から帝都に住んでいるのに、血が騒ぐのかしらねぇ。」

「自分は、もとは関東の生まれですが、そこから神戸に行って、大阪も少しは居ました。大きくなってから、神戸で会社を興して、拠点を帝都に移しました。だから、京の櫻も知っていますよ。」

なるほど、だから、関西の商人が、まるで無理やり標準語になおしたかのような独特の話し方をするのか、と櫻子は思った。
楡崎は、紅葉の葉を数枚取ると、それをじっくりと目を凝らして眺めた。
まるで、物思いに耽るかのように。
「きれいでしょう?京の櫻は。」
「あ?ああ…」
上の空だった楡崎は、声をかけられたことに驚いて、うなづいた。いつの間にか、日差しは西へ傾いて、周囲は葉と同じ朱色に染まっていた。
「長い事、喫茶店で時間を潰してしまったようだ、櫻子さん。帝劇を見たいと仰っていたが、それでは帰宅が夜になる。」
兄にも夕方には戻ると言ってしまった。
「どうだ、来週も一緒に何処かへ出かけませんかな?」
「来週も?」
きっと、この人は、また忙しい間を縫って、私に会いに来てくれるつもりだろう。
櫻子は少し考えた。

来週は……

「一緒に帝劇に行きたいわ。」　⇒【楡崎蓮一】編へ
「斎木にワルツを習わなければ。」　⇒【斎木萩人】編へ
「菊弥さんの家族に挨拶をしなければ」　⇒【京極菊弥】編へ
「兄と浅草へ行く予定なの。」　⇒【二階堂桃真】編へ

序章（8）　日曜日ノ訪問者（選択肢有り）（後書き）

楡崎は、関西の年輩ビジネスマンが、標準語に合わせたような話し方をします。彼は関西で起業し、関西の商売人を相手にしていたので、影響されたのです（標）よく来たね→（関）よう、来たな→（楡）よく来ましたな。

こんな感じ（笑）

【楡崎蓮二】編（1）　戸惑ヒ

「一緒に帝劇に行きたいわ。」
櫻子は、少し顔を上げて、蓮一を見た。
「でも、その後、一緒に浅草にも行ってくださる？」
後で、兄に謝る事を忘れてはいけない。どうせ、乗り気ではなかったのだから、自分と付き添わずにすんで、喜ぶだろう。
「浅草ですか？」
「酉の市に行きたいの。でも、一人では危ないって言うから、兄様に一緒に来てくれる様にお願いしていたの。代わりに一緒に、行ってくださると嬉しいわ。」
楡崎は、少し戸惑っている。
「あ、でも、お仕事が忙しいのよね？そんなに長く一緒に居ていただいたら、悪いかしら。」
やっぱり、浅草は兄様に、と櫻子が考えたときだった。
突然、楡崎に腕を引かれた。
咄嗟の出来事に、逆らえず、櫻子は楡崎の胸に倒れこむ。
その胸からは、眩暈のするような、あのオード・トワレの香りがした。
今日、彼が持ってきた本物の生花よりも、深い深い真紅の薔薇の匂い。
「ちょっと、楡崎さんっ？」
驚いた櫻子は、声が少し裏返っている。
「…俺は、あんたが好きだと言っただろう？」
耳元で、低くて艶のある声が囁いた。
ゾクリ、と体の心が震えた。
「そのおれを兄貴代わりにする気かい？」
「離して！」
櫻子は、楡崎の胸を突っ撥ねた。

しかし、その逞しい胸は、びくともしなかった。
どうして、こんな事をされているのか、櫻子にはまだ理解できない。
「駄目なら、いいの。私は気にしないから……っ？！」
何が起きたか理解する事に、時間がかかった。
すっ、と楡崎の顔が近づいてきたかと思うと、そのままぶつかりそうになった。
ぎゅっ、と櫻子が目を閉じると、自分口元に何かが触れた。
それが、楡崎の唇だと気がついた時、櫻子はどうしてよいかわからなくなった。
自分の下唇を何度も、何度も吸っている。
「ん…！」
その執拗さから逃れようと、櫻子が顔を上へそらそうとすると、その拍子に、楡崎は自分の顔の角度を変えて、己の舌を桜子へ潜り込ませて来た。
結果的に、より深く、楡崎と唇を絡める事になってしまった。
口内を蹂躙される、その生々しい行為に、櫻子は戦慄した。
このような至近距離で男性と接した事は、今だ経験した事がない。
楡崎本来の体臭は、彼が纏っている香りよりも、官能的だった。
きっと彼自身は、気がついていないだろう。
しかし、少なくても櫻子には、この野生的で、荒々しい匂いを、薔薇の香りで包み込む事で隠しているように思えた。
脅える櫻子は、恐怖から顔を離そうとするが、楡崎はその度に追いかけてくる。
「ん…あなたが悪いんだ。そんなにつれない事をするから。」
熱情に支配されている楡崎は、櫻子が今まで聞いた事のないようなとろけた甘い声で、彼女に囁く。
頬を手の平で固定されて、より深く繋がる位置へ、顔の角度を変えられた。
櫻子には、もう抵抗できる状態ではなくなってしまった。

唇だけではなくて、魂までもが抜き取られて、くもの糸に絡め取られてしまったような感覚に陥った。
誰かに、見られているかもしれないとか、余計な何かを考えようとしても、すぐに、頭の中を乱されてしまう。
「好きだ……あなたが……。」
うわごとのように、呟く。
何度も送っても、彼女の元まで届けられなかったその思いを吹き込むかのように、何度も角度を変えて、唇を吸った。
最後に、彼女の顎の後ろまで吸い、そこでようやく、名残惜しそうに顔を離した。
濃厚すぎる楡崎の行為に、櫻子の耳元や頬は火照ってしまっていた。
それに気がついた楡崎は、優越感に眩暈がしそうになり、彼女の顔から手を離して、それを腰にまわした。
そして、うなじや首筋についばむような軽い口づけをして、ゆっくりと、顔の肩に埋めた。
櫻子の匂いを楡崎も吸い込んで、それからうっとりして息を吐いた。
「はあ……。」
嵐の後のような静けさによって、櫻子は、意識を取り戻した。
「酷い人……。」
奪われていた声を取り戻したかのように、櫻子が呟いた。
「でも、これで、俺の気持ちはあなたに伝わったろう?」
「……あなたが、野蛮な人だという事も、よくわかったわ。」
高鳴る心臓が静まってくると、逆に怒りが込みあがってきた。
「私は、あなたなんて嫌いよ!」
櫻子は、楡崎の腕を振り払って、逃れた。
「全部が、全部、あなたの思い通りになる女の人だと思うのは、大きな間違いだわ。」
葵が言っていたように、この男は、相当女性からもてるのだろう。

これだけ無体な事をされながら、完全には嫌い貫けない自分がいる。浅草で、自分達をからかった男達にしたような扱いを、彼にはすることが出来ない。

もちろん、それは、夜会の時に命を救われた事から、彼が根っからの悪人ではない事を知っているからでもある。

しかし、自分がされた蛮行を、櫻子は受け入れる事は到底出来なかった。

「あなたは、最初にお会いした時に、あなたの魅力の虜にならなかった私に執着しているだけなのよ。私が、あなたを好きになれば、それで終いにするつもりでしょう」

「ふふ……、もし、それが本当であったとしても、それが何だというのですか？」

「私は、あなたを好きではありません、と言っているのです！」

櫻子が声をあげた。

「まあまあ、そんな可愛い顔をしなさんな。」

からかわれている。

「今にも、噛みつかんばかりだな。俺は女に噛みつかれるのは、閨の中だけで十分だ。」

冷たく楡崎が笑う。

一代で富豪にまで上り詰めた男だ。まだまだ世間知らずの女が相手にするには手ごわすぎた。

きっと、楡崎には、子犬にでも吠え立てられているように映るのだろう。

あんまりだ。

「来週のお約束もなかったことにします。もう、私に近づかないで！」

楡崎は、精悍な顔つきを引き締めて真面目な顔をした。

そして、抗う櫻子をなんなくもう一度抱き寄せて、深く口づけた。

しかし、その行為には、先ほどのような凶暴さはなかった。

優しい、慈しむように触れる。

その違いに、櫻子は驚いた。
「……震えなくてもいい。」
顔を離した楡崎は、もう一度櫻子を抱きしめた。
くっつきすぎて、楡崎の心臓音が櫻子にも伝わってくる。
「震えていなんかないわ。」
それは、嘘である事は、抱きしめている楡崎にはわかってしまう事だっただろう。
「大丈夫さ、そんなに怖がらなくても、あなたに危害は加えない。」
「……加えたじゃないの。」
「それは、あなたがあんまりにも憎らしい事を言うからだ。逢引の約束をしたがっている相手を自分の兄貴代わりに使おうとするなんてあんまりだ。俺じゃなくても、怒る。」
考えてみれば、配慮に欠けていた。
楡崎を炊きつけてしまったのは、自分である。
でも、謝りたくは無い。
その代わりに、少し戸惑ったように、上目遣いで楡崎を見た。
「はあ……。」
もう一度、楡崎は、櫻子を抱き寄せた。
「本当に、あなたは、憎らしい人だ。俺にとっては。」
「できれば、このまま連れて返ってお楽しみ、と行きたいところだが……。」
「下品!」
全てを言い終わらないうちに、櫻子は、楡崎を突き飛ばした。
「痛っ……全く、財閥令嬢ともあろう方がはしたない事をいたしますな。」
「あなたが、そんな事ばかりするから悪いんでしょう?」
「いいでしょう。どうせ、あなたは俺のものになるんです。それまで待つ事にしましょう。好機を逃　すことは嫌いだが、せっかちな性分ではないのでね。」

十分せっかちだ。自覚が無いだけだ、と櫻子は思った。
「もう、帰りましょう、日が暮れますぞ。」
飄々と、楡崎が言う。
櫻子は、おとなしく楡崎の車に乗ったが、家の前に着くまで、むすっとした顔を保って、彼とは一言も話さないようにした。
家の門につくと、櫻子は「もう来ないで」と念を押したが、楡崎は、さらりと受け流して、「また来る」と言って、運転手に命じて車を出して去ってしまった。
櫻子は、楡崎が去って見えなくなると、急に、先ほどの感覚が蘇った。
抗えない力、熱を帯びた吐息、楡崎の体温。
恐怖にもにた冷たい感情と、火照るような甘美な情熱の両方に絡みとられるようだった。
自分の何処かが、壊されてしまったような気がした。
「お帰りなさい、お嬢様。」
扉の前で悶々としていると、それが急に開いた。
「どうかされたのですか?」
斎木が訝しがる。
「なんでもないわ、斎木。ただいま。」
自分の動揺を悟られないように隠すだけで精一杯だ。
斎木の目は何でも見透かしているように思えて、心が震えた。
「どうでしたか、楡崎様とは?」
「そうね、昼食をご馳走していただいたわ。斎木、私の部屋に、紅茶とケーキの余りを持ってきてくれる?今朝、私が焼いたやつよ。」
「はあ…わかりました。しかし、夕食前ですよ。」
「夕食も食べるわ。お願いね?」
無性に、紅茶と甘いものが食べたくなった。
あの男とは正反対の、紅茶の高貴な香りを楽しみたかったし、甘い食べ物で、鬱憤を吹き飛ばしたかった。

「熱いダージリンにして頂戴。ミルクもお願いね。」

きっと、紅茶が、今日自分の身に起こった全てを清めて、何も無かった事にしてくれるに違いない。

櫻子は、そう考えながら、自室へ戻る為に階段を上がった。

【楡崎蓮二】編（2）　煩悩二ツ

一方、車の中の楡崎は、あれだけ無下に扱われながらも、何処無くうれしそうに、薄い笑みを浮かべていた。
広くなった車内で、足を組み、ゆったりと深く腰をかけている。
「……気持ち悪いです、楡崎さん。」
運転手の新堂が、視線を正面に向けたまま、自分の主に向かっていった。
彼は、楡崎より二つ年下の付き人だった。運転手、秘書などの仕事を兼任している。
「正直びっくりしましたよ。あなた、ああいう人が好みだったんですね。」
「どういう意味だ？」
「私はてっきり、あなたは熟女好みだと思っていましたから。」
楡崎は、ずり落ちそうになった。
「どうしてそうなるんだ。」
「夜会でも、いつも金持ちの奥方様に囲まれているじゃありませんか。あなたもまんざらでもなさそうですし。」
「おいおい、社交の場だぞ。愛想を振りまかないでどうする。一体、どうやったら、そんな豪快な見込み違いができるんだ。」
「おや、違うのですか？」
「ご婦人やお嬢様から誘いを受ける事は、多々あるさ。しかしな、あくまで社交上の範囲内だ。」
「誰かに、本気になった事は？」
「ないさ。深入りしすぎて怪我でもしたら大変だ。俺が社交場に出るのは仕事の交友関係を深める為さ。逆に損を負っては意味が無いだろう。」
確かに、金と女のもつれは、身の破産を生む。
どこぞこの誰が不倫をしたばかりに、身を破滅させたとか、そん

な話はいくらでも転がっている。
しかし、だからといって、つれなくしすぎるのも、高飛車だとか、生意気に映ってしまう。
つまり、自分のような成り上がりものは、つかず離れずの安全地帯で、周りの人間と関わっていくのが都合が良かった。
「まあ、そのあなたがここまで二階堂のお嬢様にご執心とはね。」
「可愛い人だろう？」
「あんなねんね、私の好みじゃありません。」
にべもない。
「しかし、盛りのついた犬でもあるまいし。震えてましたよ、櫻子さん。」
「……おまえ、のぞいたな？」
楡崎が、眉を上げた。
「珍しく人気がなかたっとはいえ、公園のど真ん中でがっついている人に、羞恥心なんてもん、ありはしませんでしょう？」
楡崎は、しれっと無視して受け流す。
「恋をした事がない……か、知らない分、その無邪気さが返って毒ですね。」
「おまえ、喫茶店にもいたのか。」
「珈琲を頂いていたんですよ。」
「あきれたやつだ。」
楡崎は、崩れて額にかかった前髪を後ろへなでつけた。
「彼女、このままだとあなたを門前払いしますよ。あんなに怖がらせて。ちょっとせっかちが過ぎましたね。楡崎さんらしくもない。」
「あのお嬢さんがあんまりつれない事をするんでね。わからせてやったのさ。」
そうしなければ、淡い下心を持って近づいてくる男共に、また彼女は無邪気に接するだろう。
自分が居ない間に、他のやつに何をされるか、わかったもんじゃ

ない。

「そもそも、あの気の強いお嬢さんのことだ、おまえは震えているとは言ったが、慣れない事をされたんで、びっくりしただけさ。」

「確かに、深窓の令嬢とは少し違う方ですね。」

「そうだろう。」

「つまり、半分は衝動的で、半分は計算ずくだったというわけですか？」

「そういうことになるな。」

「怖い人だ。」

「怖いのは新堂の方さ。覗き趣味があったなんてね。俺は安心して女性も口説けない。」

新堂は、楡崎の皮肉を笑い飛ばした。

「無頼漢に、二度も啖呵を切ったお嬢さんの顔を見たかったのは事実ですよ。」

浅草と、夜会の夜だ。

「もう一つは、楡崎さんの耳に入れておきたいことが急にできまして。」

「なんだ？」

「今朝、衆議院の議員殿が、一人亡くなられたそうですよ。日本刀じゃなくて、毒殺だったので、まだ自殺か他殺かわからないですが、おそらく他殺の見込みです。」

「ふむ。」

「夜会の晩に、二階堂家に襲撃来た者とつながりがあるのかはわかりませんが、その議員は企業の経営活動の推進の為に、いろいろな法整備に尽力をつくしていた方だったので、よもや、と思いましてね。」

「確か、襲撃者は社会主義や無政府運動に関わるものの仕業かもしれないという話だったな。どこぞの国では、財産は盗奪である、と表現した者もいたそうだ。」

それならば、まさに資本主義の恩恵を受けている自分は、彼らに

とっては富の略奪者だ。
あの日の襲撃者の狙いは、本当は何名だったのか知る由もないが、もし、彼らの計画が失敗に終わっていたのだとすれば、それを妨害した櫻子と楡崎は恨まれているかもしれない。
報復される可能性があるなら、顔も知られている分、危険だ。
「全く、物騒な世の中になったもんだ。」
「物価もここの所、不安定ですしね。」
「物価は、どの時代も不安定なものさ。どんな時でも、知恵を絞れば、しこたま儲ける事はできるさ。」
楡崎は、自分の頭を指差した。
「話を元に戻しますとね、楡崎さんとお嬢さんが一緒にいるなんて、まとめて始末したいものには都合のいい状況ですから。まだ危険か安全かがはっきりするまでは、十分に気をつけてくださいね。」
「ああ、わかった。」
そう言うと、楡崎は、軽く目を閉じた。
「ちょっと眠る。仕事で、今週は殆ど寝ていないからな。」
新堂は、自分の仕事の代わりはたくさんいるが、楡崎の代わりができるものがいない事を知っている。　間近で仕事ぶりを見ている分、疲れが溜まるのも、無理は無い、と思った。
「悪いが、着いたら起こしてくれないか？」
「新吉原ですか？」
うとうととと、まどろみかけた楡崎は、ぱっちりと目を開いた。
「なんで、そうなる？」
「違うのですか？二階堂のお嬢さんに無体にされた分、妓（おんな）にでも、優しくしてもらって自信　を取り戻されては如何かと。」
「知らぬ人が聞けば、誤解されそうな口ぶりだ。俺は、昼は仕事、夜はどこぞの夜会でくたくただ。」
「ですから、吉原でその疲れを取ってきてはいかがですか。」
それとも、遊女はお嫌いですか、と新堂は声をかけた。
「俺は、嫌だ。遊んで、うっかり、子供でもできたらどうする

んだ?」

「用心深いですね。」

「それにだ、吉原は、一人の馴染みしか作れないんだろう?」

京の島原と違って、吉原では、男は馴染みの女が出来ると、他の遊女へは登楼できない不文律がある。うっかり浮気をすれば、女の報復を受けると聞いた。

「どうせ通うなら、島原がいいさ。京は、女余りだから、どこも愛想がいい。」

というのは、楡崎の方便で、本当は妓遊びには興味が無いだけだった。

ちなみに、女余りというのは、単に、人口比が異なるからだ。京の人口は僧と女性の数が多く、江戸は男性が多いので、自然とそうなる。

楡崎は、自分の商売に良い影響を与えそうな夜会には顔を出すが、一夜の夢を買う時間があるなら、もっと己の商売を大きくして、今以上に力と権力を持てる人間になりたかった。

それを目指して、今まで突っ走って来たのだ。

その夢ももうすぐ叶う。

立ち止まっている暇は、無いのだ。

「聞いてもいいですか、楡崎さん。」

「なんだ、新堂?」

「どうして、あのお嬢さんにそこまで執着されているんです?」

「今以上に、しこたま儲ける為さ。櫻子さんは、自分は父親の仕事に何も関わっていないと言っていたが、二階堂家の名前はこの日本で知らぬものはいないだろう?にも関わらず、この間の夜会に出席していた御曹司どもは、生まれたときからぬるま湯に浸かっているせいで、野心のかけらもない。」

そんな軟弱者共に、みすみす奪われるのを黙ってみている程、自分には被虐趣味はない。

「確かに、金と権力を手に入れたものが、次に手に入れたがるの

は家格ですが、梅造氏は実力主義者ですね。」
長女の撫子嬢も、たまたま若手の中央官僚の妻になったと聞いたが、それも本当は恋愛結婚なのだとか。
「近頃の富豪は娘を持てば、官僚や華族に嫁がせて血縁関係を持ちたがりますが、梅造氏はそういった事は重要視されていないようでしたね。」
「貧しいものや、素性の良くわからぬものも、気に入れば取り立てて、傍に置くという噂だ。」
あの、神谷藤隆のように。
「だから、これは、俺にとっては、願ってもいない機会なんだ。俺は金はそれなりにはあるが、それだけでは、資産家の令嬢にとっては魅力的な結婚相手にはなりえんからな。」
「ですから、二階堂のお嬢さんを手玉に取る為に、回りくどい事をしていらっしゃるんですね。」
食えない人だ、と楡崎はにやりと歯を見せて笑った。
「しかし、最近の楡崎さんは、特にお忙しかったでしょう。たまには息抜きも必要だ。」
「だから、今日、こうしてお嬢さんと食事に行っただろう?来週の約束も取り付けた。」
「はあ……。」
傍目(はため)には、思いっきり嫌われてはいやしなかったか?
「とにかく、俺は寝る。会社に着いたら、起こしてくれ。」
「まだ働く気ですか、あなたは?」
「急に不安な案件が思い浮かんだ。ちょっと調べて、すぐに自宅に戻るさ。」
そうして、再びまどろみ始めた。
楡崎は、そこでとても幸福(しあわせ)な夢を見た。
しかし、新堂に起こされて目覚めると、その夢の内容をすっかり忘れていた。

◆◇◆◇

「先生、どうしはったの？」

若い尼僧に覗き込まれて、櫻子は我に返った。

女学校で、今日の授業を終えた櫻子は、尼寺に居た。

仕事の後、時間を見つけては、ここへ書を習いに来ていた。

国語の教師のくせに、書道だけは、どうしてもなかなか上達できない。

しかし、近場の教室へ通えば、学校の生徒と出くわすかもしれない。そこで、わざわざ、少し離れたこの尼寺まで通っては、書の練習に励んでいた。

「いつまでそうして、墨をすらはるおつもり？」

小柄な尼僧は、まだ年は三十ぐらい。昔は、京都に住んでいたらしく、言葉もそのままだった。

「妙月先生、ごめんなさい。ちょっと、うっかりしていたわ。」

櫻子は、照れ隠しに、最後に、硯で墨を二、三すった。

筆に適度に墨を吸わせて、半紙の上に滑らせる。

最近は、ずっと漢詩を題材にして練習している。

「李賀の秋来やなんて、また渋くて暗い詩を選びはったなぁ。」

中唐の詩人である。

「あの芥川龍之介先生もお好きらしいけど、うちは、この人の詩はちょっと怖くなってしまうくらいの印象がありますのや。」

研ぎ澄まされた、才能にに畏怖すら感じる。

さすが、鬼才と称されたお人やな、と妙月が言った。

確かに、彼の生きた時代の風潮を突き抜けて表現するような印象を、櫻子も持った。

「でも、書道の先生としては、ちょっと丸はつけられへんな。」

線に迷いがある、と妙月が言った。

「心が動揺してるような感じやね。」

「そうかしら？」
「ええ。口では何も言わんでも、筆は教えてくれますのや。」
もう一度、やり直して書こうと、新しい紙を用意したが、妙月に遮られた。
「今日の櫻ちゃんは、ちょっと変やで？」
澄んだ瞳は、全てを見透かしているようだった。
「どうしたのや、何かあったん？」
櫻子は、困った顔をした。
「やっぱり、何かあったんやね。」
「実は…」
妙月は、人の異変には良く気がつく人だったが、相手から心を開こうとしない限り、無理に踏み入ったりはしない人だった。
だから、櫻子の方から、先週あった出来事を全て話した。
夜会、そして、楡崎の事、全てを。
「そう、大変やったなぁ、櫻子ちゃん。」
妙月は、櫻子を包むように抱きしめた。
袈裟からは、わずかに沈香の香りがした。
「今日は、練習は終いにして、お抹茶でも飲もう。丁度今朝、ええ和菓子を頂いたんや。」
そして、にっこり笑って、準備を始めた。
出された菓子は、扇型にきれいな色がつけてあって、中にはこしあんが入っていた。
「本当に美味しい…。」
「そうやろ。お茶もやで。」
すすめられて、口をつけると、ほろ苦い甘みが口内に広がった。
「本当…。」
息をついた櫻子を、妙月はにこにこと見つめていた。
気持ちが和んだところで、縁側を見た。
「ここの庵にも紅葉が植えられているのね。」
「そうや、今はまだ朱色やけど、来週ごろには真紅になるさかい、

楽しみにしてるんよ。」

「……私、来週どうしたらいいのかしら。」

「どうせ、その強引なお人は、断っても、また別の日に来なさるんやろ?それやったら、お会いしてみたらどう?それでも、嫌やったら、次から会わんかったらよろしいのや。」

「簡単に言いなさるのね、妙月様は…。」

「悩んでも、体の毒になるだけや。」

櫻子は苦笑した。

「煩悩の数だけ、人は強くなれるんどす。死んだら煩わしいも何も在りはしません。悩めるだけ幸　せや、と気楽に構えとき。」

妙月は、抹茶をすすった。

小柄な人だが、櫻子以上にしっかりした人だと思った。

「でも、聞いてもらえるだけでも、随分楽になったわ。」

「うちかて、びっくりしたで。最初に見たときから、櫻ちゃんの顔が暗かったさかい。」

「そんなに……?」

「ええ。そして、筆を持ったら、いつもの勢いもなくて何かよわよわしいし。声かけたら深刻な顔を　するから、てっきり何か悪い病気にでも罹ったんかと思ったんよ。きっと、家には話せる人がいなかったんやろ?気鬱になる前に、こうやって、美味しいものでも食べながら、全部吐いてしまえばいいんや。」

確かに、家に帰っても、誰にも相談できなかったのは、事実だ。

今、働いている女中には、年が近くて親しい人もいなし。

斎木に話したところで、あの鉄面皮は微動だにしそうにないし、兄は怒って楡崎を切りつけそうだ。

そして、父は、面白がって、楡崎を屋敷に招きかねない。

あの俺様で、豪胆で、飄々とした男は、父が好感を持ちそうな人物だと思う。うっかり気に入って、屋敷を出入りするようになっては、それこそ逃げ場が無い。

梅造と楡崎が、仲良く日本酒を酌み交わしている姿が、ありありと想像できてしまう。ああ、嫌だ。

「そうや、櫻子ちゃん。今年の大晦日は忙しいの？」

「いえ、年末年始は父もお休みするようにしてるから、特に何もないわ。」

「それやったら、うちの庵で、一緒に年越蕎麦でも食べへん？それとも、家族の方と一緒に過ごさはる？」

「私が来ていいの？」

「もちろんや。ほかの尼僧も喜ばはるよ。」

「じゃあ、お邪魔したいわ。」

櫻子は、妙月と約束をして、その日は習字の続きはせずに、帰宅した。

【楡崎蓮一】編（3）　手探り

土曜日、楡崎蓮一は懲りずに、意気揚々と二階堂家の門をくぐった。

斎木に呼ばれて、応接室に入った櫻子は、眉をしかめた。

「やっぱり来たのね？」

楡崎は、前回と同じように、鷹揚に長椅子に腰をかけて、斎木から用意された紅茶をすすっていたが、現れた櫻子を見て、立ち上がった。

「やあやあ！また、お会いできましたね、櫻子さん。」

楡崎は、快活に笑いかけた。

ぬけぬけと言うもんだ、と櫻子は思った。

「お約束していた通り、帝劇を見に行きましょう。」

「私、もうあなたとは一緒に行かない、って言ったわ？」

今日の櫻子の髪型は、横髪をすくって後ろで留めただけだ。

緩やかなくせのある長髪を、背中に流したままでいる。

腕を組んで、仁王立ちのように、楡崎の前に立っている。

「おや、嫌われたようですな。」

「当たり前よ！」

傍にいる斎木が疑惑の目を向けたのに気がついて、櫻子はとりあえず落ち着く事にした。

「怒ると額に皺がよりますよ。この花でもご覧になって、安らかな気分を取り戻して下さい。」

そう言って、楡崎は、また大きな薔薇の花束を取り出す。

今度は、真紅ではなくて、淡い桃色の薔薇だった。

香りも、この間のものよりも、やわらかで、甘い。

「ありがとう。」

小さく言って、櫻子はそれを受け取った。

斎木にそれを後で花瓶にでも生けるように言い、渡す。

「あと、今日は、これもね。」
すこし大きな包みを渡された。
「開けてみてください。」
中から出てきたのは、着物の帯だった。
赤地に、櫻の文様が散らされた、高級そうな品だった。
「きれいな帯ね。どうもありがとう」
「……素直ですな。突っ返されるかと冷や冷やしましたよ。」
案ずるどころか、その強い瞳は、底抜けない自信に満ち溢れている。
その瞳を細めて、笑う。
「では、今日は、こうしましょう。そんなに心配だったら、家の者を誰か一緒に連れてくればいい。」
思ってもいない提案だった。
「どうだ?それともこの屋敷には芸術には興味が無い者ばかりか?違うだろう。俺はあなたと外出できる。あなたは、安心して俺と一緒に居られるってわけさ。」
どこか勝ち誇ったように、楡崎が言う。
どうしてそこまでして、自分と出かけたいのかがわからない。
櫻子がどうしてよいかまごついていると、楡崎がさらに提案する。
「そこの執事さんは、今日は忙しいのかい?」
「は?」
斎木が目を大きく開いた。
「私はこの家の執事ですから、外聞もありますので。お嬢様と外出はできません。」
「お嬢さんのお守も仕事のうちだろう。なに、ほんの数時間の事さ。帝国劇場に行って帰る、それだけの事だ。固い事言いなさんな。」
斎木と櫻子は、困ったように、お互い顔を見合わせた。
しかし、この年になって、外出に使用人付とは、いかがなものか。
「ま、待って、私の付き添いなんて斎木が可哀想だわ。私、一人

で行けるわよ。」
いつも忙しくしている斎木に、余計な負担をかけたくなかった。
「ほう、お嬢さんは一人でも大丈夫との事ですな？」
言ってしまってから、しまった、と思った。
「それじゃあ、参りましょうか。」
楡崎が、手にしていた紅茶のカップを戻して、立ち上がった。
「あ、あなた、私を嵌めたのねっ？」
「何を言いなさる。俺は、妥協案を提案しただけですぞ。」
驚いたような顔をしているが、その目は据わっている。
勝ち誇ったようにも見えた。
――やられた。
「外で、車を待たせています。私は先に乗って待っていますから、後で会いましょう、櫻子さん。」
傲岸な声音で言い放つ。
「紅茶は大変美味しかったよ、執事さん。今度、うちの秘書にも、淹れ方を教えてやって欲しいものだ。」
斎木の肩を、ポンと右肩で叩いて、応接室を出る。
「私でよければ、いつでもお教えいたしましょう。」
一礼して楡崎を送る斎木が、複雑な顔をしていた事には、誰も気がつかなかった。

◆◇◆◇

――帝国劇場
通称、帝劇は、１９１１年にした開館した、日本発の西洋式演劇劇場である。
しかし、知識人の尽力により、歌舞伎も上演できる和洋折衷の劇場に成し遂げた事は、古代から大陸の文化を真似ではなく吸収する

事で、日本文化を成長させてきた日本人の真髄を象徴しているかのようである。

ルネサンス様式を基調とした四階建ての外壁には、白色の装飾煉瓦が使われ、屋上には能楽「翁」の彫刻像が施された。

その帝劇の象徴は、当時の新聞から、「巍然（ぎぜん）たる白亜の一閣を成して宛ら劇界の覇王たらんず壮観を呈（てい）せる」と評された。

また広い敷地には、劇場のある本館以外にも、技芸学校、大道具製作所、背景部製作所等が設置されていた。

「桜子さんは、もちろん帝劇は初めてではないだろう？」

「数回ね。でも、いつ来ても、中に入るとびっくりするわ。ここって、座席も、切符売り場も、休憩室も、お手洗いも全部左右対称なんだもの。」

一階の正面玄関の扉を通されて、その前面の階段を、楡崎と上りながら話していた。

今日は、和風の装いで来た櫻子は、行儀作法として、楡崎からもらった帯を締めている。

着物は、白地に、振袖の裾の部分だけ赤と桃色になっているものを、帯に合わせて持ち合わせの内から選んだ。

楡崎は、時々、ちらちらと櫻子の装いを見ながら、どことなく満足げだった。

上ると、また扉があり、そこで切符を見せて入る。

「どうぞ、櫻子さん。」

楡崎が、その扉をうやうやしく開けた。

「ありがとう。」

その奥は、大理石の柱の立っている広間にでる。そこの廊下を進めば一階の客席にたどり着ける。

客席は約１７００席で、一階と二階が椅子席、三階と四階はベンチ席で、馬のひづめのような形に並んでいる。内壁は金色。天井にはドーム型のシャンデリア。

櫻子は、天女が羽衣を纏って昇天する場面が描かれた天井画を見

た。

三年後、関東大震災が起こる事になるのだが、耐震性や防火装置に力を注いでいたこの劇場は、倒壊を免れ火災も起きなかった。

しかし、周囲から火の粉が、まるで隕石が落下するかのように飛来したことで、壮絶な消失を遂げる事になることを、櫻子達はまだ知らない。

並んで座ってしばらく経つと、暗くなって、劇が始まった。

しかし、灯りがなくなったのをいいことに、楡崎は、櫻子が座席のふちに置いていた手に、自分の手を重ねた。

驚いた櫻子が、何かを言いたげに横を向くと、楡崎もこちらを向いたのが、影の輪郭でわかった。

その頭が近づく。

「いいでしょう？これくらい。」

甘みを帯びた、艶めかしい声音が、耳元で囁く。

許可を求めるというよりは、否とは言わせず、と言うかのように。

また、もとの位置に戻っていった楡崎の顔は、わからない。しかし、きっとイタズラ坊主のように、にやついているのだと思った。

櫻子は、眉をしかめたが、暗闇のせいで、楡崎には伝わらないと思い、あきらめて、劇に集中した。

しばらくすると、今度は、櫻子の手をひっくり返して、手のひらが上向きになるようにし、指の間に自分のを絡めて、握ってきた。

大きな手に、長い指をしているが、節が目立ってごつごつしている。皮膚の皮も厚い。苦労を重ねた手なのだと直感で思った。

そこから、熱いような温かいような、楡崎の体温を感じて、櫻子の心臓は高鳴った。

楡崎の方を見たが、彼は知らんふりである。

――無視、ではなかった。

彼は、劇中に、すっかりご就寝だった。

いびきは立てていないが、その安らかな呼吸具合と、すっかり椅子に体を沈めている事から、眠っているとわかる。

手探り、しかも無意識の中で自分の手を求められた事に、顔の血潮がたぎった。

きっと、楡崎は、本当は観劇なんて興味はあまりないのだろう。

（私の為……なのよね、やっぱり。）

忙しい間を縫って、好きでもない劇を、自分と見る為に来てくれたのだと思うと、さすがに、心の端を、ぎゅっとつままれる様な思いがした。

いつも、ぎらついた眼をした獅子のような彼が、こうもすやすやと眠りこけている所に、自分が隣で座っているのは、奇妙な感覚だった。

そのまま、楡崎は結局、終幕まで目覚めることは無かった。

「楡崎さん？劇は終わりましたよ。」

灯りが戻ると、観客達は、わらわらと立ち上がり始めた。

「おーい！」

櫻子は、揺すっても起きない楡崎の耳元に、口を寄せた。

「……ああ？」

ようやく、自分が眠りこけていたことに気がついた楡崎は、まぶしそうに目を何回か開けたり閉じたりして、それから、首を左右におって運動してから、辺りを見回した。

「もう終わったのか？」

「今、さっき。」

楡崎は、しまった、と言った感じで、右手を額に当てた。

「すまない、眠ってしまった。」

「仕方ないわ、きっとお疲れなのよ。」

不審げに、櫻子を見た。

「な、何？」

「いや、今日のお嬢さんは、前回と比べて、やけに優しいな、と思ってな。」

「私は、いつでもこれくらい優しいわよ。」

つん、とすまして、櫻子は、楡崎を置いて、扉の方を向いて歩き

出した。
慌てて、楡崎も立ち上がって、櫻子の横に並ぶ。
そして、腕を曲げて、示した。
手を絡めろ、ということらしい。
躊躇していると、早く、というように、楡崎が軽く顎でしゃくった。仕方なく、手を置いた。布越しでも、引き締まった固い腕の感触と、楡崎の体温が伝わってきた、
「どうだ、俺を好きになってきただろう?」
歯を見せて笑いかける。
「そ、そういう所が傲慢だって言うのよっ。」
それでも、楡崎は上機嫌だ。
そのまま、二人で劇場を出た。

◆◇◆◇

今日は運転手はいないようで、楡崎が運転席に座って車を運転する。
「まだ四時か。軽く夕飯でも食ってから行くか?鶏肉はやめておいた方が良さそうだが、櫻子さんは、何がいい?」
「私は好き嫌いは無いから、食べ物なら何でも好きだわ。楡崎さんは、最近食べてなかったものとかあるかしら?」
「ふむ。そうだな……寿司でもいいか?最近、洋食ばかりでな。」
「じゃあ、そうしましょう。」
二人は、途中で、楡崎が行きつけだという寿司屋に入った。
「浅草の酉の市か。一体、何年ぶりかな?」
お絞りで手を拭きながら、楡崎が首を傾げた。
「そんなに言ってないの?賑やかで楽しいのに。」
「ははは、そうだな。これからは浅草にも暇が出来たら出かける事にしよう。せっかく帝都に住んでいるからな。」

「そういえば、楡崎さんは、関西にも詳しいものね。私も、京都の嵯峨とか、奈良の吉野に小さいけれど別荘があったから、少しは知っているんだけど、最近は、あまり行く機会がないわね。」

「この間も、そう仰ってましたな。」

楡崎は、出してもらった温かい茶をすすった。

「しかし、別荘が嵯峨に吉野にあるとは。雅な所に建てましたね。。」

「そうね。私が小さいとき、まだ生きていた母は、体が弱かったので、帝都よりも、関西の別荘の方で暮らす事が多かったので、私もその頃はよく居たわ。特に春は、あの辺りは、櫻が綺麗なのをご存知かしら?」

櫻子は、目を瞑った。その光景をまぶたの裏に思い出しているようだ。

「嵯峨はまだ知りませんが、吉野の櫻は、随分昔に、一度だけ。」

「すごいでしょう?国語の教師をするようになってから、和歌を勉強するようになったけれど、吉野の櫻について詠んでる歌の多い事!でも、無理もないわね。」

「……。」

楡崎の顔が、急に何かを考え始めたのに気がつくこともなく、櫻子は、出された寿司を見て、感激した。

「なんてお魚の身の色が綺麗な寿司!あなたって、本当にいいもの食べてるのねぇ……。」

「ははは、俺はあなたの方がいろんな物に食い飽きてるだろうと思って、今回もここに連れて来てよいものか一瞬考えたのだがなぁ。」

楡崎は、鮪の寿司を一口で、中に入れる。

この間、仏蘭西料理店に一緒に行った時から、ぼんやり気がついていたが、どうやら櫻子は、楡崎が思っていたほど、飽食ではないようだった。

きっと、自宅での通常の食事は、質素なものなのだろう。　あの

斎木とかいう執事が、内容を決めているのかは知らないが。

「そういえば、今日は、あの運転手さんは居ないのね？」

「ああ、私的な用事にも、あいつを使うのは間違いだったとわかったのでね。」

楡崎は、何故だか急に、くっくっ、と思い出すかのように笑った。

櫻子は意味がわからなかったが、聞かない事にした。

食べ終えると、二人は浅草に向かった。

【楡崎蓮二】編（4）　浅草四重奏（R15）

「まるで、江戸時代に戻ったみたいねぇ。」

浅草「長國寺」の酉の市は、江戸時代からの伝統と文化を受け継いで、参詣者に小さな江戸を体現させてくれる場所だ。

酉の市の始まりは、近在の農民が鎮守である「鷲大明神（わしだいみょうじん）」に感謝した収穫祭であったと伝えられている。やがて江戸市中からは武士だけでなく、町人がこぞって参詣するようになり、江戸文化の一翼を担った。

長國寺は、東隣に新吉原をひかえている。祭り当日、吉原は通常は開けない大門以外の門も開放して、昼見世から開き、遊廓にとっても特別な日であった。

深夜零時に、鷲神社で祝詞が始まり、その夜まで続くが、夜は一層、客が増える。

長國寺や鷲神社にびっしりと掛けられた提灯が、こうこうと境内を照らし、金銀細工の縁起熊手がきらきらとその光を受けて輝いている。

周囲では、熊手商と客の駆け引きが繰り広げられている。

「楡崎さん、熊手は買わないの？会社を経営してらしてるのに。」

熊手を「買った買った」の掛け声や、手締めが聞こえてくる。

賑やかさが高まるにつれて、周囲の屋台の居酒屋も、大変繁盛していた。

「今日の俺は、あなたの付き添いだからな。それより、あなたはどうなんだ？」

「私は、こっち。」

櫻子は、飴や、切山椒、江戸いり豆の屋台を指差した。

楡崎は、噴出しそうになるのをこらえた。

しかし、顔の引きつり具合は、隠し切れなかったようで、

「どうしたの、楡崎さん。」

と、櫻子に不思議がられている。
女と逢引のようなものをする時、楡崎は、これまで自分が櫻子にしてきたように、高級な料理店や、観劇などに連れて行ってやった。浅草には来た事がなかった。
ましてや、程よい夕方に二人っきりで来ているにも関わらず、周囲はどこからこれだけ集まったんだろうか、という程の人込み。
そして、沢山の屋台に興味津々な相手。
何もかもが、自分の今までの常識から、大きく逸脱していた。
本当に、お嬢さんは、色んな意味で、面白い。
「栗餅の事を、ここでは黄金餅って言って、食べれば黄金持ちになれるっていうけれど、楡崎さんは、必要(いら)ないわよね。」
そんな事を考えていたら、当の櫻子は、既に何処からか、いろいろ買い込んで来ていた。
「つき合わせちゃって、ごめんなさいね。兄も、今年は私のお守をしないで済んだから、助かってると思うわ。……あら?」
櫻子は、人込みの奥に、見慣れた人物を見つけた。
「やだ、兄様だわ。」
楡崎も、つられて前の方を見ると、夜会の時、見かけた男が確かに居た。
「確か、兄上は軍人殿でしたな。」
「そうよ。」
櫻子は、「兄様!」と声をかけようと手を上げかけたが、止めた。今までは、桃真に重なって見えなかったが、その隣には、女性が居たからだ。
綺麗に化粧をして、藍色の着物を着た、色白の美人が居た。
結い上げた髪には、簪を挿している。
「ご婦人と一緒のようですな。」
楡崎に言われなくても、一目瞭然だった。
「私と一緒に行くのを渋っていたのは、きっと、あの方と一緒に行く為だったんだわ。」

「あなたと、御知り合いの女性かな？」
「知らない人、よ。」
櫻子は、素っ気なく言った。
急に、兄が遠い人のように思えた。
「櫻子さん？」
楡崎は、桃真と女が顔を寄せ合って何かを話している様子を、じっと見つめたままの櫻子に声をかけた。
「あ、ごめんなさい。楡崎さん、あまり来た事がないんでしょう。何か見てみたいものはある？」
櫻子は、楡崎に気を使って、酉の市のいろいろな所を広く見て回る事にした。
少し疲れてきた頃、二人は、屋台に腰をかけて、おでんなどを食べていた。
「楡崎さん、お酒飲んで大丈夫なの？」
日本酒を口に含み、飲み込む。
楡崎の喉仏が大きく上下した。
「大丈夫だ。実は、あやつは今晩この近くに来ているのでな、八時になったら山門で会う予定だ。彼に運転を頼めばいい。」
あやつ、というのは新堂のことである。
「心配ない、あいつは下戸だ。一滴も飲めんさ。」
そう言った楡崎の顔は、ほんのり紅く染まっていた。
「最近は、洋酒ばかりだったから、日本酒は久しぶりだ。」
「美味しそうに飲むわねぇ。」
「あなたは、飲まないのか？」
「甘酒は大丈夫だけど、日本酒は辛くて無理ね。」
「よし、もらって来てやろう。」
櫻子が何か言う前に、楡崎は立ち上がった。
そして直ぐに、一つ瓶を抱えて戻ってきた。
「ほら、持ちな。注いでやろう。」
櫻子が差し出すと、杯に甘酒が注がれる。

白い湯気が、立ち込めた。
熱いそれを口に入れると、こうじの甘い味がした。
「旨いか？」
「うん、甘いわ。」
体が芯から温まってくる。
楡崎が、不意に、杯をもっていない方の櫻子の手を握った。
「なんだ、すっかり冷えてるじゃないか。大丈夫か？」
「このくらい大丈夫よ。」
櫻子がそういうと、楡崎はもう一口酒を含んだ。
「まさか、お嬢さんとこうして酒が飲めるとはなぁ。」
「どうしたの？」
「夜会で会った時のあなたは、いかにも財閥令嬢だったからさ。新しい服を着て、白銀の簪を挿して、ほんのりと白粉の匂いをさせていた。」
「本当は、あなたが思っていたような上品な女性でなくて、ごめんなさいね。」
「いや、楽しいんだ。仕事柄、ご婦人やお嬢さんのお相手をさせて頂く事もあるが、一緒に杯を傾けるのは、高貴な洋酒や葡萄酒ばかりでね。一緒に並んで、屋台で酒を飲んだのは、あなたが始めてだ、櫻子さん。」
酒が回っているせいか、いつにも増して、上機嫌だ。
「ははは、まいったなぁ。」
楡崎は、櫻子の背中に腕を回して、軽く抱いた。
「俺は、あなたが本当に可愛い。」
「だから、どうして直に、そういうこと言うの。」
「嘘じゃないさ。」
楡崎は、少し体を櫻子の方に寄せて、囁いた。
「その証拠に、今、猛烈にあなたに口づけしたい。…が、いかん

せん、人が邪魔だ。」
櫻子は、箸でつまんでいた大根を、鉢の中に落とした。
驚いて、楡崎を凝視する櫻子を、面白そうに見ている。
櫻子は、甘酒を一人で注いで、一気に飲み干した。

◆◇◆◇

「櫻子さん、どうしてあんた、甘酒で酔うんだ?」
「酔ってないわよ。酔ってるのは、楡崎さんの方よ?」
車に戻った二人は、もつれ合うようにして、後部座席になだれ込んだ。
結論から言うと、二人とも、軽く酔っていた。
頬の血色がほんのり良くなっている。
「まだ七時半も前じゃないか。」
とろんとした顔で、楡崎が自分の腕時計の文字盤を見た。
それから、上を仰いで、タイを緩め、シャツの襟を開いて、風を送った。
「いかん、少し飲みすぎた。」
「気分は悪くない?」
楡崎の右隣に座った櫻子が、心配そうに覗き込んだ。
「気分は、最高さ。」
楡崎は、太い腕を、櫻子の背中に回して、がっちりと抱きしめた。
気だるいような、熱気と酒の匂い。
自分の頬が、楡崎の広い胸にひっついている事がわかる。
櫻子が口を開く前に、楡崎の指が伸びて、唇に触れた。
そして、優しく下唇をなでられた。
触られているか、いないのかというような動きで、触れられたせいで、櫻子は震えた。
「なあ、貞淑な二階堂のお嬢さんのここに、一体今まで何人が触れたんだ?」

櫻子は、一瞬、言われた意味がわからなくて、まばたきをした。
「楡崎さん……？」
しかし、櫻子の戸惑いを無視して、楡崎の指が顎にかかる。
上を向かされて、楡崎の顔が、酒の匂いと共に近づいてきた。
「また、怒られても、俺はかまわない。」
櫻子が気がついた時には、柔らかい彼の唇が重なっていた。
恥ずかしくて、瞼を伏せた。しかし、その為に、彼が何度も触れる感触がより感じられてしまう。
ついばまれるように、少し離れたかと思うとまた吸われる。その強さも、始めは唇の形を確かめるような軽い感触だったのが、だんだん深いものになっていく。
顔から食べられてしまうのではないか、と思うように、最後はかぶりついてくる。
櫻子は、息が出来なくなり、どうしたものかと思って、顔を背けようとする。
しかし、楡崎の濡れた舌が忍び込んできた。
舌は内側にすべり込み、歯をなぞる。
楡崎は、舌が、より深いところを目指す為に、一層吸い付いてくる。
離されて、息をつく隙を与えられたと思うと、また貪られる。そして、怖くて、逃れようとする櫻子の舌に絡んで、攻め立ててくる。
「すまない…。」
かすれるようなささやきとともに、顔が離れた。火照った唇は、発火してしまいそうだった。
しかし、再び抱きすくめられる。そして、耳の後ろに口付けられて、耳を甘く噛まれた。噛まれるたびに、口内にこめられた息が耳にかかり、その熱さにぞくりとする。
やがて、首筋をゆっくり辿って、鎖骨に下りていき、襟もとに顔を埋められる。朝から時間が経ったせいで僅かに伸びた髭のざらりとした感触に、怯えた。

着物をはだけられて、鎖骨を激しく口付けられる。全身を貫く刺激に、恐怖心が増した。

「だ、駄目！」

楡崎の肩を掴んで、押し戻す。離れた顔が上げられた時、その心を射抜くかのような強い瞳に、はっきりと情欲の色が宿っているのを櫻子は見た。

それに圧倒されて、何も出来ないでいると、今度は優しく抱き寄せられた。

そして、白銀の櫛を外され、解けた髪を、楡崎の指で優しく何度も、梳かれる。

その一房を掴んで、唇を寄せた。

「綺麗な髪だな……石鹸と香油の香りがする。」

熱病にでも冒されたような、狂おしげな、甘い響き。

「今日のあなたは少し変だ。慣れぬ酒まで飲んで……。」

髪を愛おしそうに梳きながら、別の房を掴んで、何度も、何度も、髪に口付ける。

「はあ…あなたは髪まで甘いのか…？」

そして、また抱き寄せて、首と肩の間に顔を埋める。

「いくら祭りとは言え、こんな霜月の夜道を、毎年、あの兄貴と一緒に帰っているのか？知らぬ女と一緒の所を見て、本当は寂しかったんだろう？」

なあ、あんたは、あの人の事が好きなのか、と楡崎が言った。

「な、何言ってるの？血はつながっていなくても、兄弟なのよ？変な事言わないで。」

「血が繋がっていない……？そうか、だからか。じゃあ、なおさらだな。夜会の時、櫻子さんに駆け寄る彼を見て、そうじゃないかという気がしてた。」

「え……？」

「その枷が、もし外される事があるならば、あの男、あなたを抱く気でいるぞ。」

いつもの悠然とした、どこか人を見下すようなからかうような声ではなく、真摯な口調で楡崎が言った。

「あなたが、本当に、兄貴の事を好きじゃなくても、彼の方はわからん。」

「馬鹿な事言わないで！」

酉の市は、夜の方が賑やかだ。しかし、玲子などを誘えば、危険な目に合わせてしまうかもしれない。

だから、兄について来てもらっている。それだけの事だ。

女性と一緒に居たところを見た時は、確かにびっくりしたが、それは、私が随分前から頼んでいたにも関わらず、なかなか一緒に行けるのか、行けないのか、という返事をくれなかったからだ。

他の人と一緒に行きたいならば、自分などに遠慮せず、はっきり言えば良かったのに。そもそも、自分と一緒に行くのが面倒ならば、外出をあきらめても良かったのに。

なのに、どうして、自分が兄を好いている、などという結論に到るのだろう、この男は。

わけがわからない。

「どうして、そういう思考回路にたどり着くの？私の事を良いけれど、兄の事を悪く言うのは止めて頂戴。」

「あなたはっ……。」

何か言いたげな楡崎だったが、その先を言う事はなかった。

代わりに、まるで襲い掛かるかのように、深く腰を抱きしめられた。

弓のように後ろ向きにしなる体に、ぴったりと楡崎の体が合わさり、激しく、首筋を口付けられる。

「あ……。」

唇の間で何度が食まれ、最後にきつく吸われると、泣きたくなるくらい、怖い感覚が襲った。

「嫌っ！」

反射的に、楡崎の体を、思いっきり強く、突き飛ばしてしまった。

慌てて、左右の襟を寄せて、彼から離れる。
「もう、信じられない！何で、こんな事するの？」
そうして、車の扉を開けて、外に飛び出した。
その弾みで、櫛が、音を立てて、道路に落ちる。
「ちょっと、櫻子さん！？」
楡崎の静止も聞かず、一刻も早く車から遠ざかろうと、走り出す。
慌てて、楡崎も飛び降りて、後を追う。
草履の櫻子と、靴の楡崎では、比べるまでもなく、あっさりと、楡崎に腕を掴まれる。
「離して！」
「馬鹿、こんな暗い道を一人で行くなんて危険じゃないか。俺が付き添った意味が無くなる。」
「あなたと二人っきりでいる方が、危ないってわかったわよっ、私は！」
離して、離さない、の攻防が繰り広げられている最中に、二人の前にあきれたような声がかかった。
「何、痴話喧嘩してるんですか、お二人さん。」
新堂だった。
背広の上に、黒いトレンチ・コートを着込んでいる。
「それとも、もう夫婦喧嘩ですか？気が早いですね。」
たっぷりと皮肉を含ませて、言い放つ。
しかし、無表情である事にかわりはない。
櫻子は、どうしようもない様子を見られて、穴があれば入りたいような気持ちになった。
「新堂…。」
「私をお持ちだったんでしょう？とっとと運転しますから、乗ってください、お二人さん。」
淡々と言いながら、車の方に向けて手を広げて、促す。
櫻子は、渋々言われるがまま、引き換えした。
しかし、帰宅途中、自分は、後部座席の左端にぴたりとくっつい

て、右側にいる楡崎と少しでも距離を離そうとしていた。
「送ってくださって、ありがとう、新堂さん。」
車から、降りると、新堂に礼を述べたが、楡崎にはとうとう、言葉どころか視線すらも交わさず、屋敷の中に入っていった。

【楡崎蓮二】編（5）　濡レ髪

櫻子が去った後、楡崎は手にしていた彼女の櫛を取り出して、見つめた。

「返し損ねたな。」

道に、音を立てて落ちた、彼女の白金の櫛。

「でも、まあ、いいさ。これで、また会う理由ができた。」

それを、手のひらで弄び始めた。

「……恋は人をお馬鹿にするって言いますけど、あなたは救い様のない大馬鹿ですよね、社長？」

心を剣山で差すように、ずけずけという。

「私が来なければ、一体ナニをしようとしてたんです。」

車内とはいえ、往来の多い、門前で。ちょっとは、学習して欲しい。

犬ですら、お座りと待ては覚えるというのに。

「あきれたな、また覗いたのか。」

不可抗力、という言葉を彼の脳みそに叩き込んでやりたい。

「八時に約束したじゃないですか。俺は、どうしたもんかと思ってこの寒空の中、外に居たんですよ。」

思わず、「私」から「俺」に戻っている。

律儀に十分前にやってきた新堂は、声をかけるわけにもいかず、櫻子が飛び出してくるまでの十五分間程度も、そのままだった。

「おかげ様で、体が芯から冷え切ってしまいましたよ。ええ。」

「俺は、来なくていい、と言ったのに、来ると言ったのはお前だろう？」

その言葉を聞いて、新堂は、この主（あるじ）を手でひねりつぶしてやりたい欲に駆られた。

そんな新堂の心中にも気がつかず、楡崎は、ぽつり、と思い出したように言った。

「思わず平手打ちされるかと思ったが、違ったな。」
「怒っていたとは言え、よっぽどの理由が無い限り、あの方は簡単に他人を殴ったりしませんよ。」
「どうして、わかる？」
「いくつか、武道をたしなんでおられるんでしょう。あのお嬢さんが本気で殴ったら、あなた、口の中を切る程度ではすみませんよ。」
こわや、こわや、と楡崎がからかうように笑みを浮かべる。
「お嬢さんが、あの白い体を火照らせて、可愛い声で啼いて俺にすがりつく姿を早くみたいもんだな。」
そして今度は、くっ、くっ、くっと笑う。
新堂の忠告は、既に素通りされている。
「あなたって、本当に何処までも前向きですね。」
新堂の忠告は、既に素通りされている。
「あなたって、本当に何処までも前向きですね。」
新堂は、なぜだか、自分が自宅で飼っている柴犬を思い出した。いつもはそれなりに可愛いが、疲れて帰宅したときも、庭先で尻尾を振って自分を向かえる姿がうっとおしい。それで、「あっちへ行け」と、追い払っても、そんな新堂の気持ちを汲み取れずに無邪気にまとわりつこうとする。
その瞳は、楡崎とは違い百倍は愛くるしいが、どことなく性質が似ている……気がする。
（楡犬（にれいぬ）……。）
心の中だけで、柴犬をもじって、自分の社長を恐ろしい名で呼んだ。
そして、新堂は、気を取り直した。
「しかし、私の話を聞けば、私がお邪魔虫だなんて、言えなくなりますよ。」
また、一人称が「私」に戻っている。
「次は、農務大臣が、亡くなりました。明日、日報に載りますよ。

事故死としてね。」
　楡崎が、眉を上げた。
「本当か？」
「ええ。私は、あなたが人様から恨まれるような事はしていないと信じていますが、それでも夜道をお一人で行動されるのは、部下として認めるわけにはいけませんから、こうして来たのですよ。」
　新堂の前職は、警察官だった。ゆえに、彼の仕事は、楡崎の身辺警護も兼任している。
　この事は、社内でも極秘事項であった。
「何の事故だ？自動車か？」
「大きな野犬に襲われそうです。喉笛を裂かれ、男の急所も噛みちぎられていたそうな。」
　楡崎は、想像したのか、痛そうに顔をしかめた。
「一連の事件と、関係がありそうなのか？」
「まだ、わかりません。しかし、今回も夏椿の花が遺体の前に落ちていました。」
　椿は、花盛りのうちに、頭がとれるように、ぽろりと落ちる。その姿から、武士が大変忌み嫌っていた花だ。
「今回も？」
「前回の議員殿は、体の近くには落ちていませんでした。その後、彼の背広の胸ポケットに入っていたのを家族の方が発見したのです。」
「金属会社の社長の場合は？」
「彼の場合は……。」
　聞いた話を思い出して、新堂の声が曇った。
「悔やみの日、棺が運ばれて、参列者と最後の対面をする時、中の花が全部、すっかり夏椿とすすり変わっていました。」
「なんだと……？」
　色々とりどりの花を供えていたはずが、最後に、一面の白い花に変わっている。

美しいようで、この上なく気味が悪い。
「しかし、別々の犯人が結託して、夏椿を使う事で、同一犯の仕業に見せているかもしれません。
一体、何人の悪党が、こうして政財界の偉い人たちを襲撃しようとしているかはわからないのです。」
「しかし、夏椿といえば、その通り夏の花じゃないか。どうして、今の時期に?」
今の時期といえば、冬に咲く紅い椿も咲かない時期だ。
「そんな事、私が知るわけないでしょう?」
楡崎は、考え込むように、顎に手を当てた。
「だから、あなたも気をつけてくださいね、という話です。」
「わかった。今のところ、俺には見に覚えがない話だが、気をつける。」
「頼みましたよ。あ、そうそう。」
新堂は、思い出したように、別の話を切り出した。
「例の件、上手くいきそうですよ。新しい協力者を得ることが出来ました。」
「おお、そうか!」
楡崎は、嬉しそうに叫んだ。
「師走に、ホテルで社交があるでしょう。その時に、お会いできますよ。」
「そうか。」
老舗の子女、つまり次期の跡取りや、若手実業家などの交流を深める為の、若年層を主とした、宴会があるのだ。楡崎は、それに参加するつもりだった。
「あなたの代わりはいないのですから、うっかり殺されたりしないで下さいね。あと、ちょっと、窓を開けてくれませんか?」
「寒いじゃないか。」
「酒臭いです。」
渋々、窓を四分の一程開けて、夜気を入れる。

その時に、楡崎は、雲の無い天から、やや欠けた月が、黄色く光を放って、下界を照らしていることに気がついた。
祭りの賑わいからすっかり遠ざかって、灯りのない暗闇の道に来ていた。
「あなたは、人前では酔わない人だと思っていましたよ。俺の前でも、そうした事はないのに。」
「おまえの前で酔ったって、気分が良いことでもないさ。」
「あんまり、無茶な事はしないで下さいね。英吉利や仏蘭西で、淑女（レディ）の扱い方は身につけたでしょうに。今に嫌われても知りませんよ。」
「ふん、何とでも言うがいいさ。」
そういって瞼を閉じる。
まだ酒の抜け切らない体は、まるで体の芯を温かい湯気で包まれているような気がする。
安心感にも似た安らぎに包まれて、楡崎は眠りに落ちた。

◆◇◆◇

一方、屋敷に戻った櫻子は、ただいまも言わずに、自分の部屋へ戻った。
入った瞬間、今まで張り詰めていた糸が切れたように、床に座り込む。
しばらく、茫然自失となって、部屋の壁を見ていたが、急にあの男を思い出して、恐怖にも似た怒りに襲われた。
（許せない、あの男…。）
――熱を帯びた吐息、体臭、腕の感触。
彼に触れられた部分を、何もなかった事にしたい。
櫻子は、湯を浴びる事にした。
準備を整えて、浴槽に向かう為に、廊下にでる為に、辺りを見回す。

今は、誰にも、自分の姿を見られたくない気がした。
無理やり殻を割られて、中身を取り出されそうな恐怖。
元の自分を取り戻したくて、頭の先からつま先まで、石鹸で洗った。
湯を浴びた後、髪を布で拭きながら、自室に戻る。
空気に触れて、冷えてきた濡れ髪が、頬や首筋にまとわりつく。
頭を振っても、水を含んだ重みのせいで、また自分を絡め取るように、鎖骨や胸元にまで攻め入って来る。
その感触に、まるで、心までもが捕らわれて、そのまま、もう何処へも抜け出せないような気がした。
楡崎が、梳いた髪。
それを断ち切れば、この思いは消えるだろうか。
蜥蜴の尾切りのように、残された部分は、もう一度新しく、なれるだろうか。
（何も知らなかったあの頃に。）
櫻子は、急いで一階に下り、裁縫道具の置いてある和室に飛び込んだ。
箪笥にしまった、布切り鋏を取り出す。
そして、その刃先に、もうすぐ腰まで届こうとしている、自分の長い髪を、押し当てた。
ジョキン、という鈍い音が、部屋に響く。
髪が一房、畳に落ちた。
――涙はこぼれなかった。
母親が、亡くなった時すら、自分は泣くことはできなかった。
どうやら、感情を体の外へ剥き出しにするのは、苦手な性質（タチ）らしい。しかし、逆に、もし、じぶんが、声をあげて泣く事が出来たなら、こんな行為には及ばなかっただろう。
もう、一房、掴んで、切る。
また、鈍い音と一緒に、自分の太ももの上に落ちた。
濡れた髪によって、夜着がしっとりと湿ってくるのがわかる。

その時だった。

「さ、櫻子様??」

神谷が、蒼白な顔をして、櫻子が右手に握り締めていた鋏を奪い取った。

「乱れた足音が響いたので、来てみれば……。どうしたんですか、そんな顔をし御髪(おぐし)なんか切りなさって?」

「神谷……?」

我に返ったように、櫻子が顔を上げた。その姿は、ばらばらの長さの髪が、垂れていて、美しくはなかった。

「ああ、髪を切っていたのよ。」

「下に髪も敷かないままでですか?それに美容院に行った方が、格好がつくでしょう?」

「急に切りたい気分になったのよ。この長さになると手入れも大変で、うっとおしくてね。」

それが誤魔化しの為の方便だという事は、神谷もわかっていた。櫻子も、神谷がそれをそっくり信じるとは思っていなかった。

しかし、無理やり笑うような櫻子の顔を見て、神谷は何も気がついていない風を装った。

「大分、お切りになりましたね。」

切られた部分は、肩の少し下辺りまでしかなかった。

「洋装が似合うようになるかも知れないわ。」

鋏を返してくれる?と櫻子が手を伸ばした。

「……僕が切ってあげましょう。」

「えっ?」

「自分で切れば、後ろ髪の具合がわからないでしょう?僕が切ってあげますよ。」

思ってもいなかった申し出だった。

「今、下に敷く何かと、櫛を持ってきますから、ちょっと待って下さい。」

「あ、いいの。箪笥に要らない布があるから、それを使って頂戴。

櫛もこの部屋にあるから。」
櫻子が取り出したそれを彼女の周りに広げ、彼女自身にも布を巻いた。
そうして、神谷は、櫛で櫻子の髪を梳いて整え、一番最初に切った髪の長さに合わせて、切り始めた。
「綺麗な髪なのに、もったいないですね。」
「いいのよ。また直に伸びるから。それにしても、神谷さんは手先が器用なのね。」
鏡がないので、自分の姿を見ることは出来ないが、手馴れたような手の動きに、驚いた。
「僕には、妻が居ましてね。病気になってしまって、最後は寝たきりだったので、こうして髪の手入れをしてやっていたんです。病人は、そう頻繁に湯に入れないでしょう。ですから、手入れがしやすいように、こうして、髪も肩の辺りで整えて。」
「まあ、そうなの。」
「これが、妻です。」
背広の胸ポケットから、写真を取り出した。
今より大分若い神谷と、並んで写っている女性は、優しそうに微笑んでいた。
「これは結婚前の写真なので、少し若いですね。僕とは幼い頃から顔見知りだったので……僕のお守りです。」
そう言って、また大事そうに、元の場所へしまった。
神谷が、既婚者で、しかも、その妻を亡くしているという話は初耳だった。
まだ若いのに、相当、苦労をしているのだと思う。
しかし、その苦労を感じさせない柔和な笑みを、いつも、櫻子や周りに見せている。
「長さはどうします?」
「肩の上の辺りで、お願いできるかしら?」
「随分、切られますね。これは、いろんな方がびっくりされます

ね。」
神谷は微笑んで、櫻子の注文どおりに仕上げていく。
切り終えると、手鏡を櫻子に渡した。
「どうですか？」
「完璧だわ。どうもありがとう。」
「どういたしまして。……よく、お似合いですよ。」
神谷は、切り終えた後の始末をして、部屋を出ようとした。
「これは、僕が片付けておきましょう。では、おやすみなさい、お嬢様。」
「ありがとう、神谷さん。」
そうして、櫻子は、自分の新しい髪型に満足しながら、就寝した。

【楡崎蓮二】編（6）　手懐ケラレナイ恋

日曜日、楡崎はまたもや二階堂邸にやって来た。
斎木に呼ばれて、応接室の前の扉に立ち、櫻子は叫んだ。
「申し訳ありませんけれど、もうあなたとお会いする事はありません！」
長椅子に腰掛け、紅茶のカップを手にしたまま、楡崎が目を丸くした。
「おや、すっかり嫌われたようですな。部屋の中にも入ってくださらないとは。」
楡崎は、落ち着いている。
「お顔も拝見したくありませんから。」
「櫻子様、それではあまりにも楡崎様に失礼では……？」
「彼は、今日は何の御用でいらっしゃったの、斎木っ？」
櫻子の剣幕に、斎木の方が慄いている。
「あの…、お嬢様が、昨晩お忘れになったという櫛をお届けに来てくださいました。」
「櫛？」
そういえば、楡崎に髪を解かれた後、その櫛が何処へいったかなんて、気にも止めていなかった。
「そうですよ、立派な理由でしょう？」
楡崎は悠然と、述べる。
「今日もあなたに、花とちょっとした贈り物を持って参りました。俺は、それをお渡ししたい。どうぞ、機嫌を直して、部屋に入ってきて下さい。」
「嫌！」
「ふん……仕方のないお嬢さんだ。」
横柄に長椅子から立ち上がり、自分から、櫻子を向かえ入れる為に、扉を開けた。

「お嬢さん……？その髪は……。」
昨日とは全く異なった姿になった櫻子に、楡崎が動揺した。
眉をしかめて、目を何度も瞬いている。
「切ったのか、髪を？」
「あなたは乱暴で、礼儀を知らない野蛮人よ！できる事なら、あなたが触れた所を、そっくりそのまま新しくかえてしまいたいくらいの気分だわ！」
「俺のせいなのか……？」
「とぼけないで。私は、もうあなたにお会いしたくはないの。帰って頂戴。」
櫻子は、楡崎の前で、強引に扉を閉めようとした。
「ま、待て…！」
その腕を引き寄せられる。
「あなたは、そんなに俺の事が嫌いなのか？」
そうよ、と言いかけて、楡崎が、今まで見たことのないような哀しげな表情をしているのに気がついた。
「衝動的に、髪を切ってしまう程、俺を拒絶するのか？」
切なげな低い声で問われて、躊躇しそうになる。
「嫌い。」
しかし、逃げずに、その目を真正面から捉える。
「奥さんが欲しいなら、他の人になさって。あなたなら、私よりも綺麗で、いい所のお嬢様をお嫁にもらえるわ。」
「……。」
「きっとあなたは、今までとは違う、風変わりな私に興味を持っているのだわ。そして、その私が、全然あなたの思い通りにならないから、躍起になっているのよ。その事に気づきなさって？」
早口で、必死に、それだけの事を言う。
「あなたは、俺が、一時の酔狂であなたに近づいたと、本気で思っているのか！？」
楡崎が急に声を荒げた。

いつも余裕綽々といった感じの彼が、怒っている所を初めて見た。
櫻子は、反射的に首をすくめて目を瞑った。ぶたれるかもしれない、思ったのだ。
しかし、恐る恐る瞳を開くと、そこには、もどかしいような、悲しいような、顔があった。
「楡崎様、どうか、落ち着いてくださいませ。」
ただ事ならぬ様子を察し、斎木が慌てて、割って入る。
「……帰る。」
楡崎は、肩をすくめ、流し目に櫻子を一瞥すると、
「もう、あなたとは、会わない。いろいろすまなかった。」
そして、長椅子の足元に置いておいた自分の荷物を持ち、扉を出て櫻子の横を過ぎ去る。
「元気でな、櫻子さん。」
一度だけ振り返り、屋敷の外へと去っていった。
完全に足音が聞こえなくなったのを感じると、応接室の中へと入り、長椅子に乱暴に腰掛けた。
「お嬢様……。」
「これで良かったのよ、斎木さん。」
なんでもなかった風に、斎木に微笑みかける。
しかし、口の中は、何も食べていないのに、苦い味がするかのようだった。
「私にも、紅茶を入れてくれる?」
「え?ええ……今、新しいお湯を沸かして参りますので、少々お待ちください。」
そういって、厨房へ戻っていった。
残された櫻子は立ち上がり、机をはさんで反対側の長椅子にある、楡崎が残していった花束を持った。
一番最初に彼からもらったものと同じ、深い真紅の薔薇だった。
「ん?」
良く見ると、その真中に、薔薇と同じ色の包みが埋められている。

それを取り出して、開けると、中から小さな木箱が出てきた。
「……！」
その木箱の中には、桜の模様のした、新品の銀の櫛が入っていた。
ところどころに、真珠や宝石が埋め込まれたそれは、櫻子が忘れていったものよりも、何倍もの値段がするような品だった。
（だから、楡崎さんはあんなに怒っていたんだわ。）
この髪の長さでは、髪を結えない。
彼が見せた、悲しげな表情が思い出される。
心を傷つけてしまった、と櫻子は思った。
その櫛を胸に抱きしめて、どうにもならない思いの行き場を探そうとした。

◆◇◆◇

月曜日、仕事を終えた櫻子は、妙月の庵に書を習いに行く事にした。
庵の周りに作ってある生垣にそって、道を歩いていると、緑葉の匂いに混じって、金木犀の匂いがした。前回もきっと薫っていたのだろうが、気がつかなかった。
門の前まで来ると、知らない女性が丁度入れ違いに出てくるところだった。
白い着物を着た、たおやかで上品な女性。その立ち姿は、まるで清廉な百合のようだった。
その美しいうなじに近づけば、その香りが漂うのかもしれないという錯覚すら覚える。
「こんにちは。」
軽く会釈をして、通り過ぎようとすると、紅をさした唇で微笑んで、櫻子に会釈をした。
心を奪われるような清楚な様子は、きっと自分が男性なら、虜にならずには要られなかっただろう。

「櫻ちゃん、お久しぶり。」
妙月は、丁度、玄関に居た。どうやら、さっきの女性を見送った後のようだった。
「あら、髪を切らはったのね？」
前回とは違う櫻子の様子に、妙月が声をあげた。
「そう、ちょっと……手入れが面倒になってきてね。」
また、嘘をついてしまった。この人は、他人の心を見透かす能力に長けているというのに。
「良う似合ってるよ。」
「ありがとう。さっきまで、お客さまがいらっしゃっていたようね、」
「ええ、さっきまでね。さあさあ、入って。」
櫻子は、庵に上がって、早速、書道の道具を広げ始めた。
「妙月先生のおかげで、私の書は随分良くなったと思うわ。これで、生徒にも自信を持って教えられそう。」
「ふふ…基本を覚えれば、書はある程度は様になるもんや。練習の成果やねぇ。」
妙月は、目を陽だまりの中の猫のように細めて、にこにこしている。
櫻子は、硯で墨を丹念に塗ってから、半紙に筆を下ろし始めた。
「そういえば、この間言うてた好い人とはどうなったの？」
筆が乱れた。
「好い人じゃありません！」
「え、なんで？帝劇と浅草行く事にしたんやろ？立派な逢引やん。」
無垢な顔で、妙月が言う。
「その方とは、もう会わないことにしました。」
「何で？」
「……いろいろ、私とは合わない所があるので。」
櫻子は、失敗した半紙を取り除いて、新しい半紙と取り替えた。

「ふうん。」
「何ですか？」
「私から言ってもええの？」
「……白金の櫛を頂きました。」
櫻子は、筆を置いて、正座をしたまま、しかし目線は妙月からそらしたまま、悪戯がばれた子供のように告白した。
「え？」
「その方が私に失礼な事をしたので、ずっと私は怒っていました。そして、次の日私の家にやってきた時に、追い返してしまいました。でも、彼が置いていった物の一つに、私への贈り物があったんです。」
「それが、銀の櫛？」
「はい。私は、彼に無礼に触られた髪が気持ち悪くて、前の晩にざっくりと鋏で切り落としてしまったんです。」
そうしたら、彼は怒って帰ってしまった。
かといって、自分が謝るのは、なんとなくおかしい。最初のきっかけを作ったのは楡崎の方なのだから。しかし、衝動的に髪を切り落としてしまったのは、やりすぎだったような気がする。
そして、頭を離れないのは、楡崎の悲しそうな目。
理由はどうあれ、他人（ひと）の心を傷つけてしまった事は確かなのだから。
もう会わないと決めたのだから、このまま謝らずに通すか、それとも……。
櫻子は、自分がどうすればよいのかは、全く検討がつかなかったのだ。
「なるほどね。」
「だって、私から謝るのも、理屈で考えるとなんだか変なんだもの。でも……。」
妙月も、腕を組み、眉を寄せて悩んでいる。
「妙月様は、何かに悩んだ時、大事にしている事とかあるの？」

「私？」
驚いたように、眼を丸めて、自分を指差した。
「特に、人間関係の悩みにおいて。」
「人間関係ねぇ……。」
その人が、明日急にいなくなっても、後悔しないように振舞う事……かなぁ、と妙月は言った。
返答が漠然としすぎている。
「人は、いつ何がどうなるかわかんからなぁ……。」
「そうだけど、それはそうなんだけど。」
櫻子も、更に悩み始めている。
それ以前に、なんとなくあの生命力の塊のような楡崎が、明日死ぬ、という想像が浮かんでこない、というのはまた別の問題である。
「でも、つまらん意地はったり、逆に意気地なし（へたれ）過ぎて、するべき事をせんかったら、後で困るで？」
「まあ…ね…。」
「昔の人もよう言ってるやん。過ぎ去った時間は戻ってこないって。」
結局、自分で考えろ、という事らしい。
「そうや、櫻子ちゃん、大晦日来るって言ってくれてたやんなぁ？」
妙月は急に話題を変えた。
「大晦日は、行くあての無い子も庵に呼んで、皆で蕎麦食べようと思ってるんよ。」
「皆で？」
「この庵は遊郭にも近いせいか、孤児が多くてなぁ。どぶの中やら道端の物を拾って食べて、赤痢やコレラにかかる子も居てる。うちの庵は貧乏やから子供を抱える事はできひんけど、こうやって、時々、世話みたいなものをさせてもらってるんよ。」
「まあ、そうだったの。長らく書を習いに来させてもらっているけど、そんな事もしてらっしゃるなんて知らなかったわ。」

「大正やなんやと浮かれてるけど、いつの時代も、末端に生きる人らの生活は苦しいさかい。」
お互い様よやなぁ、と妙月は笑った。
「ごめんな、お習字中断させてしまって。わたしは、休憩の為のお茶の用意をするし、戻ってきたら、何枚か採点しましょう。」
そういって、ゆっくりと立ち上がる。
「あ、妙月さん。」
「何？」
「妙月さんは、時間を巻き戻したくなるほど、何かを後悔したことはあるの？」
どうして、こんな質問が口から飛び出たのだろうか、と後になってから考えた。
「……あるよ。」
そういって、笑った。
「昨日も、大切にしてた花瓶を割ってしまってなぁ。全くどうにかならんやろうか。」
その言葉に櫻子も笑った。
しかし、一瞬だけ、悲しそうな深い眼をしたのは、気のせいだっただろうか、とも思った。

【楡崎蓮二】編（7）　扉

「櫻子、来週の週末は暇か？」
朝食の席で、梅造が櫻子に問うた。
霜月が過ぎ去り、師走も半ばになった季節は、隙間さえあれば木枯らしを部屋の中へも吹きかけてくる。
「今週は、特に何も予定はないけれど、どうしたの？」
櫻子は、焼いたパンに上品にバターを塗る手を止めて、顔を上げた。
今日は、桃真は既に家を出ているので、二人だけの朝食だった。
「すっかり忘れておったんだがな、宴会の招待状をもらっておった。主催者は親しくさせていただいている方でな、出席してはくれんか？」
梅造によると、本当は桃真か、組織の誰かを遣りたかったらしいが、誰も年末が近づいている為に忙しく、都合がとれないらしい。
つまり、組織内の重要な位置についているものが、無理やり予定をねじ込んで出席する必要性はないが、顔見世程度に参加した方が良いとは考えているらしい。
「私が…？」
「そうだ、娘を寄越したと思ってもらえれば、先方も喜んでくださるだろう。一人が嫌なら、私の若い秘書の誰かをつけてやろう。顔と名前を覚えなくてすむ。そうだ、吉良がいいな。」
確か、その方の父親も、梅造の秘書をしていてくれた。引退した後、今度は代わって息子が梅造の仕事を補助してくれている。
「彼が居なくては、父様が困るでしょう？他の方も忙しそうだし、一人で行くわ。」
「そうか？大丈夫か？」
「ええ。」
こうして、櫻子は、軽い気持ちで梅造の頼みを承諾したのだった。

◆◇◆◇

ホテルの最上階の大広間を貸しきって行われたその会は、天井に吊るされた豪奢なシャンデリアの下に、きらきらしい着物を身に纏った紳士や淑女が、優雅に会話を楽しんでいた。

ちょっと緋色は派手すぎかしら、と思いながら、着物を選んで来たが、その華やかさにおされて返って逆に地味すぎたかも、と錯覚してしまうほどだった。

なぜ、参加者が全員着物かというと、主催者が大店の呉服商の主人だからである。

「いやいや、これは二階堂のお嬢さん。」

「こんばんは。」

その主催者の主人、皆川が、ゆっくりと近づいてきた。細面の顔立ちは、どこか菊弥に似ている、と思ったが、その若旦那は、着物よりも洋装が似合いそうな、現代的（モダン）な雰囲気がした。

「これは、今日もお美しい。私に気を使ってか、皆さん着物を来て下さって。呉服商としてはとても嬉しいのですが、この立派なホテルには、洋装でもまた来てみたいものです。二階堂邸で開かれた夜会で、あなたが着ていた物も大変あなたにお似合いでした。」

「まあ、来て下さっていたのね。ご挨拶できずに申し訳ありませんでしたわ。」

「いえいえ、突然の災難で櫻子様も、それどころじゃなかったでしょう？」

皆川は、まだ何も手にしていない櫻子に、どうぞ、といって杯を渡した。

「葡萄酒は、嗜まれますか？」

「ありがとう、頂くわ。」

受け取って、少し口をつける。甘さの中に、鼻腔をくすぐるような渋さを感じた。

「今日は気楽な会です。これからの日本経済を担うような若い人々の社交の場としてね。どなたか、御知り合いはおられますか？何方かご紹介させて頂きましょうか？」

櫻子は、来た初めに広間を見回したが、知り合いらしき人はいなかった。

「ちょっと、柳葉、こっちに。」

皆川は、そばに居た大柄の男を、こっちへ手招いた。

「紹介させて頂きましょう、櫻子さん。こちらは、柳葉海運会社を経営しておられる次期社長です。」

「こら、皆川、先代の息子とはいえ、まだ決まったわけじゃない。……こんばんは、二階堂のお嬢様。」

日焼けした顔に、白い歯を見せて、柳葉が櫻子に手を差し出した。背が高く、筋肉のつき方も良くて、まるで運動選手のようだと思った。

「こんばんは。」

櫻子も、微笑んで、柳葉と握手をする。

「おまえ、少し太ったんじゃないか？」

皆川が、柳葉の腹部の辺りを見ながら言った。

「ははは。恰幅が良くなったと言ってくれないか？」

櫻子は、体躯の大きい柳葉が拗ねた様な言い方をしたので、不謹慎だと思いながらも、不噴出してしまった。

そんな談笑しているときに、並んで経つ二人の男性の体の隙間から、その顔を見てしまった。

――楡崎だ。

緑青の渋い着物を颯爽と着こなして、他の人より一つ分高い頭が、何やら楽しそうに話している。

その向かいには、見覚えのある顔があった。

それは、妙月の庵に行くときに、門の前ですれ違った貴婦人だった。今日も、白い着物を着ているが、この間のとは、柄が違っていた。白色が本当に良く似合う人だと思う。

楡崎が何か可笑しいことを話したのか、口元に手を当てて、彼女の方も一緒になって微笑んでいる。

そして、再び顔を寄せ合って、親しげに話していた。

ほぼ半月の間、本当に全く姿を見せなかったので、自分の事など忘れているのだと思った。

それなら、それでいい。

しかし、あれだけ自分に執着していたにも関わらず、この身の変わりようは何だろう。

自分に会う前から、このような場に一緒に来るような関係だったのだろうか。

それとも、今晩会った、見知らぬ女性だろうか。

（私には、どうでもいい事だわ。）

会わないことにして、正解だったと思い直した。そして、楡崎からはこちらが見えないように、上手く柳葉と皆川の陰に身を隠した。

その後も、今晩は会って話す機会もないように、なるべく広間の隅にいることにした。

一時も経った頃、そろそろ疲れてきた。軽い頭痛がする。

一旦、化粧を直す為に、広間を出て、お手洗いに行き、広間の前の扉で息を吐いた。

（そろそろ帰ろうかしら？）

今晩は、随分たくさんの人に話しかけられたような気がする。少し、声も枯れている。

「おや、櫻子さん。」

別の方向から、皆川がやって来た。

「楽しんで頂いていますか？」

「ええ、ご招待頂いて、どうもありがとう。」

その時、ふっ、と眩暈がして、体が大きくよろけた。慌てて、皆川が抱きとめる。

「大丈夫ですか？」

「……ご、ごめんなさいね。ちょっと、ふらっとしてしまって。」

「風邪でもひいてしまわれたのでは？ちょっと別の部屋を用意しましょうか？」
「大丈夫よ、どうもありがとう、皆川さん。」
その時だった。
「おや、櫻子さんではありませんか？」
鷹揚としたこの話し方は聞き覚えがある。
（楡崎さん……？）
快活な笑みを浮かべる楡崎が、そこに居た。
先ほどの女性も隣にいる。
「あなたもこの宴会に来ていらしたのですか？これは、偶然だ。」
そう言って、皆川から奪い返すかのように、櫻子の手を引く。
「ん？どうしたのですかな、額を押さえて。」
「……櫻子さんが、軽い眩暈を起こされたので、どこか休憩できる場所をご用意しようとしていたんだよ。」
「ほう、そうですか、では、私が屋敷までお送りしましょう。」
「え……？」
この期に及んでも、顔を合わすことに躊躇いがあったので、顔をそらしていたが、思わず上げてしまった。
「私は、今日は車なのでね。あなたの家の場所も詳しいですし、ご気分が優れないなら、送って差し上げましょう。」
「あ、あの……。」
何か言おうとしたが、また急に眩暈が襲ってきた。どうやら、見知らぬ人の多いこの場に、自分が思っていた以上に緊張していたらしく、体はくたくたになってしまっていたらしい。
「どうしましょう？抱えて差し上げましょうか？それとも、ご自分で歩かれますか？」
「あ……ありがとう、まだ、大丈夫、歩けます。」
右手を額に押さえたまま、櫻子が言った。左手を、楡崎が引いて、歩き出す。
「では、皆川、そういうわけで二階堂のお嬢さんの心配はいらな

い、俺がちゃん届けるさ。」
「あ……ああ。」
「ありがとう、邪魔したな。」
また、会おう、と空いている方の手を振り、櫻子を連れてその場を去ろうとした。
その時だった。
広間の中から、突然、白煙が上がり、その煙が櫻子たちの居る方へも流れ込んでくる。
「な、なんなのっ？」
櫻子の傍を、黒い服装の男達が横切った。
その手には、しっかりと日本刀が握られているのを、見た。
次の瞬間、一拍遅れて、客達の阿鼻叫喚が、響き渡る。
あの夜と、同じ。
「金に飢えた富豪の子女共が！無駄に殺されたくなければ、おとなしくしろ。」
男達は脅かすように、食事が乗った卓子などを切り付けている。
「け、警察を呼べ！」
皆川の怒号が響いた。
客達は、そのおぞましさに危険を感じて、一斉に広間の外へと出ようとする。
「あっ……。」
白煙の向こうで、白い着物の貴婦人が、誰かに押されてよろめく姿が見えた。
「大丈夫ですか？」
櫻子が、助けようとする前に、誰かによって、抱きとめられ、事なきを得た。
楡崎である。
しかし、その事に気を捕らわれている場合ではなく、当てもなく振り回されている白刃の存在に気がついて、櫻子は身を避ける。
その動きから、きっとまともな剣術を習った事が無い者である事

を悟ったが、竹刀どころか、その代わりになるようなものすら身に着けていないこの状態では、考えなしに動くわけにはいかない。

つくづく、柔術も兄様に習っておけば良かった、と思うのはこういう時だ。

男の中の一人が、他の客のように、恐怖の感情をその顔に貼り付けるのではなく、自分達をかみころさんばかりの野獣のような目をして睨み付けている櫻子に気がついた。

「ほう…あんたか、この前の夜会ではご苦労な事だったな。」

その言葉に、櫻子は、彼らが自分達をかつて襲ったものと同一犯である事を知った。

「あんたも、標的対象の一人だ。女は、殺すか、連れて帰れ、と言われている。」

そうして、男は、大きく刀を振りかぶった。

しかし、振り下ろされたそれを、なんなく避ける。櫻子にとっては、十分に遅い動きだ。

そして自分に危害を加えようとしている男をねめつける。

その時、ピィィィっという甲高い笛の音が聞こえた。

「ちっ、時間か。引き上げ時だな。」

男が、野卑な眼で櫻子を見て、つばを吐いた。

「命拾いしたな、女。」

そうして、他の襲撃者と一緒に、廊下を駆けて、何処かへ去っていった。

騒ぎを聞いて、他の階から駆けつけた従業員によって、ホテルの窓が全開にされ、そこから白煙が抜けていく。

櫻子は、再び眩暈を感じて、よろめいた。

「大丈夫か、櫻子さん?」

楡崎だった。現れた方向から考えると、一度、階下に逃げて、それからこちらに戻ってきたらしい。

辺りは、従業員と駆けつけた警官ばかりで、貴婦人の姿どころか、他の客は既に居なかった。

「……全くあなたという人は。どうして逃げ出そうとしないんだ。一階に客達は全員避難したというのに。姿が見えないと思って、戻ってみてよかった。」

ホテルの玄関に向かう為に、階段を折りながら、櫻子の手を引いていた自分の手を、彼女がよろめいて倒れないように、背中に回す。

「あの人たちだったわ！私の屋敷も襲った人たちよ。今回は、誰も怪我をしていない？大丈夫だったかしら？」

「自分より、他人の心配をしている場合ですか？何人か、切りつけられたそうだが、重症ではないらしい。」

と、いう事は、今回の襲撃は失敗したのだろうか。それとも、他に目的があったのだろうか。

「財界の子女が襲われる事件が師走になってから続いている。……重症ゆえに、亡くなった方もいるそうだ。にも関わらす、もしかして、お嬢さんはお共の者も今日は居ないのか？」

なんとも言えずにいると、楡崎が冷めた声で言った。

「……皆川の時もそうだ。あなたには、防衛本能というものが欠けているらしいな。」

「皆川さん？」

「あの男は、俺の友人の一人ですが、呉服屋のくせに、着付けるより脱がすほうが百倍上手いんだ。偶然通りかかっていなかったら、もう少しで、あやつの毒牙にかかる所でしたよ。」

はあ、とため息をついて、少し、櫻子を抱き寄せる。

「そうなの…？」

「俺が嘘をついても、得する事はないだろう？それよりも、あなたはどうして今日此処へ？」

「父に頼まれたのよ。主催者の方と親しいから、顔見世程度でもいいので出席するようにって。」

「ほう、そういえば、皆川の父親と、あなたの父上殿は昔から懇意だったなぁ。」

「そうらしいわね。気がつかなかったけれど、この間の夜会にも

来て下さっていたと言うし……。」

「皆川が？そうか、俺もその話は聞いていなかったな。にしてもだ、二階堂の誰かとは、一緒に来なかったのか？日頃、財閥とは全くかかわりの無い国語教師のあなたが一人で来ても、会う人々の顔や名前がこんがらがるし、商売の具合の話はされるし、気づかれするだけだぞ。」

確かに、櫻子が二階堂の組織の状況について全く知らないにも関わらず、あの事業は最近どうだ、とか、世間話というよりは、腹の探りあいをされている風に感じた時もあった。

「……どうして、わかるの？図星なだけに、辛いわ。」

はあ、と楡崎は、もう一度ため息をついた。

「事前にあなたが来ると知ってたら、一緒に来て差し上げたのに。それでなくても、広間に俺の姿を見かけていたのなら、声をかけてくだされば良かったんだ。そうすれば、上手い具合に話を切り返してあげたのに。」

確かに、楡崎ならば、そのような社交術は手馴れたものだろう。

「俺が、唐突に話しかけた時も、それほど驚いていない様子だったから、きっと気がついていたんだろう？」

そんなことまで、見抜かれている。

「……でも、声をかけにくかったのよ。あなた、知らない方と一緒に居たし。」

「宴会だから、それは当然だろう？」

「ち、ちがうの。最近、その方とすれ違った事があったから。軽く会釈しただけで、名前は知らないんだけど。」

「じゃあ、なおさら、声をかければ良かったじゃないか？」

楡崎には、分けがわからない。

「あなたが、あの女性の方と親しげに話していたから、今晩はその方と一緒に参加されていたのかしら、と思って、声をかけなかったのよ。」

「あの女性……？わからんな、誰の事だ、櫻子さん。」

「白い着物の人。」
しばらく、楡崎は考えていたが、やがて、ああ、とうなづいた。
「誰の事かわかったぞ。」
「そう。」
「あれは、柳葉の妻だ。」
「そう……ええっ？」
あのうなじの綺麗な美人が、日に焼けた運動選手のような柳葉の隣に居る様子が、思い描けない。
「ははは。お嬢さんの気持ちは言わなくても、俺にもわかる。あやつも友の一人だが、仲間内では、美女と野獣だと、いつもからかわれているのだ。」
「そんな！柳葉さん、格好良かったわよ。私が言いたかったのは、その奥さんと一緒に居る姿が思い浮かばなかったって事。どちらかというと、皆川さん……いえ、楡崎さんの横に居るほうが似合いそうよねぇ。」
「今度、そう言ってやろう。」
「わ、私が言ったって言わないで頂戴ね？」
「わかっているさ。」
楡崎は、愉快そうに声を立てて笑った。
「ふむ……と、いう事は……。」
楡崎は、何かを考えたかと思うと、次は、不敵な笑みを櫻子に見せた。
「あなた、俺が居るとわかって、声をかけなかったのは、柳葉の奥さんに嫉妬していたからか？」
意地悪そうな視線を向ける。
「嫉妬っ？」
「だって、そうだろう？俺と一緒にいる方がしっくりきたって事は、彼女が俺の新しい恋人じゃないか、とでも思ったんだろう？」
「確かにそう思ったけど、でも、今晩新しく会った方かも知れないじゃないの。」

「だったら、声をかければよかったんだ。どうだ、違うか？」
むむむ、と櫻子は声を曇らせた。
「……だって、私、あなたにひどい事をしたもの。でも、先にその原因を作ったのはあなたでしょう？私が謝るのは、変じゃない？でも、傷つけてしまったのは事実だもの。」
そう言いながら、また櫻子は混乱し始めた。
「だから、今度あなたと会った時は、一体どういう風に声をかけるべきか悩んでいたのよ。心の準備が出来る前に、会ってしまったから、どうすればよいかわからなかったのよ。」
「……。」
「なのに、あなた、あんなに怒って出ていったのに、今日も何にもなかった風に、私を助けてくれたじゃない？私の事、怒ってないの？」
「あ？」
「あ？じゃないわよ、普通は、ああゆう別れ方をした後に、再会したら、気まずいもんなのよ？」
この人は、大丈夫だろうか。
それとも、私の方がどこか、おかしいのだろうか？
「銀の櫛、下さったでしょう？なのに、私は、すっかり髪を切ってしまって……傷つけたでしょう？」
ごめんなさい、と小さく櫻子が謝った。
「……俺は、謝らない。」
少し、低い声で、楡崎が言った。
「わ、私を馬鹿にしてるの？」
せっかく謝ったのに。
「俺は、あなたみたいな年下を、しかも精神年齢はそれ以上に下の女を相手にした事は今までにない。押せば怖がられる、引けば異性としては見られない……どころか、まるで兄貴がわりだ。次の一手に、俺はどう駒を進めれば良いんだ？」
楡崎は、立ち止まって櫻子の正面を向き、その両手を自分の手に

取った。
「しかも、逆上して髪は切り落としてしまうし……。」
はああ、と楡崎がため息をついた。
「可哀想な銀の櫛。緬甸(ビルマ)の稀少なルビーや、伊勢の高級な真珠を使って、お嬢さんの為に櫻柄に仕上げた特注なのに。」
そして、顔を右斜め下に背けて、もう一度ため息をつく。
「ご、ごめんなさい…高級そうだとは思ってたけど、そんな品だったなんて思っていなくて。」
櫻子が焦って困惑し始めた顔を、面白そうに見つめる為に、彼女の身長に合わせて体をかがめる。
「でもいいさ、頑ななお嬢さんは、まだ自分では気づいていないらしいが、どうやら他の女(ひと)に嫉妬してしまう程、俺の事が好きみたいだしなぁ……。
吐息が、かなりお酒臭い。
「扉を開けられないなら、誰かにそっとあけてもらうのもいいもんさ。」
「……楡崎さん、酔っているの?」
「俺は、いつでも自分の人生に酔ってるさ。くらくらしそうだ。」
櫻子の手を握り締めたまま、顔を反らして、くっ、くっ、くっと、笑う。
何が、可笑しいんだろう。
それとも、何も初めから、可笑しくはないんだろうか。
「……まだ、混乱しているな。」
いつの間にか、楡崎の腕は、櫻子の腰に回っている。
「わからないなら、わかっている方にゆだねてみるか?そうすれば、わかることもあるかも知れないさ。」
楡崎は、そう言って、櫻子の方に顔を落とした。
酒のせいか、少し熱を帯びているそれは、今までで、一番優しい口づけだった。

【楡崎蓮二】編（8）　月蝕（R15）

楡崎は、騒ぎの熱の静まったホテルの部屋を取った。そして、その寝台に腰掛けながら、楡崎は櫻子にゆっくりと口付けている。

誰の目も気にしなくて良い。二人以外は誰も知らない世界。

楡崎は、櫻子をかなり優しい人だと思う。夜会で会った時の様子や、今日も自分の身よりも他の客を心配していた事、そして自分のたわいない揺さぶりに負けて簡単に謝ってしまった事からもわかるように、少し風変わりな所もあるが。恐らく、彼女自身も気がついていない程、本当に、令嬢という言葉がしっくり当てはまる人だ。

だから、そんな彼女の世界に荒々しく踏み込んでくる楡崎に、櫻子が戸惑うのも当然だった。

逆に、楡崎の方からしてみれば、櫻子は今まで自分が接してきたどのような女性よりも、理解しがたい存在だった。自分を篭絡させようとして近づいてくる女性よりも、もしかしたら悪女ではないかと時々考える程で、恋しい分憎らしさも募った。

どちらが一方が悪いわけでも、良いわけでもないこの不思議な状況は、後々、楡崎が振り返って考えるに、お互いの育ちの環境が正反対だったからのように思う。

「求め」なければ、何一つ手に入れることが出来なかった自分。

求めるのでなくて、与えられる選択肢を「選ぶ」事を課せられている彼女。

普通の人よりも恵まれている自分は、これ以上何かを望んではいけないのだとでも言うように、与えられる限りの世界で生きてきた。

だから、服や身の回りの品も、自然と地味なものになっていったのかもしれない。

しかし、恋というのはそのものが、誰かを求める行為なのだ。

その経験値においては、確実に彼女を上回っている自分が、ゆっくりと気がつかせていけばいい、と楡崎は思った。

じわじわと、彼女の心を、浸食していくように。

「ずっと、こうしたいと思っていた……。」

楡崎は、櫻子の耳の後ろから首筋にかけてを、まるで彼女の体に己の唇で尋ねるかのように優しく吸っている。櫻子が怖がらないように、自分の欲望を殺して、優しく接していた。

そして、仕上げは、顎に口づけてから、顔を櫻子の正面に戻して、抱きしめた。その間、何度も楡崎の口から、ため息が漏れてしまう。

窓掛（カーテン）から差し込む月明かりに濡れた櫻子は、もうとっくに、頬を上気させている。

楡崎は、顔を離した。

自分より先に櫻子の唇の甘さを堪能した者が居たとすれば、金と権力で相手をどうにかして、葬り去っていたかもしれない。そう思ってしまうほど、自分より五つ以上も年下のこの女性に、自分はまいってしまっているようだ。

楡崎は、櫻子を切なげに見つめて、こう懇願した。

「お願いだから、櫻子さんの方からも、俺にしてくれないか。」

櫻子は少し照れながら、仔猫のように楡崎の顎や頬の辺りをゆっくりと口づけを始めた。

「なんで、顎……？」

楡崎は、櫻子の顔を手のひらに包んで、親指でその頬を撫でながら聞いた。

「……多分、楡崎さんと同じ理由かしら？」

櫻子の細い、女性的な顎は、男の楡崎が持ってはいないものだった。逆に、骨で角ばっていて、皮膚の厚い楡崎の顎に、櫻子は男性的な魅力を感じていた。

楡崎は、手の指を櫻子の髪の間に入れて、愛撫した。

「ああ……でも、もったいない。綺麗な髪だったのに。」

「……ごめんなさい。」

「冗談だ。また直に伸びるさ。」

櫻子は、小さく微笑んだ。

「そういえば、あなたは何処で柳葉の奥さんとすれ違ったんだ？」
唐突に、楡崎が聞いた。
「妙月様のいらっしゃる尼寺の門よ。私は、彼女に書道を習ってるの。」
「なんだ、あなた彼女とも知り合いなのか。」
「妙月様の事？あなたもお知り合いなの？」
「彼女も俺達の計画の協力者だからな、当然だ。」
一体、その計画が何のことなのか、櫻子は知らないのでわからない。
「妙月様に何も聞いてないのか？あの庵の近くに、今度、孤児院を立てるんだ。」
「孤児院？」
「そうだ。俺みたいな若手の事業家で資金を出し合って、作ることになった。日本は明治の経済恐慌時代に捨て子が増えたことから、孤児院が立てられるようになったが、欧米では二百近くも前から既に作られていたんだ。米國や欧羅巴に出かけていると、そういった所を自然と真似たくなるもんだ。」
確かに、日本では、昔から寺社が身寄りのない子供の面倒を見る風潮が有りはしたが、公や民間の機関がそういった児童福祉に携わる事は、諸外国と比べると機会はまだ多くなかった。
「柳葉も、その一員の一人でな。だから忙しい彼に代わって、時々、奥さんが庵を訪問していたというわけさ。」
「まあ、そうだったの。」
「関東出身だと言ったが、もともと俺は遊郭の生まれでね。父親が誰かもわからないような子供だった。」
遊郭の子供達は、母親である遊女が貧しい事から、彼女達が生活する置屋でも疎まれ、こき使われたり、あまりにすさんだ生活の為に命を落とす子供も多かった。
そして、運よく生き延びても、今度は働き手としてこき使われるような生活が続く。

「あの場所は、男にとっては極楽かも知れないが、女とそこで生れ落ちる子供にとっては、生き地獄かも知れないような場所だ。しかし、俺は、運よく神戸の貿易商の下働きとして売られたのでね。旦那も悪い人ではなかったので、そこでは人並みの生活が出来た。」

しかし、その貿易商が潰れて、今度は大阪の米問屋に売られると、生活は一変した。

下働きというよりは、犬や豚にも劣る扱いだったように思う。

「何度も逃げ出してやろうか、と思ったが、ある日、俺が病気にかかったと知れたら、あっけなく、放り出されてね。そのまま死んでやろうかと、彷徨ったが、せっかく自由になったのだから、生きてみるのもいいものかも知らん、と思って、神戸に戻った。前に働いていた会社の関係先をあたっては、仕事を見つけて、会社を興して今に至るってわけさ。」

櫻子は、「そのまま死んでやろうか」なんていう台詞を、あっさりと言う人と初めて会った。

「まあ、そうだったの。」

あまりに壮絶な話を聞かされて、櫻子は何て返して良いかわからなかった。

「でも、まあ、死ななかったのは正解だったな。死んだら、上手いものも食えないし、女とも口づけできない。」

「……もしもし?」

俗物的な台詞を吐く楡崎に対して、櫻子はあきれた声をだした。

「俺を卑しい男だと思うかね、櫻子さん?」

突然、楡崎は大真面目な顔をして、櫻子の瞳を見つめた。

「確かに、俺は金なら腐るほどあるさ。まだ日本人が馴染みのない土地に乗り込んでいって、そこでしこたま儲けたからな。しかし、若造だということもあって、国内では俺の名はまだまだ知られてはいないが、外国での人脈は日本の大企業にも負けちゃいない。」

「……。」

「が、俺の素性は先のとおりだ。金も地位もある、しかも母方に

は華族の血が混じっている財閥令嬢には、一緒にいる価値のない男だ。」

「じ…自分を貶めるような事、仰らないで！」

櫻子は、頭を起こして、楡崎を覗き込んだ。

「昔がどうだ、とか、今がどうだ、とかは、この先とは関係のない事よ。私だって、今にも食べ物にも困るような生活になってしまう知れないわ？そうでしょう？」

「……じゃあ、いいんだな？」

楡崎は、後ろから櫻子を包み込むように、身体を沿わせた。

「俺は、あなたの最初で最後の男になりたいと思ってる。あなたが、他の男とこうしているのを考えただけで、内臓がつぶされそうだ。……頼む、俺のものになってはくれないか？」

そして、櫻子の滑らかな額に、口づけを落とした。

「俺と、結婚してくれ、櫻子さん。」

◆◇◆◇

――大晦日。

雪がちらついている。

その中を、何人もの子供達が元気に走り回り、近所の大人たちも除夜の鐘を聞く為に、集まってきていた。

「何だ、あなた、手袋をしていないじゃないか。」

背広の外に黒いコートを来た楡崎は、櫻子の冷えた手を取った。

二人は、庵の縁側に腰を掛けて、外の様子を並んで見ている。

「あ、いいわよ。それほど寒くはないから。」

今日の櫻子は、長袖のワンピースの上に、毛皮のコートを着込んで洋風の装いをしていた。

楡崎は、自分のカシミヤの手袋を外して、櫻子にはめようとした。

「……いいから。」

おとなしく手を委ねると、指先が余る程大きい手袋が、櫻子の手にはめられた。
「ありがとう。」
外には、近辺の身寄りのない子供達も来ており、近所の子供達と一緒になって遊んでいた。
「日本の正月を楽しみたかったが、俺は明日から海外へ出張なんだ……。しかも、二月の終わりまで日本へは帰って来れない。」
楡崎が、何処となく哀愁漂う声で落ち込んで、ため息をついた。
「本当に忙しいのね、あなた。大丈夫?」
「まあ、仕事があるのはいいことさ。が、しかし、俺は二か月間は、あなたの傍にいないから、心配だ。」
皆川のような強引な輩に、何かちょっかいをかけられたら、と思うと、気が気ではない。
「また、子供扱いして!何が心配なのよ。」
「……いろいろと、だ。ああ、そうだ、巴里にも行くぞ。向こうで流行の服でも買ってきてやろうか?」
「まあ、巴里!?」
櫻子は、顔を輝かせた。
「あなた、仏蘭西の血が混じっていらっしゃるくせに、巴里は行った事がなかったのか?」
「巴里どころか、外國へはまだ何処にも行った事がないのよ。ああ、凄い。エッフェル塔の見える街を歩くのでしょう?」
頬に手を当てて、夢見るように、櫻子が言う。
「外國に行ってみたいのか?」
「ええ、機会があれば……でも、駄目ね、国語の先生では機会はないわ。せめて英語の教師だったら、機会はあったかも知れないけれど、無理ね。」
「何をとぼけた事を。俺の妻になれば、あなたは嫌でも世界中を巡る事になるぞ。」
にやり、と笑って、楡崎が言った。

その言葉に、櫻子は、少し顔を紅く染めた
「英國、伊太利亜、独逸も、行くぞ。」
「……白耳義（ベルギー）は？」
「白耳義？あの国は明治から日本と交流があるからな。もちろん、うちの会社も取引しているから、行けるさ。」
でも、どうして白耳義なんだ、と楡崎が聞く。
「父様が、お土産に下さったお菓子が凄く美味しかったから、覚えているのよ。名前は忘れたけど。」
「……あなた、食べ物の事ばかりだな。」
楡崎は、こらえかねて、下を向いて笑った。
櫻子が、つん、とすまして、「酷いわ」と言ってそっぽを向いた。
「ああ、笑って悪かった。で、だな、二月の十四日が俺の誕生日なんだが、その頃俺は、海の向こうだ。だから、俺が帰ってきた後の最初の終末に、一緒に何処か夕食にでも行かないか。」
一緒に祝ってもらえると、俺は嬉しい、と楡崎が笑った。
「お誕生日？ええ、行くわ。約束ね。」
櫻子は、そう言って小指を出した。
そうして、指切りをしたが、そんな子供っぽい振る舞いを最後にしたのは、一体いつだっただろうかと、楡崎は想いをめぐらせた。
「じゃあ、今晩は、日本の行事を堪能しておかないとねぇ？」
櫻子が、茶目っ気たっぷりの瞳で、楡崎を覗き込んだ。
「全くだ。」
楡崎が、眉を上げて、瞼を閉じた。
しんしんと雪が降る晦日に、除夜の鐘が響き渡った。

【楡崎蓮二】編（9）　告白（上）

楡崎と約束をした終末。

櫻子は、帝国ホテルの前で彼と待ち合わせていた。街灯が灯り始めた黄昏の時刻の空は、夕焼けが忘れていった黄色と朱色に、夜の群青が混じって、幻想的な様子だった。

雪がちらついていたので、白い手袋をはめた手で、紅い傘を差している。

今日の櫻子は、首までフリルで覆われた、紅いワンピースドレスを着ていて、控えめな小粒の真珠の首飾りをしている。

そして、その上から、羅紗（ウール）の白いコートを羽織っていた。

顔も綺麗に白粉をはたいて、服と同じ真紅の口紅をさしている。

髪は、前髪を七・三に分けて横に流し、熱したコテで大きなウェーブをつけていた。その髪を耳を隠すようにゆったりと後ろでまとめて、ごく低い位置に髷（シニヨン）を作っている。これは、「耳隠し」と呼ばれる、当時流行していた髪型である。

寒さのせいで、頬も少し紅くしていた。純粋な日本人よりもやや長くて、太いまつげに縁取られた瞳で遠くを見ている姿を、過ぎ去った男達が時々、振り返って見ている。

約束していた時刻が近づいてきた頃、櫻子が顔を向けていた反対側から、声がかかった。

「おや、椿の精が帝都にやってきたのかと思いましたよ……。」

振り返ると、皮の手袋をはめて、黒い傘を差した人物が居た。臭い台詞を、女性に向かって堂々を言える者は、櫻子の記憶には一人しか居ない。

「おまたせしましたな、櫻子さん。」

背広に、蘇芳色のタイを締めて、黒の山高帽を被った、楡崎だった。

「まあ、楡崎さん、お久しぶり。」

そう言って振り返った櫻子を見て、楡崎は少しびっくりした。
綺麗になっている。
二ヶ月ぶりに見たせいなのか、それとも、醒めるような真紅の服と口紅のせいなのか……。
それにしても、毎回思うことだが、彼女はどうして洋装の時は、いつも顎まで襟があるような服を着るのだろうか。鎖骨が綺麗な人なので、襟ぐりの大きい服を着た方が似合う気がする。
と、いうよりも、このままだと、やや重たげな彼女の胸の膨らみに視線が移ってしまうのだ。首筋すらも全く肌を見せない事が、かえって禁欲的である。
「……蓮一、と呼んで下さいとお願いしたでしょう?」
不満そうな顔をした楡崎を、櫻子は、恥ずかしそうに上目遣いで見る。名前で呼ぶのが照れくさくて、まだ一度も、蓮一さん、とは呼べないでいた。
「こんなに深々と雪が降っている夕方です。もし、先に着いたら、中に入って待っていて下さい、と言っておいたのに。」
「ええ、忘れてないわ。でも、雪もひどくないから、待っていようと思って。」
「冷えていませんか?」
「大丈夫よ……お誕生日、おめでとう。」
櫻子は、紅い紙に包まれた、小さな細長い箱を楡崎に手渡した。
「俺にですか?」
楡崎にとっては、全く思っても見なかった出来事のようで、少し眼を見開いた。
「だって、あなたのお誕生日じゃないの。」
櫻子は、首をかしげた。
「あなたと食事するきっかけが欲しかっただけで、俺の誕生日を祝ってもらおうとは考えてなかった。」
「……よくわかんないわ。でも、あまり中身には、期待しないで頂戴ね?」

櫻子は、昼間に屋敷を出て、百貨店で楡崎への誕生日の贈り物を選んでから、この待ち合わせ場所にやって来た。

男性に対して、何を選べばいいのか、良くわからなかったので、きっと仕事でも入用になるであろう品の、上質な物を贈ることにした。彼なら、きっと何でも喜んでくれるだろうが、本当に気に入って、使ってもらえれば、嬉しいと思った。

「そうか、気を使わせてすまなかったですね。そこまで頭が回らなかった。」

楡崎は、それを大事にそうに背広の内側に入れてから、ありがとう、と言った。少し、耳元を紅く染めている。

「いいえ、気に入ってもらえたら嬉しいんだけど……入りましょうか？」

「参りましょう。」

楡崎が差し出した手を受け取った、その時だった。

遠くの方で、大きな爆発音が聞こえた。

人の悲鳴と騒音の中に、銃声のような音も混じっている。

「大変だ、爆弾だ！」

「不審者が集会に押し入って、爆発させた！」

大勢の人が、建物の中から逃げてきて、二人のいる方角へ、走ってくる。

建物の窓辺りからは、黒煙が上がっていた。

楡崎は、櫻子の腕を引いて、自分の胸元に抱き寄せた。

「何だ？」

櫻子にも、一体何が起こっているのか、検討がつかなかった。

しかし、建物から出てきた黒服の男達が、逃げ遅れた人々を、捕まえては短刀で傷をつけていた。

ある男性も、犯人の一人に捕まり、背中を刺されて、櫻子達の足元に倒れた。

刺した黒服の男が、櫻子の方を見る。

「あんた見覚えがあるな。……そうだ、二階堂財閥のお嬢さんだ。

いい所にいる。あんたも標的の一人だ。」
そうして、櫻子の方へ、血で汚れた短刀を突きつける。
「二階堂財閥にも、苦しみを与えなくてはいけないからな。あんたのような、綺麗なお嬢さんが傷つくところをみたら、理事長殿はさぞ悲しがるだろう。」
「おまえたち、何ものなんだ?」
「あんたに用はないさ。楡崎商会の若旦那。俺達は、標的の娘や息子を苦しめるように、と言われているんでね。そこのお嬢さんに危害を加えれば、褒められるのさ。」
そして、短剣の切っ先を櫻子の方に向ける。
「馬鹿な真似はよさないか!」
楡崎が、犯人に掴みかかって、その腕をひねり上げようとする。
その弾みで、山高帽が足元に落ちた。
「この野郎、邪魔をするな!」
しかし、犯人よりも楡崎の方が身長が高く、体も大きいので、逃れられない。
「くそう!」
その時、別の方から、弾ける様な銃声が聞こえて、楡崎の方を掠めた。
「うっ……。」
その隙に、犯人が、楡崎の右腕に刀を突き刺した。
「俺達の邪魔をすると、こうなるんだ!その腕を切り落として、女の目の前で殺してやる。」
勢い良く引き抜くと、すさまじい鮮血が飛び散った。しかし、犯人は、更に、もう一度刀を突きつける。
しかし、楡崎は逃げずに、その刀の動きを受け止めた。
「……おまえ、今、自分から、腕を刺される為に突き出したのか?」
全く怯まない楡崎に、犯人の方がたじろいだ。
「あんたに俺は、殺せないさ。」

髪や顔まで、自分の血で真っ赤に染めたまま楡崎が、犯人に対して悠然と言った。
唇は不敵に微笑んでいる。
「俺の名を知っているんだろう?」
しかし、その眼はまるで、獲物を逃がさんとする猛獣のように威圧感に溢れていた。
それに畏怖の念を覚えた。
「東の果てにおかしな奴がいる、と世界中の貿易商から恐れられている男だ。一度死んで地獄の底から蘇った男だから、この世の恐れというものを知らないんだ、と噂されているのさ。事実、刀や銃ぐらいの脅しには、びくともしない肝に育ってしまってね。」
そのまま睨みつけられていれば、石化してしまうのでは、と男は思った。
「ひいいい、化け物。」
一歩も引かない楡崎に、恐怖を感じ、男は刀を引いて、逃げ出そうとした。
「逃がすか!」
楡崎は、男の背中を、思いっきり蹴飛ばした。道路に叩きつけられた男は、ぐったりと動かなくなった。
その瞬間、別の方から銃弾が飛んできて、今度は腹部を突き抜けた。
「楡崎さんっ!」
がっくりと、体を二つに折り、崩れ落ちる。
その絶望的な光景に、櫻子は、まるで無声映画でも見ているような気分になった。
楡崎が、自分の腹部を押さえた手を確かめると、手のひらに恐ろしい量の血がついていた。
腕からも腹部からとめどなく流れ出る血液の量に、驚愕する。
周囲の人が、「人が撃たれた!」と叫び、助けを求めて騒ぐ声がする。

櫻子は、楡崎の傍に座り込んだ。そして、彼の頭を自分の膝に乗せて、血でぐっしょりと濡れた手を握る。

「……櫻子さん、怪我はないか？」

「私は、大丈夫よ、ありがとう。楡崎さん、しっかりして。」

良かった、と息も絶え絶えな状態で、微笑んだ。

「大丈夫だ。」

嘘だった。

内臓を銃弾を通過していた。

もう、持たないかも知れない。

（……死ぬのか？）

べっとりとした血で紅く染まった手のひらを見ながら、覚悟した。

もしそうなら、今この場でやらなくてはいけないことが、楡崎にはある。

櫻子に、伝えなければいけない本当のことが。

「……礼を言うのは、俺の方なんだ、櫻子さん。あなたは、吉野で……俺を救ってくれた。」

「……吉野？」

「十二年前…櫻の季節に、労咳で死に掛けていた少年を……あなたは助けてくれたろう？」

「少年？」

櫻子は、楡崎の突然の告白に、戸惑って視線を泳がせながらも、何とか彼の為に思い出そうと、記憶を辿り始めた。

「十二年前の、吉野の山里……？」

考えられるのは、その時期にまだ母親は生きていたという事だ。

そして、その療養の為に、頻繁に吉野には来ていた。特に、春は。

「あ……。」

何とか記憶をこじ開けようと、もがいていると、思い当たる節があった。

「まさか……、あの人なの、あなた…？」

確かめるような櫻子の瞳に、満足したように楡崎がうなづいた。

◆◇◆◇

――十二年前　吉野

十六歳の楡崎少年は、大阪の米問屋で昼夜こき使われていた。旦那は、下働きを人とも思っていないようで、米を売る仕事に携わっていても、米どころかまともな食事を食べさせてもらった記憶すらなかった。

しかし、ある朝、皆の前で喀血してしまった。

労咳である。

罹患者の多さから、国民病として呼ばれた明治時代よりも前から、著名人の多くも命を落としたといわれる、恐ろしい肺の病。

そして、それが人に忌み嫌われる理由は、空気感染によって広がることにある。

ゆえに、楡崎は、仕事場を追われた。

しかし、金のない楡崎は病院に行く事が出来ない。それどころか、今晩泊まるあてすらない。

（このまま、俺は死ぬのか？）

生まれ落ちたその時から、他の遊郭生まれの子らと同じように、溝や道に落ちている食べ物を拾ったり、訪れる客達に媚を売って、情けをかけてもらう生活。

物心ついた時には、神戸に売られ、そこでは最低限の生活は保障されていたが、働き詰めの生活だった。おまけに、先輩共が、失敗を後輩に押し付けるので、その度に、理不尽な罰を受けるのは屈辱的だった。

（十六年間、耐えても最後は病になるとは、天も不平等に人間を

造りなさったな…。）

しかし、どうせ死ぬなら、最後に自分が見たい景色の所で死にたかった。

（今の時期の吉野の山は、さぞ夢のようだろうなぁ。）

奈良の吉野山は、平安時代から有名な櫻の名所である。その数は約三万本にも及ぶという。

これらの櫻は、４月初旬から末にかけて、山下から順に山上へと開花してゆき、山全体が、桜色になる。

楡崎は、こうして大阪から吉野まで、行く事にした。労咳を病んだ者が、そのような大移動をする事自体、死出の旅のようなものである。しかし、楡崎は、なんとかたどり着いた。

たどり着いたは良いが、疲れきってしまい、とある櫻の大木の根元に寝転がった。ごほごほと止まない咳が続いたが、山の奥には人もいない為、楡崎を忌み嫌う者もなかった。

時々、咳と一緒に血を吐く事もあるが、櫻がその花びらをはらはらと散らせるだけで、あたりは静寂である。

櫻を見上げていると、舞い落ちる花弁が、自分の顔や体に積もっていく。

その美しさに、まるで極楽浄土のようだ、と思った。

このように美しい世界が、この世にもある、と。

ここで誰にも見つからずに、桜の花弁に覆われながらひっそりと死ねば、朽ちた体はやがてこの櫻の養分になるのだろう。

そうすれば、それを糧にして、来年も、美しい花弁を咲かせるのであろうか。

楡崎は、急に安らかな気分になって、瞳を閉じた。閉じながら、自分の体が朽ちて、この根に吸われて、幹や枝を通って、最後には花弁になるところを想像した。

（それなら、悪くないかもしれん。）

この櫻と一体化する事ができたら、意味もなかったような自分のつまらない人生が、とても価値があるように思えてきた。

その時だった。

草むらで、かさり、と葉のすれる音がした。

血の臭いをかぎつけて、獣が近づいてきたのだと思った。飛び起きようとしたが、既に疲れきった体は動かない。狼か、熊か、いずれにしても、その死に方は、想像してはいなかった。

――しかし、現れたのは、紅と橙の鞠だった。

それを追いかけて、続いて少女が現れた。桜色の上質な着物に身を包み、淡い化粧も施されている様子から、どこかの裕福な家のお嬢様の様である。年は十歳くらいだった。

しかし、顔は日本人形と言うよりは、西洋渡りの人形のように、彫が深い顔立ちをしていた。

「お兄ちゃん、どうしたの?」

女の子が、ゆっくりと楡崎に近づく。

「死んでるの?」

座って、顔を覗き込まれた。

その時に、ごほごほと咳が出てきた。

「大丈夫?」

「……お兄ちゃんは、肺の病気なんだ。逃げないと感染(うつ)してしまうよ。だから、きみは、早く戻りなさい。」

楡崎は、女の子を怖がらせないように、優しく言った。しかし、逃げずに、首を傾げている。

「咳が止まらない病気なの、お兄ちゃん?」

「そうだよ。だから、お嬢ちゃんとは一緒に遊んであげられないんだ。」

とても綺麗な鞠を持っているのに、ごめんね、と言う。

「ううん。今は、父(とお)さまが遊んでくれているからいいのよ。戻らなくちゃ。」

「そう、よかったね。」

「そのびょうき知ってるよ。わたしのおばあちゃんも、そうだったの。」

どうやら、彼女の身内も自分と同じ病であったらしい。
「でも、おばあちゃんは、仏蘭西に居るから、わたしはお見舞いに行けなかったのよ。」
「あなたのお婆様は、仏蘭西の人なのか？」
そうよ、と女の子は笑った。
「とても怖い病気だって、父様が言ってたわ。」
「そうだよ、とても怖い病気なんだ。」
だから、はやく、行きなさい、と促す。
「おにいちゃんは、おうちに帰らないの？」
女の子は、小さな手で、楡崎の服を掴んだ。
「お兄ちゃんには、お家がないんだよ。」
「お家がないの？」
「おうちを探すよりも、いまは櫻が見たいんだ。」
「櫻を見に来たの？」
「櫻は近くに寄らないと、匂いがわからないだろう？」
「だから、寝転んでるの？」
「そうだよ、だから、お兄ちゃんにかまわずに、お帰り。いい子だから。」
そして、痰や血で汚れた自分の手のひらで彼女の着物を汚さないように、手の甲で、彼女を誘って、戻るように促す。
また、咳き込んでしまった。ごほごほ、と醜い音がする。
「お兄ちゃん苦しそうね？」
「……うん？」
「わたし、すぐに戻ってくるよ。」
跳ねるように歩き出した女の子が、ちょっと待っててね、と自分の方に振り返った。
――ああ、と、手を弱弱しく上げて返事をした楡崎には、もう自分の意識を保つだけの力は残っていなかった。

【楡崎蓮二】編（１０）　告白（下）

再び、眼を開けると、楡崎は白いベットの上に居た。
光の当たるほうを見ると、窓があり、その奥には、櫻が風に吹かれて、はらはらと花弁を舞い散らしている。
（俺は、死んだのか？）
死んだにしては、窓とか、白い壁とか、やけに生前に見覚えのある光景ばかりである。
その時、ギイ、と扉が開けられるような音がした。
「あら、気づいたんだね、僕。」
白い服に身を包んだ、医者だった。
「あの……ここは病院ですか？」
「そうだよ、死ぬところだった。でも、生命力が強いんだね。もう峠は過ぎたよ。安心していい。」
「俺、治るんですか？」
「うん。」
優しい顔をした医者は、楡崎の前の椅子に腰掛けた。
「どれ、目覚めたばかりで、どこか辛いところはないかい？飲みたいものや、食べたいものは？」
「いえ、今は、特に。」
「そうかい。また、何かあれば看護婦を呼ぶんだよ。」
「ありがとうございます。」
「しかし、君、労咳をこじらせていたのに、どうして外にいたんだい？うん、言いたくなければ別に良いんだ。君の体や服の状態から、ある程度は予想がついている。」
優しく、穏やかに、医者が尋ねた。
「労咳で、仕事場を追い出されたので、死ぬ前に吉野の櫻を見たいと思って……。」
「そうかい。綺麗だったろう」

「……はい。」
「また、来年も見れるさ。君をここへ運んで下さった方に感謝するんだね。治療費の事も心配いらないよ。その方が十分なお金を置いていかれたからね。」
「え?」
そういえば、病院に運ばれたという事は、助けてくれた方がいるという事である。
「誰が、僕を助けてくださったんです?」
「女の子が、山で君を見つけてね、その方が連れて来て下さったんですよ。」
「……櫻色の着物を着て、赤と橙の鞠を持った?」
「そうだよ。そのお嬢さんのお父様が、君を発見なさってね。君を担いで来られた。」
労咳の自分を担いで、山を降りた?確か、あの少女の身なりは、それなりに身分も資産もありそうな様子だった。そんな方が、自分をこの病院まで連れて来てくださったとは。
「名前はなんと仰るのですか?」
「さあ、名乗らずに行ってしまわれたのでね。僕は、この病院に来て間もないし、看護婦達も知らない風だったよ。」
「……そうですか。」
「どうやら別荘がこちらにあるらしくて、櫻を見にいらしていたみたいなんだけど、かわいそうに、急に奥様がお亡くなりになって、本宅に戻られたんだ。君を往診中に使用人の方が呼びにいらしてね。慌てて、帰られたんだ。」
そうそう、これを忘れていた、と医者が、一旦部屋をでて、何かを取りに戻った。
再び、部屋に入ってきたときには、花瓶に入った櫻の枝があった。
「あのお嬢さんが、君に渡して欲しい、と言われたんですよ。獣か、風に折られた枝を見つけたので母親に渡すつもりだったが、あなたにあげて欲しいとね。」

「俺に…？」

「ええ、彼女の母上は病気で床から出られずに、外の櫻を部屋の中からしか見られないので、持ってかえって渡そうとしていたんですって。でも、君も外には出られないだろうから、元気になるまで、この枝の櫻の香りで我慢して欲しい、って仰っていましたよ。」

そういえば、あの女の子に、「櫻を見に来た」と言った事を思い出した。

病院に入院したら、櫻の近くに寄れなくなる、と思ったんだろう。だから、この枝を自分に置いてかえったに違いない。

（優しい子……。）

楡崎は、その枝を受け取ると、末端に沢山ついている花に顔を近づけて匂いを吸った。

「先生、実は僕、櫻の根元で死のうと思っていたんです。」

医者は、顔色を変えることもなく、優しげな瞳で楡崎を見ている。

「生きていたけれど、あの世界は僕にとっては地獄だった。だから、あの満開の桜の中で死ねたら、人生の心残りとか、そんなのものも忘れても大丈夫そうに思えたんです。」

「だから、吉野に来たのですか……。」

「はい。でも、あの女の子が気づいてくれたおかげで、僕は病院（ここ）に来れて、病気も治ったおかげで、死なずに済んだ。」

楡崎は、眼にかかる程伸びすぎた、うっとおしい前髪を後ろへ撫で付けた。

その手を取って、医者は、力強い瞳で楡崎に、こう訴えた。

「いいえ、君は一度、死んだのです。」

「……え？」

「君を最初見たとき、正直、死体なのか患者なのか見分けがつきませんでした。それほど、腐臭と汚れと、血にまみれていたんです。顔も真っ黒でした。普通の人なら、怖がって、近づこうとさえしなかったでしょう。」

「……。」

「君は何も語りませんでしたが、僕は、あなたが並みの人にとっては想像できないほど、壮絶な環境の中で生きてきたことは予想できました。でも、今の君は、布と湯で汚れも取り払われました。病も治った。君を支配していた人々も、皮肉にも、病のおかげで今は居ない。だから、これから、新しい人生を作ればいいのです。」

……ここは、あなたにとっては、二回目の娑婆なんですよ、と医者は微笑んだ。

「二回目の……？」

「君の新しい、自由な人生です。十歳の女の子でさえ、死体とも見分けがつかない君を気にかけたのです。これからも、君は、まだまだ良い人に沢山めぐり合えますよ。」

医者はそう言って、声をあげることなく静かに涙を流す少年の為に、自分の清潔なハンカチを差し出した。

◆◇◆◇

その後、楡崎は、神戸へ戻って、新しい人生を生きることにした。医者の言うとおり、自分の人生は一度死んだのだ。

そして、あの名前もわからない、小さな恩人に、いつかお礼が言いたいと思った。

記憶にある手がかりは、十二年前の春に、女の子の母親が亡くなっているという事、そして、その女の子の祖母が仏蘭西人であったという事だ。

神戸は有名な貿易港だ。外国との接点も多い。しかし、あの混血の少女は、あの身なりと、吉野に別荘を持っているという話から推測するに、関西の上流社会の人々の可能性が高い。

そのような人々が出入りする場所に行かなくては、手がかりを得られそうにない。その為には、自分がその場所に辿りつけられるような人物にならなくてはいけない。

だから、楡崎は、より仕事に打ち込んだ。打ち込みながら、恩人の手がかりを集めようとした。

行き詰る事があっても、自分は「一度死んだのだ」と思えば、新しい人生である「今」に対する、ためらいや迷いは、嘘のように無くなっていった。そして、勇気を持って、新しい事に挑戦できた。

そうして、現在までたどり着いた楡崎は、富豪や華族の集まる夜会に頻繁に出かけるようになった。

しかし、なかなか、手がかりの条件に合った少女にたどり着けなかった。

それもそのはずである。最初の楡崎の見込みとは違い、櫻子の本宅は関西ではなく帝都にあったのだから。

終に、自分の会社を帝都に移した後、転機が訪れるようになる。ある日、自分の部下が、昨晩、浅草を歩いていた時に、無頼漢に絡まれている淑女二人を、咄嗟に助けられなかった事を、猛烈に後悔していた。

二人とも、歩き方や雰囲気から、何処かのお嬢様のように見えて、もし、自分が助ける事が出来たら、いっぺんにその二人と知り合う事が出来たのに、と、こぼしていた。

じゃあ、その女性は、他の誰かが助けなさったのか、と楡崎が聞くと、

「いや、強引に男が女性の手を引いたので、もう一人の方の女性が怒って、返り討ちになさったんだよ。」

と、意外な答えを返した。

手に持っていた扇子で、男の小手を叩いて、「いい加減にしなさい！」と一喝したという。その気迫と、扇子を打ち込んだ素早い動きに恐れをなして、只者ではないと感じたのか、男達は退散したそうだ。

あれは胸がすかっとして、凄かったな、としみじみ話すので、そんなに色気のない、男勝りな女性だったのか、と聞いたら、

「いや、それが、着物を着ていたけれども、洋装も似合うような、

彫の深い顔に、長い睫毛が印象的な女性でね。瞳は黒かったけど、外国の血でも混ざっておられるんじゃないだろうか。」

と、話した。

それで、その浅草の一件に興味を持って、あちこちの夜会で話していたところ、それが二階堂財閥の令嬢、櫻子が起こした事だと噂されていた。

それで、ある夜会に、その令嬢も出席されるというので、その場に楡崎もやってきた。

そして、その顔を見て、「ああ、この人だ」と思った。

十二年という月日が経っても、記憶に残る少女の面影の残る、その人。

周囲に聞けば、母親と祖母の件も、当てはまった。そして、二階堂家で夜会が開かれるというので、何とかしてツテを辿って、紹介状を手に入れた。

あの日に、告白するつもりだった。

あなたが、お見舞いに桜の枝を下さった少年です、と。

最初見た時、そして、夜会でも、まるで男子学生の詰襟のように顎まで隠れた、色気に欠けた洋装を着ていた彼女を、恩人としては惚れていたが、女としては欲していなかった。

だが、事件の時、無頼漢に啖呵を切っていくのを見て、きっと彼女はこれからも、こうして誰かの為に、自分の身を返りみないで進んで行くのだと思った。

そして、かつて自分にそうしたように、優しく傍によって、優雅に微笑むのだと。

◆◇◆◇

「……その時に、俺は、あなたを守っていきたいと思った。」

櫻子からもらった二度目の人生を、そのために生きたいと思った。

「覚えているわ、あなたの事は……。母が亡くなったので慌しくて、京都になかなか戻れなかったのよ。お見舞いに行けずにごめんなさいね。」

戻ってきたときには、全快した彼は、病院を去っていた。

「俺が、今まであの時のお礼を言えなかったのは……もう、夜会の日から、あなたの事が好きだったからだ。……あの時の少年だと分かれば、優しいあなたは、俺に情けをかけてくれるかも知れないから……でも、ただの貿易商の楡崎として、あなたと接したかった。」

櫻子が気がつかないなら、このまま初めて会った男として、他の男達と同じ立場で、堂々と求婚を申し込みたかった。

「……櫻子さん、櫻の枝を……俺を助けてくれてありがとう……。」

「いいの。あなたが元気になったとわかって、嬉しいわ。お願いだから、もう話さないで。体に障るわ！」

楡崎は、血を流しすぎて、ショック症状を起こしかけていた。体が、がくがくと震えている。

瀕死の楡崎の痛みが、どこも傷を負っていない自分にも流れてくるような気がして、櫻子も体が震えた。

そして、妙月が「人は、いつ何がどうなるかわかんからなぁ。」と行った時に、楡崎が死にそうにない、と考えた事を、後悔した。

人は、突然、死ぬ。

その怖さを初めて知った櫻子は、涙をぽろぽろと落とした。

透明なしずくの玉が、楡崎の頬に落ちては、潰れる。

母が亡くなった時すら、零れなかったもの。

「櫻子さん、泣いているのか……俺の為に？」

嬉しいなぁ……と言って、楡崎が眼を閉じた。

「ま、まって……！もうすぐ、病院に運んでもらえるから。駄目、気を確かに持って！」

そう言って、楡崎の手をより強く握り締める。

「眼を開けて……待って！……蓮一さんの事、私は、とても愛
しているの！」
そうして、彼の血がついた手で自分の顔を覆って、泣き崩れた。

内臓と肩をえぐられ、腕の肉を切られたことによる大量出血で、生死の境を彷徨った楡崎が、眼を覚ましたのは事件から三週間後の事だった。

「気が疲れましたか、社長」

天井をぼんやりと見て、声のした様子を伺う為に首を動かす。

「新堂……？」

椅子に座って、腕と足を組み、厳しい顔でこちらを見ている顔がある。

「あなたは大馬鹿ものですか？」

ふつふつとこみ上げて来る怒りを抑えて、話し出す。

「どうして、私の忠告を聞いてくださらなかったのです。私を巧みに巻いてまで、あの方と二人でいる事に危険だとは思わなかったのですか？」

「……悪かった。」

名のある富豪の子女が、次々と血祭りに上げられていたのである。新堂が心配するのも当然だ。

「犯人は、どうなったんだ？あの事件のけが人は？」

「自分の身より、他人の心配ですか？」

眉を顰めた秘書の顔を見て、楡崎は不覚にも笑いそうになった。どうやら、櫻子の性格が、少しうつってしまったらしい。

「主犯は、政治家の集会を爆破した時に一緒に自決しましたよ。」

「何だって？」

「あの事件の時に、周囲に紙片（ちらし）が撒かれたので、犯人達の目的も明らかになりました。」

楡崎の脳裏に、誰とも知らぬ男が、体に爆弾をくくりつけ、往来に紙片を撒いた後で、集会に使われていた部屋を爆破する様子が浮かんだ。

「山の麓にとある小さな村があり、その山から金属が取れた為に開発が行われたそうなんですが、
鉱毒の為に住民は殆ど死に耐えたそうです。」
その開発を手がけたのが、先に殺された堂島金属であったらしい。
「鉱毒と村の人の死の因果関係は、厳密にははっきり分からない。にも関わらず、他の人に知れたら、他の山の鉱山採掘も、全て中止になってしまうかもしれない。それに被害者には、多額な賠償がかかるでしょう?ですから、鉱山開発に関わった関係者は事件を黙視する事にしたんです。」
「じゃあ、主犯はその村の生き残りか?」
「ええ、そうなりますね。名前は堇谷祐磨、という男だそうです。」
「そうか……。」
楡崎は、視線を落とした。
そして、上体をベッドから起こそうとする。
その時に、体のある部分に違和感を覚えた。
「ちょっと、社長、まだ起き上がるのは、無理ですよ。」
「新堂、きみ、医者から何か聞いているか?」
楡崎は、自分の右腕に視線をやった。
いくら力を入れても、びくともしない、棒のようなそれを。
「……切断は免れました。しかし……。」
「一生、動かないのか?」
「いえ、訓練しだいだと。」
深刻な顔をした新堂とは異なり、そうか、と楡崎は、にやりと笑った。
「治らんかも知れんが、治る可能性もある、と言うことだろう。それならいい。」
「でも、利き手ですよ。仕事にも不便が出るでしょう。」
「そういう時の場合に、俺の右腕はいつも居るのだろう。」
なあ、新堂?と楡崎が不敵に笑った。

新堂は、泣き笑いしたいような気持ちになった。

「俺だけじゃありませんよ。他の人も、毎日代わる代わる見舞いに来ていましたよ。社長はまだ何も食べれない、と伝えたにも関わらず果物やら菓子やら持ってくるし、……俺がどうにかしなければ、この病室は花屋でも開店できそうな勢いでしたよ。いろんな花の匂いが混じりすぎるのも、かえって、気分が悪くなるでしょう?」

「ははは。」

「あと、隙あらば看護婦にちょっかいをかけようとするので、それも成敗しておきました。」

楡崎商会の恥になりますから、と律儀に言った。社長が若いということと、海外で仕事を開拓していく貿易商社と言う性質柄、若々しく活発的な人材が多かった。

「櫻子さんも、毎日お見舞いにいらっしゃっていましたよ。」

「本当か、今日も来てくれるだろうか?」

「いつも仕事の帰りに、同じ時刻にいらっしゃるので、そろそろ来られるのではないかと……。」

楡崎が、窓の外を見やると、女性が、病院に入ろうとするのが見えた。白い長袖の洋装を着て、日傘を差している。その陰から、見覚えのある顔がちらりと見えた。

「あれ、彼女じゃないか?おい、お嬢さん!」

不意に上から声をかけられて、少しびっくりした様子で見上げる。

「あっ!」

そして、急いで、病院の中に入っていった。

「楡崎さん、良かったわ、気がついたの?」

病室に飛び込んだ櫻子は、思わす楡崎に飛びつこうとして、彼があちこち体を痛めている事を思い出して、やめた。

「新堂さんも、今日もお疲れ様。あなた、貯古齢糖(チョコレート)のケーキはお好きだったかしら?」

小さな袋を新堂に渡す。

「ええ、ありがとうございます。」

「なんだ、それは新堂の分か？」
「だって、あなた何も食べれなかったじゃないの。」
「それはそうだが……。」
「知らないの？新堂さん、私の兄様とは逆で、洋菓子がとってもお好きなのよ。だから、練習台と実験台にもなってくださっているの。」
「何の…？」
「私が美味しい洋菓子を作れるように、食べたものの感想を丁寧に教えてくださるの。」
「……。」
つまり、あの袋の中身は、櫻子の手作りの物だという事になる。
俺の意識が死の淵でさまよっている間に、部下と（未来の）婚約者が仲良くなりかけている。
「新堂？」
「はい？」
呼ばれた本人は、うれしそうに病室で、お茶の準備を始めている。
いつまでそこに居るんだ、とっとと出て行け、と楡崎に追い出された。
理不尽だ、と新堂は思った。
「え、ど、どうして……？」
「あいつは、邪魔だ、いらん。」
櫻子は、楡崎に促されて、椅子に腰を掛けた。
「しまった、目覚めたらあいつに聞かなければいけない事があったんだった。」
おい、新堂、ともう一度声をかけるが、既に去った後のようで、戻ってくる気配は無い。
「どうしたの？」
「櫻子さんが俺の誕生日に、何かくれたじゃないか。あの中身が気になっていてな。今、あなたの前で開けても大丈夫だろうか？」
「あ……。」

櫻子は、はっと気がついて、気まずそうに視線を泳がせた。
「俺の血まみれの背広は、新堂が処分してしまったろうが、中身は全部取っておいてくれるだろう。その中にあるはずだ。撃たれたのは胸じゃないから、包装は血を吸ってしまったかもしれないが、中身に傷はついてはいないはずだ。」
「あれは……その…一旦、私に返してもらえるかしら?」
「ん、どうしてだ?俺にくれたんだろう……?」
「その、えっと中身が、思い返すとちょっとあんまり良くなかったから、改めて渡したいなって。」
明らかに動揺している。
「俺は別に、中身が何たるかはそれ程、気にしていないぞ?もらった、という事実の方が大事だからな。で、今それは、どこなんだ?新堂っ!」
何ですか、と新堂が再び部屋にやって来た。
「俺がお嬢さんからもらった贈り物だ。背広の内側に入れていたはずなんだが、今何処にある?」
「……ああ、そこの机の中に入れておきましたよ。」
少し、血に汚れてしまいましたが、と言って、机の引き出しを開けて、中身を取る。
「あああ、駄目!」
それを櫻子が、奪い取ろうとする。
「なんでだ、お嬢さん。新堂、俺に渡せ。」
戸惑っている新堂から、櫻子が包みを奪おうとする。
その時、腕が楡崎の体に触れた。
「痛っ……!」
「え?あ、ごめんな……。」
その隙に、楡崎は奪い返した。
ちょろいもんだ。
「騙したのねっ?」
櫻子を無視して、楡崎は包みを開ける。櫻子は、そっぽを向いて、

知らんふりをしていた。
新堂は、どうすれば良いか、戸惑っている。
「これは……。」
赤い包みを開くと、中から出てきたのは、万年筆だった。
瑞西（スイス）製の高級な品だ。それは、重いわけではないのに、ずっしりと重みを感じるような、上質さに溢れていた。
「ありがとう……良い贈り物じゃないか。なのに、何で取り返そうとしたんだ。」
「だって、あなた、利き手を怪我してしまったじゃないの。」
「あっ……。」
「お医者様が、治る見込みはその後の訓練しだいだから、今はなんとも言えないって。」
「……。」
楡崎は、自分とは反対方向を向いたままの櫻子の手を取った。
「大丈夫さ。利き手が駄目なら、左手でも、すぐに書ける様になる。」
「えっ……？」
「ふん、競争しようじゃないか。あなたの髪が伸びるのと、どっちが早いか。」
櫻子は、その言葉を聞いて、楡崎に飛びついた。
彼は、まだ痛みの残る体に加えられた衝撃に、悲鳴を上げそうになったが、我慢して、彼女のうなじに顔をよせて、柔らかな匂いを吸い込んだ。
「……二ヶ月半も我慢したんだ。今度は、無茶苦茶に可愛がってやる。」
「いっ……？」
「利き手が使えなくても大丈夫だ。やり方はいくらでもある。」
「いやっ！」
櫻子は、それを聞いて、楡崎の体を押しやって、逃れようとした。
しかし、楡崎の体はびくともせず、捕まえられたままだった。

「ここは、病院！あなた、病人！」
「もちろん、退院してからの話だが？」
「あなた、新堂さんも傍にいるのに、なんてこと言うのよ。」
櫻子は、ちらりと後ろの新堂を見る。嫌だ。思いっきり聞かれているのに。
しかし、新堂は、真っ赤になっている櫻子とは違って、表情一つ変えない。
新堂は、一生櫻子にいう事はないだろう。まさか、彼女のいない場所で、自分の上司がどれだけ変態発言をしているか、などとは。

◆◇◆◇

「まあ、素敵な街！あああ、私、この街に恋しそう。」
つばの大きい白い帽子を、風で飛ばないように押さえながら、櫻子が言った。
「そんなに気にいったのか？」
何処か、遠くの方で鳴らされた鐘の響き、聞こえた。
櫻子は、船上から海の上に広がる街並みに声をあげた。
巴里の春は、やわらかい日差しの中で、賑わっていた。
「いい街だろう」
「とても、いいわ。日本とは全く違うのね。」
隣の楡崎は、手に葡萄酒のグラスを持って、興奮している櫻子を見守るように笑っている。
「俺は一度死んで、あなたに助けられ、そして今度もまた、瀕死の状態なのに生き返った。ははは、また新しい悪い噂を作られそうだ。」
「そんなの、きっとやっかみよ。いいじゃないの、気にしなければ。」
そうだな、と楡崎は考えた。
「それでなくても、巴里の社交場に出席する時は、いつも一人だ

ったから、冷たい視線を送られていたからな。」
外国の社交場は、妻などの女性をともって行く習慣がある。
「でも、今回は違うからな。あなたを巴里の淑女（マドモアゼル）に負けないくらいに飾り立てて、人前に出してやろう。」
「そんな、飾り立てるなんて、私の趣味じゃないわ？」
「ははは、知ってたさ。冗談だ。」
楡崎は、ゆっくりと赤黒い濃厚な葡萄酒を口に含んだ。鼻腔を抜ける豊満な香りに恍惚とする。
「やっぱり、本場の味はいい。これは何処の酒だ？ぜひ輸入したい。」
「じゃあ、日本で売れそうな食べ物を沢山見つけて、帰りましょう。」
「……あなた、本当に食べ物の事を考えるのが好きだな。」
「ほうっといて！」
すまない、と笑って、機嫌を悪くした彼女の肩に手を置く。
「巴里は良いぞ。美味しい食べ物が沢山ある。あなたが、まだ見たこともないような、洋菓子もあるだろう。」
「いいわね、仏蘭西って。」
「あと、服もたくさん、買ってやろう。あなたは地味好み過ぎるんだ。パリの洒落た服を着て、上手いものを食べて、日本に帰ろう。」
「でも、これ旅行じゃないわ。仕事で来てるのよ。」
「もちろん、仕事が終わった後でさ。それでは、文句は無いだろう？」
楡崎が、櫻子を抱き寄せた。
「それなら、楽しみだわ。」
到着を告げるような、船の蒸気の音が、空に響いた。
【終】

【楡崎蓮二】編ＳＳ　猫ト御嬢様

「絶対、犬が良いわ。」
「いや、猫がだろう。世話が楽じゃないか。散歩も行かなくていいしな。」
「犬は、しつければ何でも言う事聞くのよ。番犬にもなるし、飼うなら犬の方がいいわ。」
楡崎と櫻子は、楡崎商会の仕事の為に、欧羅巴の長期出張に来ていた。今は巴里を拠点とし、部屋を借りて、しばらくそこに滞在している。
二人が言い争っているのは、他愛無いことである。
櫻子は、巴里の人々が、可愛い犬を連れて歩いているのを見て、自分も子犬を欲しくなった。
しかし、楡崎は、どうせ飼うなら、自分は犬よりも猫の方が好きだという。
「白くて、ふさふさした長い毛に、青い眼をした猫がいるだろう？あれが、いい。可愛いじゃないか。」
「犬にも、似たような毛色に瞳をした子は沢山いるわよ。」
「それに、猫は鼠を捕るだろう。この街はちょっと鼠が多いから、役に立つ。」
「鼠を取るなら、ぴったりの犬がいるわ。茶色に青銅色をした宝石みたいに綺麗な毛の、小さい犬がいるじゃないの。」
確かに、犬の品種の中には、ネズミ捕り用に開発された品種もある。櫻子も、なかなか譲らない。
「あの犬は、英國の犬だろう?仏蘭西なら、やっぱりあのモコモコした犬を連れて歩いたほうが、様になるんじゃないか?」
楡崎の言う、「モコモコした犬」とは、プードル犬のことである。この犬は、仏蘭西では昔から大変人気のある犬だった。
「じゃあ、その犬でも良いわ。」

櫻子が眼を輝かせた。

「猫も可愛い、って言っているだろう?……いいさ、今日、知り合いの家に届け物をする用事があるが、そこでは色んな種類の猫を飼っている。あなたも一緒に来て、猫と戯れてみてから決めれば良いさ。」

きっと、家に戻る頃には、猫が欲しくなっているはずさ、と楡崎が不敵に微笑んだ。

「いいわ、受けて立とうじゃないの。」

櫻子も、負けじと言い返した。

◆◇◆◇

”Bonjour(ボンジョール)! Mrs(ミセス) Antoine(アントワーヌ). Comment(コマン) allez-vous(タレヴ)? ”

(こんにちは、アントワーヌ婦人。お元気ですか?)

”Bonjour(ボンジョール)! Tr?s bien(トレビアン), Merci(メルシー) Et vous(エ ヴ), Renich(レンニチ)”

(よく来たわね、レンイチ!お久しぶりね。あなたは?)

アントワーヌ婦人は、楡崎の両頬に軽くキスをした。これは、仏蘭西式の挨拶である。

櫻子は、女学校で英語は習っていたが、仏蘭西の血は引いていても、言葉は使えない。

帝都から仏蘭西に来る途中の船の上で、楡崎が様々な外国語を巧みに操っているのをみると、改めて苦労して、努力してここまで上り詰めてきたのだと、しみじみと感じた。

しかし、その船の上でも、巴里に来てからも、外国語で話しかけられると、櫻子はどうして良いか分からず、ただニコニコと笑っているしかないのが、辛かった。

”Elle（イル） est－ce（エセ） que（ク） votre（ヴォル） nouvel（ノヴェル） amant（アマン） est（テス）?”

（あら、この方は、あなたの新しい恋人かしら?）

“Non（ノン）, elle（イレ） est（エス） mon（モン） fiance（フィアンセ）?. Sa（サ） grand－m?re（グランメレ） est（エ） la（ラ） Fran?aise（フランセ）”

（いいや、彼女は私の婚約者です。彼女の祖母は仏蘭西人ですよ。）

”Oh!”

（あら！）

アントワーヌ婦人は、親しげに、櫻子の手を取った。

”S'il（シル） vous（ヴ） pla?t（プレ） soyez（ソイ） prudent（プルーデン）. Il（イル） est（エス） un（タン） Don（ダン） Juan（ジュアン）.”

（彼は女たらしなのよ、気をつけなさい。）

楡崎は、苦笑いをした。

「なんて、仰ったの?」

「……仏蘭西の血の混じった東洋のお嬢さんに会えて、嬉しいって。」

楡崎は、適当にごまかした。

櫻子は言葉が分からないが、歓迎されていると知り、微笑を返した。

楡崎は、用が済むと、婦人に櫻子に猫を見せてもらえないか、と頼んだ。

婦人は快く承諾し、二人を猫の間に案内した。そして、少し家の前で買い物をしたいから、猫を見るならその間だけ、留守番をお願

いしたい、と言って、出かけていった。
婦人の自慢の猫は、部屋の一室に飼われている。。
「まあ、可愛い！」
櫻子は、白毛はもちろん、黒や灰色、縞、黄色など　色とりどりの猫を見て、驚きの声をあげた。
「アントワーヌ婦人は大の猫好きでね。世界中から、猫を集めて来ていらっしゃる。」
「凄いわ。始めてみる猫がたくさんだわ！」
櫻子は、長い茶色の毛をした猫の傍に近寄って、撫でようとする。しかし、猫は、ふいっと避ける。
「あら?」
あきらめて、白くて短毛の猫に近づこうとする。しかし、その猫も、トコトコと逃げて、最後は白い箪笥の上に乗ってしまった。
「嫌われたかしら?」
櫻子は首をかしげた。
その後、玩具や、食べ物をちらつかせて猫の機嫌を取ろうとするが、彼らは全く櫻子に愛想を振ることはなかった。
「何してるんだ、あなたは?傍から見ていると、凄く滑稽だぞ。」
楡崎の方を振り返ると、自分の肩によじ登ろうとする黒い猫を捕まえて、撫でてやっていた。
椅子に右足を組んで座っているが、その不安定な上に別の猫が飛び乗ってくる。
さらに、床についている楡崎の左足首に体をひっつけるようにして、また別の猫が眠そうな顔をしていた。
猫にももてるのか、この人は。
「どうして、楡崎さんには、そんなに猫がたくさん寄ってくるの?」
しかし、この差は、何処から生まれてくるのだろう。
「あなたが追い回すから、怖がっているんだろう?優しくしてやればいい。」

「……違うと思うの。」
でっぷりと太った別の猫が、つん、と済ました顔で、櫻子の前を横切った。
「ほら、私、絶対、猫に嫌われているわ?」
櫻子は、楡崎の足元でこくり、こくりとしている穏やかそうな猫を抱き上げて、無理やり膝に乗せた。
毛が長くて真っ白な猫は、青い瞳をしていて、これが先ほど楡崎が言っていた猫なのだと思った。
この猫は、とても穏やかな性格のようで、もがこうとしなかった。
櫻子のされるがままにおとなしくしている。
猫は、愛嬌に溢れた瞳で、櫻子を見上げた。
櫻子は、その猫を抱いたまま、手の肉球をぷにぷにと押し始めた。
「もう!肉球があるからって、自分の事、可愛いと思っているなら、大間違いなのよ?」
猫は、不思議そうな眼で櫻子を見つめて、にゃうん、と鳴いた。
楡崎は、その様子を見て、溜まらず噴出した。
「あなた、その猫がおとなしいからって、その子に八つ当たりはやめないか。迷惑そうにしてるじゃないか。」
白い猫は、櫻子の腕の中で、彼女にされるがままになっている。
逃げ出そうとしない様子を見る限り、大分、おっとりした性格の猫のようだ。
「だって、あなたには懐いてるのに、どうして私には、この子たち冷たいのよ?」
「あなたの事は好きそうになれなかったんだろう?」
「どうして?」
「猫は、櫻子さんの事、人間じゃなくて、同じ猫だと思ったんじゃないか?」
あなた、猫っぽいものな?と楡崎がからかうように笑った。
「同属嫌悪ってやつだろうよ。」
「ど、同属嫌悪?」

「猫は、猫同士では、大変相性が悪い生き物だからなぁ。だから、あなたに近づきたくなかったんだろう」
楡崎の言葉に衝撃(ショック)を受けて、
「ねえ、優しいあなた。私が他の猫に嫌われてるのって、本当にそうだと思う?」
と、唯一、自分が抱き上げる事を許した、白い猫の顎をなでてあげながら、尋ねている。
「ねっ、答えて?」
猫は、櫻子の愛撫に、眼を細めて気持ち良さそうな顔をするだけで、何も答えなかった。
楡崎は、その様子を見て、たまらずもう一度噴き出した。

◆◇◆◇

――婦人の宅から自分達の家に戻った、その夜。
ベッドの中で、櫻子を後ろから抱きしめながら、楡崎は言った。
「明日は日曜日だろう?二人で街を散歩しよう。その時に、あなたの念願だった、仔犬を飼ってやる。」
「本当?」
櫻子は、振り返って、楡崎の方を見た。
「あんなに反対していたのに、どうして?」
「……いや、まさか、俺の人生において、猫と張り合う女性が現れるとは思ってなかった。」
しみじみと、言った。
「……。」
楡崎は、櫻子の顔の輪郭に手を添えて、じっと見つめた。
「今日、沢山の猫に触れたが、こうして良く見ると櫻子さんの顔は猫に少し似てるな。」
「どの辺りが?」
眼かな、と楡崎は、櫻子の髪を撫でながら言った。

「あとは…てくてく歩いているのに、突然振り返る所とかも似てるな。」
「……嬉しくないわ。私、猫自体は好きだったけど、私は、猫とは仲良くなれそうにないって、確信したから、今日で嫌いになったのよ。」
「……だから、猫と張り合ってどうする。」
櫻子の奇怪な振る舞いが、楡崎には、いちいち面白くてしょうがない。
「俺の猫は、あなた一匹で十分だ。二匹もいらん。世話が大変だ。」
「私が猫？私、猫は嫌いになったって、さっき言ったのに！その猫と私が似てるって言うの？」
ああ、やだ。何処が似てるっていうのよぅ、と楡崎とは反対の方を向いて、ベッドの中に少し潜ってしまった。
私、鼠なんて捕った事ないのに……とかぶつぶつ言っているのが聞こえてくる。
「なんで、落ち込むんだ。喜べば良いじゃないか。仔犬を飼ってやるって言っているんだ。」
「嘘じゃないわよね？」
「なんでそうなる。」
「本当に仔犬買ってくれるの？」
「だから。さっきから言ってるじゃないか。」
楡崎さん、素敵、好き、と言って、櫻子が首に抱きついたので、楡崎はちょっと驚いた。
いつもの櫻子なら、こんな媚びたような、可愛らしい振る舞いはしない。何か変だ。
この人、今晩は酔ってるんじゃないだろうか。食後に飲ませた葡萄酒が悪かったのだろうか。
顔を近づけてみると、確かに吐息が酒臭かった。
（……本当に、酔ってるな？）

少し、落ち込んだ。

……でも、まあ、いい。

楡崎は、櫻子を抱き寄せて、とっておきの艶っぽい声で、耳元に囁いた。

「だから、明日の昼間は二人っきりだ。」

しかし、櫻子はすっかり安らかな呼吸をしていて、その声を聞いてはいなかった。

【終】

【新堂茂】SS　秘書ノ誘惑

「別れよう……。」
仏蘭西料理の名門店である、築地の精養軒（せいようけん）で食事中に、恋人にこう切り出した。
明治の鹿鳴館時代から、華やかな文明開化の一翼を担い、国賓・貴賓の交歓の場として利用されてきた格式高いこの空間で、女性と二人っきりで食事をする事など、数年前では考えられなかった。
ましてや、目の前の人は、うちの会社と取引のある重役の娘である。
見た目は華やかで美しく、気品に溢れる女性だが、少々派手好みなのが元々気に食わなかった。
所詮、成り上がり者の自分には、ふさわしい相手ではなかったのかも知れない。
「何？他に好きな方でも出来たのかしら？」
「そうではない。」
「じゃあ、何？」
「申し訳ないが、きみの事は、もう女性として見れそうにないんだ。」
「茂さん、本気で言っているの？」
新堂茂（しんどうしげる）というのは、俺の名前だ。職名上は社長秘書だが、楡崎商会で二番目に力を持っている人物だと、周囲からは認識されている。
「すまない、俺は冗談が嫌いなんだ。」
「……っ！」
恋人は、立ち上がって、グラスに入った水を俺にぶちまけて、出入り口へ出て行った。
従業員が驚いて、慌てて布を持ってやって来る。
「大丈夫ですか、お客様？」
「ああ、ありがとう。すまないね、見苦しい所をお見せしてしま

って。他のお客様にも失礼な事をした。」

俺は、自分はさも、どこかの高貴な紳士であるかのように振舞おうとした。驚いてこちらを見ていた他の客たちにも、優雅に微笑み、軽く会釈をする。

怒らせるような言い方をした自分も悪かったかもしれないが、あれくらいはっきりと言わないと、きれいに別れられそうにない。それに、どのような言い方をしても、彼女は怒っただろう。

しかし、自分のものではなくなった瞬間、男に恥をかかせる女性というのもいかがなものか。しかも、このような格式高い料理店の中で。

それでなくても、男は、女性よりもずっと社会的な生き物で、面前で恥をかかされる事を心の奥では恐れているというのに。

（きっと、櫻子さんなら、こうはなさらないだろう。）

恋人と同じ、令嬢と呼ばれる彼女だが、表面上は活発に見えて、中身は実に奥ゆかしい人だった。

しかし、自分の恋人を、他の女性と比較してしまった時点で、やっぱり自分の恋はとうに終わっていたのだと、確認できた。

せっかくの料理を一人で食しながら、その日は一人で店を出た。

◆◇◆◇

十代の半ばまで、俺は機械工として、古びた大きな工場で働いていた。

毎日、汗と泥と油にまみれて暮らしていたが、慣れてくると、そこまで大変な仕事だとは思わなくなり、休日になるとその辺の川で釣りをしたりして、過ごしていた。

その後、貯めた金で勉強して警察官として、帝都で働くようになった。

ある日、同僚と一緒に飲みに出たところ、酔っ払いに絡まれて、警官であるにも関わらず、酔った同僚の数人が、その男を殴り返す

という事件が起こった。
翌日、俺もその殴った内の一人だという事で、処罰を受けた。事実無根である。
しかし、一緒に居た他の同僚も、酒のせいであまり記憶がなかったせいで、無罪を誰も、証明してはくれなかった。
考えた末に、俺は同僚だと信じていた彼らにはめられたのだとわかった。
おそらく、彼らは、あまり俺の事を好いてはいなかったのだろう。
確かに、それ程真面目だったわけではないが、新人の中では、いつも優秀な成績を残していて、一目置かれる存在ではあった。その事に対して、驕るわけでもなく、かといって謙遜をするわけでもない俺の事が、なんとなく気に食わなかったのだろう。
その原因は、元々、人に好かれる性質(たち)ではなかった事を自覚していなかったことなのだろうと、今になってからわかった。
人付き合いは下手ではなかったように思うが、元々、人間としての感情表現が乏しいせいで、得体の知れぬ人間として、周囲には映っていたのだと思う。
そのせっかく誘ってやっているのに、彼は、喜んでいるのか、それとも、単に付き合いの為で仕方なくついてくるのだろうか、と周囲は疑っていたに違いない。
そもそも、警察と言うのは組織のつながりを大切にする所なので、俺と言う人間は、その環境では、あまり好かれない種類の人間だったのだろう。
そうして、職をなくして、毎日ぼんやりと、日刊新聞の求人欄を見ていた。
食っていけるだけの金を得られそうな職なら、どこでも良かった。
その中から、適当に一つを選んで、応募してみる事にした。
それが、後に自分の人生を振り返ったときに、最大の分岐点になるとは知らずに。

◆◇◆◇

「やあやあ、はるばるごくろう。」

「私は、新堂茂（しんどうしげる）と申します。本日はお時間を取って頂き、ありがとうございます。」

「俺は、楡崎商会の社長をやっている、楡崎蓮一だ。以後、よろしく。」

そう言って、快活に笑いかけた。

面接に行ったら、一回目から、いきなり社長が出てきたので驚いた。

背が高くて、肩幅が広い。

英国紳士の着るような茶色の背広に、蘇芳色のタイをしている。

香油で前髪を後ろに撫で付けるように整えている。そして、近づくと、かすかに香水の匂いがした。

薔薇の匂いだ。

それ以上に、この人物を特徴付けているのは、底知れない自信に満ち溢れた瞳と、悠然とした物腰だった。

昨日まで、英國で仕事をしていて、今日の朝に横浜に着いた、というこの社長が予想以上に若かった事に、驚いた。

「かけてくれたまえ。」

俺は、促されるまま、長椅子に腰を掛けた。

「実は、今度、本社を帝都に移そうか、と考えていてね、この辺の地理に詳しい人材が丁度欲しかったのだよ。それに、君の事は、聞いていたよ。」

「はあ……。」

何を聞いたというのだろう？

「警察の人間の何人かと知り合いでね、若くて優秀だった警官が辞任してしまったと、酒の席でこぼしておられた。」

冤罪だったんだろう？と楡崎は、ずばり問うた。

一介の警官の事件まで把握しているとは、この男の情報網は、一体何処まで張り巡らせているのか。

急に、目の前の男が、恐ろしくなった。

「そんな、怪しい者じゃないさ。本当に、たまたま、君の話を聞いたんだ。その方は、君の様子を見て、冤罪だと確信したらしいが、いかんせん、目撃者が口をそろえて紡げばそれまでだからな。残念がっておられたよ。」

その言葉に、少し救われた気がした。嫌われていると思っていた職場でも、密かに自分を評価してくれていた人が居たことを。

「警察が要らぬなら、俺にくれ、と言ったんだが、酒の席での冗談と取られてしまったらしいな。まあ、いい。きみはここに来てくれたのだから。」

きみは、もう、来る前から採用と決めてある、と社長は言った。

「本当ですか？」

「もちろんだ。来てくれるな？」

はい、と新堂は返事をした。これで、明日から食事に困らなくてもすみそうだ。

「でも、その前に、一つ質問させて欲しい。」

「何でしょう」

「貿易商して、これからたくさんの場所に行く事になるだろうが、ある場所にやって来た、と仮定しよう。」

「……はい。」

「きみは、靴を売る商人としてやって来た。その場所には原住民が住んでいたが、靴を履く習慣　が彼らにはない。それを見たきみは、俺になんて報告する？」

まるで、謎々のような質問を突然、出された。

俺は、しばらくの間考えて、自分の答えを言った。

それを社長は、目を閉じて聞いていたが、言い終わると満足そうに微笑んだ。

「思った通り、きみは優秀で、聡い男だな、新堂くん。……少し真面目すぎて、先見の明に欠けている風もあるが、十分な合格点だ。」

そういって、長椅子から立ち上がり、手を出しだした。
「ようこそ、楡崎商会へ、新堂くん。俺たちと一緒に世界を目指そう。」
手を差し出すと、力強く握手をされた。
その手は、洗練された外見とは裏腹に、厚みがあって皮膚も固く、指は節が目立っていた。

◆◇◆◇

「新堂さん、いつも悪いわね」
明くる日の夕方、櫻子さんを迎えに二階堂邸の門前で、車を止めた。
社長が夕食に誘ったのである。行き先が、会社と二階堂邸は逆方向であるので、自分が自分の車で迎えに行くのは、時間の無駄になると言う。櫻子さんだけを会社の方まで送るのが、言いつけられた仕事だった。
「もし、私を送らなくてすんだら、もう少し早く帰れたでしょう？」
「……まあ。」
「じゃあ、この後は、やっぱりこの間はなしてくださった素敵な方と、お食事でも行かれたりするんでしょう？やっぱり申し訳ない事をしたわ。」
「うん？……ああ、別れましたよ。」
え、と彼女が、驚いた。
「お似合いだったのに……。」
そして、気まずい事を言ってしまったと思って、困惑した顔をする。
「気にしないで下さい。私から振ったのです。今日は暇ですから、ご心配なく。」

「そうなの……でも、やっぱり、私的な事柄まで、秘書さんにお願いするのもどうかと思うわ。」

困った顔をしている彼女は、今日は紺のワンピースドレスに、黒いコートを着ていた。しかし、今日の服は、鎖骨の辺りに襟刳りがある。きっと社長に何か言われたに違いない。顎まで襟がある服を、彼女は好んで着ていたが、それを社長は、色気がない、といつも不満そうにしていたから。

そして、化粧も落ち着いた色の服に合わせて控えめにしてある。髪飾りも、小さな銀の花のようなものにして、服と合わせていた。最近流行の、横髪にパーマを当てて、低い位置に髷（シニヨン）を作る「耳隠し」と呼ばれる髪型は、長髪の頃より、むしろ彼女には似合っているように自分は思う。

「私は、迎えはいらないって言っているのに、あのひと聞かないんだもの。ごめんなさいね。」

今度こそ、きつく言っておくわ、と後部座席から運転席を覗き込むようにして言った。

すると、彼女からかすかに花の香りがした。

深い薔薇の匂い。自分と四六時中一緒にいる、社長のオード・トワレと同じもの。

おそらく、あなたは花屋か、と思うほど、定期的に楡崎さんが、薔薇を贈っているからだろう。

飾られている部屋には、絶える間も無いほど、きっと香りが充満しており、それが移ってしまったのか。

あるいは……。

「かまいませんよ。社長の私的な事柄もお世話するのが、秘書ですから。」

「いいえ、良くないわ。」

ああ、そうだ、と思い出したように、一度に後ろに引っ込んでから、また運転席を覗き込む。

「今日は、カスティラを作り直してみたの。あなたが教えてくれ

た通り、お砂糖は少し控えて蜂蜜の量を増やしてみたわ。助手席に置いておくわね。」

そういって、緑色で取っ手のついた、小さな紙袋を渡した。

「あの人に見つからないようにして頂戴ね？五月蝿いから。

社長の入院の時から、こうして定期的に彼女の作る洋菓子の味見をしている。

洋菓子作りは彼女の趣味なのだ。残念な事に、家の者は辛党派ばかりらしい。

ちなみに、社長は洋菓子は嫌いではない。しかし、酒の味は分かっても、それ以外の食べ物の味の、微妙な違いが分かるほど、繊細な舌を持っていない。実は。

「新堂さんが、いつも次に何を気をつけて作ればいいか教えてくれるおかげで、私、かなり上手になったと思うのよ。」

「いえ、お役に立てたなら。私も、甘いものが食べれて嬉しいですし。」

「どうもありがとう。」

そう言って、ニコニコと笑っている。

「やっぱり、お料理が上手な方は、味もよくお分かりになるのねぇ。」

「そうだ、最近、オーブンを新しいものに取り替えたんですよ。外国製のね。」

本当の話だった。昔のものは、使い勝手は良かったが、古すぎで上手く焼けなかったので。

「まあ、本当？絶対、素敵ね。」

好奇心で、彼女の顔が輝いた。

「もし、よければ、今度は、私の家でカスティラを焼いて下さいます？」

運転をしながら、このときだけ、彼女の顔を見た。

きょとんとして、突然、言われた事の意味を理解しようとしている。

「あ……あの…。」
「ふふふ。からかってみただけです。」
冗談ですよ、とは言えなかったのは、何故だろう。
会った当時の彼女なら、本当にオーブンを使ってみたくて、のこのこやって来たかもしれないが、現時点でそのような事をしたら、きっと楡崎さんが機嫌を悪くするだろう事を知っている。
きっと、今夜も、二人で顔を寄せ合いながら、一緒の毛布に包まって、あの広い寝台（ベッド）の上にいるのだろうか、と考えたら、戸惑いから安心の表情に変わった彼女が少し、憎らしくなった。

◆◇◆◇

「なんで、こんな寝台を買うんです、社長？」
「この形状（デザイン）のやつは、この大きさしかなかったんだ。洒落てるだろう？」
「でも、これは一人と半人分位の大きさがありますよ。女性でも、とっかえひっかえ連れ込む気ですか。」
「下世話な発想をするな、新堂。この仏蘭西製の寝台は、絶対、寝心地がいいぞ。俺にはわかる。」
そういって、わざわざ滞在先の仏蘭西で、持ち帰るのに邪魔になるような買い物をした。
「俺には、わかりませんね。似たようなものは日本でも買えるでしょう？」
「おまえは賢いが、先見の明に欠けている、と度々言っているだろう？あの時これを買っておいて良かったと、寝る度に思うようになるさ。」
そう言って、社長は、意気揚々とおかしな買い物をした。

◆◇◆◇

「ありがとう、新堂さん。気をつけて帰ってくださいね。」
車から降りると、春先だというのに、木枯らしのような冷たい風が吹いていた。
「ええ、今晩は寒いですから、風邪などに気をつけてくださいね。」
「ありがとう、またね。」
そういって、軽やかに去っていく。
「ああ、櫻子さん。」
その彼女の手を引っ張ってしまった。
「はい？」
意味もなく引き止めてしまったから、次の台詞を用意していたわけでもない。
困惑で、視線を宙に酔わせてから、やっとの思いで思いついた事を言う。
「今度は、あなたの作ったお菓子で紅茶でも飲みましょう……社長も一緒に。」
「わかったわ。私、頑張らないとね。」
そう柔らかに笑って、去って言った。
そんな事を言う為に、引き止めたのでない事は分かっているはずなのに。
（俺は、あなたとは、楡崎さんよりも、ずっと前から会っていたんです。）
あの、浅草の一件の時。
何人かの同僚と一緒に歩いていたときに、その場に遭遇していたのだ。
（もし、俺があの時、あなたを助けていたら、あなたはどうしていましたか。）
今とは、何かが違う未来があったのだろうか。
菓子の試食をして、料理の助言をするだけの関係ではないような。

他の男の元へ、あなたを車で送っていかなくてもいいような。
今とは、似ているようで、違った世界が。
……全く、自分は何を考えているのだろうか。
楡崎さんが、あの方が好きだと言った時、「私の好みではない」と返したのは、自分ではないか。
今、現在、俺が魅かれている彼女の部分に、自分よりも早くに発見したのは、社長なのだ。
（あなたは、俺を優秀で、聡い男だと仰ったが、少し真面目すぎて、先見の明に欠けている風もあると仰った。）
全く、的を得すぎている。腸（はらわた）から、可笑しな笑いがこみ上げてくるようだ。
（……あの方には、かなわない、か。）
鬣をなびかせて、悠然と草原をきる獅子のような人。
――いや、しかし。
（もしも、あなたが油断なされば、私はあの方を、罠にはめてみたくなるかもしれませんよ。）
あなたが、褒めてくださった、この知力を尽くしてね。
勇猛たる獅子でも、蛇蝎（だかつ）の毒にはかなわないでしょう？
そんな日が、来ないように、二人に祝福を。
そして、自分も、新しい恋人に、早くめぐり合えたらいい。
そんな事を考えながら、無数の灯りがてらてらと闇夜に浮かぶ中を、運転して帰路に着いた。【終】

【斎木萩人】編（1）　処女航海

――明治四十五年　　イギリス　サウサンプトン港

「ハギト！俺たちゃ幸運だぜ、頑張って勉強していい教授についたかいがあったなぁ！」

「全くだ、カール！」

二十二歳の斎木萩人（さいきはぎと）は、こげ茶色の中折れ帽子が、風で飛ばないように抑えながら、くすんだ金髪に緑眼を持った、ドイツ人声をかけた。

二人は、独逸にある音楽大学の、学生仲間である。

高い空には、雲がたなびき、海鳥が気持ち良さそうに何羽も旋回している。

「おい、興奮しすぎて転ぶなよ。」

「これが、興奮せずにいられるか、見ろよ！」

二人の目の前の波止場（オーシャンドック）には、全長二百七十メートル、幅は三十メートルにもなろうかという巨大な豪華客船が泊まっている。

その真新しい船体の、黒々とした下辺部分が、陽光を受けてきらきらと反射していた。

マストは二本，フォアマストには見張りが付いている。巨大な四本の煙突からは、もくもくと黒煙を上げていた。

「こんな大きな船を今までに見たことがあったか、え？」

「ないともさ！」

「俺達の教授が、ニューヨークの学会に、助手つきで招待されて幸運だったな。」

向こうが、気をきかせてくれて、この船の乗船券を贈ってくれたのだった。

いやっほうっ、と興奮を隠し切れないカールは踊るように飛び跳ねた。

「そういえば、バッカー教授は？」
「何処かでカプチーノでも買って飲んでるんだろう。あの人、珈琲好きだからな。」
教授の事など、どうでもいいような感じだった。まだ、小躍りしている。
「おい、切符失くすなよ？」
萩人は少し、心配になった。
既に、多くの乗客たちが、トランクを抱えて船に乗り込んでいる最中だった。シルクハットいステッキを持った紳士や、使用人が挿す日傘の中をゆっくりと歩く貴婦人、茶色くたびれた背広を着た商人風の人、様々な人間が居た。
その中で、淡いラベンダー色のドレスを着て、ゆっくりと船に向かって行く若い女性と眼が合った。
黒い睫毛に覆われた、青色の瞳に、白い肌、濃厚な紫がかったブラッド・レッドの口紅。
すこし頬も紅で染めている。
つばの広い帽子を被っていて、その中からは、やつやと輝くブロンズ色の髪がこぼれていた。
襟刳りの大きい胸元には、宝石の着いた首飾りをつけている。
その女性が、顔を上げた瞬間、眼があった。
じっとハギトを見たが、また何事も無かったように視線を戻して、紳士風の若い男に誘われて、船の中へ消えて言った。
「あんな、お金持ちそうな人も、一緒に乗るんだな。」
カールが、思わず声を出した。
この船には一等席から三等席まであり、自分達は二等席に乗る予定である。
「知ってるか、ハギト？」
「何だ？」
「この船には本当は自動演奏楽器（オルゴール）が使われる予定だったが、間に合わなくて本物の演奏者を急遽、乗船させたらしいぜ。」

「生演奏か。」

「そうさ、機会があれば俺達も飛び入りで参加させてもらえないかな？俺達のヴァイオリンを、多くの人に聞いてもらえる絶好の機会だ！」

「そうだな、船に居る時は持ち歩いて、その機会をうかがっていようじゃないか。」

二人は、お互いの右手に持っている、ケースを見せ合った。

船上だろうか地上だろうが、萩人もカールも常に持ち歩いている、命の次に大切な相棒（ヴァイオリン）だ。

二人は、一流の演奏者になりたくて、大学一著名だと言われているバッカー教授の下で学ぶ機会を得る為に、寝る間も惜しんで訓練をしていた。

教授も努力家の二人をえらく気に入っていて、今では自分の助手としても、あちこち連れ回しているほどだった。

「君たち、そこで何をしているんだ、置いていくぞ！」

船の上で、教授が大きく手を振った。

「なんだ、教授、ひとりでとっくに乗船しているじゃないか。」

「俺達も行くぞ。」

二人は、興奮の醒めぬまま、早く歩行用甲板（プロムナードデッキ）に駆け上りたい気持ちを抑えながら、もどかしそうに船員に切符を見せた。

そのまま、競うようにして階段を上る。

やがて、辿りつくと、そこに広がる絶景に息をのんだ。

「Ｄｉｅ（デ）　Ｗｅｌｔ（ウエルト）　ｇｅｈ？ｒｔ（ゲホート）　ｚｕ（ズ）　ｍｉｒ（ミア）！」（世界は俺のものだ！）

隣のカールが、両手を上げて叫び、その手を胸にひきつけて、表現しきれない気持ちをあらわにした。

他の乗客が驚いて振り返っている。

「おい、まだ出航もしていないぞ。」

「だって、ここからの景色を見てみろよ。船の上なのに、あんなに人の頭が小さいぞ。」

全高は十メートルもあるのだ。無理も無い。
「興奮しすぎだな。」
はは、と笑って、上をみると、先ほどのラベンダーの貴婦人が居た。
遠くの地平線を切なげに眺めている。
そのままじっと見つめていると、女性の方も、萩人に気がついたようである。
しかし、女性は、また何も無かった風に、視線を戻した。
「なんだ、さっきの美人じゃないか。」
「ああ、見たな。」
「惚れたか、ハギト。」
カールは不敵に笑った。
「なんで、そうなる?」
眉をしかめた萩人に対して、なぜか満足げに、にやりとする。
「俺は前々から、きみの事を心配していたんだ。大学に居ても、きみは浮いた話の一つも無いだろう?俺はまさか東洋って言うのは、そういう習慣でもあるのかと思ってしまったよ。」
「どういう習慣だ?」
かわいい女の子が傍に居ても、きがつかないふりをする習慣だよ、と冗談めかして言う。
「全く、俺が、きみの顔を持っていれば遊びまくってやるっていうのに、本当にもったいない。」
と、カールは、萩人の両頬を左右に引っ張って伸ばした。
「何をする?」
「このギリシャ彫刻のように整った顔に加えて、東洋の血が混じっているせいで、神秘的な雰囲気がいけないんだな。あー、羨ましい。」
そばかす顔だが、カールもそれなりに、女性の噂を誘う容姿ではある。
萩人は困ったような、複雑な顔をしている。

「あと、もっと笑え、萩人。きみはちょっと落ち着きすぎる。」
「ふふ、こうか？」
口を一杯に引きつらせて、歯をむき出しにする。
彼がめったにみせない、面白い顔に、カールは噴出した。
「ははは、いいぞ、ハギト！」
「ははは。」
萩人もつられて、笑った。
しかし、カールは、急に深刻な顔に戻る。
「まさか、きみ、混血児（ハーフ）である事を気にして、彼女を作らないんじゃないだろうな？」
萩人は、少し、驚いた。
「まさか、大丈夫。気にしてはいないさ。」
「日本ではどうだか知らないが、ここでは普通だぞ。アメリカみたいに、混血の集まりのような国もあるんだ。君は堂々と女の子をたぶらかしていい権利がある！俺が認める。」
「たぶらかすのは駄目だろうが。僕が、彼女を作らないのは、単にもてない男だからだ。」
「また、そういう大嘘を。いいか、今年のヴァレンタインまでには見つけておけよ。あの日に相手がいないのは寂しいぞ？そういえば、日本でも、この習慣はあるのか？」
「いや、ないな。七夕はあるが……少し違うな。」
「なんだ、タナバタって？」
「まあ、話がややこしくなるから、気にするな。」
萩人は、ラベンダーの貴婦人が居た方向を見た。
しかし、既に、そこに彼女の姿は無かった。
「ああ、わかった。それとも祖国（にほん）に愛しい人を置いてきたから、独逸では恋人を作らないんだな。」
そうか、そうか、と一人で納得している。
「カールはどうやっても、僕におせっかいをかきたいらしいな？」
「まあ、そうだな。いつもクールな相棒が、恋愛で慌てふためく

姿を拝んでみたいのさ。」

「また、そんな冗談を。」

二人で、笑いあっていると、船が出港の合図を高らかに鳴らした。

「おっと、いよいよだな。」

「ああ、楽しみな旅になりそうだ。」

二人は身を大きく乗り出して、見送りの為に波止場にやって来た名前も知らない大勢の人々に向けて、手を振った。

乗客乗員二千二百人以上の期待をのせながら、大きい船体がゆっくりと海に向かって動き出す。

――豪華絢爛な姿を、ギリシャ神話に登場する巨人の神になぞらえて、人はこの運命の船を「ＴＩＴＡＮＩＣ（タイタニック）号」と呼んだ。

【斎木萩人】編（２）　執事ノ日常（Ｒ１５）

櫻子が楡崎と銀座に出かけ、桃真も梅造も仕事の関係で出かけたのを見送ると、斎木は自室の浴槽で、午前から風呂に浸かり始めた。

二階堂家の洋館は、東側に外通路を挟んで、もう一つ別の小さな洋館と繋がっている。二棟とも二階建てだ。現在、唯一、住み込みの使用人として働いている斎木の住居空間としてや、他の通いの使用人の休憩所として使用されていた。

斎木は書生だった頃から、この館に住まわせてもらっており、京極菊弥もかつてはこの館の一室に住んでいた。

この館は昔、客人を泊まらせる部屋として使われており、それゆえに、部屋には風呂がついていたのだった。

ちなみに現在は、通路を挟んで、西側の新しく作られた洋館に客を泊めている。

斎木の部屋は洋室で、浴槽も欧羅巴製だった。部屋には他に、寝台と本棚、机と椅子などといった洋風の家具が置かれている。

まずは、部屋の机に置いた蓄音機を作動させて、音楽をながす。

そして、熱い湯船に浸かりながら、画集を眺めたり、外国の小説や詩を読んだり、時には、なぜだか高度なの問題集を頭の中で解いたりしながら、ゆったりとした時間を過ごすのが好きだった。

斎木の母親は、墺太利（オーストリア）人の演奏家で、日本人の学者であった父親と、墺太利（オーストリア）で会い結婚した。

八歳の時に父親と離婚するも、母親は日本にとどまり、演奏家として夜会などで活躍する事で、生活費を稼いでいた。斎木も、いつしか演奏家を志すようになり、貧乏ながら学校にも通い始めた。

十六歳の時、母も死んだ。そして、母親と知り合いであった二階堂家の梅造が、書生として引き取ってくれる事になった。

そうして音楽大学を卒業し、その後に、さらに独逸へ留学に行ったのである。

しかし、二十二歳の時に海難事故にあい、凍傷の後遺症のせいですっかり木偶のようになった両指が、斎木の全てを絶望に変えた。

その自分を執事として雇ってくれたのは、またしても梅造であった。現在は、家の使用人などを束ねる家令という立場にある。

ちなみに、現在は、両指も昔とは殆ど変わらないほど回復したが、繊細な指の動きを要求される演奏家としての指としては、不向きだろうと斎木は考えている。

現在までを振り返ると、波乱万丈であったと思うが、今は穏やかな日々が続いているように感じている。

僅かに開けた窓から聞こえてくる鳥のさえずりを聞きながら、こんな日がずっと続くといい、とぼんやり考えていた。

そして、ふと、先ほど屋敷を訪れた男の事が、頭を過ぎった。

（お嬢様は、大丈夫だろうか……。）

結婚を申し込みに来た、と言っていた。

確かに、ここ最近において屋敷で開催された夜会の目的は、それであった。

なのだから、彼女にそれなりにふさわしい男性が求婚に訪れる事は、喜ばしいことではある。

しかし、斎木は、あの男性の体からにじみ出るような自信に溢れた雰囲気と、少し傲慢そうな印象が気にかかった。

（活発そうに見えて、意外と天然というか、奥手というか、とろい所もお持ちだから…あの方は。）

そうして、この間の夜会において、懇願されてダンスの手ほどきをした事を思い出した。

よっぽど苦手意識をお持ちなのか、いつも足元をおぼつかせて、自分の動きに一生懸命についていこうとしていた姿がいじらしかった。

それを思い出し、瞼を閉じて、くすりと笑った。

浴槽から上がって、着替え終えた頃、隣の部屋で物音がし始めた。

確か、隣は空き部屋である。

不振に思って、濡れた髪を拭きながら、隣を覗くと見覚えのある顔があった。

「何しているんだ、柊くん？」

料理人の柊秀介（ひいらぎしゅうすけ）だった。ちなみに、年は二十二。

「あ、斎木さん。僕も今日から住み込みとして、ここに住まわせていただく事になりました。」

柊は、荷物を運んでいた手を止めて、お辞儀した。

「ああ、今日だったか……。」

柊が引っ越してくるのは。

「君も、災難でしたね。」

「はい、まさか、下宿していた長屋が家事で消失するなんて、思ってもみませんでしたよ。ははは。

でも、そのおかげで、住み込みとして使って頂く機会を得られて良かったです。頑張るので、これからも、よろしくお願いします。」

「そうですね、これから冬になるから、仕事を覚えるには丁度良いでしょう。」

「はい！」

柊は、元々、料理人としてこの屋敷に通っていたが、住み込みを機会に、執事としても働く事になったのだった。斎木としては、非常に助かる存在ではある。

「僕は実家が植木商なので、一応庭の手入れもできます。住み込みとして働かせてもらえるなら、それも合わせて請け負う事になりましたので、よろしくお願いします。」

今週の始めに、通いの園丁が辞めたのだった。腰を悪くしたので、引退するらしい。

二階堂家の庭園は、洋館の周りを囲う仏蘭西式の薔薇の庭園と、洋館の後ろ側に、池を中心にた日本式庭園の両方があった。

日本式庭園の中には茶室や書庫もあって、桃真がそこでよく時間を過ごしている。

この屋敷は、没落した男爵家が、梅造に屋敷を買い取れと迫って

きたので、そうしたのである。
明治時代に作られたものなので、幅の広い馬車道が正門から裏門まで伸びている。斎木も、朝の見回りと散歩代わりに、季節の移ろいを感じながら、そこを歩くのが好きだった。
「驚かせてしまって、すみません。もう大丈夫ですから。早く髪の毛を乾かさないと、お風邪を召されますよ。」
「じゃあ、何か分からない事があったら、遠慮なく聞いてください。」
自室にまた引っ込んでいった先輩執事を見ながら、柊は、そういえば、斎木さんの髪の毛が乱れている所を見たことがなかったな、などと考えていた。
彼は、いつも香油で、その黒くてつやつやした髪を綺麗に撫で付けて整えていたから。

◆◇◆◇

富豪ではあるが、皇族や華族ではない為、櫻子も桃真も、最低限の身の回りの事を行う。そして、暇があれば、掃除なども行う為、同じ規模の他の家の屋敷よりは、仕事は少なかった。
しかし、食器の管理、酒類の管理など、お客さまをもてなす時に必要になるものや、お客さまが滞在された時の世話、二階堂家に来る手紙や書物等の管理、運転手、高級な衣類の管理など、一般庶民の生活とは大きく異なる二階堂家では、特殊な仕事が多かった。
梅造は、秘書を数人抱えており、仕事に関する事は彼らに任せることが多かったが、私的な内向きの仕事は、斎木に任せる事が多かった。
今日の午後は、今週に送られてきた、手紙や贈り物の返答の容易を整える為に、ずっと部屋に引きこもる事にした。
あっという間に時間が過ぎ、太陽が西に傾いて紅く染まり、他にも紫や黄色などが空に交じり合った頃、門の前に黒塗りの車が止まった。

櫻子が帰宅してきたらしい。
「おかえりなさいませ、お嬢様。」
「斎木さん、ただいま。」
「お夕食はいかがされますか？」
「もちろん、頂くわ。」
どうやら、夕食までは一緒に過ごさなかったらしい。
最初の印象とは違って、あの貿易商は意外と紳士なのかも知れない、と斎木は思った。
「そうだわ、斎木さん。」
斎木の横をすり抜けて、自分の部屋に戻ろうとした櫻子が、唐突にくるりと体の向きを変えた。
「なんですか。」
「父様が、また近々夜会を開く、って言っていたけど、あれって本当なの？」
「本当ですよ。でも、今度は、財閥と関わりのあるお客さまをお呼びして、もてなす為のようですが。」
「じゃあ、私のお知り合いは少ないって事よね……。」
櫻子は、女学校の国語教師である為、二階堂財閥とはあまり関わりがない。
「ですが、お嬢様は、もちろん出席して頂かなくてはなりませんよ。」
斎木の言葉に、あからさまに櫻子は落胆した。
「嫌だわ、緊張するわ。」
「夜会では、梅造様の秘書はもちろん、会社の方もいらっしゃるでしょうから、皆さん助けてくださいますよ。」
斎木は、櫻子の不安を取り除くように、優しく微笑みかけた。
「ええ、父様のお仕事が上手くいくように、娘として協力しなくちゃいけないわよね。」
「よい心がけですね。」
「ちなみに、いつあるの？」

「月末の土曜日の夜です。」
「あと、二週間しかないじゃないの！」
櫻子が、悲痛な声をだした。
「……楡崎さんのお誘いをお断りして、正解だったわ？来週の週末は、来られるお客様の名簿でお名前を覚えて、夜会に着る服を準備して、ダンスの練習をして、会話のネタも容易して……。」
指を折りながら、一つずつ確認している。
「ねえ、斎木さんも手伝ってくれるわよね？」
急に、腕をつかまれた。
「あ…はい、もちろんです。」
「着物にするか、洋装にするか…洋装なら、また神谷さんにお願いすればいいのかしら？いらっしゃる方の名前やお顔は、兄様や父様に手伝ってもらって、ダンスは斎木さんに見てもらえばいいし…でも、どんな事をお話したらいいのかは、毎回悩むのよ。本当に悩むわ？」
ううう、と頬に手を当てて、苦悩している。
その悩みっぷりを見て、少し可哀想になってきた斎木である。
「私（わたくし）でよければ、出来る限りお手伝いいたしますから、仰ってくださいね。」
「あ、ありがとう、斎木さん……。」
本当に困ったような顔をしたままの櫻子を見て、斎木は少し、苦笑した。
「お嬢様、おかえりなさいませ！」
その時、二階堂家の女中（メイド）の、リンが櫻子を見つけて声をかけた。
リンは櫻子より年下の１９才である。西洋風の女中（メイド）服に、長い髪の毛を後ろで髷（シニヨン）にした髪型が良く似合っていた。
身長が百六十五センチはある自分と比べて、小柄で華奢な体形をしたリンを、櫻子は密かに羨ましかった。
「リンさん、ただいま。」
「あの素敵な方と、ご一緒だったのでしょう？ああ、羨ましい。

どうでしたの？」

「えっと、昼食をご馳走になって、銀座で一緒に紅茶を飲んだわ。後は、紅葉を見ながら外でぶらぶらしてただけよ。」

斎木は少し驚いた。あの楡崎というお金持ちそうな方にしては、普通過ぎると思った。

「それは、よろしかったですね。もう、お夕食の用意はできていますよ。旦那様と桃真様は、櫻子様は楡崎さんとご一緒に食べなさるのだろう、と仰って、先にお済になられましたが。」

「そうなの？兄様ったら、早く帰って来い、と言っておきながら…もう。」

「お洋服を着替えてから、お食事されますか？」

「いいえ、このままでいいわ。」

「では、すぐにお持ちいたしますので、食堂へどうぞ。」

「ありがとう。」

櫻子は、リンに促されて、夕食を取る事にした。

しかし、その時に、何かを誰にも悟られないように、そっと手に握りしめされた事に気がついた。

夕食の席について、そっと手を開くと、それは折りたたんだ紙片だった。

◆◇◆◇

――夜。

櫻子は、本来ならば禁じられているはずの、使用人用の別館に一人出来ていた。

（寒いわ…。）

寝巻きの上に、ガウンを羽織っても、外の通路を通って行かないといけないので、凍えそうだ。

手には、小さな洋灯（ランプ）を持っている。

（一体、リンさんったら、私に何の用かしら？）

あの、紙片には、「相談したい事があるので、夜九時頃になった

ら来て欲しい」と書かれていたのだ。九時を過ぎて、使用人の方から櫻子たちの住む本館に入るのは、斎木を除いて禁止されているからだ。

別間は、既に真っ暗だ。灯りをつけるわけにもいかないので、暗い中を歩いていく。

二階に上がって、さらに進むと、何やら奇妙な声が聞こえてきた。

（……何かしら？）

部屋の一つがほんの少し空いていて、そこからぼんやりとした灯りの筋が、廊下まで漏れている。

その中の様子を伺おうと、そっと覗き込んで、櫻子は驚愕した。

淡い灯りの正体は、寝台の横の、机の上で灯してある洋灯が一つ。暗くて良く見えなかったが、眼を凝らしてみると、状況が理解できた。

その灯りに照らされているのは、何故か、斎木とリンである。

ベットに腰掛けていた。斎木は上着を脱ぎ、シャツのボタンを上から半分位まで外している。そして、リンは、彼の膝の上に乗り、しがみつきながら、斎木に何度も口付けていた。乱れた女中服（メイド）からは、白い足がのぞいている。

「ああ……斎木さん。」

解けた長い髪が、顔を動かす度にうごめく。

斎木の右腕が、彼女がずり落ちないように、リンの背中を抱きとめている。

リンの表情は暗くて良く見えなかったが、その哀願するような切なげな声から、のめりこんでいる事はわかった。

しかし、斎木は、夕刻見たとおりの無表情を崩さずに、まるで機械の様に淡々としていた。

ありえないものを見てしまった。

櫻子は、一瞬ぽかんとしたが、直に顔が真っ赤になったのがわかった。

（いっ、……いやぁぁぁん！！）

直に走り出して逃げたかったが、ここに居るのがばれては困るので、ゆっくりと階段で階下に下りてから、走り出した。
嫌だ。見なかったことにして頂戴、私の視神経。
本館に戻ると、走るのをやめ、早歩きで、てくてくと歩き始めた。
しかし、まだ心臓が高鳴っている。
……一体なんだったんだろうか、あれは。
（斎木とリンは、恋人同士だったのかしらん？）
そんな風には見えなかった。しかし、自分は恋愛に関することには大変疎いことが、今日、楡崎と一緒に居て実感したばかりなので、自信は無い。
それ以前に、一応、雇い主である自分を呼び出しておいて、本人は待っていないとはどういうことだろう。
まさか、自分にあの光景を見せる為だろうか。何の為に？
（もしかして、斎木は、家令という立場を利用して、雇い入れた女中に片っ端から手をつけているとか？）
櫻子は、頭の中で、昔読んだブラム・ストーカーの恐怖小説の主人公、ドラキュラ伯爵のように、女性を吸血していく斎木の光景が、何故か浮かんだ。
想像してはみたが、そんな風に女性に襲い掛かる印象（イメージ）が、彼には無い。ありえない。
しかし、彼とて男なのだと思うと、自分の「ありえない」という判断にも自信が持てない。
なんか、自分が情けなくなってきた櫻子だった。
（それに、あの時、リンさんが、こちらの方をちらりと見た気がしたのも気になるわ…。）
気のせいだったのかもしれないが、確かに、一瞬、櫻子の方を見た気がしたのだ。
わからない。
全くわからない。
櫻子は、自分の思考を無理やり消して、その夜は寝る事にした。

◆◇◆◇

「これで、満足ですか？」

櫻子が、もやもやと考えていた頃、斎木は寝台から立ち上がり、冷たい瞳でリンを見下ろしていた。

リンは、もう一度、斎木の首に腕を回して、唇を奪った。

斎木は、眉をしかめたが、微動だにしない。

これ以上の進入を許さない事が分かると、リンはあきらめて、斎木の唇から顔を離した。

「全く応えてくれないのね？酷い人。」

「どっちが酷い人ですか。離して下さい、腕。」

「私は、あなたの事が好きなのに。」

妖艶な唇の端をゆがめて、誘うように笑う。

「嘘はおよしなさい。きみは私の事をなんとも思っていないでしょうが。」

斎木は、緩めるだけではなそうとしないリンの腕を、ゆっくりと解いて、シャツのボタンを締めなおした。その上に上着もはおり、白い手袋もはめ直した。

「もう、つまんない人。」

「結構です。」

斎木は、息を吐くように落ち着いた声で言った。

「ここまで誘惑して、篭絡しなかったのはあなたが始めてよ？」

「前科あり、ですか。救いようが無い人ですね。」

「うふ？昔の恋人の話よ。」

リンも、ようやく衣類を身につけ始めた。髪も無造作に結いなおす。

「とにかく、私はあなたのいう事を聞きましたから、約束は守ってくださいね。」

斎木が、厳しく言い放つ。

「あら、そんなにあのお嬢様が大切なのかしら？」

「当たり前でしょう。櫻子さまも、桃真さまも、旦那さまも、私の主ですから。」

「忠誠心が強いのね。」

「当然です。これ以上、変な真似をしますと、本当に旦那様に言いつけて、解雇していただきますよ。」

斎木は、とうとう、侮蔑に満ちた視線を送り始めた。

「無理よ。私は、まだ何もしていないもの。」

リンは勝ち誇ったような顔をする。その顔には、夕刻に櫻子に見せたような、少女的な愛くるしさはない。

「あなたが、勝手に心配して、取引に応じただけよ。」

すっかり、服の乱れを正したリンは、一瞥を斎木に向かって投げると、悠然とその部屋を出て行った。

取り残された斎木は、しばらくしてから、自分の部屋に戻った。

そして、今日で二度目の熱い湯船に浸かって、無理やりに、疲れを流し去ろうとした。

【斎木萩人】編（3）　海ノ賛歌

斎木は、嫌悪感にさいなまれながら眠りに着いた。
そして、夢の中で過去を見ていた。
◆◇◆◇

斎木は、陽光の降り注ぐ甲板で、椅子にゆったりと腰掛けながら、鼻歌で曲を作っていた。
生まれたての曲を、まるでメモでも取るかのようにすらすらと五線譜に記していく。
何気なく顔を上げると、先ほどのラベンダーの貴婦人が、手すりに手を乗せて、風に吹かれながら、海の遠くを見ていた。
（あれ、さっきのお嬢さんじゃないか。）
しかし、何やら思いつめた顔をしている。
じっと観察していると、急に腕に力を入れて、手すりから体を乗り出し始めた。
「お、おい、きみっ？」
慌てて、斎木が駆け寄る。
「離して下さいっ！」
貴婦人は、斎木の手を跳ね除けて、さらに身を乗り出そうとする。
「海の中に飛び込もうとしているのか？馬鹿な真似はよすんだ。」
こんなに船との距離が近いところで海に入れば、溺死する前に、スクリューに巻き込まれて木っ端微塵だ。
「離して下さい！」
「この状況で、見逃せ、と言うほうが無理だろう？」
斎木は彼女を無理やり抱きかかえて、甲板から離れて、自分が座っていた椅子の上に放してやった。
しかし、手首は、また女性が甲板に戻っていってしまわないように、掴んだままだった。

「何があったのか知りませんけれど、まあ、落ち着いてください。」

「誰なのよ、あなた……あら、乗船の時に、眼があったわね。」

彼女の方も、斎木の事を記憶していたらしい。

「二等客室の斎木萩人です。名前は日本名ですけど、半分、墺太利人です。」

「エレナ・アディントンよ。」

エレナは乱れたドレスを直しながら言った。

「世界一の豪華客船の船旅ですが、あなたにとっては楽しいものではないようですね。僕の友人は、嬉しくて、先ほどからずっと船内を探検し続けていて、まだ戻ってこないというのに。」

ここで、待ってるように言ったのは、彼なんですけどね、と斎木は言った。

「あなたは、ニューヨークには、何をしにいらっしゃるの?」

エレナは気品のあるクイーンズ・イングリッシュで斎木に尋ねた。

「学会ですよ。教授が出席する予定の付き添いです。」

「そう…。私は、アメリカで結婚式を挙げる予定なんですわ。」

「あら、おめでとうございます。」

斎木は、少し驚いた顔をして、祝辞を述べた。

「おめでたくなんかないです、私は両親に身売りされるのです。」

「はい?」

「父が百貨店を営んでいたんですけれど、新しい店が次々と参入して、経営が苦しくなりましたから、借金まみれに……。ですから、倒産寸前のうちの会社と合併してもらう代わりに、私がお嫁に行く事になりましたのよ。」

「……。」

斎木は、そういえば、エレナが両親らしき人物のほかに、貴公子のような若い男性と、一緒に船に入っていたのを思い出した。あれが、婚約者だったのか。

なんとも生々しい話である。まさしく、小説の中でしか読んだこ

とのないような、政略結婚そのものではないか。
「だからって、自殺なさらなくてもよろしいでしょう？」
エレナは、斎木を睨みつけた。
「あなたに、私の気持ちはわからなくってよ！」
エレナは怒って立ち上がった。その時に、斎木が椅子の足元に置いておいた楽器のケースを倒してしまった。
「あら、ヴァイオリン？あなたが弾きなさるの？」
「ええ、僕は音大生ですから。」
斎木は、ケースから自分のヴァイオリンを取り出した。
「では、元気を出していただきたいので、何か一曲弾きましょう。」
斎木は恭しく、一礼した。
「聞いて頂けますか？」
エレナは、もう一度、椅子に腰を下ろした。
そして、斎木が弾き始めると、眼を丸くした。
今まで聞いた事のないような音楽。それは、哀愁漂うような切なさの中にも甘い響き。急に踊り出したくなるような軽快な心地よさ。そして、斎木の音を伸びやかに響かせるような演奏技術。
その音に引き寄せられて、他の客達も視線を移し、やがては二人の前に集まってくる。
「Ｂｒａｖｏ(ブラボー)！だわ。」
弾き終わった後の静寂を、エレナの拍手が破った。斎木が一礼すると、他の客も拍手を始める。
やがて、他の客が散っていくと、二人でまた話し始めた。
「すごいわ、あなた。でも、私が聞いた事のない音楽ね。」
「これは、さっき、僕が暇つぶしに作曲した曲ですから、知らないのは当然ですよ。」
エレナは、まあ、と感嘆の声を上げた。
「でも、演奏家を目指す方が、こんなに変わった音楽を弾いても大丈夫なのかしら。」

普通、古典音楽（クラッシック）の演奏家は、他の種類の音楽をあまり弾かない。演奏手法が異なるので、変な癖がついてしまうといけないからだ。

「いいんです。音楽は、楽しめば。」

斎木は、微笑んだ。

「ねえ、他にも私が知っている曲をお願いしていいかしら?」

斎木が、何なりと、と言おうとした時だった。

「エレナ!」

黒い背広に身を包んだ貴公子が、彼女の名を呼んだ。

「駄目だわ。彼だわ。」

エレナが、落ち込んだような声で言った。

「また、会えるかしら、演奏家の卵さん?」

「あなたが望んでくだされば。」

同じ船に居るのだから、次の機会はあると、斎木は返事をした。

◆◇◆◇

ある夜、エレナは、豪華な夜会服に身を包んで、一等客の集まるラウンジに居た。

そこで繰り広げられる、金と道楽の話しかしない会話に、エレナはうんざりしていた。

しかし、だからと言って、立ち去るわけには行かない。

早く、この拷問のような時間が終わってはくれないだろうか、となるべく多くの会話をしないですむように下を向いていた。

そして、たまに会話をした後は、決まって婚約者にねちねちと言われるのだった。

「エレナ、さっきのブロンドの男性と妙に親しげだったな?」

長椅子に座っている婚約者は、ワインの入ったグラスを傾けながら聞いた。

エレナも同じ長椅子に座っているが、間には、人があと一人はすわれるくらい間が空いている。

さっきの男とは、鉄鉱業を営む会社の御曹司である。先ほど、俯いているエレナに気を使って、たわいも無い会話をかけてくれたの

だ。

それを言われているのである。

自分より十二も年上のこの男は、いつも自信に満ち溢れていて、傲慢だった。

そして、大変嫉妬深かった。

「お互いに乗馬が趣味だと分かって、話が弾んだだけよ。」

そっけなくエレナが言い返す。

婚約者は、エレナを抱き寄せて、自分の隣に座らせた。

「やめて頂戴、みんな見てるわ。」

「良いじゃないか、君は俺の婚約者だ。ニューヨークに着いたら、君は俺の妻だ。」

「あなたには、沢山女性のお友達がいらっしゃるでしょう?どうして他の方々と結婚なさらないの?私と結婚しても、あなたには良い事は一つもないのに。」

しかも、こんな年下の自分に、だ。少女趣味でもあるのだろうか。

「なんだ、機嫌でも悪いのか?」

「違います。」

エレナは、イライラしてくるのがわかった。

婚約者は、なおも自分の体に触れてくる。

「もう、止めてくださいってば。」

「ふん、いいのか?俺と結婚しなければ、借金取りに追われて、君の家族は命がなくなるぞ?」

「……!」

「君は、俺と結婚し、俺の子を産み、育てるのが一番幸せなんだ。俺の機嫌を損ねて、気が変わってしまったら、どうする?」

ゾクリとするような、瞳で脅される。

「君は、もう、俺から逃げられないんだよ。」

◆◇◆◇

斎木が甲板の上で一人で演奏していると、階段をゆっくりと駆け

上ってくる音がした。
「エレナさんですか?」
斎木が、演奏を止めて振り返る。
「ええ、今晩も来てしまったわ。」
ヴァイオリンの音がしたから、とエレナは言った。
「今晩は、豪華な夜会服を着ていますね。」
「ええ、まあ……。」
少し悲しげに言った。
「今日も、何か曲をお願いしていいかしら?」
エレナは、甲板の上に膝を折って座り込んだ。
「もちろんですよ。」
彼女はこうして毎夜、斎木のヴァイオリンを聞きに甲板に訪れていた。
「……あなたの音楽を聴いている時が一番幸せだわ。」
眼を閉じながら言った。
「それは、光栄です。」
エレナの声が、とても哀しげな事に、精一杯気がつかないふりをして、斎木は彼女の為だけに、音楽を弾いた。
「このまま、時間が止まってしまえばいいのに。」
そうして、眼を開けて、高いところで、星の散る夜空を眺めた。
エレナの眼からは、涙が溢れている事に気がついて、斎木は、音楽を奏でるのを止めた。
そして、彼女の隣に座って、その切なげな瞳を見つめた。
「じゃあ、時間を止めてあげましょうか?」
「え?」
斎木は、自分の背広の中から、銀色に光る懐中時計を取り出した。
「僕がこの間の音楽コンクールで入賞したときの、副賞です。スイス製の高級時計ですよ。」
そして、その時計をいじって、針の動きを止めた。
それをエレナの胸にかけてやる。

「あなた、面白い事するのね？」
涙をぬぐったエレナは、意外そうに斎木を見た。
「そんなキザな事、あの人だってしなかったわ？もしかして、女たらしなの、あなた？」
あの人、とは、きっと婚約者のことなのだろう。
斎木は、せっかく気を利かせたのに、何やら色々誤解されてしまった事に落ち込んだ。
「元気になったのなら、その時計を僕に返してもらっても良いですか？」
「待って、今は時間が止まっているんでしょう？」
じゃあ、魔法を解かなくちゃね、とエレナの顔が、斎木の顔にゆっくりと近づいて、唇に触れた。
その瞬間、斎木は、夜の海から吹く風から彼女を守るように、自分の腕で彼女を包み込んだ。
「あなたの方が、よっぽどロマンチストでは？」
お互いの顔が、元の位置に戻ったとき、斎木は言った。
「ふふふ、そうかもね。フランスの詩集をよく読んでるからかしら？」
そう言って、エレナは首から懐中時計を外して、返した。
斎木は、もう一度いじりなおした。元のように、秒針が動き出す。
それを確認してから、背広の中へ大事そうにしまった。
それから、もう一度、今度は斎木の方から彼女に口づけた。

◆◇◆◇

斎木は、眼を覚ました。
窓掛（カーテン）から漏れる明りの量から察するに、まだ五時前だろう。
忘れようにも忘れられない記憶を、夢で見てしまった。
眠っていた為に、特に疲れるような事をしているはずもないのに、酷く体に倦怠感が残っている。

再び、眠る事はあきらめて、その体を起こした。

【斎木萩人】編（4）　悪夢

冷や汗が止まらない体を抑えながら、斎木は風呂の蛇口を限界まで開けて、湯船を貯めていた。
早く、熱い湯に浸からなければ、体が凍っていくように感じた。願うように、水位が上がる様子を見つめている。

◆◇◆◇

――忘れもしない、四月十四日の深夜、不沈船と呼ばれたタイタニック号を襲った悪夢の幕が上がる。

優しくエレナに口付けた後、少し離れて、今度はより深く吸った。その後、自分の顔の角度を少し変えて、別の方向から、ついばむようにして吸った。
まるで、何かを確か合うように、深いところで確かめ合ったあった。その熱い感触が愛おしくて、斎木は、エレナの腰に両腕を回した。
息が切れそうになったところで、もう一度お互いの顔を離して見詰め合う。不思議と二人同時に幸せな笑いがこぼれた。エレナも、斎木の背中に腕を回した。お互いの頬を寄せ合い、体温のぬくもりを感じた。
その時だった。
船の船体が急に大きく右に振った気がした。その衝撃でよろめきそうになったエレナを抱きかかえる。
「何かしら？」
操縦ミスか。いや、様子がおかしい。嵐の前の静けさにも似た不気味な静寂を感じた。
次の瞬間、地震が起こったかのように、足元が弾んだ。脳髄を揺さぶるかのような、強い衝撃。斎木はとっさに海に近い手すりの方

から離れ、中央の方にエレナを抱えたまま逃げた。
「何だ？」
北太平洋の暗闇の中には、靄が立ち込めていた。その中から、高さが二十メートル程もある氷山が前面の視界に入った。おぞましい巨人の化け物のようだ。斎木は絶望にも似た衝撃で、体の芯がやられてしまったように感じた。
「まさか、ぶつかったのか……？」
船首部分は回避したようだが、今の衝撃から考えるに、船全体に衝撃を受けたように思う。接触時間は、おそらく十秒程度。どの程度の影響を与えたのか、分からない。
しかし、乗組員が次々と慌しく動き出したのを見て、尋常ではない事態が起きた可能性がある事を斎木は悟った。深夜という事もあり、乗客の殆どは既に就寝している。が、先ほどの衝撃で次々と目覚めているに違いなかった。
「一旦、船内に戻ろう。」
「え……ええ。」
エレナを促し、二人は船内に戻った。甲板の騒々しい様子とは裏腹に、斎木の予想以上に落ち着いていた。ある者は、　不沈船と呼ばれるこの船が沈むはずはない、といい聞かされて安心したり、ある者は、本当に大丈夫なのか、乗組員達に詰め寄っていた。
「ああ、エレナ！」
一等客室の区画の前までエレナを送り届けに現れると、婚約者の姿があった。
「おや、君は？」
「二等客室の斎木と申します。彼女が甲板にいらっしゃったもので……。」
「そうか、どうもありがとう。」
婚約者は、不敵に笑って、エレナを斎木から引き離した。
エレナは少し寂しげに斎木を見たが、後から現れた両親に連れられて、自分の船室へ連れられていった。

「私の婚約者が、何かお世話になったかな？」
男は、斎木を見下すような視線を送った。
「音楽を聴きたいと仰ったので、拙い私のヴァイオリンを聴いて頂いていました。」
「ヴァイオリン？」
「僕は、音大生なもので……。」
「そうか。」
男は、ふん、と鼻を鳴らした。
「それは、お礼を申し上げないと。すみませんな、斎木殿。」
「いえ、お礼を言って頂く程の事はしておりませんよ。」
「……せっかくなので、君にいい事を教えてあげよう。先程の衝突の件だが、乗組員達は客に不安を与えない為にああ言っているが、この船は沈む。」
ぴくり、と斎木の眉が動いた。
「確かな情報だ。船の六区画で浸水した。海水が防水区画から溢れれば、船首から船尾に向かって浸水が拡大していくだろう。ボイラー室の損傷は酷くは無かったそうだが、浸水が進めば冷水が触れて、水蒸気爆発もありうる。」
五区画が浸水してしまえば、沈没は確定だ、と男は述べた。
「前の大型客船沈没事故から、救命ボートの搭載数は減らされたのを知っているか？」
実は、大型客船は、たとえ沈没しても救助までの時間に余裕があり、救命ボートは必要が無いと考えられていた。
「早くしないと、男は乗れないぞ？」
男は、斎木の耳元で囁いた。そして、顔を離して、傲慢に言い放った。
「二等客室の男が、一等客室の女性に手を出すものではないさ。身分違いの恋は身を滅ぼすぞ？でも、まあ、君とはもう会うことも無いだろうから、最後に俺の親切心で有益な情報を教えてあげたのさ。せいぜい、これを無駄にしないように頑張ってくれたまえ。」

皮肉たっぷりの嫌味を述べて、男は斎木に後ろを向けて悠然と去っていった。

◆◇◆◇

「カール！おい、いるか？バッカー教授？」

急いで二等船室に戻ると、あろうことに二人ともまだ寝台の中だった。

「なんで、この騒ぎの中に起きないんだ？」

「一度起きたさ、でも、このタイタニックは沈まない船なんだろ？心配してもしょうがないじゃないか。」

「沈まない？カール、外の状況を本当に確かめたのか？」

その時、爆発音が轟いた。ただ事ではない轟音に、とうとうバッカー教授とカールは飛び起きた。

恐らく、これがあの男の言っていた水蒸気爆発だ。

「急げ、浸水が始まる。六区画まで浸れば、この船はアウトらしいぞ。」

「本当か？冗談じゃな……さそうだな。」

カールが耳を澄ますと、大勢が慌てふためく足音が響いていた。

恐らく、救命艇（ボート）の準備がされ始めたのだろう。

「教授も早く。艇（ボート）の数が足りないが、教授だけは乗れるかもしれない。」

三人は、急いで甲板に上がった。そこは、まさに船上のような騒がしさだった。持てるだけの荷物を持って、右往左往する人、泣く赤子、女性、老人などを、乗組員が慌しく乗客を誘導している。

高齢の教授一人でも何とか救命艇に乗せたいが、乗組員が許さない。斎木歯は素早くまだ残っているボートを見回して、その中に男性も混じって乗っているボートを見つけると、そこの乗組員にかけあった。思ったとおり了承が得られたので、そこへひとまず教授を乗せた。

すでに、船は船体の一部が下に沈みかけている。暗い夜の闇に、窓からこぼれる船内の明りが反射して、亡霊のようにゆらゆらうごめいていた。衝突から二時間が経とうとしている。

しかし、圧倒的な救命ボートの不足から、まだ千五百名近い乗船客が船上に取り残されたままとなっていた。その上では、もう脱出する事をあきらめて、正装でワインを口に含みながら最後を迎えようとしている紳士や、恐怖に逃げ戸惑う乗客を勇気付けようと音楽を奏でる演奏団の姿もあった。しかし、何人かの乗客は、ボートに乗れない恐怖に狂ったのか、沈み行く船から逃れようと海に飛び込んでいった。

「……出来るだけ長く船上に居よう。そして、船が沈んだら、適当な浮き片の上に乗るんだ。」

斎木の判断に、カールも同意した。冬の大西洋の水温は零下二度。溺れ死ぬ前に低体温症で死んでしまう。

「だったら、それまで俺達もヴァイオリンを弾いて、他の客達を勇気付けよう。」

カールは、とっさに部屋から持ってきた、二つの音楽ケースを持ち上げた。

「持って来たのか？」

「当たり前だ。」

楽団に混じって、賛美歌の三百二十番を引くことにした。突然の参加者を団員は、快く受け入れてくれた。寒さで悴む手のせいで調べがが狂わないように気をつけながら、演奏する。

すると、今まさに降ろされようとしている救命ボートの中に、エレナを見た。斎木は、声を上げそうになったが、こらえて演奏を続けた。

しかし、エレナの方は斎木の存在に気がついてしまった。

彼女は、救命ボートから抜け出して、船に戻ろうとする。

一瞬の事で、周囲も止める暇も無かったようだった。彼女は、下の甲板に移ると斎木たちが居る一番上の甲板へ駆け上がってくる。

斎木さん、とエレナが斎木の胸に飛び込んだ。

「駄目なの、私。彼と一緒にニューヨークになんて行けないわ。」

私、あなたが好きになってしまったんだもの、と斎木の首にしがみついた。斎木は、どうして戻ってきたんだ、と言いかけた口を、エレナの唇でふさがれた事に気が着いた。二、三回、彼女の求めに応じる。

「駄目だ、エレナ。この船は直に沈むんだ。早く逃げないと……。」

その時、轟音とともに、タイタニックの船体が二つに千切れた。急に傾き始めた船体に、様々なものが振り落とされて、海へ落下していく。とうとう、沈没までの限界が迫ってきた。

その瞬間、斎木は自分の考えが間違っていた事を悟った。沈んだ後に、適当な浮き片に飛び移ったとしたら、沈む船の周辺の流れに飲まれて一緒に沈んでしまう。急いで、甲板にあった大きなテーブルを海に投げ入れた。木でできているなら、浮かぶはずだ。

「沈む前にこの船を出よう。あの木片にしがみつくんだ。その後で、ボートが浮かんでいるところまで、泳ごう。」

わかったわ、とエレナがいい、二人で一斉に飛び降りた。水面に叩きつけられた後は、凍てつくような寒さが待っていた。斎木はエレナを抱えて、浮かぶテーブルにしがみついた。平泳ぎをしながら、救命艇が集まっている場所まで数百メートルの距離を泳いだ。

どの救命艇も満杯で、斎木を助けようとはしなかった。すると、救命艇の六号だけが自分達の方から近づいてきた。どうやらその上に避難していた女性客が渋る乗組員を促して、助けにやってきてくれたらしい。その中でも、主だって周りを仕切っていた四十代くらいの貴婦人を見つけて、斎木は海の中から叫んだ。

「お願いだ。一等客室の女性がここに居る。俺はこの木片の上に乗るから、彼女をこの救命ボートの上に載せてやってくれ。」

「……あなた、ここまでの距離を泳いできたのね？」

貴婦人はは、斎木の必死の懇願に驚いた。そして、乗組員に指示

してエレナを引き上げると、斎木も一緒に冷たい海から脱出させてやった。冷たい海をエレナを抱えて泳ぎきった斎木の体は、強烈な震えが止まらない。体力は限界点に達し、昏倒した。

遠くの海では、既に明りも消え去った豪華客船の先端が、海の底へと消えた後だった。

◆◇◆◇

目覚めたとき、白い天井が眼に入った。左側の窓辺からは、陽光が燦々と降り注いでいる。まだ完全には覚醒しきっていない虚ろな瞳で、何かを考えなくては、と思う。起き上がろうと、背中に力を入れるとそれは可能になった。

「斎木さん、気がついたのね？」

良かったわ、と自分の背中を力をこめないように優しく包み込む。まるで、羽で包むように。その誰かからは、春の陽光の匂いがした。体が離れると、見覚えのある顔がそこにあった。最後に見たときよりも、少し大人びた顔つき。十五歳になった櫻子だった。

どうして、こんな所に居るんだろう？

彼女に話しかけようとしたが、唇は弱弱しく震えるだけで声は出ない。何度かそれを繰り返して、ようやく声を取り戻せた。

「あの、どうして、あなたがここに？」

櫻子はちょっと怪訝な顔をして首を僅かに傾げたが、やがて理解をした。

「きっと覚えていないのね。斎木さん、助けられた後、酷い低体温症のせいで、重度の昏睡状態になっていたのよ。二か月も眠り込んでいたわ。」

どうやらここは病院らしい。だから、壁も寝具も白で統一されているのだ。それに、手首からは、命を繋ぐ為の点滴の処置もされていた。

「あなたが沈没した船に乗船していた事やこの病院に運ばれた事

を、大学が連絡を下さったの。だから、父様と一緒に英國へ来たわ。父様は仕事が忙しいので直に帰国したけど、代わりに父の秘書の方が私についていて下さるのよ。」

その秘書は、昼間は二階堂財閥の英國にある事務所で仕事をしている。よって、櫻子だけが、日本での学校に長期休暇の申請を出して休みを取り、こうして毎日斎木の看病をしていたのだった。

そうですか、と櫻子に手を伸ばそうとした己の手を見て驚愕した。全ての指に、分厚い包帯が巻かれている。櫻子に聞かなくても、その鈍くなってしまったその動きから、どんな状態にあるか理解できてしまった。

そんな斎木に何も言えず、櫻子はただ悲しい眼をしている。慰めになるような言葉をかけても、余計に彼の心を傷つけてしまう事を、悟っていたから。

「そういえば、エレナは……あと、カール…一緒に乗っていた僕の友人は…？」

「教授の方も、あなたの同級生も奇跡的に無事だったわ。でも、あなたが助けたという女性の方は、低体温症のせいで病院でお亡くなりになったと教えていただいたわ。」

目覚めたら、斎木がきっと聞くと思ったので、警察に頼んでおいたのだ。しかし、受け取った連絡は最悪のものだった。

「エレナ……。」

斎木は、深く息を吐き、絶望で手で顔を覆った。

「斎木さんの服、海水で濡れてしまって駄目だと思ったんだけど、聞くまでは捨てないで置こうと思って取っておいたの。」

櫻子が、綺麗に汚れを取って乾かしてはあるが、塩分に浸かったせいで二度とは着れないだろう斎木の洋服を取り出した。斎木は、その服をまるで、誰かのなきがらを抱きかかえるように、腕に乗せた。その時、背広の胸元から何かが滑り落ちてきた。銀の懐中時計だ。

しかし、文字盤にもひびが入り、壊れてしまっている。針も同じ

時刻を差したまま、動かない。
　足元からひびが入り、そのまま奈落へと自分の心が崩れて落ちていくのが分かった。
（本当に止まってしまった……。）
　灰色の瞳を閉じて、深い睫毛の間から一筋の涙を流した。壊れた懐中時計に唇を当てる。
それは、ひんやりとして塩気を帯びた、絶望の味がした。

【斎木萩人】編（5）　疑惑

「これを、僕に……？」

次の日も櫻子は、斎木の元へやって来た。

そして斎木が、病院の昼食を寝台で食べ終わった時に、もじもじしながら、彼に銀色に光る懐中時計を渡した。剣道の試合に三つ連続で勝ったので、父親がくれたのだという。

櫻子は、斎木が二階堂家に来たときから、既に剣道を習っていた。どうして、習い始めたのだと聞くと、病弱な母親のか細い腕を見ていたら、元気なうちに体を強くしたい、という風なことを言っていたのを、ふと思い出した。

「うん。一緒の瑞西製の時計だけれど、斎木さんがもってたもの程高級ではないと思うの。出国前にもらって、英吉利に行くときに持ってきたばかりだから、まだ新しいのよ。だから、良かったら使って？」

どうやら、自分が壊れた時計を見ながら絶望的な表情をしていたので、気を利かせて自分にくれようとしているらしい。もじもじしているのは、代わりの時計を渡したところで、慰めになるのか、それとも余計に傷つけてはしまわないだろうかと、きっと悩んでいるのだろう。

十五の少女に気を使わせてしまった事に心が痛んだ。

「でも、せっかく旦那様が下さった大切なものでしょう？」

「ううん、いいの。代わりの時計は持ってるし、そうでなくても、時間が経ってるのは周りにある時計をみればすむもの。それに、父様には、これは斎木さんにあげます、って言ったの。」

父様は、おなじものを贈ろうとなさったんだけど…、と櫻子が小さい声で言った。壊れた斎木の懐中時計と同様のものの新品を梅造は見舞い品の代わりに送ろうとした。しかし、その時計を見て斎木が傷ついてしまう可能性を考えて、櫻子が止めたのだ。

もしも、斎木が傷ついたとしたら、十五の少女が父親からもらった時計をあげるよりも、自分が持っていたものと同じものの新品をもらうほうが傷つくだろうと考えたからだ。

もしかすると、「試合で勝った褒美」を「偶然持ってきていた」というのも、櫻子の嘘で、本当は最初から斎木の為にこの時計を用意していたのかどうかは、彼女のみぞ知るところではある。

「ありがとうございます、櫻子さま……。」

手の中の時計はひんやりとしていた。しかし、時計の中の秒針が規則正しく動いている様子は、斎木を温かい安心感で包んだ。

優しい顔で時計を見ている彼に、櫻子は安心したようだった。

「私も、ご飯を食べてくるわ。また戻って来るわね。」

そういって、櫻子は病室を出た。その後で、点滴の具合を見にやってきた。

斎木は、目覚めた時から、病室に訪れる看護婦達が、自分に酷く脅えているような気がしていた。

びくびくと斎木の様子を伺いながら、仕事をすませて帰っていく。

その後で、医者がやって来た。白い髭を生やした五十代位の老紳士である。

「やあ、斎木くん、元気そうになって、良かったよ。」

「あの、先生……。」

斎木は自分が看護婦に避けられているような気がすることを、打ち明けた。

「そりゃあ、そうさ、起きた当初の君の状態は大変、酷かったんだ。君は覚えていないだろうけどね。」

どうやら、自分が覚醒したとおもっていた日から、少し前に本当は目覚めていたらしい。

「ストレス障害だったんだ。窓掛やシーツを破り散らすし、大変気の毒な状態だったよ。」

全く記憶がない。医者の話によると、最初に目覚めた時、記憶にある二度目に起きた時と同じように上体を起こしてぼんやりと窓を

ながめていたらしい。
その姿を見て、気を利かせた看護婦が、持ってきたコップ一杯の水を持ってきた。それを見るなり、急に錯乱し始めたそうだ。獣のような唸り声を上げて、手につかめる物を引き寄せては投げつけていたらしい。
その時丁度、櫻子が見舞いにやってきて、斎木のただならぬ状態に慄いた。しかし、看護婦や医者と一緒に何とか斎木をなだめようと努力した。
とうとう医者が斎木に安定剤を打つと、そこでようやく落ち着く有様だった。
目覚めては暴れ、安定剤を打たれて眠る。その繰り返しに、もう人としての生活は出来なくなるのでは、と周囲は思った。ゆえに、あと一日様子を見てから精神病棟へ移す事を考えた。
その一日が、昨日であった。
この日から、斎木が櫻子を見る眼が少し変わる事になる。
日本から独逸へ立つ前までは、どことなくふわふわしたお嬢様のような印象を持ち続けていた。
しかし、錯乱した病人に怯むことなく、見舞いに来てくれていたことから、その見た目の割には、肝が据わっているというか、簡単な事には物怖じしない勇敢さみたいなものを垣間見気がした。

◆◇◆◇

「櫻子さま。」
斎木が、屋敷の一階の廊下で櫻子を見かけたので声をかけた。
「神谷さまが新しい夜会服の仕立ての件でいらっしゃいました。和室で待って頂いています。」
「あら……そ、そう、ありがとう。すぐに行くわ。」
櫻子は、あの衝撃的な日から、斎木とはまともに眼すら合わせられずにいた。
斎木の首から肩にかけての滑らかな筋肉のつき方とか、腕の逞し

さなどがほの暗い中でも記憶に焼きついて離れない。
目の前で微笑んでいる斎木の白いシャツの下に、あんなにもなまめかしい隆起が隠されているのだ、と櫻子自身は考えたくなくても、脳が勝手に反応してしまうのだ。本当に困る。
「あと、ダンスの練習の件ですが、専門の講師の方を手配いたしましたよ。」
え、とその時は斎木の眼を見てしまった。
「あなた、十分に教えるのは上手じゃないの。」
「いえ、やはりその道の方に習ったほうが良いかと思いまして、旦那さまとも相談しまして、そうすることにいたしました。」
そんな話は聞いていない。
しかし、夜会の日も斎木は、練習とはいえ使用人と踊るなど云々、といい続けていた事を思い出した。役目に忠実なのか、それとも単に自分に教えるのが嫌なのか、櫻子には分からなかった。もしかしたら、斎木に嫌われているのではなろうか、とも考えてしまう。
「桜子さま？」
俯いた櫻子の顔を斎木が覗き込んだ。その拍子に、シャツの襟の間から、鎖骨がのぞいたので、櫻子は自分の心臓が一瞬飛び跳ねたように感じた。
「い、いやぁぁ！」
そして、頬を両手でおさえて、その場から逃げ出した。
「櫻子さま？」
そのまま廊下をぱたぱたと駆けていく櫻子の前で、遊戯室の扉が開かれた。そして、その中から出てきた人物の胸の中にそのまま突っ込んでしまった。
「痛っ……なんだ、櫻子、どうしたんだ？」
櫻子が顔を上げると、驚いているのは、右手にビリヤードのキューを持ったまま出てきた桃真だった。藍色の着物は、遊戯に熱中しすぎていたのか、若干、胸元がはだけている。
「いやぁぁん！」

櫻子は、兄も軽く突き飛ばして、階段を上って自分の部屋に入っていってしまった。

「なんだ…あいつ、どうしたんだ?」

桃真は、怪訝な顔で首を傾げている。斎木も、あっけに取られた顔で、それを見ていた。

「おまえ、あいつに何かやらしいことでもやったのか?」

「いえ何も……。」

顔の前で白い手袋をはめた手を振る斎木を見て、冗談だよ、と桃真は言った。

しかし、ほんの数秒前までは、にらみつけるような据わった眼で自分を見ていたように、斎木は感じた。

◆◇◆◇

「ねえ、柊君。」

「なんですか、斎木さん?」

「お嬢さまの様子が最近どうもおかしいような気がするんだが、気のせいだろうか?」

洋館の周りのバラ園で選定を行っていた柊に声をかけた。季節は秋だが、園内には色とりどりの薔薇が咲き誇っている。

柊は、しばらく気まずそうに考え込んだ。本当の事を自分が言い出して良いものかどうか、悩んでいたのである。

「なんですか、何か気がついていることでもあるのですか?」

人の顔色を敏感に読み取る事に長けている斎木には、彼の分かりやすい態度はばればれだ。

「いや、実は、僕も見てしまったんです。」

「うん?何を?」

「……その、斎木さんがリンさんと怪しげな事をしている所を。」

「ああ。」

斎木が、特になんでもないような顔をしたので、柊の方が返って驚いた。

「いえ、僕は見なかった事にするつもりなので、安心してください。」

「いや、君は、これから住み込みの執事として重要な仕事につくこともあろうから、それでは困る。」

「は？」

わけがわからない。

「リンさんは、斎木さんの恋人ですよね？僕みたいな新米執事がどうして、斎木さんの恋愛状況について把握する必要があるんでしょう…。」

「はい？」

今度は、斎木が眉をしかめる番だった。

「彼女は、私を脅していたんですよ。自分に口づけしなければ、屋敷に火をつけるだの、お嬢さまに危害を加えるだの、と言ってね。」

一度、若い自分の唇を味わえば、簡単に篭絡できるとでも思っていたんでしょう、と斎木は淡々と述べた。

唖然とする柊に、斎木はこう付け加えた。

「使用人としてはこういう事は禁忌（タブー）ですが、よくある事ですよ。家令が若い女中にたぶらかされて、屋敷の金庫から盗んだり、会計を改ざんしてお金を貢いだりする事件はね。」

公になれば家の恥になる為、なかなか外には聞こえませんけどね、とため息と一緒に言った。

「な、なんで、彼女を追放しないんです？」

「勤務態度は一応真面目ですし、口頭の脅しだけでは、解雇理由には出来ないでしょう。第一、私しかそれを聞かされていないのだから、彼女がそういう事を言ったという証拠を立証するのは難しいでしょう。」

そりゃ、そうだ、と柊は納得した。しかも、斎木は助言はするが使用人の人事決定権はない。

「だからって、あんな事を斎木さんがなさらなくても……。」

「家の揉め事の種を内々に処理するのも私の仕事ですから。それに、家令を篭絡できないと分かれば、彼女もあきらめて、いずれ自分から辞表を出すでしょう。常習犯っぽいですからね。」

しかし、お嬢さまに見られていたとなれば、やっかいですね…と斎木は言った。

「そもそも、櫻子さまは、使用人が使っている別館への立ち入りは禁じられているはずですのに、どうして、来なさったのでしょう？」

「さあ、それもリンの仕業なのではないですか？」

なるほど、と斎木は親指で顎を触りながら、何かを深く考え始めた。

「考えられるのは、保険をかけたかったからでしょうね。」

「保険？」

「何か、責められる事が出来たとしても、私に脅されていた、あるいは命令されていたとでも言い張るつもりなのでしょう。」

つまり、櫻子は斎木とリンがただならぬ関係である事を証言してくれる都合のいい目撃者に仕立てあげられたのである。

「げ、あくどい！」

柊は、思わず地で言ってしまった。

「お嬢さまに、説明しないのですか？」

「私から説明したところで、信じてもらえなかった場合、私が不利な立場になります。逆に、お嬢さまが私の方を信じるならば、立場の悪くなったリンは次にどんな行動を取るのか予測がつかない。」

「あー、なるほど。」

柊は、孤高の斎木が、いつもこうして内々に二階堂家の揉め事を処理してきたのだと思うと、将来自分もそんな風に知恵の回る執事になれるのか、少し不安になってきた。

「と、いう事で、柊君もくだらない罠に引っかからないように注意してくださいね。屋敷の外でも中でも二階堂家に悪さをしようとたくらむ連中がいないとも限らないですから。」

「わかりました。」
「使用人は、中国の宦官のように、強制的に自由を制限される存在ではないですが…。
できれば恋愛はしないほうが好ましいですね。」
「あの、宦官ってなんですか？」
柊は斎木の説明を聞いて、聞かなきゃ良かったとちょっぴり後悔した。昔の人は、やり方が極端すぎる。
「私は、君自身が考える以上に君を評価していますよ。これからも、良い仕事をなさって私を助けてくださいね。」
「あ、はい、ありがとうございます！」
斎木は、やわらかな微笑を柊に向けて、その場を去った。そして、櫻子に知れた事を知った今、次にどうするべきかを考え始めた。

「え、一緒について来てくれないの、兄様？」
「約束したのにすまないな、急に予定が入ったんだ。」
土曜日の朝食後の席で、言われた。
「いいわ、わかったわ。」
もう少し、言ってくれればよかったのに、と思うが、仕方ない。
その時、斎木は家の前に車が止まった気配を感じた。
（おかしい、今日は誰も来客の予定はないのに。）
しかも、こんなに早くから、一体誰だろうか。
「誰かお客さまがお見えになったようなので、失礼いたします、桃真さま、櫻子さま。」
「本当？誰かしら。お願いね。」
斎木が門の前まで行くと、黒塗りの車が止まっていた。見たことがあるな、と思っていると、助手席の扉が開き、背広に身を包み、花束を抱えた男が現れた。
先日の成金貿易商、楡崎蓮一だった。
「おはようございます、執事殿。」
「おはようございます、楡崎さま……あの……。」
「いや、約束は何もしてはいませんよ。ただ、今日は仕事の都合がついたものでね。一度お断りされましたが、もしお嬢さんの都合が変わっていれば、と思いまして、こうしてあきらめきれずにお誘いに来たのです。」
と、余裕たっぷりの笑顔を返した。
「はあ……。」
斎木が、通すべきかどうか迷っていると、桃真が現れた。
「これは、楡崎さん。わざわざどうも。」
造り笑顔も浮かべずに、桃真が淡々と挨拶した。
「桃真さまですな？櫻子さんの兄上さま、おはようございます。」

「……櫻子の意向を聞かねばわからんが、とりあえず、立ち話もなんだから、入ってくれ。斎木くん、応接間にお通ししてくれ。」
「あ、はい。」
桃真はそういって振り返ると、一人で屋敷の中へ戻っていってしまった。
「では、こちらにどうぞ。」
斎木は桃真の指示通り、楡崎を応接間に案内する事にした。

◆◇◆◇

午後、斎木は書斎で本や資料の整理をしていた。
梅造の秘書の一人である神谷は、今日は休日を与えられていた。
しかし、仕上がった夜会服を、屋敷に届けにきたついでに、斎木を手伝う事にしたのだった。
ちなみに梅造は他の秘書と一緒に、出張中である。
「しかし、せっかくのお休みのところを手伝って頂いて良かったのですか?」
「いいですよ。どうせ暇でしたし。」
夕刻、斎木は、神谷の為に熱い紅茶を注ぎながら言った。
その時、扉が閉まる音と、階段を上る足音のようなものが聞こえた気がした。
「ん?」
「どうしました、斎木さん?」
「お嬢さまが帰られたのだろうか?今、人の気配がしましたね。」
天井を怪訝に見やりながら、斎木が言った。
「帰ってこられたら、ただいまくらい仰るでしょう?鼠の仕業ではないですか。」
それもそうだと思って、斎木は思い直した。
二人は、残りの仕事をやりおえて、書斎を一緒に出た。
廃棄する物を抱えながら、廊下を歩いていくと、夜着の櫻子が和室に入っていった。
「どうしたんでしょう?」

濡れた髪に隠れた顔が、あまりにも深刻であったので、神谷が後をついていこうとした。その方を優しく掴んで、斎木が阻む。

「私が参りましょう。神谷さまは、こちらをお願いできますか？」

「ええ、いいですよ。」

斎木が抱えていた荷物を受け取った神谷は、それを処分する為に別の方向へ向かって歩き出した。

斎木は、急いで和室に入る。扉は、開いたままになっていた。

「失礼します。」

急に入り込んできた人物に、櫻子の方もぎょっとして動きを止めたが、斎木も櫻子を見て取り乱した。

「お、お嬢さま？」

なぜなら、櫻子は大きな布きり鋏を持ち、自分の首に今まさに突き立てんとしているように、彼の角度からは見えた。急いで、櫻子の手から、鋏をひったくるようにして奪い去る。

その素早い動きに、櫻子は抵抗すらできなかった。

「どこか、どこかお怪我はなさいませんかっ？」

急いで、櫻子の首筋や肩を確認する。そして、傷などが何もなかった事を確認すると、安堵して、櫻子を抱きしめた。

「良かった……。」

「斎木……？」

名前を呼ばれて、はっと気がついた斎木は自分の体を離すと、動揺しつつも櫻子に聞いた。

「一体どうなさったのですか？あんなに尖った鋏を持ち出して…。」

「髪を……切ろうとしていたのよ。」

「はい……？」

斎木は少し首を傾げた。しかし、まだ櫻子の髪が濡れていることや、何やら思いつめた顔をして和室に入っていったことを思い出し、理解した。

「嘘おっしゃい。髪なら美容院に切りにいけばよろしい事でしょ

う。」
「でも……。」
「あの、楡崎という方が、何かなさったのですか？」
その瞬間、櫻子の顔が険しい物に変化したのを察して、斎木は確認した。
「ぶ、無礼な人の話はしないで！」
「わかりました。斎木もこれ以上は聞きません。」
「お願い、もうあの方を屋敷にお通ししないで。あと、この事は、父様や兄様には内緒にして？」
「……かしこまりました。今度、約束なしでいらっしゃった時には、私が適当に理由をつけて帰っていただくことにします。」
ですから、今晩の事はなかったことにしましょう、と畳の上に落ちていた布を櫻子の頭にかけてやった。
「さあ、風邪をお召しになってしまいますよ……ん？」
その時、櫻子の足の甲が僅かに腫れているのを見逃さなかった。
「足にだいぶん疲れが溜まっているようですね。」
「浅草を歩いたからかしら。足首や土踏まずが痛いわ。多分、寝れば治るんでしょうけど。」
「そうですね。少し香油で指圧して差し上げましょうか？」
え、っと櫻子が顔を上げた。
「旦那さまがお疲れの時も、そうして差し上げているんですよ。足は健康にとって重要なところで、足の裏の状態を見て、内臓の調子まで当ててしまう方もいるそうですよ。」
柔和な笑顔でそう微笑みかけると、ちょっと待ってて下さいね、と言って香油の瓶を取りに戻っていった。そして、香油と櫻子の為に厚手のガウンを持って再び和室に戻ってきた斎木は、囲炉裏に火をくべた後、櫻子を椅子に座らせて指圧を始めた。
「今日の疲れというよりは……胃の調子が良くないようですね。」
「胃が？」
「……はい、最近、何かを食べすぎたり、それとも何かに悩んだ

りはなさっていませんか？」

「ううっ……。」

何やら、思い当たる節があるらしい。しかし、その内容までを聞こうとはしなかった。

「ちょっと緊張されていますね。どうぞ体の力を抜いて楽にしてください。」

そんなことまで、足の裏でわかるのか。

しかし、他人に足の裏を揉んでもらうなど、櫻子には実は初めての経験だった。執事とはいえ、男性に跪かれたまま、足の甲や指をさすってもらうのは、緊張した。

しかも、相手は斎木だ。事故さえなければ本当ならば明るい照明が当たる舞台で、人々の喝采を受けていたはずの演奏家の手が自分の足の世話をしているのだと思うと、少し変な気分になってしまうのだった。

皮膚を保護する為に塗られた香油が蒸発して、かすかな良いにおいが鼻腔をくすぐる。そして、指圧されるたびに、今日の疲れが―精神的な疲れも含めてが、ぷちぷちと潰されて消え去るような気がした。

斎木の温かい手に包まれて、血行が良くなってきた足は爽快で、気持ちがいい。

「どこか、特に押して欲しいところはございますか？」

「指の間……かしら？」

やっぱり気疲れですかね、といいながら、斎木は念入りに指圧した。それとも、性格的に人に気を使いすぎる性質（タチ）なのかもしれない。

足首やふくらはぎの指圧を終えて、最後の仕上げにかかろうとした時、斎木は櫻子がすっかり眠ってしまった事に気がついた。

「おや……。」

すーすーという規則正しい寝息が聞こえる。

櫻子は、斎木が運転手をした時、どんなに疲れていても決して車の中で眠ろうとはしない程、人前で眠りこける事ができない人だっ

たのに。どうやら、楡崎と一緒に出かけて帰った時点で、すっかりお疲れだったらしい。

髪の中に手を入れて乾いている事を確かめると、櫻子をゆっくりと腕に抱きかかえた。そして、彼女を起こさないように、ゆっくりと階段を上って、部屋の寝台に横たわらせて寝かせた。

（Ｇｕｔｅ（グーテ）　Ｎａｃｈｔ（ナハト）．）

心の中でおやすみなさい、とつぶやいて、そっと部屋の扉を閉めた。

◆◇◆◇

「斎木さん。神谷さまがお帰りになりました。斎木さんによろしくお伝えくださいと。」

階段を下りてきた斎木を見つけて、柊が声をかけた。

「君が見送ってくれたんだね。どうもありがとう。」

「いいえ。」

穏やかに微笑む斎木を見たとき、柊の心の中にことり、と落ちる何かがあった。

「斎木さん、お嬢さまの事がお好きなんですね？」

つい、口に出してしまって、げっ、何て事をしてしまったんだろう、と気がついたが遅い。

「はい……？」

「いえ、先ほど声をかけようとしたら、櫻子さまをお部屋に連れて行かれる所だったので、ここで待っていたんです。斎木さん、いつも僕や周りに優しい顔をされるでしょう？でも、櫻子さまを見る時はこう、格別にお優しそうなお顔をなさるので……。」

階段を櫻子を抱きながら上っていくときの、斎木の顔を柊は見てしまったのだ。母親が赤子を抱くときのような、慈しみと愛しさに満ちた微笑を。

予想もしていなかった不意打ちに、斎木は衝撃を受けた。

「愛していますよ……。」

斎木は認めた。あろうことにも、自分の部下にそれを指摘されるとは思っていなかったが。

柊の問いを認めたとしても、誤魔化したとしても、斎木のとる道は一つしかないのだから、それなら自分の心に正直であるほうが良い。

「しかし、君にこの間お話したように、執事は恋をしないほうが職務上都合が良いのです。家族や恋人に向ける愛情よりも、主に忠誠を尽くせる者の方がよいでしょう。執事の結婚を禁じているお屋敷もあります。」

「では、斎木さんはもしかして、一生結婚をしないつもりでいらっしゃるのですか？」

「そのつもりですよ。」

「どうして、そんな……。」

柊は、斎木が少し悲しげな目をしたのに気がついた。そして、自分の上司に向かって、さらに余計な事を口走ってしまったのだ。

「だったら、執事を辞めてしまえばよろしいじゃないですか。そうすれば、櫻子さまの前に行けるでしょう？」

斎木は、自分とは二十センチは差があるだろう柊を優しく見下ろして言った。

「私が結婚をしない理由は、他にもあるのです。」

――美しき、エレナ・アディントン。

自分が、その時間を止めてしまった女性。

もしも、あの時、彼女のキスを拒んでいたら、沈み行く船に戻ることもなかっただろう。

「私は、身分も違う高貴な、しかも婚約者のいるエレナと親しくしてしまい、その結果、彼女を死なせてしまった愚かな男なんですよ、柊くん。」

悲報を聞いた時から、自分の心はずっとあの夜に沈んだ豪華客船と一緒に、暗い海の底へ置いてきてしまった。

「じゃあ、どうして、櫻子さまをお好きになられたんです？」

氷のように心を閉ざしていたならば、どうしてまた恋心が芽生えてしまったのだろう。

しかも、自分の使える主に。

「それは……。」

その答えは、斎木にも分かりかねなくて、同時に深く思い知らされていることでもあった。

自分は彼女を好いている。その理由づけをする事ができない程に。

執事として働き始めて、七年の間にそれは大きく育っていった。

彼女が自分にみせる、ちょっとした思いやりに魅かれていった。

櫻子からあの時計をもらってから、斎木の時間は流れ始めたが、最初はまだ、十五歳の彼女の事を好きでも何でもなかった。それが、時計をもらったことで、今までなんとなく見過ごしていた彼女の気遣いが目に見えるようになった。

降り積もるように、愛しさが自分の心に蓄積されていった。その気持ちを、言葉で表現せよ、と言われたら、「愛している」という言葉以外に、適当な言葉があるだろうか？

でも、同時に、エレナを失ってしまった自分が、別の誰かを愛してしまった事で、自分に恐怖すら覚えた。その人が亡くなったからといって、別の人を愛せるほど、自分の愛は薄情なものなのだろうか、と。

それに、もう誰とも話すことすらできないエレナを差し置いて、自分だけが恋をして幸福（しあわせ）になるのは、罪な事のようにも思えた。

「私は櫻子さまを愛しています。でも、抱きしめて、口づけ（キス）する事は許されていません。」

「そんな…許すとか…許さないとか…。」

「忍ぶ恋でも、私は幸せなのですよ、柊くん。」

そういって、微笑む斎木に、それは本当ですか、と柊はずばり問うた。

「あ、すみません、口が滑りました。わ、忘れて下さいっ。」

そして、言ってしまってから、また、酷く後悔した。

「失礼いたします、斎木さん！僕、仕事に戻ります！」
柊は、誤魔化す為に、斎木の元を走り去った。
（辛くないわけなんかにないに決まってるのに、あああ自己嫌悪！）
斎木の魂は檻に捕らわれたままなのだ。自分で自分の気持ちを無意識に殺している。
なのに、その恋が幸福（しあわせ）なのか、と残酷な事を聞いてしまった。
楡崎が訪問する度に、ふとした瞬間に斎木が苦い顔をしている事に、こっそり気がついていたというのに。
（柊秀介の、愚か者めが！）
自分で自分を罵りながら、柊は残りの仕事を片付ける為に、厨房へ急いだ。

「素敵だったわ、神谷さん、あの夜会服！」
日曜日、朝食後に梅造を迎えに現れた神谷に、櫻子は声をかけた。
「いえ、喜んでいただけて、良かったです。」
神谷は、眼鏡の奥で、微笑んだ。
桃真は朝から出張の為に家を発った。昨日、自分の頼みを断ったくせに、浅草で女性と一緒に居た兄に、複雑な気持ちだった。しかし、それを悟られるよう、送り出したばかりである。
「いってらっしゃませ、旦那さま。」
リンや他の女中達にも見送られながら、梅造は仕事に出かけていった。彼は今日から米國に出張に行く予定である。
その後、しばらくすると、門にまた車が止まった。
「忘れ物でしょうか？」
その気配に気がついて、斎木が慌てて扉を開けて、外へ出ようとすると、その前には楡崎蓮一画立っていた。
「おや、あなたは。」
「すみませんね、執事殿、楡崎です。」
「どのような御用で……？」
「お嬢様が、私の車に櫛をお忘れになったのでね、お届けにあがりました。」
「そうですか、ではここで私が受け取りましょう。」
「おや、通しては下さらないのかな？」
「二度もお約束なしに来ていただくと、こちらもどうしたらよろしいのか…。」
斎木は、言葉を濁した。
「今日は、日曜日でしょう。固い事は仰らずに。お嬢さんは、いらっしゃるのでしょう？」
「はい、しかし、お通しさせて頂く事はできません。」

斎木の態度に、楡崎は眉を上げた。
「すみませんが、今日のところはお帰り下さい。」
「頑固な執事だな。いいさ、わかった。二階堂氏に直接申し込みに行くさ。それで許可を得られれば、問題ないだろう?」
「まあ、その通りですが……。」
そこで、斎木はすっと楡崎の耳元で小さく囁いた。
「昨日、お嬢様に無体な事をなさったのでしょう?斎木は存じておりますが、まだ旦那さまに報告してはおりません。」
楡崎の顔が僅かに動揺したのがわかった。
「旦那さまがお怒りになられてもしりませんよ。あなたは、貿易商です。海の上で物が運べなくなったら、どんなに事業に影響が出ることか……死活問題ですパナマ運河を通れなくなったら困るでしょう?」
悪魔のように囁かれて、楡崎はふっ、と短く笑った。
「これはなんて守備の固いお嬢さまだ……いいでしょう。今日のところは、ここで帰ります。」
そういって、櫻子が落としたという櫛を包んだ布ごと渡す。
「また、来ますよ、執事殿。」
そういって、車に乗って去っていった。
「毎回思いますが、本当に傲慢そうな方ですね……。」
剪定をしていた柊がひょっこり現れた。
「なんだ、柊くん、居たのですか。」
「はい、すみません。ところで、パナマ運河の話って、本当なんですか?」
「はったりですよ。」
「えっ?」
あっさり斎木は言い放った。
「私は、あくまで内向きのお仕事しかしていませんので、財閥のお仕事に関しては全く知りませんからね。」
なのに、何か思い当たる節でもあったんでしょうかねぇ、と呑気

である。
　この人は、黒い性格の人ではない、と柊は希望を持ちたい。きっと、執事として様々な仕事を処理していくうちに、処世術を身につけてしまっただけなのだと。
（さ、斎木さん…僕もいつかあなたのような執事になれる日が来るのでしょうか？）
　それは果てしなく遠い道のりのように、柊には思えた。
「では、私は戻りますので、剪定頑張ってくださいね。この寒空ですから、冷える前に適度に休憩を取ってください。」
「あ、はい、ありがとうございます。」
　そうして斎木は、戻っていった。

◆◇◆◇

　その数分前、屋敷の中で櫻子は洋菓子を作っていた。
　彼女の趣味である。
　今日は、いつも世話になっている神谷にお礼の意味を込めて、何か焼き菓子でも作ろうと、材料を測っていた。
　彼は、兄とは違って、甘いものはそれなりに好きなほうだったから。
（小麦粉と、卵と、あと何が必要だったかしら？）
　あ、牛乳、と思い出しながら、大瓶を軽量用の容器に注ぎいれる。
「櫻子さま、楡崎さまがお帰りになられるみたいですけど、よろしいのですか？」
　窓の中から、門を見やりながら、リンが別の部屋から駆け寄ってきた。手には火熨斗を持っている。
「ああ、いいのよ。斎木にそう頼んだの。」
　そう言って、また手元に手中し始めた。
「あの方はあまりお気に召さないのですか？」
「あまりね。強引な人は苦手だわ。できれば、情熱的な方より、優しい人の方が私には合うと思うわ。」
　あと、あの方には、常識も少し必要ね、と櫻子は少し怒ったよう

な声を上げた。
「羨ましいですわ、桜子さま。あんなに素敵な方とお近づきになりながら、振っておしまいになるなんて…。」
「そうね、素敵な方だけど、私には合わなかっただけよ。」
「なのに、贅沢だわ、憎らしい人……！」
そういって、リンは、厨房にずかずかと入り込んで、小麦粉の袋を櫻子にぶちまけた。
何が起こったのかわからないが、喉に入った粉に咳き込んでしまう。
「ど、どうしたの、リンさん？」
「あんたなんかっ！！」
そうして、火熨斗を振り上げた。
顔に当てられると思った櫻子は、顔を肘で覆いながらしゃがんだ。
ぶつかる、と思った瞬間、間に割って入ったのは、斎木だった。
「何をしているんです。主人に危害を加えるとは。」
斎木の右腕から、ジュウ、と火熨斗が触れた音がした。
しかし、それにかまわずに、左手でリンから火熨斗を奪い取る。
「残念ですね、リンさん。旦那さまに報告しなくてはいけません。あなたは解雇になるでしょう。」
斎木の冷徹な瞳で見下ろされて、リンは机の上の物を床に叩き落すと、厨房を出て行った。きっと屋敷からも出て行ったのだろう。
「派手にやっていきましたね。」
床に散らばった卵や、牛乳、調理器具を見ながら、斎木が言った。
そして、自分の背広からハンカチを取りだすと、櫻子を頬を少し、ふいた。横髪に溜まった小麦粉を、指で軽く払い落とす。
「櫻子さま、真っ白です。」
「あ、あの……。」
櫻子は、目の前で起こった状況をまだうまく理解できていないようだった。
「何か悪い事を言ったのかしら？」

「いえ、おそらく何も。」
ハンカチを彼女に握らせて、斎木は微笑んだ。
「さ、斎木、どうして、彼女を……追いかけなくていいの？」
急に、我に返って、斎木に言った。
「どうしてですか？」
「どうしてって、彼女はあなたの良い人なんでしょう？どうしていきなり、と思ったけれど、斎木はいつも私に優しいでしょう？例え、それが仕事でも、女性の方からすれば、自分ではない異性に優しくする所を見ているのはつらいわ。」
「……はい？」
「彼女、きっと私に嫉妬したのよ。やっぱり、足の疲れを取ってくれた時、断るべきだったんだわ。きっと、彼女もどこからか見ていたに違いないのに、私ったら馬鹿だわ。」
だから、私の事はいいから、追いかけてあげて、と叫んだ。
やはり、柊の言うとおり、誤解をされていたようである。
「彼女とは、あなたが考えていらっしゃるような関係ではありませんよ。」
斎木は、これまでのいきさつを櫻子に話した。それを聞いて、目を丸めて驚いた顔をしていたが、やがて納得したように、うなづいた。
「そうだったの。玲子の家でも、お金が流用されていた事が最近わかった、と言っていたわ。女中頭が若い新米執事にたぶらかされて、会計からお金をくすねていたのよ。」
どうやら、外に漏れていないだけで、最近、富豪の屋敷でそのような事件が多発しているらしいと、親しい屋敷の執事から教えてもらった事があり注意していたが、どうやら噂は事実であったらしい。
「しかし、私があと少し戻るのが遅ければ、大変な事になっていましたね。申し訳ありません。」
「そうだわ、あなた二の腕を……！」
「え、あの、桜子さま、ちょっと？」

櫻子は、斎木の上着を剥いで、ボタンを外し、シャツをはだけさせて、右腕を見た。
「やだ、赤くなっているわ……。」
「大丈夫ですよ。冷やせば治ります。今が寒い時期で幸いでした。」
もしも上着を着ていなかったら、もっと大変な事になっていただろう。
「待って、今、氷水を作るから。」
「待ってください。」
立ち上がろうとした櫻子の腕を掴んで、引き戻す。
「あなたの方が酷い状態です。鏡で自分の顔をご覧になれば、さぞやびっくりされますよ。……睫毛の先まで真っ白だ。」
そして、腕を伸ばして、睫毛についた粉をやさしく払った。
「……私、きっと嫉妬していたんだわ。」
「え?」
櫻子が急に、思いがけない事を言った。
「だって、私、このままお願いすればリンさんが傷つく事が分かっていたのに、断れなかったんだもの。どうしてって、思っていたんだけど、分かったわ。今みたいに、いつもあなたは優しいのに、それはきっと私が主人だから優しくしてくれているんだと思ったら、ちょっと淋しい気がしてたのね、きっと。」
はあ、と櫻子がため息をついた。
「私って本当に子供だわ。」
それを聞いた斎木は、驚いて、落ち込む櫻子を見つめた。
「……それが嫉妬だと言うなら、私のもきっとそうだったんでしょう。」
「え?」
「櫻子さまは私を指名してくださいましたのに、私は、あなたにワルツを教えたくなかった。その理由が、今まで分かりませんでした。」

自分が教えた足どり（ステップ）を、他の貴公子と踊るのだと思うと、耐えられなかったのだ。その事に気がつかずに、なんとか他の理由を見つけようとしていた。

「もし、他の誰かと踊る所を見てしまったら、私は嫉妬で狂っていたでしょう。」

そう言って、伸ばした手を櫻子の頬に沿えた。櫻子は、その手に自分の手を重ねて、頬と手の平で斎木の体温を感じた。

そして、どちらからでもなく、唇を合わせた。

羽が舞い降りたかのような、軽くて優しい口づけ。

斎木は、もう片方の腕を櫻子の背に回して、包み込んだ。

「今まで、気がつかなかったけれど、楡崎さんと会ってから、恋ってどういうものか私なりに考えたの。そして、昨日、足の疲れを気にしてくれたのを見て思ったの。私、優しいあなたが好きだわ。」

櫻子は、体重を斎木に傾けるようにして、その体に寄り添った。触れ合った場所から、彼の心臓音が聞こえてくる。

「あなたは、私の事を好いていてくれるのかしら?」

そう尋ねた櫻子に、斎木は何も言わずにもう一度、口づけを落とした。

（Mein（マイネ） Herz（ハーズ） verlangt（ヴァラント） nach（ナハ） Dir.（ディア））

心が求めています、と頭の中だけで独逸語でつぶやきながら。

「でも、私は、エレナ・アディントンを殺してしまった人間です。」

斎木は、櫻子を抱きしめたまま、言った。

「エレナさんの死は私にとっても残念だったわ。あなたが責任を感じているという事も知っているけど、……でも、あなたのせいではないのよ。」

沈み行く船に戻ることが死を意味することは、彼女も知っていただろう。それでも、彼女は婚約者とニューヨークに行く事を選ばなかったのだから。

「それに、あなたには、楡崎さまのように、お金も才能もある方

がこれからも沢山現れるでしょう？一介の執事なぞ、あなたには身分違いです。私は、あなたの幸せを邪魔してしまう存在にしかならない。」

「わたしが、そんな事を気にする女性だとでも？」

「思わないから、余計に辛いのです。何もしらない世間から見れば、あなたは執事にたぶらかされてしまったお嬢さまだ。私には、その方が辛い。」

「だったら、執事を辞めて、私を迎えにきてくれたらいいじゃないの。」

今度は、櫻子の方から、斎木に口づけた。

「今度の夜会は、父様は仕事に必要不可欠だと言っているけど、本当は、財閥やその取引先、お世話になっている華族、外国の駐在大使の人々を招く気なの。きっと、次は、本気でその中から気に入った人を私にあてがう気かもしれないわ。」

悲しげに、櫻子は言った。

斎木は、その言葉に、唖然とした。櫻子が、本当に見知らぬ誰かのものになっていく姿が、もう間近に迫っていたなんて。

「だから、今、勇気を出して言ってみたの。もしかしたら、本当に時間がないかもしれないから。」

「櫻子さま……。」

「うん、だからありがとう、斎木さん。……私、湯を浴びてくるわ。」

そういって、櫻子は、粉まみれの自分をどうにかする為に、厨房を出て行った。

◆◇◆◇

斎木も、粉まみれの櫻子と抱き合った為に、着替える事にした。そのついでに、自室の風呂に熱い湯を張って、しばらく浸かる事にした。

今日は蓄音機は流さす、本も持ち込まず、ひりひりする二の腕が浸からないように注意しながら、入った。

その時、部屋の扉を叩く声がした。
「斎木さん、居ますかー？」
「柊くんか？私は入浴中だ。そのまま入ってきていい。入ってくれ。」
一度、湯から出て、浴室の扉を開けてから声をかけた。これなら、部屋の扉の外まで聞こえるだろう。
「失礼します。」
柊は、浴室の扉の前まで進んで斎木に尋ねた。
「斎木さんに、郵便物です。海外からの消印もあるみたいですよ。あと、厨房が、地獄絵図みたいな状況ですけど、あれは片付けたほうが良いのですか？」
厨房をそのままにしていた事を思い出した。
「すまない、そうしてくれ。」
「わかりました。あと、斎木さん、ちょっとこれ。」
柊が、少し浴室の扉を開けて、紙に包まれた何かを滑り込ませた。
「櫻子さまが、渡してくださいと仰っていました。では、僕はこれで失礼します。」
「ありがとう。」
柊が帰った後で、湯船の中でその包みを開いた。
中から出てきたのは、軟膏だった。中に走り書きのような紙片もある。
”さっきは助けてくれてありがとう。二の腕の火傷に効くと思うわ。私は少しこれから出かけるので、柊さんにこれを渡しておくけどよろしくね。”
斎木は、これを見て、別れを告げられたような気がした。外に出かけたのも、今日一日は屋敷で自分と顔を合わせたくないからなのではないだろうかと。
そして、実際、櫻子が夕飯も取らずに湯を浴びて、さっさと自室に戻っていったのを見て、やはりそうだったんだ、と確信した。
この瞬間に、斎木はある事を決断した。

【斎木萩人】編（8）　小夜曲（R15）

櫻子は、いつもより早く寝台に入ったせいで、寝付けないでいた。
（絶対、変だと思われてしまったわ…。）
寝返りを頻繁に打ちながら、悶々と考えるが、やってしまったことは仕方が無い。
ふいに窓掛けの間から差し込む月光の強さに驚いて、閉めなおそうと、寝台から起き上がった。
少しめくると、不思議なくらい青い月が闇夜にぽっかりと浮かんでいるのが見えた。
（綺麗…。）
ガウンを羽織って、バルコニーに出てそれを眺める事にした。丸い月は、影が見えるほどはっきりしていて、そのふちも青く光っている。
その時だった。
「櫻子さま！」
下を見ると斎木がこちらを見上げている。寒空の中で、息は白くなっていた。
「待って良かった。あなたならなんとなく、外を見るような気がしていたので！」
「どうしたの、そんな所で。」
「あなたに会いに来たんです。」
え、と櫻子は驚いた。
「そちらに行ってもいいですか？」
そういうと斎木は、洋館の壁から適当な出っ張りの部分を見つけて、簡単にバルコニーまで上ってきてしまった。
「……もう少し、防犯について考えないといけませんね。」
斎木は、自分の辿ってきた道を見ながら、真面目に言った。
「あの……。」

「あなたに会いに来ました、と言ったでしょう?」
そういうと、斎木は、ひざまづいて櫻子の手を取った。
「執事を辞めて迎えに来い、仰ってくださいましたね?あれから、考えて、そうすることにしました。旦那さまが帰ってきたら、私は退職のお願いをいたします。」
覚悟してください、と月光を背にして彼女に微笑を向けた。
「本当?」
「はい。」
今晩は月が綺麗ですね、と言って、斎木は彼女の手の甲に口づけを落とした。
◆◇◆◇

「恥ずかしいわ……。」
寝台に腰をかけた櫻子の脚を持ちながら、斎木は、脛の骨に沿って優しく口づけていく。
「どうしてですか?」
「だって、私の脚太いでしょう?ふくらはぎなんて特に。」
武道をたしなんでいるから仕方ないとは言え、密かに櫻子が気にしている事の一つであった。
「今は暗いけれど、明るい所で見たら、きっと幻滅するわ。」
「”愛人の欠点を美点と思わないほどの人間は愛しているのではない”とゲーテも言っています。」
「誰?」
「独逸の作家です。」
斎木の唇と舌はかまわずに、膝まで上ってきた。櫻子は、まるで、体の先に流れる血が心臓まで昇るようにと攻めたてられているような気がした。くすぐったいのと羞恥心から体を時々振わせている。
やがて、自分も櫻子の隣に腰掛けると、ゆっくりと彼女を抱きしめた。
「石鹸のいい匂いがします。いつも嗅いでいる匂いなのに、今日

はくらくらする。」

斎木は、櫻子の柔らかな肢体や髪を見ながら、何を食べたらこうなるのだろうか、ふと考えた。しかし、七年間、二階堂家の食卓の献立について考えてきたのは自分であると思うと、倒錯的と言うか、不思議な気分になりそうだった。

源氏物語を読みながら、入浴したことがあった。少女の若紫を自分の元で育てて、大人になった時に自分の妻とした源氏について変態ではなかろうか、と考えた事がある。

しかし、十八歳の源氏が十歳程度の若紫に出会った、という事は、年の差は八歳前後である。自分と櫻子の差とたいして変わらない事に気がついた。きっと、源氏も自分と同じ気持ちだったのかと思うと、複雑な気分ではあった。

斎木の頭からも同じように、石鹸の匂いがした。それにいつも香油で整えている前髪が額に下りていて、くしゃくしゃになっている所を初めて見た。

櫻子は、斎木の顔を見つめながら、聞いた。

「外國は日本と違って、こういうことを家族や友人ともするんでしょう?祖母に会った時は、いつも両頬に口づけしてくれたわ。」

「あなたのお婆様は仏蘭西の方でしたね…。でも、恋人のキスは違いますよ。」

「そうなの?」

「友人や家族の前では目を閉じませんから。あとは……。」

「こう?」

斎木が全て言い終える前に、櫻子は軽く目を閉じた。

斎木は、彼女の下唇に吸い付くように、ぴったりと自分の唇を合わせた。そして、上唇と下唇の間を舌でなぞった。その熱さに驚いた櫻子が口を少し開くと、そこから優しく舌を進入させてきた。

櫻子は、さらに驚いたが、不思議と嫌ではなかった。それは、まるで入ってもいいか、と自分の舌に尋ねるかのように、触れてきたからかもしれない。

首に抱きついて、斎木が入りやすいように、少し口を開いた。受け入れられた事に喜びを感じながら、斎木は自分の舌を彼女の舌の根元からゆっくりと絡めていった。さっきよりも、より熱い舌の温度を感じて、櫻子はくらり、としそうだった。舌を使って、食べ物の味以外に確かめられるものがあるなんて、知らなかった。

お互いの顔を離すと、熱い吐息がかかった。櫻子は斎木を見つめながら、先ほどよりも自分の頬が紅潮しているのを感じた。そして、斎木は、今までで一番強く、しっかりと櫻子を抱きしめた。

全体で斎木の体温を感じながら、櫻子は深い幸せを感じた。

口づけの余韻が冷めてくると、斎木は櫻子を抱く手を少し緩めて、彼女の額にかかった横髪を後ろへ指で梳いて流してやった。

「……楡崎さんも、わたしとこういう事がしたかったのかしら？」

唐突に櫻子が一人ごちた。

「はい？」

「ごめんなさい、何でもないわ。」

自分と二人っきりでいるときに、他の男性の名前がでてくるのは斎木とてあまりいい気分ではないが、それはまあ、いいとする。

「そういえば、あなたが唐突に髪を切りたくなるほど、彼は何をしたんです？」

「無理やり……普通の口づけと、そうじゃない方……。」

斎木は、脳の血管がぶちっ、と切れるような気がしたが、櫻子の為に平然を装った。

「それは可哀想に……驚いたでしょう？」

他には、何かされたんですか、と優しく聞いた。

「あと、髪も触られて、口づけされて……。」

なるほど。女性の髪は敏感だというのに、なんという無体な事をする方なんだろう。

「後は、その……。」

「他にも？」

「……。」

恥ずかしそうに戸惑う櫻子だが、聡い斎木は彼女の目の動きから、あの貿易商がどういう事をしたのか、わかってしまった。

斎木は、ぐっと櫻子を抱き寄せると、うなじを食むようにして口づけた。

「あ、待って。そこはくすぐったいから……。」

逃れようとしていたが、それは本気じゃない事を見抜いている斎木は止めようとしない。駄目だってば、と言いながら、斎木の後頭部の髪をくしゃ、と握ったり、撫でたりしている。

そんな櫻子の反応を見ながら、斎木はもし今度、楡崎が無体な真似をしたら、簀巻きにして、ドーバー海峡に沈めて差し上げなければいけませんね、などと考えていた。

「人の体温がこんなに温かいって知らなかった……。」

うっとりと息を吐きながら、櫻子が斎木の胸に顔を寄せた。

「僕もです。」

斎木は、そのうなじに顔をうずめた。櫻子は、斎木が私ではなく、「僕」と自分の事を呼ぶのを初めて聞いた。

そして、七年間の想いを壊さないように、斎木は彼女の額に、口づけを落した。

◆◇◆◇

次の日からの一週間、梅造と桃真が出張中の為、梅造が通いの使用人に暇を出していた事から、櫻子は教師の仕事を終えて帰宅してから寝るまでの時間の殆どを、斎木と一緒に過ごしていた。

柊はそんな二人を見守りながら、心底良かったと感じていた。

しかし、梅造が家令とお嬢さまの結婚を認めなかったとすれば、どうなるだろうか、と不安を感じた。それに、梅造と桃真が居ないときに、櫻子に近づいた事は家令としては解雇が免れない事態である。その事に激怒した梅造が、斎木を追放するだけではなく、再就職もできないように手を打つのではないか。指を痛めた演奏家で、しかも混血児の彼はそうでなくても仕事を得るには柊の何倍も難し

いことだろう。
頭の良い斎木の事だ。柊が気がつくまでもなく、最初から知っていたのだろう。
（知っていて、賭けにでなさったのか……。）
斎木には黙っていたが、リンが叫んだときに柊も何事かと思って、駆けつけていた。そして、二人がお互いの気持ちを確かめ合う所を目撃してしまったのだ。
もしも、一歩踏み出すのに、最適な時があるとしたら、斎木のとって昨晩以上の機会は無かっただろう。それを逃せば、櫻子は遅かれ早かれ他の人のものになる。
柊は、庭で斎木の弾くヴァイオリンに耳を澄ましながら、薔薇を摘んでいる櫻子を見ながら、どうか全てが上手くいきますように、と祈った。
「私、その曲知らないわ。何ていう曲なの？」
一曲弾き終えた斎木に櫻子が尋ねた。
「自分で作曲したんです。題名はまだありません。」
「これ自分で作ったの？」
「はい。毎日、曲を作っています。でも、楽譜に直すのが追いつかなくて、忘れてしまう曲もたくさんあるんですけどね。」
執事を辞めたら、作曲家になろうと思います、と斎木が言った。
「作曲家に？」
「はい。時々、旦那さまのお許しを頂いて、いくつかの楽団に曲を提供していたんです。楽団の運営に関わる人々は、私の大学の人間である事が多いですから。私は作曲より演奏するほうが好きだったので、ヴァイオリンを選びましたが、私が作曲狂いなのは仲間の内では有名でしたから。」
それと、不幸な事故に遭遇したとはいえ、仲間内で一番優秀だった音楽大の卒業生が、使用人として働いている事を知り、何とかもう一度音楽の道に戻したい、という中間達の親切なおせっかいでもあった。それがわかっていたので、斎木も快く曲の提供をし続けて

いた。

「アンコールで使うための曲を提供していたんですけれど、観客からの評判が良かったようで、いくつかの楽団から専属にならないか、と長年、誘いを受けていたんです。郵便も頻繁に送ってくださって。」

「まあ、そうだったの。」

「しかし、実力主義の世界です。そんな男性と一緒になったら、苦労するかもしれませんよ。」

櫻子の手を取って、彼女の顔の位置にあわせる為に少しかがんだ。

「私がそんな事を気にするとでも思って？」

櫻子は、斎木を抱きしめた。斎木は彼女の耳元に顔を寄せて、こう囁いた。

「私を愛してくれますか。」

櫻子も、斎木の耳元でこう囁き返した。

「死んでもいいわ。」

熱い吐息に混じって、とろりと溶けるチョコレートのように甘い響きが耳の神経を揺さぶった。

斎木は驚いて、少し固まった。

「ツルゲーネフの＜片恋＞の和訳を使ってみたわ？」

謎掛けのような言葉だが、おそらく国語教師である櫻子以上に読書を、しかも様々な言語で多読しながら入浴するのが趣味である斎木には、その意味がわかった。

翻訳者でもあった文豪・二葉亭四迷が、露西亜語の「私はあなたを愛している」を、「死んでもいいわ」と日本語で訳したのである。

「随分、洒落たことをなさるのですね。」

「あら、あなただって、昨晩、私に愛していますじゃなくて、＜月が綺麗ですね＞って言ったじゃないの。あなたが私が国語教師だから、この事を引用すれば意味が通じるんだと思ってそうしたのだと思ってた。あなたってそんなにロマンチストな人だったかしら、と驚いたわ。」

ちなみに、英語の”Ｉ　ｌｏｖｅ　ｙｏｕ”を学生が「我君ヲ愛ス」と訳したときに「月が綺麗ですね」とでも訳しておけ、と言ったのは夏目漱石である。

斎木もそのことは知っていたが、別にそれを引用したわけではない。しかし、日本と欧羅巴文化の両方を知っている自分としては、「愛している」と直接伝えるのは、日本人の文化には合っていない様に思えたので、口にするのをためらっていたのは事実だ。

詰まる所、無意識的に口をついて出た言葉が、漱石の訳と一緒だったのだ。

「洒落たつもりではなかったんですけどね……。」

斎木は、なんだか少し恥ずかしくなった。なんだか過去にも経験した事があるような気がする。

「夕方が一番いいですね。のんびりできる。」

斎木は話題を変えようとして、夕日が沈む空の方を向いた。

「皆さんに尋ねたら、きっと夕方が一番良いと仰るでしょう。」

その言葉に、櫻子が反論した。

「あら、私は、朝がいいわ。朝の中を散歩するほうが好き。」

「そうですか、じゃあ、どちらが良いか、明日の朝確かめてみませんとねぇ……。」

そういって、また新しい曲を弾き始めた。

それに耳を澄ませながら、櫻子は日がゆっくりと落ちていくのを感じていた。

【斎木萩人】編（9）　発砲

櫻子は斎木の隣で、次の日の朝を迎えた。

寝ているときはつけて居るはずの無い斎木のオード・トワレの匂いがした。かすかなラベンダーや鈴蘭といった様々な匂いの混じった神秘的な匂い。

それに、彼は頻繁に布団を干しているのか、とても乾いていてふんわりとしていた。その心地よい中で、彼と過ごすのは、今までに感じた事の無い至福の時だった。

しかし、急にやってきた四人の警官たちが、全てを台無しにした。

「斎木萩人殿、少し、お話を聞かせていただきたいことがあるので、一緒についてきていただけませんか。」

朝、斎木と櫻子は屋敷内の馬車道を散歩して、最後に庭のバラ園で一緒に水をやっていた最中だった。警官たちは、無礼にも門を開けてずかずかと敷地内に入り、斎木の目の前に立って偉そうに言い放ったのだった。

見に覚えのない斎木は、首を傾げた。

「私が、何かしましたか？」

「最近、夜会を襲撃している一味がいるのはご存知ですか？」

「ええ、私共の屋敷も被害にあいましたから。」

それは、知っている。先日も、二階堂家の夜会に乱入してきた無頼漢どもを、桃真などの軍人の招待客が庭で食い止め、それでも広間に入ってきた者たちに、櫻子が啖呵を切ったばかりである。

「では、お宅の女中が、その組織に資金を提供していた事は？使用人が勤める屋敷から金品を盗み出したり、家令や女中頭を篭絡させて金を引き出したり、または組織の仲間がその屋敷に強盗に入るのをほう助したりといった事件が最近多発しているのです。その組織に資金を提供していた人間は、何人もいたようですが、彼女はその中でも重要な役割を占めていました。」

やはり、自分の考えが間違っていなかった事を斎木は確信した。

「ええ、彼女も私に関係を迫って近づいてきましたので。むろん、私はこういう事は良くある事ですから、それなりの対処はいたしましたが。ちなみにその女中は勤務中に不躾な態度を取ったので、旦那さまが解雇されたはずですが。」

「警察は、二階堂家の夜会の襲撃と、リンという女中に指示を出し、挙句の果てには自分が勤める屋敷に引き入れて、二階堂家の資産を盗み出す手助けをさせようとした疑いを、あなたにかけております。」

「はい？」

とんでもない濡れ衣だ。どういう情報を元にそのような答えにたどり着いたのか、全く分からない。

「あなたの父は、昔、政府に対して武装蜂起事件を起こしましたね？そのような反政府組織と、あなたも水面下で長年の付き合いがあるのではないですか？」

確かに、自分の父は武装蜂起事件を計画した罪で捕まった。。冤罪なれど、政治犯の息子となった斎木。母は、息子の身が心配なり、父自身からのすすめもあって、父と離婚したのだった。父はその後、病気にかかって獄死した。

「そんな、言いがかりです。そもそも、父と別れたのは、八歳ですよ。どうやったら、父とかかわりの会った人と、私が接触をするというのです。理由がありません。」

「あなたの父親が、本当は冤罪だったとしたら？」

警官は斎木に詰め寄った。

「あなたの父親は、そういった類の人間と付き合いはあったが、武装蜂起事件の計画には加担していなかった。あなたは、父親の無念を晴らすために、組織と手を組んだのではないですか？」

濡れ衣は本当の話だった。父親は、見に覚えの無い罪で牢獄送りとなった。病気となっても、政治犯である自分との関わりを知られない為に、見舞いに来ることを拒んだ。そして、冬の或る日に、一

人でひっそりと死んでいったのだ。
「それを悔しい、と思わないというのは嘘になります。しかし、誓って自分は犯罪に加担するような事は何もしていません！」
「いずれにしろ、取調べさせていただきます。」
そういって、警官は、斎木の腕を掴んだ。
「ま、待って！明日、父が帰ってきます。斎木は家の使用人だわ。連れて行くなら、父を通してからにして頂戴！」
「ほう、二階堂家のお嬢さまですな。そんな事をしたら、その一日の間に逃げてしまうかも知れませんでしょう？申し訳ないが、連れて行きますよ。」
そういって、強引に斎木を引っ張ろうとする。
櫻子は、明らかに悪意に満ちた警官たちに、恐怖した。きっと、斎木も確かな証拠もなく有罪にされ、刑務所に送られてしまうのだろうかと。大きな事件が立て続けに続いているせいで、政治犯に対する視線は厳しいものとなっていたから。
「ちょっと、斎木を放して！彼の事を何も知らないくせに！」
二人の警官が斎木の腕を封じ込め、残りが櫻子が追いかけられないように、にその道をふさいだ。
「離しなさいってば！」
櫻子が、その警官の間をすり抜けて、斎木の腕を掴んだ。
「待て、逃げるのかっ！」
一人の警官が、あろう事にか銃を向けて発砲した。
それは、銃声に驚いて振り返った斎木の胸元に、正面から命中した。
驚いて振り返った櫻子の左腕にも、銃弾がかすめた。
とっさに櫻子を自分の身体に引き寄せて、かばった。しかし、そのせいで狙いやすくなってしまい、新たに、肩とわき腹の肉を銃弾で抉られた。
ぐったりと崩れ落ちるとき、斎木は櫻子が地面を着かない様に、その下にまわりこんだ。地面に後ろ向きに倒れた斎木の胸の中に、

櫻子がなだれ込む。
発砲した男の上官らしい人が、うった若い警官に向かって、声を上げた。
「ばか者！何をしている！」
「あ……。」
若い警官は、襲いくる恐怖にがたがたと震え始めた。
「そうして発砲したりしたんだ！」
「あ……あ……の方が……あ……。」
若い警官は、錯乱したのか、ゆっくりと銃口を自分の頭の右側面につけた。
そして、周囲が止める間もなく、発砲した。

◇◆◇◆

斎木はゆっくりと目を開いた。
「気がついたか、斎木。」
それは毎日見ている梅造の顔だった。後ろには、秘書達も控えている。
「旦那さま……？」
「一日、帰宅が早くなった。しかし、帰っても誰もおらぬので、どうしたのかと思っていたら、丁度柊が病院から帰って来たので、事情がわかった。」
「すみません……。おかえりなさいませ、旦那さま。寝台の上からですみません。」
「そんな事きにするな、斎木くん、きみ、横腹がえぐられているのだぞ。全く災難だったな。」
「旦那さまは、私が無実である事を信じて下さるのですか？」
「信じるも何も、きみは犯罪など起こせん性格だろう。何に対しても優しすぎる。」
まして、海難事故の時に、死の淵を彷徨った男だ。梅造の知る人

物の中では一番、音楽や文学を嗜み、生の世界を愛している男だった。

「そういえば、桜子さまは？」

「かすめただけだ。命に別状は無い。別室でもう起きている。」

「そうですか……。」

良かった、と斎木は息を吐いた。

「あれ…でも、私は胸に銃弾を受けた気がするんですけど、気のせいでしたかね？」

手でそのあたりを触りながら、斎木が訪ねた。包帯は巻いてあるが、痛みは無い。

「気のせいじゃない。打ち込まれたよ。もし、運が悪ければ、死んでおったな。」

「運が悪ければ？」

「これのおかげだ。」

梅造は、病院の寝台の横にたたんであった、事件の時着ていた斎木の服から、あるものを取り出した。

「何と……。」

それは、銃弾が文字盤に貫通した、銀の懐中時計だった。斎木がいつも、上着の内ポケットに入れていたものだ。

「こういうわけだ。」

梅造からそれを受け取った。いつものように、ひんやりとした感触が斎木の手のひらに伝わる。

「二度も救われてしまいました。」

愛おしそうに、その側面を指でなぞる。

「櫻子にか？」

「ええ、旦那さま……いえ。」

斎木は、梅造の手を取った。

そして、どこぞの貴公子にも負けぬ風情に溢れた微笑で、こう言った。

「これからは、お父様と呼ばせて頂く事を、斎木にお許し願えま

せんでしょうか？」

「やだわ、こんなに胸元の開いた服！」
「こんなに、って、たしか鎖骨までしか開いていませんでしたよね？」
扉の向こうで、斎木が声を掛けた。
「それに、コルセットがなんだかきついの。私、こちらに来て太ったのかしら？」
「……。」
きっと甘い焼き菓子のせいにちがいないと思ったが、優しい斎木は何も言わなかった。
「入っても大丈夫ですか？」
「ええ、大丈夫。」
扉を開けて入ってくる斎木に、櫻子はびっくりした。
燕尾服に身を包み、香油で艶やかな黒髪を整えた斎木は、どこからどう見ても、完璧な紳士であったから。
櫻子も、淡い桜色のドレスに身を包んで、髪も髷（シニヨン）にして結い上げている。服に合わせて、桜色の口紅に、淡い頬紅で化粧をしていた。
「まあ、素敵だわ。私、燕尾服を着たあなたなんて、初めて見たわ。」
「あなたの方こそ素敵ですよ。」
行きましょうか、と斎木は手を伸ばした。櫻子は、それを恭しく取った。
ここは、維納（ウィーン）にある高級ホテルの大広間だ。中では、音楽大学の教授やその関係者が集まる夜会が開催されていた。天井には豪華なシャンデリアが輝いている。
金色の窓掛が開けられた大きな窓の外では、雪が降り続いていた。しかし周囲は、そんな夜の冷たい気温を感じさせないほどの煌びやかさの中で、人々が談笑していた。

「ハギト、こっちだ！」
「カール、ごきげんよう。」
斎木は、今では母校である独逸の音楽大学の教授となっているカールに声をかけた。彼も、燕尾服に身を包んでいた。くせの強かった髪は短く刈り込んでいる事で、より紳士的に見えた。
「勉強の方は順調か？」
「ぼちぼちだな。」
斎木は、作曲家として働く前に、きちんと作曲に学びなおす為に、墺太利の大学に入りなおした。
「なんで、俺の大学を選ばなかったんだ？」
「母の卒業した大学で、学んでみたいと思ったんだ。それに、バッカー教授は今、僕の大学で教鞭をふるっているしね。」
独逸と墺太利は、地理的に近いので、欧羅巴に来てから、カールと斎木は何かにつけてよく会っていた。
「奥様も今晩は。」
「今晩は。」
櫻子は、独逸語で返して、カールに礼をした。まだ独逸語にはなれていないので、いつも斎木の後を離れないようについていかなければならない。
「傷、やっぱり少し残ってしまいましたね……。」
斎木は、櫻子のドレスの袖口を少しめくりながら、縫ったせいで筋のようなあとが残った二の腕を見た。
「大丈夫よ。目立たないし。私は気にしてないわ。」
「……女性の肌ですよ。気にしないわけがないでしょう？」
「本当に、大丈夫よ。他にも生傷の痕なんてあるから、気にしないで？」
斎木は、そっと櫻子の腰に手をまわして抱き寄せた。そして、他の客に悟られないように、短いキスを額に落とす。
「そういえば、私、あなたに聞きたいことがあったのよ。今まで忘れていたわ。」

櫻子が思い出したように、話した。
「なんですか？」
「私が撃たれた時、私をかばうようにして転んだわ。あれって、やっぱり、わざとよね。」
「当たり前でしょう。女性を地面につかせるなんて出来ません。」
「紳士なのね？」
「こっちでは普通ですよ。あなたにワルツを教える時、言ったでしょう？下手なのは男性のせいにしておきなさいって。もしも、女性が転ぶような事があれば、男性は身体をはってでも相手を守らなければいけませんよ。」
その時、絶妙のタイミングで、円舞（ワルツ）の優雅な曲が流れ始めた。墺太利と独逸は、実はワルツの生まれた国である。
「おや、話をすれば、なんとやら、ですね。」
「私、まだ苦手だわ。本当に上手くなれない。」
「随分、上達されましたよ。まあ、教師がよろしいですからね。」
「良く言うわ。」
櫻子は、くすりと笑って、上目遣いで斎木を見た。
「では、お手をどうぞ、櫻子さん。」
斎木は、櫻子の正面に立って、恭しく手を差し出した。
「ありがとう。」
櫻子は、そっとその上に自分の手を重ねた。
これから始まる優雅な時間に、期待で胸を膨らませながら。

◆◇◆◇

斎木は、一番最初に欧羅巴を訪れたとき、迷わず櫻子と一緒に、英國にあるエレナの墓に行った。
事故後、怖くて一度もいけなかった彼女の墓標には、自分に宛て

た言葉が小さく彫られていた。

――ハギトへ

”私はもしかしたら死ぬかもしれない。でも、それはあなたのせいじゃないの。
最後に自分の人生を選ぶ事ができたから、私は後悔していないわ。”

エレナより

最後の署名にはｌｏｖｅ（愛を込めて）ではなくＳｉｎｃｅｒｅｌｙ（心から）と書いてあった。
それは、もし、「愛してる」と書けば、斎木が苦しむ事が分かっているからだと思った。そして、もし、斎木があのおぞましい事故から生還できたなら、精一杯残りの人生を生きて欲しい、の願う彼女の愛情であることも。

◇◆◇◆

「失礼します、旦那さま。」
梅造の書斎の扉を、柊が叩いた。
「入ってくれたまえ。」

促され、扉をゆっくり開いて、中に入る。
「紅茶をお持ちしました。」
「おお、すまないね、柊くん。」
梅造は読んでいた本から、目を離した。
すっかり執事らしくなった柊が、手馴れた手つきでカップに注ぐ。
今日は、梅造は完全な休みなので、あのするどい目つきの秘書達もいない。
「今頃、櫻子さまたちは、何をなさっておいででしょうかねぇ。」
「さあなぁ……斎木くんの事だから、櫻子を甘やかして砂糖太りにさせてしまわないか心配だ。」
いつぞや、白耳義（ベルギー）の焼き菓子やらを土産として持ち帰ったら、えらく喜んでいたことを思い出した。
「今度、欧羅巴に出張に行くときに、様子を伺いに行くとするよ。」
梅造は、優雅にカップを傾けた。
「旦那さま、私、腑に落ちないことがあるのですが聞いてもよろしいですか？」
「なんだね？」
「どうして、斎木さんと櫻子さんと結婚をすんなりお許しになったのです？」
「斎木くんは、櫻子にはふさわしくはなかったかね？」
「そう意味じゃありませんよ。むしろ、誰よりもお似合いです。私が申し上げたいのは、旦那さまは、いくら斎木さまとて、自分も桃真さまも居ない時に、使用人に暇をやって櫻子さまと斎木さんを二人っきりになんてなさらないでしょう、という話です。」
「きみも居たじゃないか。」
「私なんてたいした抑止にならないでしょう。第一、斎木さんの部下ですし。」
柊は、何故、自分の娘が一人で留守の時に、通いの使用人に暇を

出したのだろうか、と後になってから疑問に思ったのだ。用心深い梅造なら、あえて人数を増やしそうなものなのに。

梅造は、柊の言葉を聞いて、にやりと笑った。

「ふふ、やっぱりきみは私の見立てどおりの青年だったようだな。」

「どういう意味ですか？」

「柊くんは、一見、のんきでぼーっとしているし、頭も斎木くんほどには回らない。」

しかし、よく細かいところに気がつく癖がある、と梅造が述べた。

「料理人よりも、探偵向きだ、きみは。ああ、でも押しが弱いから、依頼人に料金を値切られそうだな。やめときなさい、私の屋敷で働くのが一番いい。」

見も蓋もない言葉に柊は、落ち込んだ。褒めてもらっているのか、けなされているのか。

「あと、もう一つ、聞きたいことがあるのですが、ついでにいいですか？」

「いいよ、許そう。きみの話は面白い。」

「もしかして、最初から、あの二人がこうなる事を予測していたんじゃありませんか？」

「根拠はあるのかい、探偵くん。」

いえ、ありませんよ、と言いながら、梅造が差し出した空のカップに、新しい紅茶を注いだ。

「実は、私が若い頃、維納（ウィーン）の夜会で演奏していた、優しいヴァイオリン弾きに一目ぼれしてしまってね……。夜会でお見かけするたびに、お声をかけて親しくしていたが、ついに自分の気持ちを伝える事が出来ないまま、帰国してしまったんだ。」

やっと経済界に顔が利くようになるまで力をつけたのに、異国の女性を妻に迎えることは、不利なように思われた。それで、結局彼女に求婚どころか、想いも告げられないまま帰国してしまった。

「次に会ったとき、彼女は知り合いの妻になっていた。あれには

私も驚いたよ。私よりも、ずっと身分の高い男でね。頭が賢くて、学者をしていた。彼も優しい男だった。」

梅造は、彼が人を愛する時は、きっと見た目や素性を気にするような方ではない気がしていた。だから、国籍が違う事くらい、彼にとっては障害ではなかったのだろうと思う。

「だから、今度、私が人を愛する時は、彼のようになりたいと思っていた。そんな時に、園子と会ったんだ。」

「亡くなられた奥様ですね？」

園子は、華族の家系だが、彼女の父が独身の時、仏蘭西で知り合った女性との間にできた子である。父親は、生まれた園子を引き取ったが、周囲の反対もあってその女性と結婚する事はなかった。

父親は後に、日本で他の華族の出身の女性と結婚した。しかし、園子は、その出生から自分の父親以外の家族や親戚からは疎まれて育ったという。しかも、体が大変弱い女性でもあった。

梅造は、園子を娶っても何の利益もない、という周囲の反対を押し切り、結婚したのである。

「と、いう事は、旦那さまは、まだ墺太利のヴァイオリン弾きの女性をまだお好きだという事ですね？」

「もちろんだよ。」

「だから、彼女の息子の斎木さまを、お引取りになったのですね？」

「そうだよ。彼女と友人の息子だ。つまらない男に育つはずがないだろう。」

梅造はゆったりと椅子に腰掛けて、もう一度、カップに口をつけた。

「できれば、撫子とどうにかならないかと思っていたんだがね。でも、斎木の方は、最初から櫻子に惚れていたようだから、これで良かったのかな。」

柊が思ってもいなかった事を口にした。

「撫子お嬢さまですか？」

「そうだ、あの子は気が強いだろう?優しい斎木と一緒に居れば、幸せになるだろうと思っていたなのに、あんなにつまらない男についていくとはね。」

柊は、かつて自分も見たことのある、撫子の旦那の顔を思い浮かべた。見るからに上流の人間だとわかる物腰の柔らかさと、貴公子たる優しい笑みを持った男性だ。彼の何が梅造のお気に召さなかったのが、柊には謎である。

「菖仁(あやひと)さん、つまらない方には見えなかったんですけど……私には。」

「きみの方が、よっぽどいい男だよ。どうせ、今にわかる。」

そう微笑んで、残りの紅茶を飲み干した。

「そういえば、今、最初から櫻子さまに惚れていた、って仰りました?」

「言ったよ。当人も最初の方は気づいていなかったようだがね。」

恐ろしい人だ。斎木も人の表情を読むことに長けているが、梅造は明らかに鉄人の域を超えているように、柊は思った。

「ちなみに、最初って、いつ辺りからですか?」

さあ、いつだろうねぇ、と梅造は笑って、もう一杯紅茶を要求する為に、カップを差し出した。

外では深々と雪が降り、赤い実を熟させた柊の葉が、年の暮れが近づいた事を教えていた。

【終】

【京極菊弥】編（1）　秘密（R15）

――あなたを私だけのものにできないなら、私はもう生きていられません。

さようなら、明石さま

「九鬼さん、良く来てくださいました。こちらです。」
部下の警官が、到着した九鬼梗吾（くききょうご）に敬礼して、道を開けた。ギヤマン細工のように鋭利な瞳をした、三十前半の背の高い男である。
九鬼は、大きな布を被せられた仏に手を合わせてから、めくる。
中から現れたのは、浅黄色の着物を着た妙齢の婦人だった。しかし、その顔は、冬の冷たい水に使っていたせいで薄い絵の具に浸したように、青白い。
「溺死か？」
「いえ、飛び込んだ時に後頭部を強く打った事が、直接の原因のようです。」
九鬼は、丁寧にもう一度布をかけて、立ち上がった。
「他殺か、自殺か、今の見立ては？」
「自殺です。女性の胸元にこれが入っておりました。」
そう言って、すっかり濡れた紙を渡す。九鬼が広げてみると文字はにじんでいたが、書かれた二行はかろうじて読めた。
「明石？女性には明石に想う人でもいたのか？」
「それを現在調査しております。」

九鬼は、もう一度丁寧にたたんで、それを警官に渡した。どうやら、今回は自分の出番はなさそうだ。

（しかし、ここ数年、女性の自殺が多くはないか？）

冷えた風が吹いた。九鬼は、背広のコートに手を突っ込む。

そして、何かを考えながら、落ち葉振る小道の中を戻っていった。

◆◇◆◇

二階堂櫻子の親友、春日玲子は、姉である煌子（あきこ）の華道教室の手伝いをしている。

ある日の夜、明日の講習の相談の為に、彼女の部屋である和室を訪れた時だった。姉に声をかけようと縁側の廊下から襖に近づくと、何やらくぐもった声がする。

「ああ、だめ……さま…。」

耳を澄ますと、哀願するような切ない声が中からする。それは今まで聞いたことも無いような姉の声だった。

玲子はほんの少しだけ襖を開けて、中を覗いた。

暗がりだと思っていたが、蝋燭が一本だけ机の上でてらてらと灯っている。そのゆらめきに映し出されたのは、玲子が思ってもいなかった光景があった。

姉が、見知らぬ男に抱きしめられて、口づけをされている。相手の顔は角度の加減で見えない。しかし、姉がその男の首に腕をまわしている所を考えると、無理やりにされているわけではないようである。

いつも結っている長い黒髪は、ほつれてみだらに赤い着物を着た背中に流れていた。その着物もすっかり乱れていて、姉の白くて滑らかな脚が見える。

玲子が初めてみるそれは、官能的というよりは、あまりにも淫ら

過ぎた。二人のやり取りに、恐怖すら覚える。

そのせいで、体がしばし動かなかった。心は、一刻も早くその場を去りたかったのに。

相手の男が、顔を上げた。そして、不敵に笑ったように思えた。

（気づかれた？）

玲子は慌てて自分を取り戻し、二人に気が疲れないように、ゆっくりとその場を立ち去った。そして、そのまま自分の部屋には戻らず、庭に出た。

空にはやや欠け始めた月が浮かんでいた。秋の空は澄み切っていて、上にかけるものを何も来ていなかった自分には、すこし肌寒い。

こんなにも凛とした世界なのに。あんなに秘密めいた事が別の場所では行われていた事が嘘のようだ。

玲子は、少し庭で思考を冷やしてから、戻ろうと思っていた。

しかし、ふいに何かの匂いがしたと思ったら、誰かに目と口を手で塞がれた。

「お姉さまの部屋を勝手に覗き見するなんてはしたないな、妹御。大丈夫、怖がらなくても、何もしない。」

こんなに明るい月の下で顔を見られると、少々都合が悪いのでな、と男が耳元で囁いた。

「さっき見た事を、きみ両親に告げ口さえしなければ、俺は何もしない。約束できるか？」

玲子は、何か言い返せないかと思ったが、恐怖と口をふさがれているせいで、何も出来なかった。

まるで石化したように直立している。

「これは、口止め料だ。」

そういって、男は玲子の目を隠したまま、彼女の顎を少し上げて、唇を奪った。玲子が恐怖で何もできない事を知っているかのように、舌を奥まで差し入れて絡みつき、吸い付く。熱く、柔らかな感触のおぞましさに驚いたが、何度か口内を往復するように弄ばれると、すぐに別の感情がむくむくと頭をもたげはじめた。

男は玲子が十分に感じてきた事が分かると、ゆっくりと顔を離した。

「口づけは初めてだったか……悪かったな。」

そう言って、最後にもう一度、激しく口づけてから、玲子を置いてその場を去った。

【京極菊弥】編（2）　訪問

――――妙蓮寺の櫻の花びらを拾えば恋愛が成就すると、誰が言い出したのだろう。

いつか、言おうと思っていた。

櫻の花が振る木の下で鞠をつく手を止めて、きいちゃん、と自分の名を呼んで振り返るその少女に。

◆◇◆◇

次の週の土曜日、櫻子は幼馴染である京極菊弥の住む長屋に向かった。その長屋の持ち主は剣術道場の師範で、菊弥もその道場で習っていた事から、時々手伝っていた。

櫻子はまず、道場の方へ菊弥を探しに行く事にした。しかし、中に居た人々に、今日は長屋の方にいると教えてもらったので、そちらへ向かった。

「菊弥さん、櫻子です。」

櫻子は、トントンと長屋の扉を叩いた。すると、灰色の着物を着流した菊弥が中から現れた。髪の毛が乱れているところを見ると、眠っていたようである。

「なんだ、櫻子、何の用や？」

「何の用や、じゃないでしょう？櫻子が、あなたのご両親に土曜日に挨拶に行きたいからよろしく、って兄様から聞いてないの？」

菊弥の両親の実家は京都にあるが、先週から帝都を訪問しに来ていたのである。二階堂家ともつながりの深い京極家に、お前からもあいさつに行っておけ、と忠告されたのだ。

「桃真さんが？いや、聞いてへん。」

「忘れているわけじゃなくって？」
「本当や。聞いてない。」
どうやら、表情を見る限り菊弥の方が正しいようだ。桃真から忠告しといて、忘れるとは。
「そんな目をするな。桃真さんも、忙しいんや。両親ならホテルに居るわ。一緒に行こか。」
「ええ？いいわよ。今までお休みだったんでしょう？」
「大丈夫や。昨日の夜更けまで絵を書いてたから、寝過ごしただけや。」
菊弥は日本画を描くことが好きなのだ。本職は、軍医であるが、それ以外の時間の殆どは、絵を描いているか、道場の面倒を見ているかのどちらかだ。
「絵の具が散らかってるけど、俺の支度が済むまで中に入り。」
促されて、彼の部屋に入った。確かに、昨晩絵を描いていた痕跡のようなものがあった。出しっぱなしの筆や、絵の具がある。部屋の周囲には、大小様々の作品が所狭しと並んでいる。しかし、部屋の中央は小奇麗で、黒塗りの低い机が置いてある。
扉から見て正面の壁には掛け軸があって、その下には生け花が飾られていた。
「これ、全部自分で描いたの？」
「そうや。絵の師匠が近くに居てると助かるわ。」
実は、ここの道場主は双子で、弟の方が日本画家だ。兄は、剣術師範として仕事をしている。
菊弥は櫻子に茶をすすめた。傍には、花の形をした菓子がある。
「きれいね。色が着いてる。」
「落雁や。お父が置いていった。俺の好物。」
口に含むと、淡い甘さがした。
「それ飲んで、ちょっと待っとって。」

◆◇◆◇

「良く来てくれたなぁ、櫻ちゃん。」
菊弥の父である音弥は、まだ四十四歳であり、とても若かった。その柔和な顔つきは、菊弥と同じ褐色の肌をしている以外は、全く似ていなかった。
「こんにちは、おじさま。」
櫻子は、音弥が差し出した手を握った。
「おばさまは？」
「去年から少し具合を悪くしてな、京に置いてきた。」
実は、現在の菊弥の母親は後妻であり、菊弥とは血のつながりが無かった。先の妻は、菊弥が小さいときに病気で亡くなったのである。
「そうでしたの？お聞きしていなかったわ。お体の方は大丈夫ですの？」
「ご心配、どうもありがとう、大丈夫ですよ。」
櫻子は、持ってきた手土産を渡し、しばらく京極親子とたわいない話をしてから、その場を去った。
「家まで、送ってくわ。」
ホテルの前で、菊弥が山高帽を被りなおした。灰色の羅紗（ウール）の背広を着て、桔梗色のタイを着けている。いつも、着物か、剣道着か、軍服のどれかしか着ているのを見たことがあまりなにので、新鮮だった。
「いつぞやの浅草みたいに、変な輩に絡まれたりしたら大変や。」
「昼間よ。大丈夫だわ？」
「俺が桃真さんに叱られる。……そういえば、思い出したわ。」
「何？」
「今晩、櫻子を西の市に連れていってやってくれ、って頼まれていたんやわ。」
「兄様が？」
櫻子が一緒に行くように頼んでいたのは、その桃真である。

「なんか、急に行けへんくなったらしくて、俺に頼まれてくれへんか、と言われたわ。」
夕方、何時に迎えに来たらいいか、と櫻子に訪ねる。
「え、そんな、いいわよ。わざわざ！」
「俺は別にかまわんよ。絵描いているだけで、京は暇やもん。それに久しぶりに浅草にも行きたいし、丁度良かったわ。」
「……大丈夫なの？」
「ああ、かまわん。」
こうして、櫻子は、夕方もう一度、菊弥と会う約束をして分かれた。

◇◆◇◆

菊弥は二階堂家から、もう一度、ホテルに戻った。
「菊弥、おまえ、本当に大丈夫なのか？」
音弥は、室内の椅子から立ち上がって、自分より若干高い、菊弥の肩を持ちながら深刻そうな顔をした。
「心配せんでええよ、父さん。俺に任しとき。」
「私がふがいないばっかりに、すまないな。」
音弥は顔を覆って、崩れ落ちた。
菊弥は、そんな父親に対して、哀れみとか憎しみが膨らんでいる。にも関わらず、どこかを小さな針で突かれて、そこから懺悔の心がにじみ出てしまうのを食い止めることができなかった。

「本当に悪いわね、つき合わせちゃって。」
「かまわん、って。」
菊弥は昼間着ていた灰色の着物よりも、上質な草色の着物に身を包んでいた。櫻子は、真っ赤な着物を着ている。
二人は、西の市の山門前までやってきた。こうこうと提灯が闇夜に照らされ、立ち並ぶ屋台からは、白い湯気が上がっている。威勢のいい掛け声に、人々の熱気。昼とはまた違う風景の祭。
「何か食べたいもんでもあるか？」
「そうね…たくさん、あるんだけど。」
その時、櫻子は、人込みの奥に、見慣れた人物を見つけた。
「やだ、兄様だわ。」
菊弥も、つられて前の方を見ると、確かに桃真が居た。
櫻子は、「兄様！」と声をかけようと手を上げかけたが、止めた。今までは、桃真に重なって見えなかったが、その隣には、女性が居たからだ。
綺麗に化粧をして、藍色の着物を着た、色白の美人が居た。
結い上げた髪には、簪を挿している。
その様子を見て、菊弥には全てがわかったような気がした。
「人を連れてるな。」
菊弥に言われなくても、一目瞭然だった。
「私と一緒に行くのを渋っていたのは、きっと、あの方と一緒に行く為だったんだわ。」
櫻子は、素っ気なく言った。
急に、兄が遠い人のように思えた。
「櫻子？」
菊弥は、桃真と女が顔を寄せ合って何かを話している様子を、じっと見つめたままの櫻子に声をかけた。

「ご、ごめんなさい、何でもないわ。行きましょう……あっ。」
動揺して、再び前を向いた櫻子はその拍子に誰かとぶつかってしまった。
菊弥は、櫻子の手を引いて、胸に抱き寄せた。
「……大丈夫か?」
「ご、ごめんなさい。ありがとう。」
ぶつかった男が、すまない、と言って振り返り、戻ってきた。黒い着物を着流した、背の高い美丈夫である。
九鬼梗吾だった。たった一人で、西の市をふらついているようである。
「こちらこそ、ごめんなさい、気にしないで。」
「すまなかった。」
そういって、再び人の流れに消えていった。

◆◇◆◇

「菊弥か?」
帰り際、向かい側から歩いてきた三人の男に声を掛けられた。顔なじみの同期だった。
「おまえが女連れとは珍しいな。」
「今日は、浅草の西の市に行って来た帰りや。」
「誰だ、そのお嬢さんは?」
「俺が大学に行ってた時に、下宿させてもろうてた家のお嬢さんや。」
「ほーう。可愛い子だな。」
そのうちの一人が、にやにやと、笑いを浮かべて、歩み寄った。
櫻子は少し怖くなって、後ろへ引いた。
「きみも知ってる二階堂少佐の妹さんやで。」
直属の上司ではないが、聞き覚えのある上官の名前を出されて、とっさに後ろへ引いた。
「あの鬼少佐の妹さんか!おまえが、そんな怖いもの知らずとは

…意外だな。」
「ちゃうて。その少佐に頼まれたんや。二階堂さんとうちの家は、家同士の付き合いが、長いさかいな。」
「ああ、なるほど。」
納得したように、うなづいた。
「俺達は、これから吉原だ。」
「そうか、気いつけてな。」
言われなくても、この時間帯に男三人衆でかける場所なぞ想像がつく。
「毎度誘ってるのに、つれない奴だよな、お前は。」
櫻子が隣に居るときに、何と言う話の振り方をするんだろうか。
「すまんなぁ。商売女は、あんまり好きやないのや、堪忍。」
「潔癖だな、軍医殿は。」
「それとも、もて過ぎて十二分に間に合っているということか？」
からかうように、一人が笑った。
「ははは、そりゃあないだろう。彼が女性と一緒にいる所なんて、俺は見たことがないぜ？」
「俺もだ。軍主催の夜会でも、お前はめったに女性と話さないものなぁ。」
櫻子にも、三人が菊弥を小馬鹿にして、ねちねちと嫌味を言っているのはわかった。
「そやなぁ、俺は男女問わず、内気な性分やから、いつも何かと損してしまうんやわ。」
菊弥は、まるで自分が阿呆な愚か者とでも言うように、柔らかく笑った。
女性にはもてない、ではなく、あくまで自分が内気である事を強調して、なるべく遠まわしに話題をそらそうとしている菊弥に気がついて、櫻子は、喉まで出かけた自分の台詞を押し殺した。
おそらく、そのやりとりからして、菊弥と同期の三人は、組織の中では、現在も同じ階級にいるのだろう。

しかし、菊弥は軍医で、つまりは医者だ。
医者と聞けば、それだけで、目の色を変えて寄ってくる女性も多いだろう。まずは、それへの嫉妬心があるのかもしれない。
「三人とも、結構、吉原は遊びなれてはるんか？」
「まあな。」
少し、あごを上げて、得意げに返事をする。
「せやったら、いちおしの妓を知ってはんのやろ？俺の連れから、ええ妓がいたら、教えてくれ、とせがまれてるんや。俺はそういうことは不得手やさかい、良かったら、今度一緒に連れて行ってくれると、助かるんやけど、頼めるかなぁ？」
「はあ…？お前の連れ？」
「つまりは、俺らの同期や。全員とは顔見知りやないやろ？どうや、頼まれてくれるか？」
三人は、顔を見合わせた。
「辛党やし、馴染みの店へいろいろ連れまわしたってや。」
「……まあ、別に、構わんが。」
「助かったわ。」
安堵のため息を吐いた。ずっと胸につっかえていた悩みが、一つ消えた、とも言うように。
「おおきにな。そいつから連絡するようにさせとくわ。ほな、俺はお嬢さんを無事に送り届けなあかんし、この辺で失礼させてもらうわ。楽しんで来てな。」
またな、と言って、別れた。
三人は、菊弥をいびってやろうとしていたのが、いつの間にか彼の話術に、丸め込まれていた事に、気がついていないようだった。
聞こえない程に離れた所で、ようやく櫻子が口を開いた。
「あなたって、口が上手いのね？見直したわ。」
「そうか？まぁ、いつもの事や。付き合いが悪いんで、それをネタにからかわれるんや。」
面白いな、と笑い飛ばした。何が面白いのかは、櫻子にはよくわ

からなかった。
「女の子の前では良くない話やったな。すまん。俺らの会話は、さっくり忘れといて。」
そやから、あいつら女性にもてへんのや、と、菊弥がつぶやいたので、思わず笑ってしまった。
「俺の母親は、踊りの師匠する前は、祇園の芸子やったんや。遊女の仕事を取らへん為に、芸子は、芸しか売らんのが決まりやけど、周りの知らん人らは、混同してしまう人がおるでなぁ…。」
そやから、母親は潔癖な性格で、父親もそれがうつってしもたんや、と菊弥は言った。
「櫻子は知らんと思うけど、帝都に行くのを父親に反対されて、ほんまは京都の大学に行く予定やったんや。」
「初耳よ。どうして反対されたの？」
「娘さんが住んではるお宅に居候なんて、何かあったら、どう責任取らせてもらうんや、ってなぁ。
お父さん、漱石先生の作品の読みすぎやないですか、って思わず言ってしもたわ。」
夏目漱石の「こころ」という作品では、大学生が下宿先のお嬢さんに恋心を寄せてしまう場面があり、そのせいで、後に大きな事件を誘発してしまうのである。
「真面目なお父さんなのねぇ。菊弥さんが、そんな事をするはずないのに……。」
櫻子が、くすりと笑った。
「やけに、信用されているんやな。」
急に立ち止まり、ぞくりとするような、低い声で返された。
「え？」
櫻子が、振り返る前に、急に腕を引かれた。
その時の弾みで、ことり、と櫛が外れて道に落ちた。

咄嗟の出来事に、逆らえず、櫻子は菊弥の胸に倒れこむ。
その胸元は、着物が冷たい夜気を吸ったせいか、しっとりと冷たかった。
「菊弥さん？」
驚いた櫻子は、顔を上げて彼の顔を覗き込んだ
「桃真さんから聞いた。あの貿易商が君んとこへ求婚に来たって。」
「ええ、そうだけど。」
桃真はどうして菊弥に話したんだろうか。
「俺の所へ来る気はないか？」
耳元で、低くて艶のある声が優しく囁いた。一緒にかかった熱い吐息に、皮膚の神経が反応してしまう。
「でも、あの……。」
こういう時、どうしたらいいのか櫻子にはわからない。しかし、背中をやんわりと抱かれて、触れた部分から伝わる体温が心地よいとさえ、思ってしまった。
「それとも、俺の事は嫌いか？」
「え……。」
そんな事、急に聞かれてもわからない。ほんの数分前は、ただの幼馴染だと思っていたから。しかし、菊弥のその凛とした涼しげな目元以上に、その頭の回転の良さと感情の穏やかさに魅かれていたのは事実だ。丁度、先ほど同僚に嫌味を言われても、やんわりと返した事も櫻子にとっては好ましく映った。
「嫌やないなら、ええやないか。」
そう妖しく微笑まれて、心が高鳴った。
どう返したらよいのか、と戸惑っていると菊弥の顔がぶつかるくらいに近づいてきた。ぎゅっ、と櫻子が目を閉じると、自分の口元

に何かが触れた。
それが、菊弥の唇だと気がついた時、櫻子は今まで考えていた事が、全て頭から吹っ飛んでしまった。
「ん…！」
さらに、櫻子の唇を舐めるような口づけを始める。無意識に顔を後ろへそらそうとすると、逃がすまいとでもいうように、櫻子の後頭部に右の手のひらをやさしく沿わせる。
左手は彼女の腰に回した。ゾクリ、と震えが走って腰がとろけそうになる。
櫻子が自分の愛撫に慣れてきた頃合を見計らって、菊弥は自分の顔の角度を変えて、より深い所へ自分の息を吹き込むようにして口づけた。
熱い体温を感じて、櫻子は自分の口の中が焼けているのかと思った。身体の芯すらも、だんだんと熱くなる。
菊弥が、一度櫻子から顔を離した。その時に、あ、と櫻子は声を漏らしてしまった。
「口を吸われるのは、初めて？」
そう言われて、かっ、と頬が羞恥心で上気するのがわかった。今まで、男性と並んで歩いた経験も、数えるくらいしかないというのに。
「ええよ、そっちの方が俺も嬉しい。」
そうして、再び櫻子の顔に近づけた。前髪からほんのりと、石鹸の匂いがした。きっと、昼間別れたあとは、自分の部屋で絵を描いていたのだろう。絵の具の汚れを取る為に、一度湯を浴びたに違いない。
「いい匂いがする。」
吐息とともに出された菊弥の声は、櫻子が今まで聞いた事のないような優しく甘い囁きだった。
菊弥は、逃げようとしなくなった櫻子の後頭部から手を下にずらして、今度は首筋やうなじを指で優しく撫でた。

「あ、ちょっと、待って！」
櫻子は、急に、菊弥の胸を突っ撥ねた。
しかし、菊弥のすっきりしているが逞しい体躯は、びくともしない。
「どうした、急に？」
逃れられないと分かった櫻子は、頬を染めて顔を横に向けるだけだった。
「ああ、そういう事……。」
菊弥は、櫻子の肩甲骨のあたりに腕をまわして抱きなおし、今度は彼女の白い首筋やうなじに口づけた。
「あ、だ……だめ…！」
やわらかい所を菊弥に食まれたり、舐め取られたりするたびに、身体が震えてびっくりした。
自分で触っている分にはなんとも無いのだが、美容院に言った時などにそこに触れられると、ぞわぞわしてしまうのだ。それが、どうしてなのか、自分でもわからない。
菊弥は確かめるように、次第に耳元に近い頬まで唇で吸い始めた。
櫻子は、もうどうしてよいかわからなくない。
「……口よりも、皮膚の柔らかいところをされるのが好きみたいやな。」
獲物を追い詰めた獣がみせるような顔。櫻子の心を、弄るかのように囁くこの男は、一体誰だろう。切れ長の瞳に、いつも精錬とした雰囲気を漂わせているこの幼馴染のはずなのに。男の人は、誰でもこのような一面を隠しもっているのだろうか。
菊弥は最後にもう一度軽く唇に数回触れて、そこでようやく、名残惜しそうに顔を離した。
櫻子は力が抜けていくのがわかった。菊弥に抱きとめられていなければ、崩れ落ちていただろう。
それに気がついた菊弥は、しばしそのままにして、彼女のぬくもりを味わった。そして、櫻子の身体に力が戻ってきた事を確かめる

と、自分の顔の角度を傾けて、もう一度唇を吸おうとする。
「ま、待って。ここ、道よ。誰かに見られているかもしれないわ。」
「夜やし、誰も居んよ。」
「駄目、恥ずかしいってば！」
櫻子は、菊弥の胸を突っぱねる。
「見てないところなら、ええの？」
「え？」
菊弥は掠め取るようにして、櫻子に深く口づけた。
「冗談。今日は、これくらいにしとこう。嫌われたら残念やし。」
急にいつも櫻子に見せるような、幼馴染の顔に戻った。
落ちた櫛を拾って、汚れを取り出した布でぬぐってから元の位置に直してやる。そして、少し乱れた櫻子の着物の襟を直してやりながら、告げた。
「俺の事、嫌やないなら、付き合おう、櫻子。また会ってくれるやんな？」

【京極菊弥】編（5）　「玉鬘」

「失礼するで。」

膝を突いて襖の扉を開けて、菊弥がするすると中へ入った。やや古い畳が敷き詰められた和室は六畳ほどの広さがある。菊弥が入ったほうから見て部屋の反対側の襖を開けると、縁側の廊下に繋がっており、そこから庭へとでる事が出来る。

天井の明りは消されていた。その襖は三十センチ程開けられており、そこから差し込む月光だけが、部屋を照らしていた。

部屋の奥に進むにつれて、鼻をつくような伽羅香の匂いが強くなる。胸をつかまれるような木の芳香。菊弥は、その強調しすぎる香りがあまり好きではなかった。

部屋の中では、壁に背をつけて、大柄な男が座っている。決して太っているわけではないのだが、固そうな腕に、ふくらはぎ。それと比較すると、職業上身体を鍛える機会がある菊弥は、ずいぶんとすっきりとしている。先天的に、筋肉のつき方のようなものが違うのだろう。顎も、首も太い。

右膝を立ててその上に肘を置き、左足はまっすぐに伸ばしたままだ。着流した臙脂色の着物ははだけていて、きつく撒いているさらしがの白さが、夜目でもわかった。

しかし、その顔立ちは、彫が深くてはっきりとしている。意思の強そうな瞳からにじみ出るのは、荒々しさではなく、たくましい男の色香だった。

男は、菊弥が目の前に立ったことが分かると、待っていたとでも言うように、口の端をゆがめた。

「遅いじゃねぇか。」

男は、自分の隣に置いた盆の上にある酒瓶を取って、杯に注いで一気に飲み干した。口の端にこぼれたしずくを、手で拭い取る。

「悪いな。野暮用だ。」

腕を組んだまま、冷たい視線をその男に下ろした。
菊弥はこの男が大嫌いだった。
傲慢で、短気な男。考える前に、暴力と支配で片付けようとする性格は、自分とは相反するものだった。もしも、このような世界に身を落していなければ、決して会い混じりえなかった類の人種だ。
菊弥は、借財と引き換えに自分の身を、この「源氏屋」に売った。
源氏屋は、女性が男性に接客する花魁でも、男性が男性に接客する陰間でもない。男性が、女性に接客する店であった。さらに、源氏屋は数人だけ、男性の相手をする者も抱えている。どの時代にも、秘密の社交場というものは存在するのである。
源氏屋の主な顧客は、未婚の女性だ。この時代、既婚の男性は他の女性と関係を持っても罪にはならないが、女性の場合は罪になる。店で抱える＜源氏＞達が誰か一人でも捕まれば、さらし者になり、金儲けどころではなくなる。ゆえに未婚の女性しか相手にしようとはしなかった。
加えて、明治からは許可を得た場所以外で営業を行った私娼は、罰せられる。この「源氏屋」が公の許可を得ている施設なのかどうか、菊弥には知らされていなかった。もしかしたら、男性を相手にする人材を抱えていることから、表向きは陰間専門の店として申請しているのかもしれない。
それ以前に、自分の職業柄、外にばれたら大変な事になることもわかっていた。年季が明けるまで、隠し通せるのか、それとも他の仕事を見つけるべきなのか、迷っているところでもある。
「にしても、おまえの親父も酷だな。自分の息子に身売りさせるとは。」
「親父はこの事は、知らん。」
「一緒だ。自分の妻の入院費を出せずに、息子に頼った。」
「親父も金策に走ったが、それでも足りんのや。もしかしたら、外國に渡って手術せなあかんかもしれん程の心の病や。」
「だからといって、おまえとその後妻には何も血のつながりはね

えじゃないか、玉鬘？」

その名をお前が呼ぶな。汚らわしい。菊弥は胸の中だけで、吐き捨てた。

源氏屋の抱える「男」には、全て紫式部の「源氏物語」から、名前を取っていた。玉鬘も、その物語の登場人物の一人である。

「血のつながりはなくとも、親子や。」

「まあ、お前の人気の高さは異常だ。用心棒としては、手練手管に狂った女がお前を刺しにこないか心配だ。」

物騒な事を言う。しかし、菊弥はそういえばある事を思い出した。

「明石の客が、一人死んだそうやな？」

「仕事に失敗したんだ。やりすぎたな。ああ、何かつれない事でも言って、たぶらかしたんじゃねぇか？」

悪い男だ。俺達の仕事は、女に良い夢をみせて金を儲ける事だ。地獄に突き落とす事じゃない。

「困ったやつやな。加虐趣味でもあるんか、彼は。いつも、熱烈というか、通り過ぎて深刻な客を増やしてるな。」

明石以外にも、源氏の男に惚れ込み過ぎて、身を滅ぼした女性が何人かいる。まずい。警察が嗅ぎついてこなければいいのだが。

「お前は客の転がし方が上手いから、そんな真似はしないだろうがよ、気をつけろ。」

「わかってる。」

「……そのお前が、あのお嬢さんに最後まで手をつけずに、ご丁寧に家まで送り届ける姿は、滑稽だったぞ。」

もう一度自分で杓をして、酒を胃に流し込んだ。

「見てたのか、悪趣味め。」

「仕事で、傍を通ったんだ。」

吉原遊郭での仕事だろう。浅草から、あの場所は近い。

「あの女が、俺の部下どもを一喝した女だってぇのか？」

「そうだ。俺はあんたみたいにいきなり取って食ったりするような、下品な真似はせえへん。」

何でも、順番と言うものがある。

「そんな勇ましい女には見えなかった。むしろ、ありゃ、生娘じゃねぇか。」

鼻を鳴らして笑った。何が面白いのか、歯を出してにやりと笑っている。やや早口で、癖の強い喋り方は、何となく江戸時代の火消しを菊弥に連想させた。

「商売女は、もう飽きた。丁度、まだ手垢のつかない娘を、とっくりと可愛がってやりたいと思っていた所だ。」

「ふん、心にもない事を。」

菊弥は、この獅堂慶示という男が、この界隈を仕切る極道一派の一つの、二番手に位置する男だという事を知っている。自分が面倒を見ている置屋で一番上等な太夫を、望めば飽くまで自由にできる男だ。普通の女なぞ、この男には物足りないはずである。

「それとも、お前が相手をしてくれるのか？」

畳の上に座ったまま、菊弥の腕を引いた。菊弥は汚らわしい、と言い放って、その腕を振り払った。この男は、女にしか興味がない事を知っていても。

「なら、俺にまわせよ、上手くやってやる。」

「何が上手くや。何か打ち込まれて眉間を切られても知らんで。」

「俺が、か？笑わせるな。」

「いずれにせよ、これは俺が受けた仕事や。」

源氏屋の存在意義は、女性へ接客する事だけではない。顔も知らぬ謎の持ち主の指令を遂行する事も、囲われている男たちの仕事であった。

それは、金で買われる男として接客するものではない。時には普通の青年を装って、目標人物に近づき、情報を聞き出すような諜報活動を行ったり、すっかり骨抜きにして傀儡にしたりなどである。

しかし、命令された源氏たちも、持ち主の目的が何なのかは、良く分かっていなかった。犯罪に加担させられているのか、どうかすらも。

それゆえに、容姿や頭脳、そして判断力に長けた者しか源氏に囲われる事は出来なかった。菊弥が、莫大な金額を担保、利子無しで借り入れる事ができたのも、その仕事の特殊性にある。

そして、最近、源氏は持ち主（オーナー）から、富豪の娘を誑かすように命令されていた。特に、結婚適齢期で、今まさに結婚を整えようと家の者が画策している女性を標的として、あてがわれた

明石の標的もそうだった。菊弥が予想するに、とうとう親が婚約者をどこからか準備して来てしまい、それでも明石をあきらめられずに命を絶ったのだろう。なんともむごい話ではある。

しかし、当の明石はきっと、何も気にしていないだろう。あの冷酷な瞳には、人間としての温かさが欠如しているように、菊弥は前から思っていた。

たぶらかした後に、一体どうするのか、そこまでは何も聞かされていない。何処まで、標的を自分の虜にさせれば良いのかもわからない。しかし、自分だったら、もう少し上手く仕事をやるだろう。標的を殺さない程度には。

その自信はあった。とうとう自分にもやって来た、その指令を聞くまでは。

――「玉鬘」があてがわれた標的は、菊弥の幼馴染の「二階堂櫻子」だったから。

【京極菊弥】編（6）　再会

櫻子の屋敷で再び夜会が開かれたのは、それから半月後の事だった。今晩の夜会は、父親の仕事で日頃世話になっている大企業の重役や、政治家、華族、外国の大使館の関係者も混ざっていると聞いて、櫻子は緊張した。

それでも、なんとか桔梗色の着物に身を包んで、女中に手伝ってもらいながら髪も乱れなく結い上げて、大和撫子を装うように努力した。

櫻子の敷地には、二階建ての洋館が三棟ある。正門を入って正面に本館がある。東側に外通路を挟んでもう一つ別の小さな洋館がある。ここは、住み込みの使用人として働いている斎木の住居空間としてや、他の通いの使用人の休憩所として使用されていた。

通路を挟んで、西側の新しく作られた洋館は、客を泊める為に使われている。

二階堂家の庭園は、洋館の周りを囲う仏蘭西式の薔薇の庭園と、洋館の後ろ側に、池を中心にた茶室や書庫も建てられた、日本式庭園の両方があった。

没落した男爵家から、梅造が殆ど無理やりに買い取らされた広い敷地には、幅の広い馬車道が正門から裏門まで伸びている。

今晩は、本館の広間と西洋庭園を夜会の会場にしていた。テーブルが並び、明りが置かれ、そして様々な食物や飲み物も用意されている。

何度経験しても、櫻子はやはり夜会には上手く馴染めないと思った。知らない人と話すのが苦手なわけではないが、いつもは着ないような豪華な服に身を包み、失礼の無いように慎重に話の種を選んで話すのは、気が疲れてしまう。

できるなら、早く知り合いを見つけてその方と一緒に居たい、思っていた時、丁度広間の中に菊弥が入ってくるのが見えた。

菊弥さん、と声をかけて近づくと、彼の方も自分に気がついた。
今日は、正式な黒い燕尾服に身を包んでいたので、前に立つのが何だか少し緊張した。心臓の鼓動が早くなる。もちろん、その理由は、きっと服装以外にもあるのだという事を、櫻子の心臓は気がついていたようだが。
「来て下さって、うれしい。」
少し、恥ずかしそうに、櫻子が言った。
「今晩は。今回も、お招き頂いて、どうもおおきに。」
菊弥は、いつもとは変わらない表情で礼を述べた。まるで、この間のことなど無かったかのように
「櫻子！」
その時、後ろから声をかけられた。赤い和服に身を包んだ春日財閥の令嬢、玲子だった。
「あら、今晩は、玲子。今日もありがとう。」
櫻子は、玲子の手を取って、挨拶した。いつも穏やかな笑みを浮かべる彼女は、本当に和服が似合う典型的な日本美人だ。腕も首も白くて華奢である。
「菊弥さんも、今晩は。」
「今晩は。」
玲子も、菊弥から差し出された手を握った。
彼の身体が近づいてきた時、ふっ、と何かの匂いが鼻をかすめた。
（この匂いは……。）
玲子の記憶の引き出しから、何かが開け放たれた。まさか、という思いが脳内を巡る。
「どうしたんや？」
しかし、顔色を変えた玲子の表情を訝しげに思った菊弥が声をかけたことで、疑心は確信へと色を変えた。話し口調は違うが、その低い声は姉の部屋に入り、それを目撃した自分の唇を奪ってさった男。
（間違いないわ。この特殊な伽羅香の匂い……！）

玲子が特殊だ、と言ったのは、沈香の中でも高級とされる伽羅香を主とした合わせ香だったからである。

それは、獅堂が好んで焚く香りだった。菊弥は獅堂の部屋に入るたびにこの匂いを浴びる事になる。実は、今日も二階堂家に行く前に、彼に会わなければならない用事があったのだ。

玲子は、櫻子に何も言わず、その場を駆け出して庭へ言った。

「どうしたのかしら、玲子…。」

「気分でも悪いんかな?俺が様子を見てくるわ。」

玲子の後を追うようにして駆けて行く菊弥に、私も、とついていこうとすると、突然名前を呼ばれた。

「やあ、櫻子さん。お久しぶりですな。」

楡崎蓮一だった。彼も、いつものような背広ではなく、燕尾服に身を固めて夜会に出席していたようだ。

「なかなか、訪問しても会っていただけませんでしたから、何か失礼をしたのかと気に病んでいたのですよ。」

「ごめんなさい。でもあなた、最初に訪問して来てくださった時、求婚の申し込みだとおっしゃったじゃないの。」

「いかにも。」

「私、申し訳ないけれどもあなたと結婚するつもりは無いので、期待をさせても悪いと思ってお断りしたの。気を悪くされていたらごめんなさいね。」

楡崎は、わかっていた、とでも言うように肩をすくめた。

「なに、一緒にお出かけする事くらい、いいじゃありませんか。どうですか、今度一緒に帝劇にでもいきませんかな?」

「……本当に、ごめんなさい。」

櫻子はすこし戸惑いながら、声を小さくして謝った。

「連れない方ですな。」

楡崎は、傍のテーブルにおいてあった葡萄酒のグラスを持つと、櫻子に差し出した。

「ワインは、嗜まれますか?」

「……頂くわ。」

本当は、日本酒も洋酒もあまり飲めるほうではないのだが、ここで断れば本当に楡崎を傷つけるかもしれないと思い、グラスに口をつけた。

「それとも、そんなに私を拒みなさるのは、他に好いた人でもいらっしゃるからかな？」

口に含んだ葡萄酒の味が、急により強く感じられた。

「おや、動揺していなさる。」

二十センチほども身長差がある櫻子の顔の位置に合わせて、自分の身体を曲げてその顔色を伺った。

「ち、違うわ！」

「では、俺と今度何処かへ出かけましょう？」

「だから、それは出来ないのよ。」

「では、やはり心に決めた方がいらっしゃるのですね。」

壁に手をつき、自分と壁の柱との間に櫻子を追い込む。逃げ場のなくなった櫻子は、観念したように、息を吐いた。

「現在、好きな方がいますの。だから、お気持ちは嬉しいですが、楡崎さんのお誘いには応じられません。申し訳ないですわ。」

しかし、楡崎は、がっくりするどころか、不敵に笑っている。

「面白い。その男がどこの誰かは存じ上げませんが、私はあきらめません。」

最後に、耳元に顔を寄せて、囁いた。

「……俺は、あなたが欲しいんですよ。」

そして、掠め取るようにうなじを軽く吸って、身を翻して去って行った。

櫻子は、触れられたところがじんわりと熱を帯びたように感じた。

そして、その身にまとった深い薔薇の香りよりも危険な匂いを漂わせる男を、ただ黙って見送るしかなかった。

◇◆◇◆

「ちょっと、待ち。」
菊弥が、玲子の腕を掴んだ。彼が追いかけてきた事に気がつかなかった玲子は、びっくりして背筋をそらせた。
「ごめんなさい、気分が悪いの。放して。」
菊弥は逃れようとする玲子の腕を引いた。胸の中に抱きとめて、顔をうなじに寄せる。
「あなた、わかってしもたんやろう?」
しかし、その言葉は甘みも優しさも帯びてはいなかった。その声は、凶悪なのに艶めかしくも、妖しい。まるで毒蝶が、闇夜にりんぷんをふりまいているようだ、と思った。
「言わへん、って約束したな?櫻子にも内緒やで?」
玲子は恐怖で、首を縦にも横にも振ることが出来なかった。しかし、ようやく震える声で、わかったわ、とうなづいた。
「交渉成立や、ほな、玲子さん。」
菊弥は玲子を放すと、広間の方へ一人で戻っていった。玲子は、ほんの少しの勇気も持てない自分の意気地なさを、恨めしく思った。

「失礼します、お嬢さま。」

次の日の午前、櫻子の父、二階堂梅造の秘書の一人である神谷藤隆が櫻子を訪れた。その時、櫻子は、庭のバラ園で斎木に用意してもらった紅茶を飲みながら、読書をしていた。

実は、昨晩の夜、菊弥が去った後に玲子に話しかけてきたのは、神谷であった。玲子の蒼白な顔を見て、心配になって声をかけたのである。

玲子は、勇気を出すならこの機会しかないと思った。菊弥に脅されはしたが、玲子はせめて櫻子だけには何とかして彼の危険性を伝えたいと思っていた。

そこで、玲子が思い浮かんだのが、二階堂家の家令、斎木だった。彼なら、何事も上手く運んでくれそうな気がしたから。

しかし、菊弥は二階堂家に書生として、斎木と共に暮らしていた時期がある。玲子が斎木に告白したところで、信じてもらえるかどうかは確信がなかった。

そして、二番目に思いついたのが、神谷だった。彼は、梅造の秘書であるが、元は仕立て職人であり、櫻子の夜会服を度々仕立てていた事から、二人は仲が良かったからだ。

その為、自分の体調を気遣って声をかけてくれた時は、天が玲子の背中を押してくれているように思えたほどだ。玲子は、自分の身に起こった事を神谷に話し、それを櫻子の耳に入れてくれるように、頼んだ。

神谷に気がついて、櫻子は本から目を離した。神谷は、灰色のすっきりとしたスーツに身を包んでいた。

「あら、どうしたの、神谷さん。」

しかし、眼鏡の奥はいつものような柔和な瞳ではない。何やら深刻な顔をしている。

「あの、最近、京極菊弥さまと浅草に行かれた、とお聞きしたのですが。」
「行ったわ。兄様の代わりについて来てくださったのよ。」
「今後も、何処か一緒に行かれる予定はありますか？」
櫻子は、返事に戸惑った。何処かへ行く約束をしているわけではないが、今度会おう、と言われた覚えがあるからだ。
悩んでいる櫻子に、神谷はずばり、切り出した。
「あの方とご一緒されるのは、どうか控えられた方がよろしいですよ。」
「どうして？」
神谷は、切り出すべきか迷った。しかし、自分の知っている事を打ち明ける事にした。
実は、玲子から話を聞いた後、神谷は斎木に相談した。他の屋敷との付き合いについての雑務をこなしている斎木は、当然地域の情報については神谷よりも長けているからだ。
菊弥の事は伏せて、それとなく雑談に混じらせて、男性の為に遊郭や陰間茶屋はあるが、女性の為のそういった類のものはあるのか、と聞いてみた。
すると、斎木は、眉をひそめたが、あるにはあるような事をほのめかした。
そこで、もしも櫻子さまが、そういった所に興味を持たれたら、どうする、と叱られるのを覚悟で聞いたところ、
「お嬢様には関係のない世界です」
と、一瞥された。しかし、
「そういえば、最近、良家のお嬢様が身投げなさる事件が多いですね。」
と、一人ごちたのだ。何でも、残された遺書の最後には、誰かに向けた別れの言葉の後に、明石だの花散里だのと残されているらしい。
「明石だけなら、恋人の姓名か出身地だと人は思いますが、花散

里とくれば、文学好きならあの作品を連想してしまいますね。」

と、言ったのだった。

そこでどうやら、そのような商売をしているものは単独一人ではなく、複数、しかも組織でやっているのだとわかったのだ。玲子の話が本当なら、京極菊弥もその組織に加担している可能性が高い。

そのような事を、言い終えたとき、さすがの櫻子もそれが作り話だとは思えなくなった。

「そんな、でも私はまだ信じられないわ！」

「驚かれるのも無理はないと思います。しかし、どうか僕と玲子さまを信じてくださいね。菊弥様には気をつけてください。」

何度も念を押して、櫻子の元を離れた。

櫻子は神谷の衝撃的な話を聞きながら、信じたくないが、神谷の話も戯言ではない事は十分に分かっていた。

神谷と玲子の気持ちは嬉しいが、一体どうしたらいいのだろう。

櫻子は、神谷が去った後も読書を再開する事もなく、しばらくバラ園で考え込んでいた。

そして、もやもやとした気持ちを壊す為の、ある突破口を思いついた。

◆◇◆◇

櫻子の考えとは、ありきたりだが菊弥を尾行することだった。自分の目で確かめられるなら、そうしたほうがいいという考えは、櫻子の性格に合っている。それで、もし本当に彼がそういった怪しいところに関わりのある人間なら、それを確かめてから今後の事を考えればいいのだ。

今日一日は仕事が休みな為、それを遂行する事ができるが、もし数日にわたるようなら、家の使用人の中で信用のおける者に尾行を頼めばいい。例えば、最近、通いの料理人から住み込みとして働く事になった、あの柊秀介などである。

しかし、他人にばれないようにこっそり後をついていくというの

は、簡単なようで難しい。空が黄昏になり、日が落ちて人の量が増えてくると、あっというまに人込みの中に菊弥を見失ってしまった。

慌てて、彼が先ほどまで歩いていった方に向かって走り出すが、手遅れである。彼の姿はもうない。

疲れの混じったため息を落し、今日のところはあきらめて帰ろうと、家の方角に向かって歩き出した。

「お嬢さん、もしかして二階堂櫻子さんかい？」

ふいに自分の名前を呼ばれた。しかし、人が多すぎて、誰に呼ばれたのかわからない。

「ここだ。」

明りのついた街灯の下で、着流しの男がいた。袖口からのぞく腕は、良く見ると生傷がたくさんある。しかし、顔はその逞しくごつごつとした体つきとは違って、すっきりとしている。櫻子はもちろん、遊郭という場所に行った事は一度もないが、話に聞く芸に溢れた花魁たちが、花代を払わなくても自分達の方から大勢寄ってきそうな雰囲気がした。

事実、この男にかまって欲しいと思っている花魁は、この辺りの遊郭には大勢いた。

「どなた？」

「獅堂慶示だ。」

「お会いした事はあったかしら？」

律儀な櫻子は、一生懸命に今まで会った人物の顔と名前の中から目の前の人物を探し出そうとしていた。

「そんなに考え込まなくても、俺とお嬢さんは、今まで面識はねぇよ。」

「じゃあ、私の名前と顔をどうしてご存知なの？」

「前に、浅草で俺の子分が世話になったみたいだな。」

櫻子は、その言葉を聞いて緊張した。櫻子が玲子と浅草を散歩していた時に、絡んできた無頼漢達の仲間らしい。その筋の人間というよりは、そこらにいる不躾な男たちと同じ人種だと判断した為、

櫻子は扇子で、玲子の手を引こうとした者の手の甲に、叩き込んでしまったのだ。

「おっと、俺は何もしねぇよ。むしろ、あんたに謝りたいくらいだ。出来の悪い下っ端が迷惑をかけたようですまなかったな。」

その言葉に櫻子は少し安心した。どうやら、この獅堂という男は素性は知れないが、根っからの悪人と言うわけでもないようらしい。

「あんた、玉鬘の後をつけてたみてぇだが、あいつに何か用があるのか？」

聞いてしまってから、獅堂はしまった、と思った。彼は玉鬘の本名を知らなかったから。

「玉鬘…？それって、菊弥さんの事？」

「その菊弥って人物が、俺の言う玉鬘かどうかわからねぇ。しかし、さっきあんたが後を追っかけた人物なら、あの中へ入っていったぜ。」

それは、一見古いが格式ある茶屋（料亭）に見えた。

「あの中に？」

「俺はあそこの用心棒みたいなもんでね、働いているんだ。用があるなら中に連れて行ってやろうか？」

「ええ、お願いするわ。」

櫻子は、うなづいて、獅堂の後をついて行く事にした。

「誰だ、獅堂、その若い子？」

獅堂につれられて中に入ると、中はひっそりとしていた。茶屋（料亭）だと思っていたが、どうやら食べ物を客に食べさせる為の場所ではなさそうだった。現に、櫻子が現れたというのに、女将や女中ではなく、まるで生きた蝋人形のように美しい男が、腕を組んで現れたからだ。不機嫌なのか、眉が額によっている。

その妖艶な姿は、一瞬、男性なのか女性なのか見分けがつかなかったほどだ。しかし、良く見ると喉仏もあるし、肩幅や鎖骨も男性特有の感じがあった。

顔は、まるで女子のように細い顎と白い肌をしている。歳は恐らく二十代後半くらい。髪は男だと言うのに、腰まで届くかのような豊かさだった。淡い紫色の着物を着流している。

全体から、すっと空中にそのまま消えていきそうな、霞のような退廃的な雰囲気を醸し出している。しかし、その強い瞳には、弱弱しさを感じさせなかった。相反する二つの印象を、一つの身に持ち合わせている不思議な人物だった。

「どなた？」

「この店の御職だ。若紫と呼ばれている。」

獅堂が櫻子に耳打ちした。

御職？若紫？櫻子には聞きなれない言葉だ。彼は、芸者か何かだろうか。

「誰だって聞いているだろう、獅堂？」

まだ、玄関から上がっていない二人を、若紫は上から傲慢に見下ろす。

「二階堂櫻子さんだ。」

その名前を聞いて、若紫は眉を上げた。そして、次の瞬間、ようやく獲物を手にした猫のように、満足した表情を浮かべた。

「へえ、彼女が？もし、人違いなら、きみをどうにかするよ、獅堂？」

残酷な瞳でねめつけるように言い放つ。

「本当よ、私の名前は、二階堂櫻子だけど、それがどうかしたの？」

「いや、どうもしない。」

若紫は、自分の居る場所から一段降りて、櫻子の腕を掴んで引き寄せた。

あ、と小さく叫んでよろけるのを、若紫が腕で受け止める。

「ようこそ、源氏屋へ。いい夢を見せてあげよう。私の部屋に来るがいい。」

「あの、ちょっと！」

櫻子が驚いて動揺している隙に、その身体を軽々と抱き抱えた。

その雰囲気から、腕の細い男だと思っていたが、どうやらそうでもないらしい。櫻子の身体を支えている腕は、たくましいものだった。

「靴はここで脱がせておやり、獅堂。」

手がふさがっている自分の代わりに、獅堂に靴を脱がせようと彼女の足先を彼に向ける。

獅堂はいわれるがままに櫻子の革靴を脱がせた。しかし、くたばってしまえ、と若紫に向けて心の中で毒づいた。

◇◆◇◆

「いや、下ろして！」

若紫が、玄関から自分の部屋に向かう途中、櫻子は当然ながらもがいていた。しかし、いくらもがいても、この男はびくともしない。

「あっ！」

そして、部屋までたどり着くと、乱暴に櫻子を褥の上にのせた。

「本当は、玉鬘の獲物だけど、私が始末してもいいだろう？どうせ、あの方のお役に立つことには変わりないのだから。」

また、玉鬘という名を呼んだ。

「あの、その玉鬘ってまさか…？」

「本名は知らないけど、きみの幼馴染とかいう褐色の肌の男の事を言っているなら、そうだよ。」

そして、櫻子が何かを言う前に、背中を抱きしめられて、唇を奪われた。

驚いて、彼の身体を突っぱねようとするが、それよりも素早く舌を絡め取られた。若紫は、目を開けたまま、櫻子の驚く顔を楽しむかのように、笑みを浮かべている。嫌だ。こんな見知らぬ男に。

不意に、櫻子の口から顔を離した。そしてゆっくりと櫻子を褥の上に仰向けに寝かせる。

「本来なら、一切十円の手練手管、たっぷり教えてあげようか。」

そして、櫻子の顔の両側に手をついて、見下ろす。

「大丈夫、私は優しい男だからね。最中に無茶な事はしないよ。」

とろり、と溶けるような危険な声で囁く。いつもの櫻子なら、誰かに組み敷かれた位で固まってしまうような、ひ弱な令嬢ではなかった。

しかし、どうやって逃げ出したらよいのか妙案が全く思い浮かばない。それは、櫻子自身がそういった経験がないばっかりに、身体の方が驚いてしまって、頭と繋がっている神経が、途中でめちゃめちゃにこんがらがっているような気分だった。

このままだと、さらにとんでもない事を、この男はするに違いない。混乱しつつも、どうしたもんか、と考え始めた時、急に部屋の襖の扉が思いっきり開かれた。

「若紫っ！」

どかどかと中へ踏み込んできた人物は、若紫の胸元を掴むと、腹部に一発、ぶち込んだ。頬にしなかったのは、まだ若干の理性が残っていた証でもあった。

そして、畳の上に倒れた彼の胸元をもう一度掴む。

「手を出すな、って言ったやろうが！」

それは、櫻子が今までに見た事が無いような、菊弥の横顔だった。
「玉鬘か、いい所で邪魔しにくるね。やな奴。」
「俺もお前なんか嫌いや。」
若紫を睨みつけて、突き飛ばした。そして、櫻子を抱き寄せて、安堵のため息をついた。
「間に合ってよかった。」
玄関にあった靴を見て、ぴんと来たのだ。獅堂に詰め寄って、若紫が櫻子を連れて行った事を聞き出し、慌てて乗り込んだのだ。こんな場所へ連れて来た獅堂も同罪だ。きっと、考えもなしに、彼女を連れて来たんだ。ああ、腹だたしい。
「菊弥さん？」
現在起こった事に呆然としている櫻子が、顔を上げて菊弥を見つめた。彼女からは、白粉の匂いがした。女性の白粉の匂いなんて、いつも嗅いでも何ともならないのに、今日だけは何故か頭の心がくらり、とゆすぶられた。その欲情に負けて、櫻子の唇に軽く口づけを落す。
そして、彼女を抱き上げて、立ち上がる。そして、もう一度若紫に一瞥をくれてから、部屋を立ち去った。

（注：平均的な遊興の代金は3円。一切は遊興時間の単位で一時間弱）

【京極菊弥】編（９）　冷静ト情熱（Ｒ１５）

菊弥は、別の室内に入ると、櫻子を思いっきり抱き寄せて、何度も口づけした。この間とは違う、闇を切り裂くような情熱をぶつけてくる。そして、菊弥の方から後ろ向きに褥に倒れこみ、自分の身体の上に櫻子で抱くようにしてから、また更に口づけた。

櫻子の方は、逃げもせず、かといって自分から求めるわけでもなく、されるがままになっていた。しかし、だんだんと身体の力が抜けていくのを菊弥が感じ取ると、今度は身体の向きを動かして、櫻子が、自分の下になるようにした。

菊弥は、両肘を肩辺りの両側について、瞼を閉じている櫻子を見つめる。

次は、うなじに、口づけをして、首すじ、鎖骨へと下ろしていった。舌をあてて、己の熱い体温を、櫻子の薄い皮膚と、その下に張り巡らされている血管に伝えるかのように。

そして、ほんの少し着物を胸元をはだけさせて、みぞおちのあたりを同じようにする。そこから悩ましげな匂いが鼻をかすめるせいで、心臓から狂うような切ない情が、鎌首をもたげたのを感じた。

止めなければいけない。これ以上、匂いと皮膚の柔らかに翻弄されてしまえば、自分を抑えられなくなる。自分自身でも、時々、凶悪だと感じてしまう男の欲望を、きっとまだ何も知らないの彼女にぶつけてしまうだろう。

女の欲を感じるたびに、菊弥はいつも、彼女達の中では、紫紺の深い霧が凝縮されて、その中心から渦をかき続けているようだと感じていた。その渦を崩して、ただの淡く漂う霞に戻してやる。それが、自分の仕事だと思っていた。

そうすれば、「玉鬘」として、相手と接する事が出来た。

しかし、「玉鬘」とその「標的」という関係にあっても、今は彼女を抱く事ができない。そして、「菊弥」と「櫻子」の関係であっ

ても、それは同じだった。
愛しさと、狂おしいまでの切なさと一緒に蓋を閉めても溢れる情欲を、抑えることができない。深いところで繋がりあって、お互いのぬくもりを確かめてみたいと、こんなにも自分は欲している。しかし、同時に、「それは出来ない」という相反する気持ちが、菊弥の中でせめぎあっていた。
穢れきった自分に、彼女は清らかすぎた。
「菊弥……さん？」
その葛藤は、菊弥の外面にも現れてしまっていた。急に、動く事をやめた彼に、櫻子が声をかける。
「どうしたの？」
「櫻子……。」
冷静さを取り戻した菊弥は、櫻子の身体から離れて、彼女を切なげに見下ろした。そして、彼女の右手を取って、その指先を触れているのかどうか分からないくらいの軽さで、優しく吸う。
櫻子は、その先端に触れる舌の滑らかさと熱さが、腕を伝って、顔を上気させていくのを感じた。神経の敏感な右腕の指先から吹き込まれる何か。熱烈に口づけされるよりも、言葉で好きだと囁かれるよりも、櫻子はこの目の前の男が、女性として自分を欲している事を感じ取った。
そして、菊弥の頭の中で、とうとう何かの糸がぷつり、と切れた。櫻子の腕を引いて、自分の胸の中に引き寄せる。
「櫻子、ここから、早く逃げろ。源氏屋にやってきた、という事は玲子さんから聞いたんやろう？」
「違うわ、神谷さんよ。」
菊弥は、玲子が櫻子ではなく、まずは第三者を介して自分の事を相談したのだと悟った。なるほど、玲子が直接話しても、二人の幼馴染のどちらを信じればいいか天秤にかけて迷うだろう。それなら、客観的な第三者からの忠告の方が耳を傾けやすい。深窓の令嬢だと思っていたが、意外と頭の回転がいい人物のようだ。

「この通り、俺は娼夫として囲われとる。俺の母親が病で、莫大な金が要り用になってしもたんや。」

「そんな……だったら、父様にでも相談してくださったらよかったのに。」

「既に、援助は受けている。それでも足らんのや。」

「なら、足らない分も……。」

「出来ん。俺の家族みたいな家が梅造さんの周りに何人いると思う？ましてや血のつながりもない人間に情けをかけ続けたら、あっという間に二階堂家の財産は空になるで。」

櫻子は今まで知らない話だった。彼は、そんな苦渋を味わいながらも、夜会では微笑んでいたと言うのか。

「それに娼夫の仕事だけじゃなくて、別の仕事も雇い主からさせられているんや。」

菊弥は、仲間の一人である明石の標的が、最近自殺した事を櫻子に打ち明けた。それは櫻子も、神谷から聞いた話だった。

「そうやから、若紫につれていかれたと知った時は、焦った。あいつは、御職や。一度、味を知ったら、よっぽどの女性でない限り、狂わされる。」

若紫、なんて可愛らしい名前を、よくもあの毒蜘蛛のような男につけたもんだ、と思う。緋色の目をして、長い八本の触手を持った、毒蜘蛛。糸を吐いて、女の魂をからめとっていくような相手だ。

若紫に比べたら、まだ獅堂の方が若干可愛げがあるようにさえ、思えてくる。

話を聞かされて、櫻子の胸は、菊弥の言葉を聞いておぞましい感触が背筋から這い上がってくるのをとめる事ができなかった。

「と、いう事はあなた……。」

私を、はめようとしていた？

「一度はそうしようと思った。でも、今はそのつもりは無い。だから、逃げて欲しい。櫻子を俺の傀儡のように仕立てた、その先に何が待っているんか、俺は知らん。何も聞かされてはいないんや。」

菊弥は、自分が打ち明けてしまった事を誰かに知られたら、自分の身に危険が及ぶのではないかと思った。しかし、そんな事まで考慮している余裕はなかった。

「あなたは、これからどうするの？」

「まだ在籍期間が残っている。しばらくはこのままや。」

そんな、と小さく悲痛の声をだした櫻子に、菊弥は口づけを落した。

そして、源氏屋から二階堂家までの道のりを送っていって、別れた。

【京極菊弥】編（１０）　在リシ日ノ残像

数日がたった頃、めったな事で動揺しない家令の斎木が、興奮気味に言った。

「大変ですよ、お嬢さま。京極菊弥さまが有名な絵画の賞を受賞されたとの事です。」

櫻子は、菊弥が暇があれば日本画を描いていたことは知っていた。しかし、絵の心得のない櫻子には、彼の力量がどれほど凄いのかを、実は理解していなかった。

だから、斎木と父に促されて、菊弥の長屋にお祝いを言いに訪れる事にした。櫻子は、源氏屋で別れた後から、彼に会っていなかったので、扉を叩く時に少し緊張の余りためらった。しかし、いざ叩くと、菊弥はいつものようにのっそりと現れた。

夜会の時だけではなく、外へでる時もいつも小奇麗にしている菊弥だが、家の中に居るときは、絵を描く為なのか、わざと自然な格好をしているように思えた。髪も、香油は使われておらず、無造作になってしまっている。

「櫻子か、今日はどうした？」

「こんにちは。あなたの良いお知らせを聞いたので、お祝いに来たのよ。」

ああ、と思い出したかのように眉をあげ、その次に笑みを作った。

「そら、どうもおおきに。」

「さらりと言うわね。でも、凄い賞なんでしょう？斎木だって驚いていたのよ。」

「うん、本当に良かったわ。運が良かったんやろうな。」

入り、と促されると、この間来た時と変わらない光景があった。変わっているのは、この間の書きかけの絵が仕上がって、現在は別の絵を描いている事くらいだ。

「一体、今まで何点位の絵を描いたの？」

「この長屋にあるのは二千点程やな。この部屋にある物以外は、ここの蔵に置かせてもらってる。」

「二千点!?」

「たまってしもうてな……どうや、好きな絵があったら、何でも持って帰っていいで。助かるし。」

助かるし、とは言われたが、賞を受賞したのならば、この部屋にある絵を画廊に持っていけば、それなりの値段で引き取ってくれるのではないだろうか。しかし、菊弥にどれがいい、と促されて、櫻子は部屋の四方の壁や床に所狭しと置いてある絵画を、ゆっくりと見始めた。

「どれも奇麗ね。風景画も人物画も。」

「富士山、川、海、花、動物、鳥、何でも取り揃えておりますで。」

冗談めかして菊弥が言う。櫻子は、その中でも櫻の木が描かれている、何点かの絵画が気になった。

「私、櫻の絵が欲しいわ。」

櫻子は、櫻の木を描いた絵だけを集めて置いてある一角を、丹念に鑑賞し始めた。

その時、一つの絵が目に入った。

大きな櫻の下で、鞠を持った少女がこちらを見ている。丁度、鞠で遊んでいる最中に、誰かに名前を呼ばれたみたいに。

歳は十五前後くらいで、ほっそりした体と赤い着物が良く似合っていた。そして、少女の周りには、櫻の花びらが降っていた。淡くて明るい色の使い方は、この瞬間の春の幸福を愛でているようだった。

「これは京都の櫻なの?」

「そうや。奇麗やろ。」

「この少女は、知り合いの子?」

佐奈子、と菊弥はつぶやいた。

「佐奈子?」

「ああ、親戚の子や。」
菊弥は、何でもない風に返した。しかし、その瞳に若干の憂いを帯びていた事を、櫻子は見逃さなかった。

◆◇◆◇

授賞式に一緒に出席をして欲しい、と言われ承諾して、帰宅する事にした。
その途中、急に後ろから声をかけられた。
「やあ、櫻子さんじゃありませんか。」
聞き覚えのある艶めかしい声に、とっさに心を身構えた。振り返ると、洋装に身を包んだあの人物の姿があった。若紫である。
「おっと、今はただの一般人なんでね。今は、その名を呼ばないでおくれよ。」
「じゃあ、私に何の用なの？」
ふっ、と若紫は目を閉じて小さく笑い、肩をすくめた。
「玉鬘のやつ、君を抱かなかったね。」
そして、目を開くと凶悪な笑みを浮かべた。そして、櫻子の腕を掴んで抱き寄せる。
「教えてやろうか、私だけが知ってる彼の秘密。」
彼女の白い顎を掴んで、上にそらせる。
離して、と言って振りほどきたいが、見た目よりも力の強い若紫は、櫻子が身をよじってもその動きを封じてしまう。
「あいつが、どうして源氏屋に身を落したか、その訳を。」
「もう知ってるわ。お金の為でしょう。離して。」

「やはり、玉鬘は私達を裏切ったんだね。きみに全てを話すなんて。」

若紫は、猫を可愛がるかのように、櫻子の顎を撫でた。

「でも、君、異常だとは思わなかったかい？自分の母親の為に、それも血のつながらない義母の為に、自分の身を売るなんて。」

「血のつながりはなくても、親子じゃないの。彼はああするしかなかったから、そうしたんじゃないの。」

違うさ、と若紫は櫻子の耳元で、息を吐きかけるように囁いた。その生暖かい感触が、耳を侵食するおぞましさに、櫻子は戦慄した。

「義母は、彼の初恋の人だった。」

そして、櫻子の頬を、絡めとるように舐める。しかし、若紫の告白によって、体の芯を貫かれるような衝撃を受けた彼女は、彼を振り払う余裕さえない。

「親戚らしいから、小さい時には良く会っていたんじゃないかな。」

「義母さまの、お名前は……。」

どうしてあの時直に思い出せなかったんだろう。自分は知っていたのに。

あの絵に描かれたのは、春の幸せではなく、菊弥の幸福な思い出。

櫻子は、若紫を思い切り突き飛ばした。櫻子の頬を唇で愛撫することに夢中になっていた若紫は、その拍子によろけた。櫻子は、するりと抜け出して、もう一度来た道を戻った。

◇◆◇◆

「菊弥さん！」
そして、長屋に着くと、扉を叩いた。
「櫻子？」
出てきた菊弥は、櫻子が戻ってきた事に驚いた。櫻子は、彼の顔を見るなり、その首に腕を回して、ぎゅ、っと抱きついた。
「ど、どうしたんや。」
いきなり胸元に飛び込んできた彼女に、慌てる。
「可哀想な菊弥さん……！」
菊弥は、下を見てぎょっとした。
櫻子が、その瞳から涙を流している。日頃、めったな事で泣かない彼女。母親が亡くなったときも、「母さまが悲しむから」と、涙を見せずに耐え抜いた少女。
その櫻子が泣いている。
「どうした……？」
「さっき、若紫さんに会ったの。菊弥さんが源氏屋で働いているのは、義母さんを助けたいからだって。」
佐奈子さんでしょう、と顔を上げた櫻子は、部屋の奥を指差した。先ほどまで自分達が見ていたあの日本画を。
菊弥は、そっと櫻子の瞼に唇を落した。頬に落ちた涙の玉も、指ですくってやる。
それから、櫻子の脚の付け根に右腕をまわして、櫻子をひょい、と抱き上げる。もう左手は、背中にまわして、彼女が腕から落ちないように支えた。
「部屋に、入り。」
そして、櫻子を部屋に連れて行くと、座布団の上にゆっくりと下ろしてやった。
「あの……。」
櫻子が何かを言おうとした唇を、そっと親指で撫でる。
「若紫の言う通りや。義母は俺の初恋の人。あの絵の少女は、小さい頃一緒に遊んだ時の櫻を思い出して描いたもの。」

でも、彼女は、父さんを選んだ、と菊弥が瞼を伏せて言った。
「でも、それはしょうがないのや。佐奈子は俺より六つ上なだけやったけど、俺の叔母やという事はどうしょうもできん。」
実母の年の離れた妹だった。
「最初から、どんな縁結びの神も、俺を見放すしかない想いや。それでいい。」
拾えば恋が成就する、という櫻の花びらを握り締めても、適わない想い。
それでも、いつか、言おうと思ってた。
そして、ある日、それすらも適わなくなった。
「まさか、義理の母さんになるとは思っていなかったけどな。」
彼女が幸せなら、それでも良かった。
「でも、父の方は彼女を愛してはいなかったんや。ただ、死んだ母さんへの当てつけやった。」
愛されるべき人に愛されない、自分の愛する人。
「俺は、父親には、全く似ていないやろう?」
菊弥が櫻子の手を取って、自分の肌にあてた。
「浅黒い肌以外は、目も鼻の造りも全部母親そっくりや。実家の困窮でむりやり父と結婚させられたせいで、父の事を全く好いていなかったから、それだけが母が一番喜んだ事だった。」
政略結婚で一緒になったが、菊弥の父親である音弥は、そのずっと前から、菊弥の母を愛していた。
しかし、母は音弥が嫌いだった。穏やか過ぎて、男らしい魅力に欠けていた音弥。菊弥のように清廉なのに、時々垣間見せる妖艶さや、凛とした眼差しも何も持ち合わせていない平凡な男性。いつも彼女に向ける柔和な笑顔さえも、うっとおしいものでしかなかった。
「いつか、櫻子にも言ったやろう?母親は潔癖な性格やったと。そうやから、父が嫌いでも、浮気はしなかったと思う。でも、父の方は、肌の色以外、顔の作りが全く似ていない俺を信じられへんか

ったみたいやった。いや、逆に、実の息子やのに全然似てない俺が密かに憎かったんとちゃうかな。」

手の形とか、鎖骨はそっくりやのになぁ、と菊弥は自分の手のひらを見つめてため息を吐いた。

「そうやから、佐奈子を後妻として迎え入れたのは、親父の復讐やったんや。自分より美しい、と言われてた妹の佐奈子を娶って、俺よりも美しい子供を成す……。」

そうすれば、音弥に似なくて良かった、と菊弥を見ながら喜ぶ愛する人を見返せるような気がしたから。

「でも、そんな事を佐和子は知らん。知らんまま、わけの分からない病になった。俺はそれを救いたいだけや。」

その彼女がこのまま儚くなってしまうのなら、自分の想いは何処へたどり着けばいいのだろう。

佐和子を娶ってから、病気になるまでの間、菊弥は自分の父親に対して、表面上は普通に接しながら、心は閉ざしていた。

それは、「憎らしい」という言葉だけでは、表現しきれない感情だった。もしも彼が生きた人間ではなくて、例えば茶碗や何かだったら、粉々に砕いているはずの、黒い黒い感情。自分の心臓が生きたまま引き裂かれるような痛みを、何度も何度も味あわされるような苦痛と悲しみ。その渦巻く思念を押し殺して生きてきた。

父親は気がついていないだろう。もしかすれば、直接的な暴言や暴力以上に残酷で醜悪な、自分の親不孝を。

しかし、佐奈子が病気になって、音弥は世界がひっくり返ったように取り乱した。そして、必死に金策に駆け回る彼の姿を見た。その時に、こころの汚いものが、すっと流れていった事を感じた。

彼も、ようやく気がついたのだ、と菊弥は思った。自分の哀しい間違いに。

「今まで密かに父を、心の中だけで裏切り続けた。その落とし前みたいなもんをつけたくて、金策に協力したんや。」

源氏屋に身を落したのは、佐奈子を救いたい想いと、父親への懺

悔の両方だった。
「櫻子、おおきに。」
菊弥は、櫻子の顔に近づいた。
そして、彼女の涙のあとに、優しく口づけする。
「俺の為に泣いてくれた事を、一生忘れない。」

【京極菊弥】編（最終回）　還ル日

深々と雪が降る午前中、銀座のとある喫茶店に、九鬼梗吾（くききょうご）は居た。本や新聞を持ち込んで、それを眺めながら、珈琲のカップに時々口をつけている。

その時、喫茶店のドアが開いて、傘をたたんで店内へ入ろうとする女性の横顔を見た。それは、櫻子だったのだが、彼は面識がないのでその名をまだ知らない。

櫻子は、桔梗色の着物に身を包んで、藍色の帯を締めていた。着物の柄は、菖蒲だった。長い髪も奇麗に結い上げて、寒簪も挿している。白粉をはたいて、頬紅をのせた化粧姿は、しっとりとしていて上品だった。

九鬼は、独り身だった。そうでなければ、休日の午前中に、喫茶店で暇を潰したいとも思わなかっただろう。知性を帯びた鋭利な瞳と、無駄な肉のついていない長身は、放っておいても女性の方が群がってくるような容姿ではある。しかし、彼自身はその事に気がついていなかったし、それ以前に、九鬼は女性の扱い方というか、接し方が下手だった。だから、当然、恋人もいない。

それに、彼の仕事柄は激務過ぎた。なかなか今日のように、ゆったりとした時間を持てない事も、自分に恋人がいない原因だと、九鬼は信じている。

仕事が忙しいのは本当の事で、最近、殺人事件が相次いでいた。自殺として扱った件も含めれば、かなりの件数にのぼる。

よって、恋人どころか、美しい生身の女の顔すら拝（かんばせ）めない哀しい日が、九鬼には続いていた。

かといって、遊郭に通うことはしなかった。どうも、色気に満ちすぎている艶めかしい女性は苦手らしい。媚を売られるのも苦手だ。向こうから自分に接待をしてもらうのは、あまり好きなほうではない。九鬼の理想は、澄んだ目をした優しい女性を、いろいろな所に

連れて行って、楽しませてあげる事だった。
だから、まさに、自分の理想に近いと思われる女性が喫茶店に入って来たので、しばし目を奪われた。しかし、その人と視線が合ってしまったので、内心どきりとして、慌てて視線を元に戻す。
そして、誤魔化すように、途中だった新聞記事を最後まで読んだ。
（……最近、大企業の経営危機が相次いでいるな。）
ある企業と、別の企業の合併の話がもつれ、破談になった矢先に、一方の企業が倒産してしまったという記事を読みながら、そんな事を思っていた。
その倒産した企業の経営者というのが、先日、謎の「明石さま」に思いつめて、入水自殺してしまった女性の父親だという事を、まだ九鬼は知らなかった。
櫻子が九鬼の座っていると所の傍へ近づいてくる。その時に、机に積んでいた本が一冊、床に落ちた。
それに気がついた九鬼が本を拾おうとすると、それより先に櫻子が屈んで拾い、どうぞ、と渡した。
「……どうも、すみません。」
「いいえ。芥川先生の羅生門ですね、私も読みましたよ。」
そう微笑んで、九鬼の傍を離れた。少しはなれた椅子に座って、窓を眺めている。
九鬼は、その横顔を見た。もし、あの人の体を自由している恋人がいるとするならば、その相手に嫉妬していたかも知れない、と思った。
（下世話な発想をしてしまった……。）
頭の中だけで、自嘲の笑いをもらした。
しかし、もしも「運命の神様」というものがいたら、九鬼を笑って見下ろしていただろう。今すぐに椅子から立ち上がって、櫻子に声をかければ、もしかすると九鬼が、彼女の恋人になり得たかもしれないというのに。

◆◇◆◇

授賞式は、ホテルの広間を貸しきって行われた。菊弥は始まるまで、受賞者用の個人控え室をあてがわれていた。その中には、菊弥の周囲からのお祝いの品や花も一緒に運び込まれていた。

（まるで、歌舞伎役者の楽屋みたいやな。）

菊弥が、その華やかな贈り物を見ながら思った。

「失礼します、京極様。」

扉を叩く音がして、ボーイが中へ入ってきた。

「軽いお食事とお飲み物をお持ちしました。」

そういって、握り飯やら、具をはさんだパンなどの軽食を持って入ってきた。

「どうも。」

その食物が置かれた台に、小さな箱が置いてあった。

「これは？」

「ああ、これは贈り物の一つです。先ほど届いたばかりですので、一緒に持って参りました。」

ボーイが珈琲を注いでくれている間に、パンをつまみながら、その箱を開けてみた。

中は、自分の好物の落雁だった。直径五センチ程の大きさで、梅、櫻、菊、紅葉など、植物の形をした落雁が詰められている。

その可愛らしさに、くすりと笑ってしまった。

こんな事を考え付くのは、女性の知人の少ない自分には、一人しか思いつかない。

菊弥は一つ口に入れて、中で噛み砕いた。中でほんのりとした甘みが広がる。

しかし、その中に混じって、痺れる様な苦味が口内を突き走った。慌てて吐き出そうとするが、痛みのせいで、上手く吐き出せない。

「き、京極さまっ？！」

急に立ち上がったと思ったら、床でのたうちまわる菊弥を見て、ボーイが異変に気がついた。

「毒だ！仕込まれたっ、病院へ！」

「はい、人を呼んで参ります！」

ボーイは慌てて駆け出していく。菊弥は、自分が先ほどまで手にしていた珈琲のカップを、なんとかして掴むと、液体を口に含んで口内の落雁と一緒に取り出したハンカチの中に吐き捨てた。

医者である菊弥にも、なんの毒なのかわからない。しかし、今だ気絶していない事を考慮すると、鳥兜（トリカブト）のような、即効性の毒ではないようだ。もし、そうならとっくに死んでいる。

（最後の瞬間まで、もがき苦しめという事か。）

うかつだった。医者の自分が毒薬を含むなんて。

菊弥は、あの贈り物が櫻子からではなく、源氏屋からだという事を悟った。

吉原遊郭でも、遊女の郭抜けは厳禁だ。菊弥が命令に反して、櫻子を守った事への罰なのだろう。

うすれゆく視界の中に飛び込んできたのは、櫻子の顔だった。

「菊弥さん！」

「櫻子……。」

何人かの大人が戸板を担いで、部屋に入ってくる光景も映ってくる。

しかし、駄目だ。呼吸が辛い。飲み込まずに素早く吐き出す事は出来たが、成分が唾液に混じって、微量が体内に取り込まれてしまったのだろう。

「……賞を取れたなら……俺の絵は売れるだろう……それを……治療費に。」

「ねぇ、しっかりして！」

「賞なんていらない……金が……売って……。」

彼女の病気を治して、全ての歪みを正しく戻さなければいけない

から。父と佐奈子の関係を、彼女と自分の関係を、そして、自分と櫻子の関係を。

かつて自分が櫻の下でいつか言おうと誓った思いを、今なら佐奈子に伝えられるだろう。父が彼女を本当は愛していると知ったから。これからは親子としての絆を、彼女と作っていきたい。

そして、櫻子とは……。

菊弥は、櫻子の手を取った。櫻子は力の入らない、弱弱しい手をしっかりと握り締める。

駄目だ、駄目だ、と心の中で、自分が叫んでいる。しかし、痺れる痛みと早まる動機は、毒が血液を巡り始めた証拠だ。視界に靄がかかる。櫻子の顔も、もうはっきりと見えない。

でも、まだ、もう少し。伝えなければいけない事がある。

「愛してる……櫻子……。」

菊弥の意識は、すう、と離れていった。

「待って、私、待ってるから！ずっと待ってるわ！」

菊弥が駆けつけた男性達に担架で運ばれ、病院の手術室に入っていくまで、櫻子はずっと傍について走っていた。

手術室の重たい扉が開いて、そして閉まった。櫻子は、その様子を見守りながら、心の中で何度も、「待っているから」と繰り返していた。

窓の外では深々と降り続いていた雪がいつの間にか止み、黄色い太陽の日差しが天から降り注いでいた。

【終】

【二階堂桃真】編（1）　吉原遊郭（前書き）

掲載するつもりだったのですが、読者に喜んでもらえるのか不安だったので、飛ばした所、桃真編を！というお声を「日々の後書き」で頂きましたので、掲載する勇気を持ちました。

【二階堂桃真】編（1）　吉原遊郭

――買うは極楽、売るは地獄。ここは、日本堤の新吉原。

大正五年に人道的見地の点で禁止されてから、男達が通りに立ち、格子越しに遊女を眺めて相手を決める「張見世」の制度がなくなってから、客はずらりと並んだ写真から選ぶようになった。

そうなると、迷ってしまって選びにくい。女は皆、顔を白く塗り立て、紅を引いていて、どれも同じに見えてしまうからだ。

しかし、数人のまとまった男が店に入ると、写真も見ずに妓女の名前を呼んだ。馴染み客である。

「いらっしゃいませ。清花（きよか）は今、空いております。」

店の者がその一団の中の、黒色の着物を着た若者に告げて、案内した。

めんどくさいことになった、と若者は、内心苦虫を？み潰したような思いだった。どうしてこうも自分は、大事なところで上手くいかないんだろうか。

彼は帝国陸軍の若き少佐、名を二階堂（にかいどう）桃真（とうま）といった。

桃真は、櫻子の血の繋がらない義兄である。

組織の中でも成績優秀、頭脳明晰、そして男性の割りに、きめの細やかな美しい肌をした眉目秀麗な容姿から、一目置かれる存在だった。出身も、養子ではあるが天下の二階堂家の長男である。血縁関係から言うと、櫻子の母親の姉の息子であり、貧乏であるが華族の末っ子だった。

しかし、そのように恵まれた彼を妬むものは、周囲には不思議とあまりいなかった。それは、彼の公平で真面目な性格によるものが大きかった。その理由は、良いものは良い、悪いものは悪い、そういった客観的な判断を周囲にも、己にも淡々と出来る者だったから。

桃真は滅多に笑わない代わりに、軍の訓練以外では、滅多に怒る事もなかった。それどころか、無表情というよりは、やや気難しげな表情をして近寄りがたい雰囲気もあったが、同時に落ち着いた印象を他人に与えていた。だから、性格と外見を総合すると、規律だとか道徳を重んじる類の人間には、受けがよかった。

だから、周囲は、桃真は何一つ不自由なく幸せで、不満に思うことなど何もない、と思っていた。ゆくゆくは陸軍でもっと昇進し、そして除隊して、綺麗な妻を隣において財閥の重要な地位について、経済界を引っ張っていく存在になるのだと思っていた。非の打ち所のない完璧な将来設計図を、神様から与えられた特別な人間なのだと。

だから、周囲は知らなかった。桃真がとある一つの深刻な憂いを胸に秘めている事を。大半の人間が手に入れることのできる単純なものを、彼が得られないという皮肉を。本当に、誰一人として知らなかったのだ。

◆◇◆◇

「桃真じゃないか。」

日が白から朱色をおび、西に傾きかけてきた。浅草に近い大通りを、一人で歩いていた所、後ろから声をかけられた。聞き覚えのある少ししゃがれた低い声。振り返ると、髭面で、顎の太い男は、軍の馴染みの同僚だった。その後ろには他にも三人ほどいる。

その構成を見て、しまった、という気持ちを顔に出さないようにするので精一杯だった。

「お前、暇なのか。どうしてこんな所にいる。」

「父様の用事でちょっと一緒に出かけていたのだ。俺だけ先に終わったので、帰る途中だ。」

「じゃあ、暇だな。」

「いや、家でいろいろとまだやる事がたまっているのだ。」
「家でやれることなら。つきあえよ。」
「すまんが、断る。」
はっきりと辞退の言葉を口にしたが、同僚は引き下がらない。
「いいじゃないか、今日は酉の市だ。吉原に行こう。」
酉の市とは、鷲妙見大菩薩を本尊とする長國寺の祭りだ。その隣には鷲神社もあるが、明治初年の神仏分離令により、長国寺と引き分けられたのである。早い話が、一緒だったものを寺と神社として分けたのだ。
その長國寺から田園をはさんで東隣には、吉原遊郭があった。遊郭の周りは「お歯黒溝」と呼ばれる堀で囲まれていて、非常時にこの堀に跳ね橋をかける以外は、大門からしか出入りできなかった。
しかし、酉の市の日だけは、通常は開けない大門以外の門も開放して、昼見世から開いて商売をしていた。つまりは吉原ついでに酉の市、酉の市ついでに吉原という提携商売を展開したのである。
だから、この辺りは吉原へ行こうとする客も必然的に歩いているわけで、それはつまり、知り合いに会うかもしれない、という可能性があるという事だった。
そんな可能性の事など、最初から頭になかったが、馴染みの顔を見るなりその事に気がついたので、ああ、しまったと思ったのである。
今日は、二階堂家の夜会を襲撃されてしばらく経った土曜日だ。そして、桃真はどうしても、夕方までは、外で時間を潰さなければならなかったのだ。
その理由は、今日の夕方、その酉の市に行きたいから一緒についてて来て欲しい、と義妹に頼まれて了承したものを、朝食の席で急に断ってしまったからだ。
本当は、断る理由なんてどこにもなかった。急に用事が出来たというのも方便だ。もしも、自分が本当に何も用事がなかったのに、断った事を知ったら、彼女は気分を害するかも知れない。しかし、

自分にとっては、これは最善の選択で、最良の選択だった。そう、信じたかった。

それに、今日の朝、急にその楡崎蓮一が、予定もなし二階堂家を訪れて、「帝劇に行きましょう」と櫻子を誘い出したのだ。それは、櫻子と、そして桃真にとっても丁度良かった。拭い去れない成金風情が、若干気に食わない人物ではあった。しかし、運転手付きで迎えに来たという事は、櫻子を無事に屋敷まで送りますよ、という証拠なのだろう。帝劇の後、二人で西の市を訪れる事になっても、あるいは洒落た料理店で夕食を取る事になっても、どちらにせよ、櫻子は今日という日を無駄にしないですんだのだ。

できれば、このまま二人が上手くいって、婚約まで結びつけばいいのに。気位だけ高い華族の貴公子や、学も気品もない富豪の愚息に嫁ぐくらいなら、あの楡崎という人物は悪くはないように思われた。頭も良さそうで、若さも、野心もありそうだった。父の梅造が好みそうな人物だった。

だから、先週、まだ外も明るい夕方に帰ってきた櫻子から、あの深い薔薇の匂いが漂って来た時に、彼女の頼みを断る事に決めたのだ。楡崎蓮一の、オード・トワレが香った時に。

その匂いが桃真の鼻をかすめて、やがて遠ざかっていった時に、どうか、彼女もそのようにして彼に奪っていって欲しいと思ったのだ。

自分の手が届かないような、何処か遠くへ。

そして、櫻子が何かに悲しんだり、落ち込む事がないように、傍に寄り添ってやって欲しい。例え、それが楡崎ではなかったとしても、いつかは訪れるであろう顔も知らぬ男性に、そう祈った。

もしも、彼女が不幸せになることがあれば、自分は壊れてしまうだろう。

それこそが、桃真にとっての、最大にして、唯一の憂いだった。

――――桃真は義理の妹を、何かに例えようもないくらいに、深く

愛してしまっていた。

【二階堂桃真】編（2）　藍色乙女

「あら、桃真さん、お久しぶり。」

馴染みの格子。清花（きよか）が微笑んだ。格子というのは遊女の順位で、太夫の次にあたる。艶やかというよりは、さっぱりとした美人で、目鼻立ちが小さい。しかし、良く気のきく頭のいい妓女で、その辺が格子まで昇格した理由なのだろう。

店が売り込みの為に流したものかも知れないが、元は、没落した武家の娘だとかいう噂もあって、落ち着いた雰囲気のある妓女だった。仕事上、客から吸えと言われれば煙管（キセル）を吸うが、清花自身は嫌いなようで、身体からその臭いが漂ってこないのも、桃真が指名した理由だった。自分も煙管は好きではない。せっかく自分の和室で定期的に焚いている、甘めの白檀の香りが失われてしまうから。

「今日の日にお手すきとは、あなたにしては珍しいな。」

「そのおかげで、桃真さんに会えましたよ。」

清花は、桃真の杯に酒を注いだ。広めの和室には、膳が五つ。男が五人にそれぞれの馴染みの妓女。それに加えて誰かが追加したその他の妓女。

桃真は、有無を言わさない、髭面の同僚以下三名に、強引に店に上げられてしまったのだった。

「また誰かに捕まりなさったのね。」

「そうだ。遊ぶなら勝手に自分達でやればいいのに、余計な世話を焼かれる。」

桃真は、清花だけに分かるようにため息をついた。他の男たちは、すでに酒を飲んで好き勝手楽しんでいる。

「それでも、お付き合いされるなんて、お優しいですこと。」

「今日は、殆ど強引に連れて行かれたのだ。俺は、この宴が終わって、彼らと別れたら帰る。いつものように、よろしく頼む。」

「はいはい。」

酒宴が終わって、それぞれの妓女を連れて部屋に入ったら、桃真も清花の部屋に入り、しばらく時間が経てばこっそり帰るつもりでいた。

軍に入った当初は、訪れる事も断固拒否をしていたが、そうした衆道、つまりは男色家なのかと疑われた。日本では、衆道は単に好みの問題とされていたが、明治維新後にその価値観は衰退してしまった。

加えて、自分は軍人である。職業上、その噂を立てられたらまずい部分も出てくるだろう。だから、付き合い上、一度も遊郭に行かないわけにはいかなかったのだ。

だから、清花は桃真にとって、こういう時の為に必要な相手だった。　いつも、揚代だけ払って清花の部屋で時間を過ごす。そして、頃合を見て先に帰る。器用な清花は、適当な理由をつけて自分の連れが帰る時に、桃真が先に帰った理由を説明してくれる。

清花にしてみれば、仕事をせずに揚代をもらう事のできる、これ以上にない上客だった。しかも、桃真が自分を買った時間以上に早く帰ったときは、睡眠時間などに当てることも出来た。だから、遊郭に来ても妓女と寝た事がない、という桃真の秘密を清花は守っている。

桃真は、遊女や、彼女達を買う男達を蔑む程、潔癖性な男ではないが、金の力でそういう行為をしたくなかった。

人並みに、女性と付き合って、そういう事になった時もある。しかし、誰と寝てみても、起きた時には後悔しかなかった。これが恋だと信じていたものが、自分自身を誤魔化す為のまやかしだったと気がついてしまうから。相手の女性にも申し訳なくて、後には己に対する嫌悪感しか残らない。

今まで好きだと信じていた女性が、そうではなかったと身体に教えられてしまうのだ。だから、もしも女を買い続けて、快楽だけを貪り続けたら、言葉では表せない何か重要な部分が、麻痺してしまうに違いない。そうなれば、自分を一生許せなくなる。

清花に注がれた酒を少し含みながら、料理を食べ、仲間が酔うのを待った。そうして良い気分になった彼らが、個々に別れていく。桃真も清花の部屋に入って、しばらくしたら、彼女に後はよろしく、と言って店を出た。

外は夕暮れが地平線に沈みかけている。吉原の大門を抜けて、さっさと帰宅しようと思って田園を歩くと、男四人が輪になって何かを囲んでいる。目を細めてよく見ると、中心にいるのは藍色の着物の女性だった。灯りも持たず、連れもおらずにどうしたのだというのだろう。そんな風だから、無頼漢なぞに絡まれるのだ。

「男四人で、軟派か？」

桃真が、その中で一番いかつい男の肩を叩いた。振り返った男は、睨みつけて凄んでいる。まだ何もしていないというのに、結構なことじゃないか。

「なんだ、お前。」

「通りすがりだ。名乗るほどの者じゃない。」

「じゃあ、放っておいてくれ。」

男は言うが、桃真は女性、見たところ歳は十六か七くらいなので、少女と言ってもいい彼女に聞いた。

「彼らは、君の知り合いか？」

少女は眉をしかめて、顔の前で手を左右に振った。どうやら、本当に助けたほうが良さそうだ。

「その先に遊郭だってあるだろう。他をあたってやってくれ。」

「正義の味方にでも、なったつもりか。」

馬鹿にしたような野卑な笑いを浮かべて、桃真の方に詰め寄ってくる。桃真は、めんどくさそうに両手を組んで、眉をしかめた。軍服姿なら、それを見て男たちもすぐに散っていっただろうが、どうやら黒色の着物姿では、すかした男が偉そうに、と怒りを買ったようだ。

「いや、一応、治安を守るのが職業なものでな。」

仕方なく、桃真も相手に睨みを利かせた。横幅は相手の方が大き

いが、百八十センチ以上もある桃真の方が縦には大きい。それに桃真のするどい顔つきを見て、どうやら只者じゃないと察したようだ。目先には吉原。もしも、そこの用心棒に下手に絡めば、命も危ない。男たちは、ちっ、と舌打ちをして、ゆっくりと去っていった。

「災難だったな。でも、きみの方も無用心だ。」

桃真はにこりとも笑わず、少女に近づいた。

「ごめんなさい、どうもありがとう。」

顔を上げた彼女を見て、一瞬、凍りついた。

――――似ている。

「櫻子……。」

思わず、口に出してしまって、慌てて手で押さえる。少し怪訝な顔をした少女に弁明する。

「すみません。知り合いによく似ていたもので。」

正確には、数年前の彼女に似ていた。色の白いところとか、睫毛が長い目元とか……。

「いいえ。ほんまにありがとうございました。あの人たち、しつこうて。」

話し方から、関西の出身のようだ。綺麗に髪を結って簪をさした少女は、遠ざかっていく男達を見ながら安堵した。しかし、その時、数人分の人影がこちらに向かってくる。

「嫌だ、戻って来た。逃げましょう、こっちに来て！」

「お、おい……ちょっと！」

少女に急に腕を掴まれて、酉の市の方に引っ張っていかれた。お互い着物なので全力疾走はできないが、なるべく早足でさっきの場所から遠ざかる。そして、たどり着いた山門を通って、人込みの中に紛れ込んでいった。

「良かった。ここなら人が大勢いるから、わからへんね。」

「何も、酉の市へ逃げ込むこともないだろう。心配なら人気の多い場所までなら送ろう。家はどちらの方向だ。」

その時、急に、少女がしがみついて来た。

「おい、なんのつもりだ。」
「堪忍。しばらく、こうさせて。」
桃真は、前方を見た。すると、数人のいかつい男たちが、周囲をきょろきょろしながら歩いていた。明らかに、誰かを探している様子だ。おそらく、先ほど少女が急に逃げたのは、彼らが近づいてきたからだろう。
「きみ、誰かに追われてるのか？」
少女の身体が強張った。当たりか。
「……全く、何をしでかしたんだ。」
「違う。無理やり金で売られそうになったから、逃げてきたん。両親が成金に、うちを金で売ったんや。」
本当ならば、気の毒な話だ。だから少女は、灯りも連れもなしに、あの道にいたのか。
しかし、自分はこれから、どうすれば良いのだろう。小さな親切をしたつもりが、やっかいな事に巻き込まれてしまった。悩んでも答えが見つからないので、今は追ってくる男達をやり過ごす事にした。
「これからどうする気だ。実家に送ろうか？」
ふるふると少女は顔も上げずに、首をふった。
「はっきり言うが、俺には何も出来んし、これから家に帰る用もある。かといって、このまま、きみを置いていけば、またさっきのような無頼漢に絡まれるのがオチだ。他にあてにできる場所はないのか？そこまでなら連れて行ってやる。」
「……帝都に知り合いなんて、いてへん。」
声が震えている。どうやら、泣いている様だ。
「なら、今日は、茶屋にでも一晩泊まって、明日の事は寝ながらでも考えてくれ。」
金は出してやるから心配いらん、と言って、信用がおけそうな近くの茶屋に、少女を連れて行った。茶屋、と一口に言ってもいろいろあって、高級な料理を出す格式高い店や、単純に食事と寝る事が

出来る店、または男女の怪しい逢引使われるような店まで様々だ。
桃真は、しくしくと顔に手を当てて、泣き止まない少女を和室の中まで連れて行ってやった。
「じゃあ、俺は帰る。」
ぶっきらぼうに一言残して、そそくさと、その場を去ろうとした。
「すみません……ほんまにおおきに。」
少女が、桃真の腕を掴んだので、振り返ると、涙で濡れた顔を上げて自分を見た。
どきり、と胸が一瞬、高鳴った。
似ている。全てがそっくりとはいわないが、理知的なのに優しげで、あまり女ぽっさを感じない目元が、特に。
「お兄さん、私をお嫁さんにして！」
固まって身動きが取れない桃真に、少女が飛びついて来た。後ろへ、押し倒される。その拍子に、少女の簪が取れて、黒髪が解けた。
自分の身体に乗っかった彼女と、目が合う。そして、少女が腕を桃真の首に巻きつけてきて、唇を奪われた。
あまりの展開に動転しそうになったが、落ち着け、と自分に言い聞かせる。とりあえず彼女を自分の身体から引き離そうとして、その肩を掴んだ。
そして、気がついた。
ゆっくり少女の身体を、自分から引き離す。
「きみ……男か？」
そう言い放った桃真の眉間は、すっかり額に寄っていた。
少女は、すうっと顔色を無表情に戻していくと、立ち上がって、肩にかかった髪をはらった。
「残念、ばれてもうた。」
心底がっかりしたように、大きくため息をついた。
「きみ、陰間だな。成金に売られそうになった、っていうのも嘘か。」
陰間というのは、男性相手に春をひさぐ少年の事である。役者の

卵が副業としてやる事が多かったので、鎖骨と肩の作りは男性特有のものなのに、女子のようなつるりとした肌と小顔を見て、ぴんときたのだ。

「半分は本当や。ほんまは京で働いてたんやけど、こっちに引き抜かれたん。今晩の客は、若い官僚で、顔もそこそこ悪くないんやけど、性格がねちっこくて。うっとおしいさかい、お座敷で待たせている間に逃げてきた。彼、待ちぼうけやな、今頃。」

もう一度、桃真の前に正座で座り、あどけない可愛らしさで、無邪気に笑った。

「じゃあ、適当に頃合を見て帰ってくれ。俺はもう知らん。」

「そんな、お兄さん、うちを助けてくれたやん。あれは本当に困ってたんや。お礼せな。」

「無頼漢も、男とは思わなかったんだろう。いずれにせよ、礼を言われる程の事ではない。」

「謙虚なんやね。」

「一応軍人なんでな、治安を守るのは仕事のうちだ。じゃあな。」

立ち上がろうとする桃真の腕を掴んで、もう一度、押し倒す。

「おい、何の冗談だ。」

「ここを一泊分、もう払ってくれたんやろ?」

「そうだ。だから、朝まで居てもいい。店に叱られても、俺は知らんが。」

「だから、お礼するって、言うてるやん。」

にこにこと笑う唇は、とてもじゃないが、男のものとは思えない。

「お兄さん、いつもそんなに、気難しい顔してるん?」

「悪いな、これが地顔だ。」

「でも、うちを誰かと呼び間違えたときは、そうやなかった。」

その人の事好きなんやろ、と優しく尋ねられる。

「まさか、きみの勘違いだ。」

「嘘はあかんで。年下でもこっちはその道の手練(てだれ)や。みれば、わかる。」

彼の目を、見てしまった。
「その人やと思って、うちを抱きしめていいよ。」
細い腕で抱きしめられ、甘く擦り寄られて、耳元で囁かれる。客の為に焚いているのか、着物からは合わせ香の甘い香りがした。顔が近づくと、睫毛が長い事が良く分かる。
「それとも吉原帰りで、陰間を抱くのは嫌？」
見つめられて、そして、再び口を吸われた。
薄い唇から熱を感じた。
その瞬間、彼を勢いよく突き飛ばしてしまっていた。
「すまん、力を入れすぎた。悪いが、俺に衆道の趣味はない。帰る。」
早口で述べて、その場を勢いよく去った。独り置いていかれた彼は、起き上がって座り込むと、桃真が去っていった扉を見た。すこし、ぽかんとしながら、暗闇に向かって、一人ごちた。
「……なんやのん、この意気地無（へたれ）。」

【二階堂桃真】編（3）　罪ト偽善

一体、何だったのだ、さっきは。

田園で無頼漢に絡まれていた少女を助けたら、実は、成金に金で囲われそうになっているといわれ、仕方なくかくまったら襲われた。しかも、少女と思っていたが、本当はかなり手練（てだれ）の陰間だった。確か、若手の高級官僚も通いに来ているとか言ってなかったか。はらはらと涙をこぼした嘘泣きにも、ころりと騙されてしまった。ああ、何という事だ。

自宅に戻り、家令の斎木に「ご夕食はいかがなさいますか」と聞かれたのに無視して、自分の和室に入ってしまった。後で彼に謝ろう。そうしなくても、勘の良い斎木はきっと何か起こったのだろう、と既に感じていたのだと思うが。

とりあえず、まだ仰天して、酸欠になった鯉みたいにパクパク動いている心臓を落ち着かせる為に、いつも焚いている白檀の香に火をつけた。甘い香りなのに、五月の新緑の季節にも似た爽やかさを感じるこの香りは、桃真の愛用品だった。日常的に嗅いでいるこれで、高ぶる全神経を平均値に戻していく。落ち着け、俺。

遊郭で女を買ったことのない桃真は、当然、陰間遊びもした事がない。女子（おなご）のような顔をしているとはいえ、男に迫られたのは生まれて初めてだ。だから、思考が停止してしまったのだ。もしも、さっきのが戦場だったとしたら、俺は確実に命を落としている。危ない。軍人失格だ。

しかし、俺に何の不手際があったというのだろう。おそらく、何もないはずだ。小さな親切をしようと思って、手を差し出したら、大きな災難に遭遇してしまった。それだけの事だ。さして、自分を責める事も、ないだろう。そう思うことにした。

ほっと大きく息を吐き、立ち上がった。縁側から眺める事のできる、桃真の和室用の小さな枯山水の庭園は、今はすっかり日が落ち

てしまっている為、その趣を味わう事ができない。しかし、翌朝になれば、水を表現する為に敷かれた白砂と、いい具合に緑苔に覆われた景石に、心を洗われたかのような、落ち着いた気持ちを感じ取る事ができるだろう。時々、日光に当たりながら、瞑想するかのように何もせず、ぼーっとするのも、桃真の好きな事の一つだった。

いま、それが出来ないならば、代わりに、夕食を取る事にしよう。空腹が満たされれば、この憂鬱も消えよう。

桃真は、一階にある自分の和室から、通路をでてすぐにある食堂に向かった。梅造は、今晩は出張で帰ってこない。櫻子もまだ楡崎と一緒のようだ。斎木が用意しているのは、十二人は掛けられるだろう、赤茶色の漆塗りの長い食卓の上に、一人分の夕食だけ。斎木を制して自分で椅子を引いて座ると、秋刀魚の焼き物を中心とした和食だった。

「今日は、俺、一人だろう。」

「一応、櫻子さまの分も、用意してありますが。」

「でも、櫻子はまだ帰ってこないだろう。何か必要になったら、自分で厨房でとりに行くから、斎木は自分の仕事をしていてくれ。」

「よろしいのですか？」

「ああ、厨房にはまだ通いの女中も、まだ帰宅してはいないだろう。気にしてくれなくていい。」

「わかりました、失礼いたします。」

斎木は一礼して、桃真の前を去った。男独りで食事するのに、傍に直立でを見守られるのも妙な気分になる事を、悟ったのだろう。

白飯を独りで黙々とほおばりながら、ふと考えてしまう事は、やっぱり衝撃的な夕刻の出来事だった。何度、脳内でかき消しても、しばらくするとまた浮かんでしまう。

二度も唇を奪われてしまった、あの瞬間を。

その度に、強烈な自己嫌悪に陥った。一体、今日の俺は、何処から狂いだしたのか。道端で、彼に会わぬよう、吉原から出てくる時間をもう少しずらせば良かったのか。それとも、強引な同僚共の誘

いを何としても受けぬべきだったのか。

いいや、違う。

櫻子に、嘘をついた瞬間からだ。

一度、よしと承諾した頼みを、自分の都合で断った。それに対する罪悪感みたいなものが、心から消えずにいるから、他人に対して善人になろうとしたのだ。そうすれば、小さな罪の穴埋めができる気がした。

しかし、天は何かの取引にも似た、桃真の偽善を知っていたかのように、その罪を相殺にはしてくれなかったのだ。

だから、桃真は気がついてしまった。どうして、軍人たる自分が、あの不意打ちの口づけを避ける事ができなかった理由を。そして、その理由は、わざわざ白飯を噛みながら気がつくことでもなく、最初から桃真の頭の中にあったという事さえも、気がついてしまった。

それは、一瞬、躊躇したからだ。あの陰間と寝てみたい、という気持ちが邪魔をした。

彼は、ちょっとびっくりするほど、数年前の櫻子に似ていた。けれども、相手は男性だ。顔がどんなに似ていても、精神面では恋心を抱けそうにない。それならば、いつも女性を抱いた後に感じるような、あの罪悪感にも似た嫌悪感を感じなくても済む、と思ったのだ。

だから、まやかしとは言え、夢を見てみれば、きっとわかるかも知れない、と期待してしまった。やっぱり後からに、死にたくなるほどの嫌悪感と後悔にさいなまれたとしても。

そんな危険を冒しても、桃真が知りたい事というのは、どうして櫻子をこんなにも愛してしまったのか、という事だった。

櫻子には撫子という、実の姉がいる。つまり、もう一人の桃真の義妹である。仏蘭西の血が混じっているせいですっきりした顔立ちや、長い睫毛も顔も背丈も、髪の質もそっくりだった。しかし、どうしてだか、桃真は撫子を愛する事はなかった。

もしも世界の片隅に、高度な数式で、世の中の全ての事象を説明

できる科学者がいるならば、桃真はいくらでも金を積んだだろう。どうか俺に、教えて欲しい、彼女と他の女性の違いとは何なのかを。原因が分かれば、それを取り除いて別の数字を当てはめればいい。そうすれば、全てをお終いに出来るだろう。

そういうわけで、あの陰間と寝てみれば、その答えの手ががりが得られるのでないか、と頭を過ぎったのだった。その答えが得られるまでは、別の女性を愛せそうにない。

櫻子とは、血のつながりはないのに。

それでも、戸籍上の兄妹が魅かれあうことは、道徳上、近親相姦と同じとみなされる。養父への裏切り、二階堂財閥の評価の失墜、すでに他界した、実の両親の実家も世間には顔向けできまい。

養子縁組の解消ができるのは、例えば、養親が養子に暴力を振い続けてどうにもならないとか、経済的に困窮しすぎている、とか重大な理由のみ。それがない限り、裁判所は認めてはくれないだろう。

だから、桃真は梅造を裏切り事なんてできなかったし、櫻子も顔を上げて生きてはいられなくなるような地獄に、貶めたくはなかったのだ。

けれども、どうして数多（あまた）の親戚の中で、自分が選ばれてしまったのだろうかと、己の運命をなじりたくなる事がある。俺をうらやむ者達は皆、勘違いをしている。やっぱり神様は、誰か一人の為だけに、完璧な将来設計図をくれるわけがない。

やりきれない思いが爆発した時、決まって桃真は夢を見る。彼女を組み敷いて、自分だけのものにしてしまう夢を。それは、幸せな夢ではなく残酷な悪夢。最初は清らかなものだったはずだったのに、時間が経つにつれて腐っていく果実のように、狂った想いへと化していく。

いつになったら、こんな危険な気持ちに、終止符を打てるのだろう。

何も知らずに無邪気に笑う櫻子を、憎らしい、とすら時々、思ってしまう。どうか、俺の狂気が具現化して、彼女を傷つけないうち

に、誰でもいいからさらって欲しい。どこか、遠くへ。

誰かのものになってしまったのならば、この思いを鍵付きの箱に入れて、海の底なんかに沈めてしまう事もできるだろう。そうすれば、安らかに彼女の幸せを、祝福できるに違いない。

パンドラのような誰かに、再びその箱をこじ開けられない限りは。

【二階堂桃真】編（４）　本能（Ｒ１５）（前書き）

全て、他の人物の章を読まなくても大丈夫なように作ってありますが、この章は、【楡崎蓮一】編（４）　浅草四重奏（※）を読むと、より理解していただけるのではないかと思います。

【二階堂桃真】編（４）　本能（Ｒ１５）

夕食を終えた桃真は、一階の遊技場でビリヤードをする事にした。これも桃真の趣味の一つだ。羅紗布を張った緑の台の上。狙いを定めた的球（たま）が、四隅の穴におちるかどうか、というぎりぎりの瞬間にいつも楽しみを感じる。的球（えもの）を仕留めると喜びを感じるのは、狩猟本能を刺激されるからだろうか。

狙いを定めて一気に手球をキューで突くと、カチン、という心地よい音を立てて、的球に当たる。狙い通りに、右上の隅に消えて、落ちた。

実は、櫻子にビリヤードを教えてやった事が少しだけあるが、一緒にゲームをした事はない。何度教えてやってもキューの扱い方を忘れてしまうのだ。その度に、背中に覆いかぶさるようして、持ち方とか打ち方とかを教えてやらなくてはいけない。密着するとどうしても、櫻子の体温とか匂いが伝わってきてしまって、心臓に悪い。馬鹿野郎。人の気も知らないで。

最後の方はわざと邪険に扱ってやったので、とうとうあきらめて、ビリヤード台には近づかなくなった。

だから、この遊技場は、屋敷の中で桃真にとっての二番目の、領域（テリトリー）だった。自分に呼ばれない限り、他には誰も入ってこない。時々、そこそこビリヤードの上手い斎木と試合をするか、一人で練習するかのどちらかだ。

二ゲームほど終えて、そろそろ終わりにしようと道具を片付け始めた。

その時、天井から、コツリ、と物跡がした。誰かが、階段を下りてくる音だ。しかし、どうして、なるべく足音を立てないように、そろそろと下りてくるのだろう。

少し、遊技室の扉を開けて、その正体を探ろうとする。

櫻子だった。

一階の床まで着地した後は、すたすたと早歩きで廊下を通っていく。どうして、誰にも見つからないように、こそこそとしているのだろう。

しかも、紺色の夜着を来て、肩に浴布（タオル）を掛けている。長い髪は、まだ濡れていて、先の方が束になってしまっている。

そして、廊下の奥の、裁縫道具の置いてある和室に飛び込んだ。

どうして、横顔をそんなに俯けて、深刻そうな顔をしているんだ。

桃真が遊技場を出ると、斎木と神谷が丁度、昼間から取り組んでいた書庫の整理を終えて、出てきたところだった。神谷は、梅造の秘書であって使用人ではないが、今日は櫻子から新しく頼まれた夜会服が仕上がったので、自分は休暇だったにも関わらす、二階堂家を訪問したのだ。そして、そのどうせ暇だから、と言って、斎木の手伝いを申し出たのだった。

「桃真さま、今の櫻子さまの様子、ご覧になりました？」

不用品の詰まった紙袋や箱を抱えている斎木が言った。

「ああ、俺が様子を見てこよう。斎木達は、まだ忙しいだろう？」

「わかりました。よろしくお願いします。」

斎木と神谷が反対方向に通り過ぎた後、桃真は、和室の様子をうかがう事にした。

すると、彼女は箪笥にしまってある布切り鋏を、そろり、と取り出しているではないか。

そして、畳に座り込んで、その刃先を、自分の首元に向けた。鋏の先が大きく開く。

「……な、何をする気だ！！」

桃真は、勢いよく中に入って、櫻子からその鉄製の鋏をもぎ取った。急に現れた兄に、彼女は驚いて、固まっている。

「自ら儚くなろうとするのは、どういう了見だ！今、シベリアでは多くの軍人が苦労しておるのだぞ。どうせ死ぬなら、女子（おなご）と言えど、帝国と世界の役に立ってからにせよ、愚か者！」

眉を額に寄せて、鬼のような形相で、自分に向かって叫んだ。櫻

子は、兄がこのように怒った表情をするのを初めて見た。
「……し、死ぬ？」
「鋏を、喉元に向けていたではないか。」
「あ……あの、髪を切ろうと……。」
はあ？
「髪を切るだと、こんな夜更けにか？」
「ええ……急にうっとおしくなって。」
「ならば、明日にでも美容院に行けばいいではないか。」
「それは、そうなんだけど……。」
桃真から目を背けた櫻子が、何やら動揺しているのを見て、不審に思った。よくよく彼女を観察すると、柔らかい首筋と、鎖骨の上に二箇所、赤くなっている箇所がある。季節はずれの虫刺されではない事は、一瞬にしてわかった。櫻子がその部分を隠そうとしないのは、自分では気がついていないのだろう。
（あの成金め……！）
桃真は、奥歯を力強く噛み締めた。
「楡崎のせいか。」
え、と櫻子は、顔を上げて桃真を見た。
「あいつが何かやったのか？そうでもなければ、こそこそ和室に入り、髪など切らぬわ。」
「私が入るところ、見てたの？」
「遊技場に居たのでな。誰かが、抜き足で階段を下りる不審な音が聞こえたのだ。楡崎に何か無体な事でもされたのか？」
「いいえ、何も……私が勝手に髪を切りたいと思っただけよ……。」
無理やり柔らかい笑顔を作って、必死に誤魔化そうとする。どうしてだ。
「嘘はつかんでよい。父様には言わん。」
櫻子は、仕事の事などわからない。楡崎商会と二階堂財閥がどの程度関係を持っているのかも知らない。しかし、もしも自分が何か

を言ったせいで、楡崎の事業が何か不利な影響を受けるではないか、と心配している事を、桃真は見透かした。

「しかし、櫻子なら、竹刀などなくても、あやつが何かしようとすれば、張り倒すくらいの力はあるだろう。どうして、何もしなかったのだ。」

力のない女子でも、無理やりに何かをされようとしたら、その横っ面をびんたくらいするだろう。大声だって、出せたかもしれない。どうして、何もせず、くやしい気持ちを髪を切る、なんていう行動に変換するのだ。毎晩、手入れを欠かさずにしている程、大事な髪ではなかったのか？

「だって……。」

「なんだ。」

口に出すか、やめるか、どうするか迷っている櫻子に、睨みつけて、その先を促した。

「楡崎さん、仕事で忙しい合間を縫って、わざわざ私に会いに来てくれた風だったんだもの。今日だって、本当はすごく疲れていたみたいだったし。」

「それが、どうした？」

「それに、夜会の日に、私を助けてくださったし。だから、私にした事は許せないけど、彼を殴ったり傷つけたくはなかったの。」

この時、桃真は、「それが、どうした？」と答えた自分と、櫻子との間に、埋めきれない何か大きな隔たりを感じた。

櫻子は、自分を犠牲にしてでも、相手を気遣う傾向がある。例えば、夜会で襲撃者に啖呵を切ったのは、周囲の客達を守る為であった。その前に、浅草で絡んできた無頼漢の小手に扇子を打ち込んで蹴散らしたのも、一緒にいた玲子が彼らに腕を引かれたからだ。

だから、怒りで理性が崩れるぎりぎりの所で、暴力にも似た抵抗をしなかったのは、楡崎への気遣いにも似た優しさだったのだ、と桃真は理解した。

それと比べて、自分はどうだ。

夕刻、あの陰間がまだ少女だと信じきっていた時、「親が富豪に自分を金で売った」と言われたにも関わらず、困り果てて茶屋に連れて行っただけだった。何も、その根本の問題の解決の為に、働きかけようとはしなかった。何故なら、今の時代、そのように身売りされる少女など山ほどいるのだから。売られるのが遊郭ではない分、まだましなほうだ、とすら考えていた。

もしも、櫻子なら、どうしていただろう。

きっと、最初はどうしたらいいかわからず、頭を何回も捻りながら考え込んだはずだ。そうして、答えが自分では見つからない事がわかれば、自宅に連れて帰って、斎木や父に相談したかもしれない。

もしも、小説の登場人物紹介などでは、櫻子のような人物をきっと「優しい性格の女性」などと書くのだろう。しかし、それは間違いだ。櫻子にとっては、偽善や自己満足で行う行為ではなく、悩んで導き出した答えが、結果的にそうなってしまうのだから。

思考の拠り所の根本的な部分、それが何なのかは言葉では表しにくいのだけれど、植物で言えばきっと根っこの部分みたいなものが、櫻子と自分は、真逆だった。何十年も、同じ館に住み、同じ食事をし、一緒に傍で暮らしてきた二人なのに、ありとあらゆる点において、山と谷くらいに違っていた。

例えば、桃真はいつも、不機嫌そうな表情をしているのに比べて、櫻子はくるくるとよく表情を変える。それは、桃真が自分を取り巻くだいたいの事に、無関心だからだ。必要なものは、自分の中で最初から決めてあって、不必要なものは自分には関係ない、と無意識に思ってしまっているから。

しかし、櫻子は、周りのものに関心を寄せていて、その中から、自分に必要なものをいつも探そうとしていた。きっと、暇があれば、大量の文学作品を読みふけっているのも、その為の本能的な行動なのだろう。

――――本能。

一瞬、雷に打たれた気がした。

自分が櫻子を強く求めていた理由の正体を、桃真はわかってしまった。

自分が持っていないものを、持っている彼女に、自分を満たして欲しいのだ。そして、彼女が持っていないものは、自分が埋め合わせてやりたい。彼女が解決できない困難から、守ってやりたい。

人間が恋をする究極的な理由が、自分の子孫を未来へ残していくといく為だとしたら、桃真の恋の理由も分かる気がした。

俺は、本能的に櫻子を欲している。

自分に欠けたものを、全て持っている女性。

もしも、彼女を手に入れることが出来たら、自分は生物としての、生存本能を満たす事ができるのだろう。櫻子は、その優しさで俺の子供を、この世で一番安全に育ててくれる相手だと、感じてしまっているのだから。

それに気がついてしまった俺は、次にどうすればいい？

二階堂桃真ではなく、人間の男性として。

「……あの、兄様（にいさま）、急にぼんやりしてどうしたの？」

「すまん、今、重要な事について考えておった。」

「どんな事？」

「あやつを屠る方法をな……。」

「ち、ちょっと、兄様！」

兄の思考が、何か危ない。兄は、父様に話さない、って言ったのに、それでは意味がない。

「俺は、今、二つの事を決意したぞ、櫻子。」

そして次は、これからさも、謀略をめぐらすかのように、不敵に唇をゆがませた。

「一つ、兄の権限を発動する。櫻子をあの成金にはやらん。今後、楡崎が訪ねてきても、俺が追い返す。それでもよいか？」

「……そうね、その方が助かるわ。でも無体なことはしないでね？」

ああ、と桃真は櫻子に約束した。

「もう一つは、これから重要な事を、櫻子に伝える。」
桃真は、怖いほど真剣な顔をして、櫻子の正面を見つめた。
「お前を、愛してる。」
「……はい？」
「お前を、愛してる。二度も言わすな！！」
「は、はい！！」
櫻子は、立ち上がって、何故か敬礼しそうになった。家に居ても、いるのかどうかわからないくらい物静かなので、すっかり忘れていたが、そういえば兄は軍人だった。
（でも、あれ……？何かおかしい。）
愛している、って言わなかったか。
兄の言った言葉の意味を考えているらしい櫻子に、耐えかねた桃真がいきなり抱きしめた。
「うわ……ちょっと、兄様どうしたの？いきなりしがみついて。」
「櫻子、俺が言った意味を理解しておらんかっただろう？病人でもあるまいし、誰がしがみつくか。抱きしめておるのだ、俺は！！」
「だ、だき……？」
「俺は、お前が好きだ。男として。だから、あの成金にはやらん。他の男にもやらん。できれば、今すぐにお前を押し倒して、抱きたいとすら思っている。」
「え……もう……。」
「もう既に抱きしめているじゃないか、と惚ける気なら怒るぞ。一体、何の為に役にも立たない恋愛小説ばかり読んでおるのだ。こういう時の為ではないのか。」
もちろん、こういう時の為に読んでいるわけではないが、本を読みすぎて耳年増にはなってしまっている櫻子には、意味が分からないわけではない。
もっと大きな次元で混乱が起こってしまっているのだ。
「まだ、わからんか。じゃあ、こう言い直す事にする。俺は、お

前の子供が欲しい。」

耳元で告白された、あまりにも強烈な台詞に、櫻子の脳内は、吹っ飛んでしまった。一瞬にして耳から頬まで上気していったのがわかった。楡崎といい、兄といい、今日は皆、様子が変だ。神様にでも踊らされているのだろうか。それとも、踊らされているのは自分なのだろうか。

必死でどうすればよいかを考えていると、ふと、さっきの楡崎の言葉が頭を過ぎった。

（兄妹という枷が、もし外される事があるならば、あの男、あなたを抱く気でいるぞ。）

楡崎は、こう言ったのだ。それは彼の戯言だと思っていた。他人が見ても分かるほどの事に、本人である自分が気がつかなかったという事か。

でも、と浅草での彼の様子を思い出す。そういえば、彼は、女性を連れてなかったか。

「何言ってるの、兄様。さっき、酉の市で見かけたわよ。女の子を連れていたじゃない。」

櫻子は、桃真を押し戻して、その顔を見上げた。

「櫻子、あの時、そばにいたのか。」

「偶然、、いたのよ。」

「声をかけてくれたら、良かったのに。」

「無茶言わないで。　藍色の着物の、可愛い子が隣に居るのに。邪魔するわけにいかないでしょう。」

「邪魔してくれた方が助かったのだ。あれは、陰間だ。」

さらりと言い切った兄に、櫻子はぽかんとした。何と反応したらいいのだろう。もう、わからなくなってきた。

「勘違いするな。最初は少女だと思って、道端で変な男たちに絡まれていたのを助けたら、お座敷を途中で逃げ出して、店の者に追われている陰間だった。」

その時の事を思い出したのか、腕を組んで気難しい顔をしている。

「じゃ、じゃあ、何であの時間帯にあの場所にいるのよっ！私の約束を今日の朝に破っておいて。」

「おい、国語教師、行間を読んで、登場人物の心理を解説するのが仕事だろうが。惚れてる奴と、二人っきりで夕方に、あの混雑した中に行けるものか。俺が押さえきれずに、変態行為に及んだら、どうしてくれる。取り返しがつかんわ。」

「に、兄様……。」

櫻子は、絶句している。

「それに、もう、兄と呼んでくれるな。俺が何年間、そう呼ばれてきた事に苦悩してきたかわからないだろう。桃真でも少佐でもいいから、「兄」とは呼ぶな。」

（……出鱈目だわ。）

何もかもが、今夜はおかしい。一体、今、何についてやりとりがなされているのだろう。櫻子は、わからなくなってきた。

「櫻子を混乱させていることは、承知している。しかし、これが俺のやり方だ。これ以上、上手くも下手にも伝えられん。」

桃真も自分のやり方でしか愛せなかったように、楡崎も彼のやり方でしか愛する事ができなくて、その思いが櫻子に届かなかったのだとしたら、それはとても残酷な事だった。

桃真は、頭を抱えている櫻子が面倒くさくなってきて、もう一度やんわりと抱きしめた。

「ちょ、ちょっと待って兄さ……桃真さま。わたしたち、兄妹なのよ！」

兄様、と言いかけたとき、するどく睨まれたので、あわてて訂正した。

「血はつながってはおらん。戸籍上と、世間的な道徳観の問題があるだけだ。」

「それが、問題だって言っているの！」

櫻子は、桃真を押し戻した。力を入れずに包み込むようにして抱きしめていた為に、なんなく櫻子は、その中をするりと抜けること

が出来た。

「ちょっと、ちょっと、あに、じゃなかった、桃真さま、気を確かにして頂戴！私、こ、今夜はもう風邪をひくといけないから、寝るわ！そ、それじゃあ！」

櫻子は、動揺しながら早口でそれだけの事を言い終えると、逃げるようにして、和室を飛び出し階段を勢いよく駆け上っていった。

残された桃真は、自分のせいで、声も動作も動揺していた櫻子を見て、密かに面白い、と思った。しかし、同時に、風のように去っていった櫻子をちょっと憎らしくも思った。

桃真とは正反対である、洋風の家具を揃えている自分の部屋の扉を閉めた後も、櫻子の心臓は高鳴りっぱなしだった。写し鏡で自分の顔が怖くて見れない。きっと、赤い。

しかも、兄の隣にいた藍色の着物の乙女は、男だったという事に、衝撃を受けた。夜目にもはっきりと浮かび上がった白くて滑らかそうな肌に、櫻色の頬紅をさしていた。あれが男だと信じよ、という方が無理と言うものだ。正直、自分より美人で可愛かった。悩む。

だから、自分ではないその子が隣にいた事で、桃真が急に自分から遠い存在になったような感覚を覚えてしまったのだ。

（でも、それって……ね……？）

兄から、国語教師なら、人物の気持ちを解説できるだろう、と言われた事を思い出した。その心情を熟語二文字で答えよ。

（嫉妬……？）

右に首をかしげながら、答えをひねり出した。傾きすぎて倒れそうになった。いっそう、このまま倒れてしまいたい。

悩みすぎて、頭痛がする。

意識していないだけで、桃真の隣に自分ではない誰かがいる事を妬む気持ちがあるのなら、それは、本当に嫉妬だ。嫉妬に違いない。

自分の気持ちが、本当に嫉妬といえる程のものなのかは、まだ分からない。

でも。

駄目だ。

もしも、本当に自分も桃真の事が好きだったとしても、その気持ちを受け入れる事はできない。私達は兄妹なのだから。お互いが、不幸になる事は、見えきった未来だ。

いっそうのこと、誰か他に好きな人がいる事にしようか。いいや、その相手が桃真に蹴散らされそうだ。怖すぎる。

（明日、どんな顔をして、一緒に朝食をとればいいのよ！）

いつもは気軽に、「あら、おはよう」と言えた口の筋肉は、きっとひきつってしまうだろう。顎が上下にしか動かないからくり人形のそれみたいに。

櫻子は、知恵熱にでもかかりそうな頭を抑えながら、無理やり寝ようとして瞼を閉じた。

◆◇◆◇

桃真は、熱い湯に入りながら、瞼を閉じていた。しかし、煩悩に邪魔をされているのか、その眉を若干しかめている。

その煩悩とは言わずもがな、考えなしに櫻子を抱きしめてしまった事で、高ぶりかけた邪な気持ちを精一杯食い止めていたのだ。こういう時、ふらりと吉原にでも訪れて、欲を吐き出せればどんなに楽だろう。

しかし、そうした所で、強烈な自己嫌悪に陥る事になるのは、すでに分かりきっていた。ましてや自己処理するなんてもっての他だ。それこそ、自分に負けたみたいで嫌になる。

（平常心……明鏡止水……。）

文字通り、水が止まれば鏡のようにあるものを映し出せるように、「穏やかな心に戻れ」、と渦巻く邪念を必死で鎮めるのに苦労していた。

二階堂家の本館には、洋式と和式の二つの浴室がある。洋式の方は主に櫻子が使っていて、和式の方は梅造と桃真が使っていた。

檜でできた長方形の浴槽は、本館の裏に広がっている日本式庭園を窓から眺める事ができた。今は夜なので何も見えはしないので、閉められた窓は立ち込める白い湯気で真っ白になっていた。

胸の辺りまで水深がある湯に、足を伸ばしながらゆったりと入っている。浴槽のふちに腕をかけているせいで、鍛え上げられた、滑らかな上腕筋があらわになっている。

湯に入る前に、髪を洗ったせいで、濡れた毛が束になっている。

それが、頬や額に落ちてくるのを、時々指でかきあげながら、しみじみと考える。

（謎はようやく解けた……。）

もしも、あの時、櫻子を止めていなければ、気がつかなかったかもしれない出来事。人はそれを偶然とも、運命と呼ぶ。

（自分のやり方で強引に伝えてしまったからな。櫻子は今頃、混乱しているだろう。）

でも、彼女の気持ちをかき混ぜたのは自分だと思うと、少しの優越感が生まれてしまうのはどうしてだろう。もしも、逆にすやすや眠っていたら、逆上したくなるが。

（しかし、これで俺が酉の市について行くのを断ったのはある意味、正解だった。）

理性を保つ訓練は軍でしてきたつもりだが、あの界隈はいかがわしい茶屋が多いので、誘惑に負けてしまって連れ込んでいたかもしれない。強引に自分のものにしてしまいそうで。そんな事をすれば、人と人としての人間関係ですら、壊れてしまっただろう。

しかし、さっきの時点で、今までの兄と妹という穏やかに、亀裂を入れたのは明らかだった。自分は、肯定的な意味で、それを強く望んでいたのだから、それでよかったのだが。

しかし、これからは、どのような一歩を踏み出せばいいのだろう。攻撃を仕掛けたがいいが、四面楚歌に苦しんだ上に、討ち死にしそうだ。

戸籍がなんだ。道徳理念がなんだというのか。しかし、義理でも兄妹である以上は、正式な結婚などできやしない。

（何が、理性だ。死んだら皆、仏ではないか。）

だったら、好きな人間の傍にいたい。

そんな風に割り切って考えられる自分を頼もしい、とも感じてしまう。昨日までは、そんな考え方をする事が出来なかったから。彼女を守れるような男が現れるまで、側にいられるだけでよかった。

しかし、あの赤い痕を見てしまって、それが原因で櫻子が苦しん

で髪まで切ろうとしたならば、もはや、あの楡崎には、彼女を預けられない。別の男が現れたとしても、いつかは彼女を傷つけたりするのだろう。それなら、自分の方が絶対に相応しい。例え、義兄であっても。

桃真は、凝り固まった首を左右や後ろに運動させて、それから浴布（タオル）で顔を吹いた。その熱い感触は、顔の血液の循環をよくしてくれるように感じた。

（まだもう少し、いるとするか……。）

檜の爽やかな香りが、自分の腕の中から、猫の子のようにするりと抜けていった櫻子の事を忘れさせてくれるまで、もう少し。

そうすれば、温まった体温が、幸福な部分だけを逃さないように包みこむだろう。きっと今夜は、上手く眠れるはずだ。

◇◆◇◆

翌朝、桃真は、和室の縁側の庭に広がる枯山水の白砂利を眺めながら、瞑想するかのように、燦々と差し込む朝日を浴びていた。

しばらくしてから、碁盤を取り出して、あぐらをかきながら、一人で碁の練習をしていた。

その時だった。

「失礼します、桃真様。」

部屋の外で斎木の声がした。

「どうした？」

指に持っていた碁石を離して立ち上がり、部屋の襖を開けた。

「あの……楡崎蓮一様がおいでになりました。いかがいたしましょう？」

斎木は、桃真の顔がすっと険しく変わったのがわかった。

「やはり、来たか。俺が出よう。」

桃真は、黒い着物の乱れを少し整えて、入り口へと向かった。

楡崎蓮一は、今日も、品の良い羅紗（ウール）の黒の背広に逞しい体を包んで、颯爽とやって来た。胸元のアスコットタイは、赤に少しだけ黒

を混ぜたような深い真紅。その色と同じ薔薇でできた、大きな花束を左手に持っている。玄関の黒い扉の前に悠然と立っていた。

「今日は一体、何の御用か。」

「これは、桃真殿。」

楡崎は、斎木に櫻子を呼んできて欲しい、と頼んだはずなのに、代わりに現れた桃真に、山高帽を取って会釈した。予想外の出来事にも、底知れない自信を宿した強い瞳は動揺の色を見せていない。

「私の用は執事殿に伝えたはずです。櫻子さんにお会いしたい。彼女の忘れ物を届けに来たのです。」

「忘れ物とは何だ。」

「彼女の銀の櫛です。私の車に落し忘れていかれたので、持ってきたのです。」

「それは、すまなかったな。」

桃真は全然すまなそうな顔をせずに、淡々としている。

「俺が櫻子に渡しておこう。」

「おや、櫻子さんには会わせていただけないのかな。」

「櫻子は、あなたにはもうお会いしたくないと言っている。」

「それは……俺も、嫌われたものですな。」

「私」から「俺」に戻り、ふっ、と鼻をならした。

「でも、櫻子さんから、直接そう聞きたい。会わせてください。」

「無、理、だ。」

「どうして、妹君の事に、兄上が口をはさまれるのです。これは、俺と櫻子さんの問題なのですよ。」

妹君、という言葉に、桃真は顔をひきつらせた。

「貴方なんぞに、会わせられぬわ。何をしたかは知らんが、櫻子に無体な事をしたんだろう。様子がおかしかった。」

その言葉に、今度は楡崎が、顔をひきつらせた。

「だから、何だというのです。桃真殿には関係のないお話だ。俺は彼女に用がある。渡したいものもある。」

そういって、花束に視線を移した。

「いらぬ。櫻子が欲しがるものは、俺が買い与えてやる。」
「奇妙な事をおっしゃりますな……。」
楡崎は不敵に笑った。
二人の間では、視線がぶつかって、ばちばちと火花が散っているかのようだった。
「過保護な兄に守られ過ぎても、妹君は幸せにはなれませんぞ。」
「妹に余計な虫がつかぬようにしているだけの事。」
「それなら、なおさら、貴方に俺を断る理由なんてない。」
「どういう事だ?」
楡崎は、一歩進んで、桃真の耳元にまで顔を近づけて、低い声で告げた。
「あなたも、櫻子さんを愛しているのでしょう?俺の目からはばれればれです。しかし、兄と妹は義理の関係でも結婚はできない。だったら、俺に下さい。俺なら、彼女を幸せにできる。」
動揺した桃真を睨みつけるように見つめて、そしてすっと顔を離した。そして、山高帽を被りなおす。
「今日の所は、帰ります。何を言っても会わせてくださりそうにありませんからな。でも、これを彼女に渡して頂けるくらいの両親はおありでしょう?」
花束を、桃真の胸元に押し付けた。むせかえるような深い薔薇の匂いがする。
「……俺は、彼女をあきらめません。」
まるで、千年前からそうする事に決めていたかのように、告げた。
「では、近いうちにまた来ます。ごきげんよう、桃真殿。」
もう一度、優雅に会釈して、楡崎蓮一は二階堂家を去っていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7262y/

誰ガ為二、華ハ薫ル★

2011年11月22日01時55分発行